

# ガンダムビルドファイ ターズ Beginning Tale

セルフニア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時はそんなに離れてないようで少し離れている未来、ある科学者により「プラフスキー粒子」と呼ばれる粒子が発見され研究を続けた結果プラスチックに反応して動かせる事が判明。

この時代で流行っていたガンダムのプラモデル通称ガンプラ同士でバトルが出来る「ガンプラバトル」の開発に成功。

当初は日本のみで行われていたガンプラバトルも瞬く間広がりに全世界で行われるようになる。

そんなガンプラバトルが世界に色濃く反映されている世界で、1人の高校生「城戸

響」のガン普拉バトルライフが幕を開けるのだった。

# 目次

Beginning Tale<コラボ

企画>

片翼の自由とバンダースナッチ<GB

DEX―DW編> 1

番外編

Another episode 1

事前情報は必要だった 13

Another episode 2

開幕・鉄血祭! 21

Another story 3 盾の

ストライクの成り上がり 35

Another story 4 今

回スナイパーは剣士スタイルで行くそう  
ですよ 43

Another story 5 紅

には蒼を、蒼には紅を 55

Another story 6 時

に人は譲れぬものがある 73

Another story 7 サ

ンダーボルト中域 85

第1章 ガンプラバトル・チュートリア

ル

第1話 そして俺はガンプラバトルに

魅入られた 94

第2話 新たな舞台、新たな出会い

第3話	腕試しと言つても	114
第4話	予期しない展開	124
第5話	目覚める種	134
第6話	初めての店舗大会・前編	144
第7話	初めての店舗大会・後編	152
第8話	宇宙の中で煌めいて	165
第9話	初めての交流試合・前編	174
第10話	初めての交流試合・後編	

第11話	来るべき新人戦	188
第12話	新人戦・開幕	200
第13話	新人戦・2回戦	210
第14話	新人戦・3回戦	221
第15話	新人戦・準決勝	232
第16話	新人戦・終幕	243
第17話	その先にあるもの	254
第18話	その引き金を引くのは誰	267
第19話	何事も覚悟が必要	275
第20話		283

	第2章くバトルで勝ち取るものく	
	第20話く何事も目で見て学ぶく	291
	第21話くストライクは伊達じゃない	
	第22話くもう1機のストライクく	301
309	第23話く燃える剣と煌めきの銃口く	
	第24話く悪意なき灯火く	319
	第25話くロックオン・ストラトスく	329
	第26話く全てを持つ者は宇宙を舞う	336
	第27話くガンプラ合宿！その1く	344
	第28話くガンプラ合宿！その2く	351
	第29話くガンプラ合宿・その3（終幕）く	361
	第30話く幼馴染は姉として見極めた件についてく	369
	第3章く地区大会く	380
	第31話く纏うは紅、超新星く	
390	第32話く侍は紅を選びストライクは	

蒼を選びましたゝ | 399

第33話ゝそれが最強の矛とするなら

こちらはゝ | 409

第34話ゝ剣と銃士のドツキングゝ

417

第35話ゝ見る人によつては地獄絵図

ゝ | 425

第36話ゝ硬いものこそ力でこじ開け

ようゝ | 435

第37話ゝそれぞれの想いを胸に秘め

てゝ | 444

第38話ゝその覚悟の先にゝ |

第39話ゝ裁定者の判決ゝ | 465

第4章ゝ全国大会ゝ

第40話ゝ舞い降りる翼ゝ | 475

第41話ゝ武士vs騎士 | 485

第42話ゝ運用テスト始めますゝ

495

第43話ゝご注文は砲撃ですか？ゝ

504

第44話ゝ時に理性は常識を超えるゝ

| 509

第45話ゝ交錯する蒼と青！そして紅

に染まるゝ | 517

第46話ゝ喫茶ステラと鏡の国のアリ

スゝ | 524

第47話く模擬戦の定義ってなんだっ

けく

539

第48話く裁定者・オン・ザ・ロードく

549

第49話くイレギュラーにはイレギュ

ラーで返しますく

560

第50話く燃え盛る炎と吹き荒れる翼

く

571

第51話く前夜祭は波乱の予感?く

585

第52話く盾に挑む獣と悪魔の狂乱く

593

第53話くそして物語は綴られていく

く

Epilogueく蒼の衝突、受け継

がれる想いく

625

607



## Beginning Tale<コラボ企画>

### 片翼の自由とバンダースナッチ<GBDEX—DW編>

今日は学校が午前中までしかなく、部活動が休みだった拓哉は1人部室へ訪れていた。

「あーあ、新型機の武装調整を翼先輩に手伝ってもらおうと思ってたのにまさか休みだったとは・・・」

仕方ない自分で出来るところまでやるかと、部室のドアを開けるとカギがかかってなくすんなりと部室へ入れてしまう。

「あれ、カギって昨日掛け忘れてたんだっけか?てか、筐体も電源入ってて誰か戦ってんのか?」

そんな事を考えているとちようど筐体のスクリーンが溶け中からこの天ヶ崎高校がンプラバトル部の部長である今井 木乃香が姿をあらわす。

「あれ、安藤くんじゃないどうしたの?」

「新機体の調整で翼先輩に用があつたんですけど、部長は?」

「私は新武装の調整でちよつとね。」

その後、ソファに腰を下ろしスマホを弄りながら話している中ふと拓哉は目に付いた記事の内容を口に出した。

「そうだ部長、GBDEX―DWって知ってます?」

「GBDEX―DW?」

「正式には「ガンダムビルドダイバーズエクストラ・デュアルウォリアー」っていうらしいんですけど、自分で作ったガンプラをデータとして取り込んで自由に対戦出来るゲームです。」

「えっと、あれよね?GBN計画の第1陣としてプラモデルをスマホとか電子機器の中に取り込む事に成功したアプリだった筈、確か。」

それがつい去年の事で大々的に報道されていたのを思い出す。

「それでそのGBDEX―DWがどうしたの?」

「いやそれが、この前友達に面白そうなスマホゲームがあるとかで進めてきてまず友達にやるっていうから俺のV2ABをスキャン用のデータとして貸したんですよ。」

「その友達、ガンプラバトルの経験は?」

「無いです、だから貸したんですし。」

「安藤くん……バトル未経験の人にあんな複雑兵装の機体を貸すとか正気の沙汰じゃないね。」

「俺だって止めましたよ！けどあいつ強そうな機体が良いって言うもんだから貸したわけです。そこで噂なんだけど、ロストフリーダムが居たとか。」

「ロストフリーダムが？あの子がやってるとは思えないけど…。」

「そこです、ちよつとやってみませんか？」

「まあする事も無かつたし、やってみましょうか。」

設定画面をいくつか行つた拓哉は同じく設定していた木乃香に声をかけた。

「部長はこのEXアビリティは何にしたんですか？」

「EXアビリティ？このズラツと並んでるやつね、安藤くんはどれにしたの？」

「当然ベース機のランザムを積んでこの他にもう一つセット出来るみたいだったからまたランザムをセットしたら、なんか同アビリティセットボーナスとかで20%効果UPしました。」

「セットボーナスなんてあるのね、けどなんか難しそうだから今回はなにも付けずに行くわ。」

EXアビリティのセット画面を飛ばし、早速タッグマッチボタンをタップする。

試験が終わって数日後の事

「さて、帰るかな。」

「おーい、逆神くん。」

いつも通り学校が終わって帰ろうとした燈真を呼び止める声がし後ろを振り向くとそこにいたのはこの学校に転校した初日くらいに始めて声をかけてくれた七星 輝だった。

「七星くんどうしたの？」

「えつとね、この後ハンバーガーショップにいかない？」

まあ、いつも通りGBDEX—DWをやるんだろうなどと輝の提案を飲むことにした。

「良いよ、じゃあ行こう。」

「分かった！急いで自転車取ってくる！」

輝が自転車を取りに行くまで校門前でスマホを弄りながら待ち、自転車に跨った輝を後ろを小走りで燈真も付いていきバーガーショップの偶然にも空いていたテーブル席に腰を落ち着ける。

「席が空いててラッキーだったな。」

「そうだね。じゃあ早速GBDEX—DWって言いたい所なんだけど、なんだかお腹空いちやつたから買って来てもいい？」

「確かに何も買わないのもあれだし、俺も行くよ。」

そうして、燈真はチーズバーガーセットのメロンソーダ氷なしを頼み輝はビックマツクセットを2つの他にポテトのLサイズも頼んでいた。

(小柄な身体のどこにそんな量収まってるんだらうな…)

「いただきまーす!」

「まあいいか、いただきますと。」

2人ともほぼ同時に最初の一口を頬張った。

ゲームを始めて数時間が経過し拓哉と木乃香のランクも初期のFからDに上がりその上がった次の試合で、エクシアのGNソードが相手のザクⅢの腹部を斬りはらい爆散すると勝利を示すテロップが流れる。

「うっし! だいぶ操作も慣れて来たぞ!」

「もうだいぶ戦って来たと思うけど、まだロストフリーダムに会えないわね…」

不満げな顔を浮かべていた木乃香の横で相方の拓哉が「次の試合に進む」をタップした瞬間画面が乱れる。

「ん? なんかノイズが走ったような…」

「安藤くんも? 私もなんだよね、でも戦績とか問題なさそうだし気にせず続けましょう。」

「そうっすね。お、早速マッチしたけど相手方のランクがCとE? 確かこのゲームのマッチって高い方に合わせるんですよね?」

「ええその筈…。今私たちが共にDランクだからマッチしないと思うけど、この時間帯

に人がいなくて仕方なくとかかな？」

未だ腑に落ちない点もあったが、試合が開始してしまうので取り敢えずその事は後で考えようと画面に視線を落とした。

ある程度ハンバーガーを食べ終えた燈真と輝は、スマホを手に取りタッグマッチの設定を輝にやつてもらい相手を待っていると思いのほか早くマッチする。

「人が居ないからなのかDランクの人とマッチしたね。」

「そんな事あるんだな。」

その会話を遮るように画面では自身の機体がスタート位置へ投下していた。

通常のガンプラバトルと違い2人で出撃してもスタート地点が、重なる事はなくみんなバラバラの位置からスタートになるらしく以下に早く味方と合流するかが重要になってくるのを理解していた木乃香は拓哉と合流するためリーダーで位置関係を把握しながらも敵機の位置確認する。

「安藤くんよりも先に敵と合流しそうね、城戸くんじゃないけど一番槍は貰いましょうか！」

対艦刀を構えようとしていたストライクだったが、それよりも早く高熱源のアラートが鳴り響く。

木乃香とほぼ同時ぐらいにその存在に気づいた燈真は視線上にストライクが映った

瞬間、デミウイングの手に持ったビームライフル「ハウリンググブラスト」を構え引き金を引き黒金のビームが放たれるが普段の戦いでは想像出来なかった事が起きる。

「ハウリンググブランドのビームを引き裂いてるのか!?!?」

本来であれば最大火力でハウリンググブラストを放つと落とすか避けられるかされるのだが、今回のストライクに至っては黒金のビームをSEED世界特有の赤と白のビームが引き裂く様子が映し出されていた。

「マジかよ... そんな特殊な見た目はしてないんだけど。」

黒金のビームがストライクを飲み込もうとした瞬間木乃香は、通常のガンプラバトルと違い最大火力で砲撃を放てるアスタロトを最大火力で放つがハウリンググブラストの砲撃を放出が終わるまでは止められず7割を受け止めた所で回避に転じる。

「最後まで受けられない?!?!? 逃げるしか!」

脚部スラスタを横向きに噴かして回避すると、すぐ横を黒金のビームが先ほどまで足場に使っていたビルが数分しないうちに崩壊し消し炭と化して破片がストライクの装甲にあたりほんの数ミリだがこのゲームの体力であるAP（アタックポイント）が減少していく。

「破片でも削れて行くのね...」

一方その頃の拓哉はというと

木乃香と合流するよりも早く、デミウイングではないもう一機黒犬と戦闘を行っていた。

「トランザム！」

「EXアビリティ、スタンバイ」

このGBDEX―DWでのスキル発動を示す電子音を聞きながら、紅い残像を残し黒犬の背後に接近しGNビームサーベルを突き立て右腕を斬りとばそうとしたが、間に合わないはずの左手のアックスにGNビームサーベルを弾き飛ばされてしまう。

「この追従性の高さ、阿頼耶識か！」

アックスでビームサーベルを弾く事に成功した輝は、自身の愛機「黒犬」のベースとなっている獅電に合わせて阿頼耶識をEXアビリティにセットしていて良かったと内心安堵していた。

「阿頼耶識にして良かったよ、そしてもう一つはこれだ！MEPE！」

異なる二つのEXアビリティを同時に発動させるのが、EXアビリティの上段階「EX―Dアビリティ」を発動した黒犬が残像を残しながら、エクシアの周囲を取り囲みミサイランチャャーを全弾放ちついでにハンドガンも連射して辺り一面が砂煙によつて何も見えなくなる。

「これで終わったかな…？」



次の瞬間、輝の目の前の砂煙が揺らいでいた。

「エクシア、俺に力を貸せ！トランザムエクスプロージョン！」

今現在発動しているトランザムに重なる形で本来GBDEX-DWでは使えないはずの「トランザムエクスプロージョン」を擬似的に発動し、周りに立ち込めている砂煙を強引にGNソードで切り裂きながらブーストを噴かして黒犬に突撃する。

「まだ倒れてなかったのか！」

大型ショットガンを構えて撃とうとしたが、トランザム中のエクシアにショットガンを掴まれヒビが入っていき後少し暴発しそうだったのでエクシアに押し付けアックスを投げつけ爆発させる。

「間に合わねえ！さらばGNソード……」

間一髪のところまでGNソードのシールド部分で防ぐ事に成功したエクシアは、左腕のシールドも投げ捨て代わりに両腰のGNブレイドに持ち替えた。

（EX-Dアビリティの残り時間は25秒って所だな……攻め時か。）

「黒犬のファイターさんよ！ここらで締めと行こうぜ！」

声の聞こえるはずのない相手に向かって叫んだ拓哉が、GNブレイドを構え突撃。

「これで終わりにしようって事か！」

輝もエクシアのプレイヤーと会話できているかのように、ハンドガンを構えて迎え撃

つ。

エクシアのGNブレイドが黒犬の胴体に突き刺ると同時に黒犬のハンドガンがエクシアの全身を撃ち抜いていきエクシアと黒犬は爆散して辺りに破片が砕け散りながら散っていった。

「近づけばあの巨砲は撃てないでしょう!」

ストライクはストライカーパックをパージしその手に持った対艦刀を突き刺す構えでブーストを噴かして突進、急な事に判断の遅れたデミウイングはハウリングブラストを地面に落とし右腕のビームソードを抜き自身を貫く寸前で受け止める。

「早いな…ビームソードが間に合って良かった。」

ビームソードで受け止めたデミウイングが背中中の片翼を揺らしながら対艦刀を弾き返し、ハウリングブラストを再び拾い上げ最大火力で放つ。

放たれた最大火力のハウリングブラストの一撃は僅かに狙いがそれストライクの頭部を吹き飛ばしながら数キロ先に大きなクレーターを作った。

衝撃で地面に叩きつけられたストライクは、地面に対艦刀を突き刺し立ち上がる。

「これでガン普拉バトルだったら確実に酔ってたでしょうね…けどまだメインカメラがやられただけよ!」

先程と同じように対艦刀を突き刺す構えブーストを噴かす。

「貰った!?？」

「って相手は思っただろうな…。」

対艦刀の切っ先は確かにデミウイングの胸部を貫くはずだったが、振り下ろされる直前であえて片翼を犠牲に動きを止め右腕のビームトンファアで逆にストライクの胸部を貫いていた。

「終わり、だな。」

ビームトンファアを斬り払うとストライクが爆散し、ゲーム終了を知らせるテロップが流れる。

「くっそー！負けちまったあ…。」

「まあでも、良い試合だったんじゃない?」

結果的に1-0で負けた木乃香と拓哉だったが、良い試合が出来たと喜んでいた。

「結局ロストフリーダムは居なかったし、そろそろ時間だから何処か寄って帰ろうか。」

「じゃあ、ハンバーガー食べて帰りませんか?」

「あ！良いわね、数駅先にこの辺にないハンバーガーショップがあるみたいだし折角だから行ってみましょうか!」

「はい!」

木乃香と拓哉は荷物を纏めるとハンバーガーショップに行く為、部室を後にする。

「お疲れ様、逆神くん！」

「七星くんもお疲れ様。」

2人のスマホには勝利を知らせるテロップが流れており、その後のマイページ画面では機体名が表示されていた。

輝の黒犬式号機と燈真のLFDW、「ロストフリーダムデミ・ウイング」の名前が。

「勝利の美酒とはいかないけど、ハンバーガーで乾杯するか？」

「そうしよう！ いただきまーす！」

その時のハンバーガーはすっかり冷めきっていたが、とても美味しかった。

## 番外編

# Another episode 1～事前情報は必要だった～

それは何でもないある日、拓哉と行くはずだったプラモ屋が定休日。目的を失い街中をぶらついていて途中の事だった。

「まさか行こうとしてたお店が定休日だったなんて…。」

「まあ、そんな日もあるさ。気晴らしにゲーセンでも行こうぜ。」

拓哉の提案に乗った響は近くのゲーセンに流れ込み取り敢えず、配置図を見ながら何をするか拓哉に声をかける。

「なんかやりたいもんあったか？」

「そりやもちろん、ガンブラバトルだろ！」

了解、とガンブラバトルの出来るブースに足を運ぶと何かイベントを行っているらしく盛り上がっていた。

「おっとお！これで右側のプレイヤーが4連勝だ！続く5連勝目を阻止できるプレイ

ヤーは現れるのかあ！」

テンション高めめの店員さんの声を聞きながら状況を纏めると、どうやらこのイベントは勝ち残り制である程度勝ち残ると景品が貰えるらしく飛び入りでの参加もOKなのだとか。

(まあ、もう少し他のファイターの實力を見てからでも遅くないか。)

響はまだ見ているだけの予定だったが隣で見えていた拓哉が我慢できなくなったのだらう響の腕を引っ張りながら手をあげる。

「飛び入りで参加します！」

「おおお!!!果たしてこのプレイヤー達が5連勝目を阻止出来るのか!早速行きましょう!」

店員さんもノリノリで飛び入りの参加を認めてしまったので参加するしかなく。

「はあ、参加しちまったからにはやりますか…:」

4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginnning Plavsky particle dispersal. F  
i ardl, colony》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ビルドプロミネンスガンダム。行くよ!」

「安藤 拓哉、V2ガンダムアサルトバスター。派手にブチまける!」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、サイド7だった。

ステージ中央まで周囲を警戒しながら移動する響のプロミネンスと拓哉のV2。

「今井先輩に作りかたを教えてもらいながら作ったトライバースタリングを改修したのか。」

拓哉はビルドプロミネンスを見ながら背部にふた振りの剣が装備されているのに気付く。

「トライバースタリングって拳メインの機体じゃなかったか。」

「ああ、これは俺が切断系統の武装を積みたかったからでそういう拓哉はシンプルだな?」

響に振られ拓哉が自分の機体の話をしようとした所で敵機が視界に入る。

「まあなつてあれはヘビアとF91か?ヘビアのミサイル搭載量がえげつない事になってるな...」

視界に入った瞬間、ヘビースタームズは本来のミサイルポッドの他に増設したポッドからもミサイルを射出し視界一杯にミサイルが迫っていた。

「ミサイル多！拓哉！」

「分かってますよつと、光の翼で押し切る！」

プロミネンスがV2の後ろに下がりがりV2が光の翼を展開、先頭のミサイルを起爆し続  
くミサイルを誘爆させる。

「よし！響、行つてこい！」

「おうよ！」

プロミネンスはミサイルを撃ち尽くしたのだから空になったコンテナをパージした  
ヘビーアームズに向けて粒子による足場を作りそれを蹴りながら接近する。

「格闘にガン振りしたこの機体の真髓をとくとお見せしよう！」

バックパックから分割式実体剣「アメノミハシラ」を抜きヘビーアームズの真正面か  
ら振り下ろし、その一撃をガトリングシールドで防がせると今度は脚の裏からアーマー  
シユナイダーを展開して腹部に回し蹴りを決める。

よろけたヘビーアームズに追撃の姿勢に入ったプロミネンスに相手方のF91が  
ビームサーベルを翳して割って入り攻撃が中断させられてしまう。

「仕留め損なつた！拓哉行けるか？」

「待たせた、やつと動ける。」

クールタイムが終わつたV2がこちらに向かつてきながらバルカンを連射しF91



のビームサーベルを撃ち落とし、サーベルを撃ち落とされたF91がV2と距離を取ろうとMEPEを発動する。

「逃すか！打ち上げ花火！」

V2背部のメガビームキャノンが上を向き一発のビーム弾が打ち上げられた瞬間上空で弾けるとV2の周囲にビームの雨が降り注ぐ。

「ちよ！俺もいるだけど！」

通信が入った直後急いでV2の足元へ退避する事が出来たプロミネンスを除いてMEPE中のF91はビームの雨を完全に避け切る事が出来ず強制的に解除させられ、ヘビアーームズはもろにくらい主武装であるガトリングが爆発してしまう。

「よし…このまま俺はヘビアに行くから響はF91よろしくな。」

V2は背部スラスタを噴かしながら、ヘビアーームズにタックルをかまし連れ去っていた。

そして、残されたプロミネンスとF91はお互いに一度ゴツイV2に連れ去られるヘビアーームズを見て視線を戻しそれぞれの獲物を構える。

「F91はおそらく再チャージに入ったからMEPEは使えないはず、仕掛けるなら今しかない！バーニングプロミネンス！」

「Burning prominence system standby」

プロミネンスの一部装甲が外れ中から元のトライバーニングと同じ炎のような粒子を煌めかせその熱気で襲いかかってきたF91を吹き飛ばす。

「初めて起動してみたけど、凄まじい熱気だな。作ってくれた翼先輩に感謝しないと。」

このシステムは翼が初めてガンプラを自分の手で作った事にプレゼントとして作ってくれたもので、この事により溢れ出るエネルギーを各所から炎の粒子で放出し機体の出力を耐えられる限界まで引き出してくれるシステムらしい。

「さあ！一気に畳みかけようか！」

ヘビーアームズを連れ去っていったV2だが、途中ヘビーアームズに折りたたみ式ナイフで腕部を傷つけられ解放してしまう。

傷ついた腕部装甲をパージし、代わりにビームスマートガン「物干し竿」を取り出し構えたまま突撃すると狙いを定めず連射する。

「下手な鉄砲も数撃ちや当たるってなあ！」

何発か続けて撃つと最初は避けられていたヘビーアームズだったがその内の一発が右肩に命中しよろける。

「好機！仕留めさせてもらおうか！」

突撃した勢いでV2は物干し竿やメガビームキャノンそしてメガビームシールドを

パージし機体を身軽にするとビームサーベルを構えそのままへビーアームズの右肩あたりから袈裟斬りにして、上半身と下半身がはつきりと別れた瞬間へビーアームズは爆発を起こしV2はその場を後にする。

「プロメテウスバーストオオオ！」

プロミネンスはバーニングプロミネンスシステムで放出していた粒子を分割していたアミノミハシラを合わせ大剣に収束し自身の背丈をゆうに超える超大型剣を作り出す。

F91も負けじと貯蔵分のビームシールドを漂わせいつ振り下ろされても良いように自身も上向きで構える。

「読みが甘かったな！これは横振りだ！」

縦で構えていた超大型剣を振り下ろす直前で強引に横にするとフルスイングで薙ぎ払ってF91を胴体の部分から両断して爆発が起きる。

「YOU WIN!!!」

「よっしゃー!!!」

響と拓哉は戦ってくれた相手方と握手を交わしてその後何戦かして疲れていた所に入ってきたアストレアとウイングゼロの改造機にやられてしまったのは言うまでもな

い。

（あの人達何処かで会ったことあるような気がするんだけどなあ…）

帰宅して寝床に入った響は戦ったファイターについて思い出そうとするがその前に深い眠りにつく。

そして、そこから先はまだ未来の話。

# Another episode 2 開幕・鉄血祭! 〳

「逃がさないですよ!」

「くそ! 何でこんなことに!」

響のアスタロト改は後方から迫る沙希のZZグレイズのダブルライフルによる射撃を躲しながら何故こんなことになったのか思いだす事にした。

事の発端は数日まえに遡る

期末試験が終わり数日たったある日の事、俺と拓哉は行きつけのゲーセンへと足を運んでいた。

「ガンプラが欲しいかあああ!」

「うおおおお!!!」

ガンプラアイドルの前島 遥と藤宮 楓がデザインした限定ガンプラが手渡しで貰えるイベントが1週間後に行われその参加条件というのが、ベースが鉄血のキットである事だった。

「おい! 前島 遥と藤宮 楓に会えるぞ!」

テンション高めな拓哉の言葉を遮るように。

「あーあの可愛い子達か、これを逃す手はないな。」

「そうと決まれば早速ベースを買いに行こうか。」

「善は急げってやつだな？行くか。」

行きつけのガンプラショップ「ホワイトベース」に足を運んだ響と拓哉は鉄血コーナーへと向かう。

「俺はもうガンダムでいく、そしてアスタロトを使う。」

「早すぎるだろ……まあ俺も獅電って決めてたけど。」

自身の使うガンプラを買いついでにパーツコーナーでいくつか見繕い部室へ戻り早速制作を開始すると、その様子を見ていた翼が声をかける。

「君たちが鉄血系のガンプラを買ってくるなんて珍しい事もあるものだね。もしか、鉄血祭に参加するつもりかい？」

「はい！前島 遥と藤宮 楓に会いたくて！」

「自分の場合は限定ガンプラが主な理由です！」

響と拓哉の参加する理由を聞いた翼が誰もいない方角を見つめながらそつと呟く。

「そうか、検討を祈るよ。」

鉄血祭に参加する為のガンプラ製作は夕方の下校アウンスがなるまで続いた。

そして、鉄血祭当日

再びゲーセンのイベント会場へ向かうと大々的なイベントらしく普段の数倍筐体が連結されていた。

「はあくこりやすげえな。」

「そんだけアイドルは凄いつて事だろ、始まるみたいだぞ?」

「皆さま、長らくお待ちいたしました。これより第一回鉄血祭を開催したいと思います  
! ルールは以前話した通りやっていけば問題ありません。それではGPベースと機体をセツトして下さい!」

「優勝目指して頑張つて〜!」

「うおおおおお!!!」

テンションが最高潮まで高まつていた参加者達が筐体を真ん中に挟むとGPベースをセツトする。

《Beginning [Plavsky particle] dispersal. Faird?, MARS》

《Please set your GUNPLA》  
音声に従つてガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、アスタロト改。行くよ!」

「安藤 拓哉、獅電キマイラ。出るぞ！」

そしてほかの参加者たちもレバーを動かしてガンブラを発進させる。

今回のフィールドは鉄血のオルフェンズお馴染みの火星だった。

「ステージも凝ってんなあ、流石鉄血祭だけあるな。」

「ホントになつて、早速おっ始めてる所があるし行きますか！」

火星の地面に降りたつた響たちの元にグシオンリベイクフルシティが現れ手に持ったアックスを振り下ろす。

「別に一人で行動しないといけないってルールはないよな！チエストオオオ！」

響の気合とともにアスタロト改がバスターブレードを抜きグシオンのアックスを弾くとその背後から拓哉の獅電キマイラがナックルバンカーで胸部を貫いた。

「まずは1機！幸先の良いスタートだ。」

「次もこの調子で行こう！そら次だ！」

背後から迫っていた小型ナイフを振りかざした百鍊をアスタロト改が足裏ダガーで斬りつけ動きを止め獅電キマイラと共に爆心地へバックパックのブーストを噴かして移動を開始する。

爆心地へ向かった響と拓哉を待ち受けていたのは、赤色のバルバトスが集団で襲いかかっていたであろうガンブラを1機1機斬り伏せていた光景だった。



「あははは！もつと来なさい！」

その光景の中でも響たちが驚愕したのは、クタン参型を装備していたグレイズをその背中に背負っていたブースターを使った二刀流のバルバトスが飛び上がり右アームを斬り落としその返す刀でグレイズの下半身を斬り落としていた。

「なあ拓哉、なんかあのバルバトスめちやくちや見覚えのある動きをしているんだが？」

「奇遇だな、俺も思った。とりま逃げるか？」

「そうするか…。」

乱戦の中見覚えのある動きをするバルバトスから逃げようと後ろを向いた瞬間見覚えのあるカラーリングの機体が現れアスタロト改の逃走経路を塞ぐ。

「狙われてるの完全に響だな。それじゃ俺はアデューー！」

「何処かで見えたカラーリングのグレイズだけどつて拓哉置いていかないでくれ！」

「やつと見つけました、城戸さん！」

「お、小川さん!? どうして…！」

「この前…。」

話を纏めるとどうやら、部室で拓哉と鉄血祭について話していたのを沙希に聞かされていたらしい。

「あそこにいたのって男だけだよな…。」

（もしかして、あのガンプラ作ってる時小川さんいたのか？）

「何か言いました？」

「い、いえ何でも。って何で小川さんがその話の流れでここに来てるの？あ、もしかして小川さんもあのアイドル好きなの？」

「そ、それは…！」

「それは？」

「それは、城戸さんのバカあ！」

「なんでさあああ！」

直後、ZZグレイズのダブルライフルが火を噴きアスタロト改に迫るがアスタロト改は右手のライフルを犠牲にして弾幕を張り逃走する事になった。

「響の奴なんかやらかしたのか？」

アデューして隠れていた獅電キマイラがZZグレイズに追いかけられるアスタロト改を見届け再び地上に出た途端、アラームがなる。

「今度はなんだ?!？」

「拓哉さん見つけました！」

どこから飛んできたアックスをナックルバンカーで殴りつけながら飛んできた方向を向くとそこにいたのは青を基調としたグレイズアインだった。

「まりーち、違うんだこれは！」

「何が違うと言うんですか！アイドルにうつつを抜かして！」

グレイズアインの大型アックスをナックルバンカーで防ぎながらかすれかすれ答える。

「誰だつて男ならアイドルに会いたいと思う筈だ！」

「…遺言はそれで良いですか？」

茉莉乃が言い終わると同時にグレイズアインのバックパックから更に腕が2本伸びてきて近くに倒れ込んでいたグレイズリッターのナイトブレードをそれぞれの腕で掴んだ。

「う、嘘だろ…？」

そんなグレイズアインに挑むかのように獅電キマイラがライフルを構えるのだった。

「たつのしいわ！かかって来なさい！」

中折れした太刀をこちらに飛びかかって来たハシユマルに突き立てると先程木乃香のバルバトスが斬り伏せたバエルのソードを抜き取り二刀流で構えハシユマルの頭部を同じように斬り伏せ、ハシユマルがその動きを止め地面に崩れ落ちる。

「部長楽しそうだね…」

「まあ木乃香ちゃんが楽しければ良いんじゃない？」

その様子を遠くから遠距離用のスコープから覗いていたのは翼のグレイズスナイプと接触回線で画像を回してもらっていた紫と黒のカラーリングが施された奏の百鍊だった。落ち着いたのか木乃香のバルバトスがこちらに歩いて来た。

「楽しかった。2人は行かないの？」

「僕はガンプラが手に入れば良いから生き残る事を優先するよ。」

「私は行きたいけど、木乃香ちゃん片端から落としていつちやうから出番がね。」

木乃香が翼と奏の話を聞くと目を輝かせながらある提案をする。

「なら、私と楽しい鬼ごっこを始めましょうか！」

「お、良いねー！負けないよ！」

「おや、僕の話はスルーかな？」

今この場合は、バエルソードを構えたバルバトスとグシオンアックスを構えた百鍊と全身のミサイル発射口を開いたグレイズが三つ巴で睨み合うという異質な空間になっていた。

「グレイズアインに隠し腕ってありかよおお！」

弾切れを起こしたライフルをグレイズアインに投げつけるが、隠し腕の剣に一刀両断されてしまう。

「悔い改めて下さい！」

ブーストを噴かして獅電を追っていたグレイズアインが途中近くにあった落石を掴み獅電キマイラに投げつける。

「ガンキャノン!? ってそれはエクバか。」

落石をしゃがんで躲した獅電キマイラは、近くの窪みに滑り込みそれに気づかなかつたグレイズアインの背後を取った。

「後ろですか!??」

「正解! 必殺、パイル! バンカー! ナックルウウウ!!!」

グレイズアインに組み付いた獅電キマイラがナックルバンカーをその背に押し付けておもむろに引き金を引くとパイルバンカーが作動し胸部を貫く。

「アイドルなんか、に...」

「粒子消費を考えるの忘れてた...」

動きを止めたグレイズアインに寄り添うように獅電キマイラも動きを止めた。

時を同じくして、木乃香・奏・翼の三者による三つ巴の睨みあいでも最初に動いたのは翼だった。

グレイズナイプの全身からミサイルが放たれ左右のバルバトスと百鍊に向かう。

「こんなもので!」

「私の動きを!」

「止められると思わないで！」

バルバトスがバエルソードで斬り払った際の衝撃波でミサイルを誘爆させていき、百錬はナツクルユニットで衝撃波を起こして同じように爆発させる。

「それでこそと言いたい所だけど、化け物かな？」

「ひつどーい！翼くんのお母さんに翼くんの事任されてるのに！」

「え？そんなの？親公認だ、と…？？」

思いがけない所でダメージを受けた木乃香が、バエルソードをグレイズに投げつけ右肩に突き刺さる。

「リア充…滅ぶべし…」

「おや、何かのスイッチを踏んでしまったかな？」

「これはマズそう…！」

背中のブースターを使って高速でグレイズスナイプに接近したバルバトスが突き刺さったバエルソードを抜き押し倒すと今度は頭部に突き立てるが足をグレイズスナイプに掴まれてしまう。

「奏、今だ。僕ごとやってくれ。」

「りよーかい！これで私たちの勝ちだあ！」

「って思うだろうけど、ただじゃ死なないわ！」

百鍊がバルバトスの胸部を貫きバルバトスがグレイズの胸部を踏み潰し逆手に持ったバエルソードを百鍊に突き立てる機が動きを止めた。

「逃がさないですよ！」

「クソ！なんでこんな事に…！」

というのがこの騒動の発端だった。

アックスをアスタロト改に向けぶん投げそれを躲したアスタロト改がバスターブレードをZZグレイズはナイトソードを抜き斬り結ぶ。

「とりあえず、落ちて下さい！」

「とりあえずで落ちる人はいない！」

何度か鏢迫り合い距離をとったアスタロト改がバスターブレードをもう一本抜き連続すると薙刀形態で再度突撃する。

「おらあああ！」

「くっ！こんな事で！」

ライフルシールドで防いだZZグレイズがライフルを連射しその弾がアスタロト改の左手に持ったライフルに命中し爆発。

「ライフルが？？まあ使ってなかったから良いけどね！」

爆発による煙を利用してブースターを噴かしてZZグレイズに接近、分割したバス

ターブレードをシールドライフルのはみ出たライフル部分に突き立て爆発を起こす。

続けて左脇腹を突き刺そうとするが狙いが浅かったのか左腰の装甲を削ったのみになった。

その後も何とかZZグレイズの攻撃を躲しながら画面右下の現在参加者の欄を見ると当初30名だった数字が2名にまで減っていた。

「そーいや、残り参加者は…2人。って俺と小川さんか！」

「話はまだ終わってません！」

「いやーもうこの大会も終わりだ、そろそろ決着をつけよう！俺が負けたら小川さんの言う事なんでも聞くなって事で話終わらない？」

「…完全に納得したとは言えませんが、それで手を打ちましょう。」

ちやうど弾切れを起こしたシールドライフルをパージしナイトブレードを二刀流で構え、アスタロト改はバスターブレードを二刀流で構えてお互いに突撃する。

何度か鏝迫り合いアスタロト改はバスターブレードの一本を失いZZグレイズもナイトブレードが真ん中で折れてしまっていた。

「これで！」

「終わりだ（です）！」

残り一本となったバスターブレードをアスタロト改が振り下ろしZZグレイズが短



剣サイズにまで折れてしまったナイトブレードを突き立てる。

バスターブレードがZZグレイズの右腕を斬り落としZZグレイズのナイトブレードはアスタロト改の胸部に突き刺さっていた。

「YOU WIN!!!」

アスタロト改に撃墜マークが表示された瞬間、沙希の勝利が確定しファンファーレが鳴り響く。

「決まったあああ! 第一回鉄血祭、勝者小川 沙希さんだああ!」

「おおおおお!!」

「おめでどう!」

「あ、ありがとうございます…」

壇上上がった沙希が遥と楓から限定ガンプラを渡され盛り上がったまま大会は幕を閉じた。

壇上から降りた沙希に響が駆け寄り声をかける。

「小川さんおめでどう!」

「ありがとうございます…。そ、それでさっきの話なんですけど…」

「ああ、なんでも言うこと聞くやつね! さあなんでも良いよ!」

「わ、私とデートして下さい…!」

その後木乃香たちの見守りがない正真正銘2人だけのデートが行われる事になるのだが、これはまた別のお話。

# Another story 3～盾のストライクの成り上がり～

それはある日の夏休みの事、響と紫織はショッピングモールを訪れていた。

「紫織ねえ、あとどれくらい回るの？」

「何言ってるの！まだ10箇所しか巡ってないでしょ、今日は水泳部もないし暇してただから付き合ってよ。」

「俺は暇じゃなかったんだけど、まあたまにはいいか。」

「あ！あのお店行きたい！」

「かしこまりましたよ…。」

そこから5箇所回った辺りである程度満足したのか近くのカフェに腰掛け、響はココアを詩織はコーラを飲んでいた。

「いやー、楽しかった！ここまで付き合わせてなんだけど、響くんは何をしようとしてたの？」

「ホントはガン普拉バトルしに行こうと思ってたけど、詩織ねえが楽しんでるなら良いんだ。」

「ならタツグマツチに付き合うよ？それとも響くんは私とペア組むの嫌なの？」

（幼馴染で姉のようなもんだからそう言う感じじゃないけどその上目遣いでそのセリフは反則でしょ。身長差があるのもあるけどこれが小川さんだったらもう告って振られるまで見えるな。つてもう振られる前提になつてるの悲しすぎるな、おい！）

「嫌じゃないよ、むしろ光栄なぐらいだ。」

「あ、でも私ガンブラ家に忘れてきちゃった。」

「じゃあ、俺のストライク貸すよ。ちやうど新装備の試運転をしようと思つてた所だから。」

今まで付けていたムラマサストライカーを取り外し代わりに前から翼に頼んでいたストライカーを新しく取り付け紫織に手渡し同じ施設のガンブラショップへ足を運ぶ。

「それじゃ行こうか、フリーバトルスペース空いてるみたいだし。」

行つた先でちやうどバトル待ちの人に声を掛け、筐体を真ん中に挟みGPベースをセツトする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. Faird4, forest》

《Please set your GUNPLA》

音声に従つてガンプラを置く

## 《BATTLE START》

「城戸 響、ビルドプロミネンスガンダム。行くよ！」

「黒羽 紫織、アイギスストライク出ます！」

今回のステージは、所々に遺跡が点々としている山脈だった。

「使い心地はどう？」

「普段からストライク使ってるだけあって、そこまで変わらない感じかな。」

詩織がストライクの試し挙動をしていたその数秒後、突如としてリーダーに反応が映りアラームが鳴り響く。

「こんなにも早く!? この様子だとバーニアを使わないで跳躍しながら移動してたのかな。」

「確かにその辺が強いね。ならこんな近いのもうなづけるか。場所は分かっていたからこのまま行くとって高熱源!? 回避は間に合わないか。紫織ねえ、1番目のスロットを！」

「了解! ファストシールド！」

ストライクの両翼からファンネルが2基射出され前面にビームシールドを貼る。

「後、2枚ぐらいいけるよね!?」

「やってみる! セカンドシールド! サードシールド！」

残っていたストライクのファンネルを全基射出し先ほど展開したビームシールドの

前面に貼りストライク自身も右腕のアップソーバシールドを開き衝撃に備えた。

直後、的確に響たちのいる所に恐らく最大出力であろう一撃が放たれ1枚目のビームバリアを貫通し2枚目に差し掛かる。

2枚目を貫通し3枚目に至る頃にはだいぶ威力も弱まり最終的にはアップソーバに吸収される形で収まった。

「このビームの色はUCの機体か。紫織ねえ、大丈夫だった？」

「大丈夫！危なかったけど。」

それは良かった、そう返した響がビームの放たれた方向を見ると何とか見えるぐらいの距離で一機は円盤状、もう一機も独特の形をした機体が姿をあらわす。

「あれはアップサラスとバイアラン？」

「いかにも俺たち悪役ですつて感じだな、紫織ねえは後方支援お願いできる？俺のソー  
ドライブル託すから。」

「良いよ、任せといて！」

自身のソードライブル二丁をストライクに預け分割式実体剣「アミノミハシラ」を両手で持つと剣をブースターにしながらか突進、アップサラスの下にいたバイアランがビームを撃ち込んでくるがアミノミハシラで切り裂きながら進みバイアランを踏みつけ跳躍する。

「飛距離が足りないか！けど、原作になぞった粒子ジャンプを見せてやる！」

はるか上空に佇んでいたアプサラスに届かせるまでビルドプロミネンスが一旦山脈のてっぺんに着地しまた飛ばうとするとところで自身の足場に粒子による土台を作りそこを踏みながら跳躍を繰り返す。

「これを足場に！シールドラグーン！」

「ありがとう！」

粒子を足場にしながら飛んでいたビルドプロミネンスの目の前にシールドラグーンが現れそれを土台にする事でまた加速、アプサラスと同じくらい上空に上がると分割式実体剣「アメノミハシラ」を大剣モードに変更しながらアプサラスの正面を陣取る。

「エールストライカー付いてりゃこんな苦労しなかったんだがな……」

ふと下を向くとビルドプロミネンスに踏みつけられると思っていなかったのか、かなり遅れてバイアランがビームを撃ち込んで来るが足場にしていたシールドラグーンに阻まれ届かずその後ろにいたストライクが気を引いてくれていた。

「よく見ればアプサラスに付いてるのザクスナイパーじゃんか！でえりやああ!!!」

アメノミハシラを振るいザクスナイパーの頭部を斬り捨てると続けて胴体を斬り飛ばし、そこに飛び乗る。

飛び乗った先でアプサラスがビームを放つが上にいるビルドプロミネンスに当たる

わけもなくアプサラスの胸部、コックピットの位置にアメノミハシラを突き立てたまま飛び降りると爆発が起こる。

「まずは1機！思ってたよりも深く突き刺さったせいで、アメノミハシラ抜けなかった…」

「響くん！」

アプサラスを沈め浮かれていた響に突如通信が入りその方向を向くと、バイアランのビームサーベルの一撃でストライクの右腕が斬り飛ばされていた。

「狙いが俺のままだったら良かったのに！」

スロットからSPを選択して聞き慣れた電子音が流れる。

「Burning prominence system standby」

地面に着地と同時にビルドプロミネンスの一部装甲が外れ中から元のトライバーニングと同じ炎のような粒子を煌めかせその熱気でストライクを襲っていたバイアランを吹き飛ばす。

「今だ、詩織ねえ！最初のアプソーバで粒子量は充分のはず！」

「任せて！殺戮する光子盾！」

ストライクのシールドラグーンがバイアランの右肩に突き刺さり地面に縫い付けると、翼のファンネルが全基射出され周囲を取り囲みながら徐々に小さくなっていく。



ファンネルで形成されたビームバリアによってギチギチと少しずつバイアランがすり潰されていく様子を見ていた響は背筋がゾクゾクするのを感じていた。

「あれは味方の時は頼もしいけど、敵に回すと恐ろしいやつだな。」

直後、バイアランが爆発を起こし胸部からコアファイターが射出され逃走を図ろうとしていたのを響は見逃さずビームダガーを投擲して推進部を破壊する。

「バイアランってコアファイターシステム無かったよな？けど、そう簡単に見逃すかっての！」

推進部が破壊され地面に墜落したコアファイターを掴み空に放ち落ちてくるのに合わせてビームサーベルで一刀両断し切り捨て爆発を起こす。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた人たちと挨拶を交わした響と詩織は自販機横のベンチに腰掛けていた。

「アイギスを使った感じはどうだった？」

「防御にパラメーターを振ってて攻撃手段が少ないのが、ちよつと何点かも。」

「そっか、今度翼先輩にその使用結果を伝えるとして今日はバトル付き合ってくれてありがとね！俺も楽しかったよ。」

「これからも暇な時はタッグマッチに誘ってくれても良いんだからね、それじゃ次のお

店に行きましようか！」

「えーまだ行くの、まあでも今日はバトルに付き合ってくれたしとことんお供させて頂きますよ！」

先ほどの買い物物の荷物を抱えた響が詩織の後ろについていき日が暮れて夜が遅くなるまで買い物が続いた。

## Another story 4～今回スナイパーは剣士スタイルで行くそうですよ

「ムラマサストライカーを貸して欲しい？それはまたどうして…。」

「実は…。」

つい先日、行きつけのゲーセンに足を運んだ沙希がいつも通りガンプラバトルブースへ向かうとこの前来た時は無かった張り紙を見つける。

「大乱戦専用バトルフィールドでのバトルロイヤル、君は勝ち抜けるか！」

というキャッチフレーズの入ったポスターだった。

（以前、2人を相手にしただけで城戸さんが来てくれてなかったら確実にやられてた…それに私に足りないのは近接戦闘能力も足りなかった…。）

「これは参加するしかなさそうですね…。」

そう思った沙希の足は当日受け付けも可能だが登録は先にしておいた方が良くと考え、受け付けカウンターに足を運ばせていた。

「それで近接戦闘の訓練も兼ねてイベントに参加しようと。」

「はい、そういうわけなんです…。」

先ほど沙希から受け取ったチラシを机の上に置きつつ「それなら」と尋ねてみる。

「乱戦と近接の訓練がしたいなら俺がNPCモック率いて相手になろうか？」

「お気持ちは有り難いのですが、知っている人だと気持的に緩んでしまいそうで…」

「そっか、分かった。はい小川さん。」

「ありがとうございます、それではムラマサストライカーお借りします…。」

その場でムラマサストライクからムラマサストライカーを外し沙希に手渡しこちらもその場でG—アルケインフルブラスターに組み込んでいた。

「おや？このチラシは…」

沙希が置いていったチラシを翼が手に取り何か考え事をしていたのを尻目にそのまま帰宅する時は流れイベント当日。

「ルールは簡単！制限時間までバトルロイヤルを戦い抜いてもらい残った上位3位の方にステキな景品をお渡しします！それでは行きましょう、ガンプライフイトオオオ？レディイイゴオオオ！」

《《Battle Damage level set to B》》

《《Beginning Plavesky particule dispersal. Faird, Guiana》》

《《Please set your GUNPLA》》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「小川 沙希、Gーアルケインムラマサ。い、行きます！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージはバトルロイヤル用のイベントステージ、ギアナ高地だった。

ゲートから飛び出したGーアルケインムラマサが石ころを風圧で吹き飛ばしながら地面に降り立つ。

「ここから南に行くと川があつて……」

と、そんな事を考えていると唐突にアラームが鳴り響き山の上部から落石が落ちてくるが沙希は冷静にムラマサストライカーのビームキャノンを起動し粉砕させる。

「急に何……？あれはドラゴン……？」

「ふはははははは！お前あれを粉砕したな？なら俺と戦え！」

粉砕した落石の陰から頭部にドラゴンの頭のようなものを被ったジムが姿を現した。

「えつと……なんて言えば良いんでしょうか……」

「俺の名前は橋本！この岩を落として粉砕したやつと戦うと決めてたんだ、いくぞ！」

「随分と好戦的な人ですね……」

そうして、ドラグナイトジムがビーム鉤爪を展開し引つ掻き回してくるのをGーアル

ケインムラマサも天羽々斬を抜き耐えながらスキを見て斬りはらう。

「なんかお前のその剣、あわねえな。本来の持ちもんじゃないだろ？」

(バレてましたか… けどこれも作戦内！)

天羽々斬を分割して持ち二刀流でブーストを噴かし突撃すると、誘いに乗ったドラグナイトジムのビーム鉤爪が振るわれる。

「ははは！こいつコケてやがる！」

「—————！」

ビーム鉤爪がGーアルケインムラマサの胸部を引き裂こうとした瞬間、ムラマサストライカーとGーアルケインが分離しビーム鉤爪が空を斬る。

「自立式のストライカーだあ!!？」

「これで終わり、です！」

空を斬った事で前のめりになったドラグナイトジムの上空からムラマサストライカーが急降下しながらビームキャノンを撃ち放ち2本のビームが貫き爆発が起こる。

「城戸さんの戦い方を見てて良かった…！」

再びGーアルケインを動かしムラマサストライカーも装備し直しその場を後にしようとする。ブーストを噴かそうとしたところ、前方から物凄い勢いで黄色のデュエルが向かってきたので何事かと天羽々斬を構えていた沙希だったが何やらオーブンチャットで悲

嘆の声を上げていた。

「なんだよあの赤黒のストライク！ビーム斬りながら迫ってくるし近くにいたダブルオーもストライクが落とし損ねたのを的確に狙い撃つてくるしよお!!?」

「ストライクとダブルオー？それって…」

天羽々斬をひとまず戻し再びビームライフルに持ち替えブーストを噴かしながら、先ほどのデュエルが向かってきた地点へ向かうがその場には既に誰もおらず戦いの後のみが残っていた。

「腹部に拳で開けたような穴…こっちは胸部を的確に撃ち抜かれたであろう穴…!!  
? 敵襲!!?」

更に確認しようとして中心地に歩き出した瞬間、左前からザクⅢが顎部メガ粒子砲を放ちながら迫っており作業を一時中断しビームサーベルを抜いて突撃する。

「右!!? ビームピストルは間に合わない…!!?」

「チエストオオオ！」

左側のザクⅢにビームサーベルを振り下ろした所で、右側からクロスボーンガンダム×2が迫るがGーアルケインムラマサに触れる間も無く胴体に風穴が空き爆発を起す。

「小川さん大丈夫!!?」

「は、はい：：でも城戸さん何故ここに？」

「お二人さん話は後回しだ、まだ来るぞー」

「援護は2人に任せた！ばあくねつ！ブレイクフィンガー！」

グラディアアトルストライクのフィンガーユニットが紅く輝き背中のタクティカルアームズ極を展開、ブーストをかけ前方に陣を取っていた複数のグリモアを1機ずつ貫きながら数を減らしていく。

その横からグラディアアトルストライクを撃ち抜こうとビームライフルを構えていたトルギスに向けて拓哉のダブルオーガンダムセグエンテがGNメガランチャーを撃ち放ち尚もまだ落とせずにいる機体を沙希が対艦ビームライフルで撃ち落とす。

「なんでこんな集まって来てるんだ？」

「そりゃこんだけ爆発起こしてれば集まってくるだろうよ！」

「えつと、なにかすみません：：」

「小川さんは悪くない（ねえ）！！」

そうして数分が経過した頃、目に見える限りの機体を落とし息を整えていたところモニター右下の残存数カウンターの拓哉が眺めていた。

「お？残り5機か、俺と響と小川さんと2機だな。」

「それなら話は早い、仕留めに行くか！」



「そうですね．．．」

ブーストを噴かし残った2機を探していると突如アームが鳴り響きミサイルやビームが纏まって向かってきていた。

「そつちから来てくれるなんてな！拓哉、小川さん！」

「そうは言ってもこう弾幕が激しいとな．．．」

「私も隙を作るのが．．．」

「無限に続く弾幕なんてないはずだ、止む隙を作るための盾を出す！タクティカルアームズ！」

「タクティカルアームズ極！シールドモードオンステージ！ハハア！」

何処かで聞いた機械音声が流れた後展開されていたタクティカルアームズ極が盾モード（実体剣）に変形するとそのまま地面に突き立てビームの集中放火にさらされながらも、3機を守りきったタクティカルアームズ極は爆散しその爆発に巻き込まれ体制を崩したグラディアートルストライクを庇うようにダブルオーガンダムセグエンテとG—アルケインムラマサがビームライフルを連射し敵機を遠ざける。

「俺がコイツを抑えるから小川さんは右のアレを！響はさっさと空中に待機させてるやつにパック換装してこい！」

「了解（です．．．）！！」

ダブルオーガンダムセグエンテが大型ビームブレードをGーアルケインムラマサが天羽々斬を両手で構え目の前のジオングとフルアーマーガンダムに斬りかかり、グラディアトルストライクはタクティカルアームズ極を失った。バックをパージし上空に浮かばせていたバンダースナッチストライカーに換装してブーストを噴かし舞い戻る。

「城戸さん、それって木乃香さんの…。」

「この前小川さんにムラマサストライカー渡した後、部長が持つて行けっというから。気を取り直して、さあ殲滅を始めようか！」

「おい、言葉まで影響受けるな。」

直後、フルアーマーガンダムとジオングのフルバーストをダブルオーガンダムセグエンテのGNフィールドで防ぎその横からアスタロトを起動したバンダースナッチストライクからビームが放たれフルアーマーガンダムをシールドごと飲み込んだ。

「よっし！まず一機、続けていく！」

ジオングの拡散ビーム砲を所々当たりながらも回避し、ジオングの右腕を斬り落とし対艦刀を地面に突き立て腕を組み土台の構えを取り

「小川さん飛んで！」

「踏んで良いんですか?!？」

「機体の方ね！リアルの方は…。」

「おっとそこまでだ！人の前でイチヤイチャすんじゃねえ！」

Gーアルケインムラマサが天羽々斬を肩に担ぎつつバンダースナッチストライクの腕にジャンプ、そのまま腕を振り上げ宙に舞い正面から袈裟斬りに斬り落とす。

「これで終わりか？」

「いや、それならもう終了のアナウンスが流れるだろ。」

「それに加えてここはバトルロイヤルステージ…」

沙希の言葉が終わる前に聞き慣れた音声とは違うブザーが鳴ると突如地面がひび割れそこからネオ・ジオングが姿を現した。

「あん？なんだありゃ。」

「バトルロイヤルステージ専用NPC、シナンジュ内蔵ネオ・ジオングですね…残り時間10分になると自動投入されると噂の機体です。」

「まだ終わりじゃないのか。でも俺たちの相手じゃないな拓哉、小川さん。」

「わあつてるよ。」

「行きましょう…」

「殿は俺たちに任せて！行けるだろ？」

「当たり前だ、足を引っ張るなよ。」

「トランザム（SEED）!!」

「SEED system standby. Remaining until  
he time limit of 180 seconds.」

突如姿を現したネオ・ジオングの両脇から紅を纏ったダブルオーガンダムセグエンテと蒼を纏ったバンダースナッチストライクがそれぞれの獲物を振り下ろし、アームユニットを斬り伏せた。

「そんなメガ粒子砲でトランザム中のセグエンテを捉えられるもんかよ!」

返す刀で右肩のメガ粒子砲にビームサーベルを突き立て爆発を起こすともう片方にビームダガーを投擲しこちらも使い物にならなくする。

「上半身の武装はほぼ潰した、行ってこい!」

「行くよ小川さん!」

「はー!」

最後の抵抗と言わんばかりの腹部メガ粒子砲が放たれたそれをバンダースナッチストライクのSEED粒子ビツトで相殺、シナンジュの正面に近づくとビームサーベルを振り回してくるがその腕ごと対艦刀で斬りふせる。

「はああああ!!」

シナンジュの左右を陣取りGーアルケインムラマサが天羽々斬をバンダースナッチストライクが対艦刀を振り下ろしシナンジュを斬り落とすとコアユニットであるシナ

ンジユを失ったネオ・ジオングが地面に崩れ落ちた。

「YOU WIN!!!」

「優勝は城戸響さん、安藤拓哉さん、小川沙希さんの3人だあ！会場の皆さん熱いフアイトを見せてくれたこの3人に盛大な拍手をお願い致します！」

その後、優勝商品の中から3人は思い思いの物を受け取り大会は幕を降ろした。

「城戸さんと安藤さんはどうしてここに？」

「あーえつとね、優勝商品欄に翼先輩が前に欲しかったなって言ってたガンブラがあつていつものお礼を兼ねて取りに来た感じ。」

「ちなみに俺は響の付き添い。」

「そう、だったんですね…。あ、私こっちなのでお先に失礼します。」

「お疲れさん(様)、また学校で！」

色々と日常を終え近々行われる予定の旅行の準備をしなければならないのを思い出し服から詰め始めた所で、作業していた手を止め机の上に置かれていた箱を手に取り中に入っていた物を見る。

「このペンダント、城戸さん気に入ってくれると良いのですが…。」

先ほどの大会で沙希が手に入れたものは本来の目的の二の次と考えていた大会告知ポスターの優勝商品に含まれていた三日月型のペンダントだった。

（温泉旅行から帰ってきたらこれを渡してちゃんと想いを伝えないと…！）

手に持ったペンダントを旅行行きのカバンに移し替え旅行の準備を終えると3日後の旅行に期待を寄せベッドに潜り込んだ。

まさか旅行がそのような事を伝えられるような状況でなくなるとも知らずに。

# Another story 5～紅には蒼を、蒼には紅を～

「これって？」

「もしかして…。」

「俺たちの機体…。」

「入れ替わってるー!?？」

なぜこんな事になったかは、数時間前のサイゼリヤまで遡る。

「2人とも悪かったね。休みの日にまで呼んでしまつて。」

「全然大丈夫ですよ！むしろ機体の調整ありがとうございます！これから大会に参加するところで先に拓哉とブラブラしてましたし。」

「ありがとうございます。マリと小川さんも後から合流する予定なんで。」

「ああ、例のあの大会か。今回彼女は参加しないから思う存分楽しんできてほしい。」

「あれは悲惨な事件でしたね…。」

今回響たちが参加しようとしている大会はショッピングモールに新しくオープンするガンプラバトルカフェのオープンイベントでいくつもの筐体を繋げた大規模なバト

ルロイヤルとなっており、響と拓哉はすぐ相方を見つけたのだが参加する気満々だった木乃香は恵美に声を掛けるが用事があったらしく断られ舞姫・奏・翼にも声をかけていたがことごとく断られていた…

「部長しまいにはその辺にいた一般人に話しかけてましたからね。」

「しかも今井先輩ガンプラのことにならなければ美人の部類に入るから話しかけられた相手が緊張しちゃって走って逃げていったしな。」

「ああその話か、奏からある程度は聞いていたんだけどそうなっていたとはね…」

今頃別のショップ大会に憂さ晴らしで参加しているだろう木乃香とその相手にされるであろう選手、双方にこの場にいる3人は空を仰いでいた。

「そう言えば翼先輩はなんで断ったんです？滝沢先輩もですけど。」

「僕は参加しても良かったんだけどね。奏が「今日スイーツバイキング行くから翼も来てよ」ってLINEしてきたから断ったんだよ。」

「なんていうかご馳走さまです…」

拓哉の言葉を理解出来なかった響と翼は頭の上に疑問符が浮かぶ。

「あ、響そろそろ時間だぞ。」

「もうそんな時間か。翼先輩俺たち行きますね！」

「楽しんできてくれ。僕の方もあと少しで奏が来ると思うからちようど良い。」



それじゃ、と翼からポーチを受け取り腰につけ入り口付近まで出たところで奏とすれ違ったらしく入れ違いで翼の隣に腰を落ち着ける。

「今日も元気だったね、あの2人は。」

「そうだね、ん？そう言えば…。」

「どうしたの翼くん？」

「奏、確認んだけど彼らのポーチってどっちがどっちだったかな。」

「えーと、確かたつくくんが紺色でビッキーが黒だったはず！あれ分かりづらいよね。」

「もしかしたら、彼らのポーチ入れ間違えたかも…。」

「えー！」

~~~~~

### 参加条件

・ペアであること

・急なステージ変更を了承出来ること

### 勝利条件

・時間制限30分で勝ち残ること

・ペア2人で残っていること

とオーブニングイベントだけあつて色々緩かった。

「さて受付は済ませたけど、かなり大規模なんだな。スタート位置がみんな違うなんて。」

「らしいなあ。俺たちがGブースで拓哉たちがAブースか。Gブースちよつと離れてるし小川さんそろそろ行こう。」

「そう、ですね。」

拓哉たちに手を振って自分のブースへと歩き出し他の人たちも所定の位置に立ったあたりで開始の合図が鳴り、拓哉は読み取り装置に機体を置こうとポーチを開ける。

「今日もセグエンテ……ってこれ響のムラマサじゃねえか!?!?」

同じく響もポーチを開けており。

「拓哉のセグエンテじゃん!これって?」

「もしかして……」

「俺たちの機体……」

「入れ替わってる!?!?」

遠く離れたところで拓哉と声が被ったような気もするがそんな事よりも震える手で拓哉に電話を掛けようとしたが間違っ隣にいる沙希に掛けてしまい、隣から「間違ってますよ……」と突っ込まれ挙句には沙希がタップしてくれた。

「もしもし!拓哉か!?!?」

「いや、俺にかけてるんだから拓哉だろうよ。… ってそんな事はどうでも良くて！」

「俺のムラマサ（セグエンテ）そっちにないか!?!?」

「ある…!」

お互いのため息を吐きながらも時間がもう無かったため諦めることにし、データを交換したところでGPベースのセットを求められ出場選手はGPベースをセットする。

《《 Damage level set to B 》》

《《 Beginning [Plavsky particle] dispersal. F  
i ar d 9 , c a n y o n 》》

《《 Please set your GUNPLA 》》

音声に従ってガンプラを置く

《《 BATTLE START 》》

「安藤 拓哉、ムラマサフルアイギスストライク。飛び立つ！」

「安藤 茉莉乃、ダブルオーガンダムエンドレスファイリア。舞って行きます！」

「城戸 響、ダブルオーガンダムセグエンテ。推して参る！」

「小川 沙希、Gーアルケインフルバスター。い、行きます！」

今回のステージはイベント限定の超大型渓谷のステージだった。

拓哉、響グループはスタート位置が正反対だったらしく見渡す限りにそれらしい姿は

見えず代わりに拓哉たちの目の前にはバトルが始まる前に結託したのだろうかザク系統の混成部隊が逆に響たちの目の前にはジム系統の混成部隊が姿を見せていた。

「参ったな… 早めに拓哉たちと合流したかったんだけど。仕方ない、小川さん援護お願いできる？」

「はい… 大丈夫です…」

初期ジムがビームガンを構えるその直前、響は肩ラックに付けていたGNメガランチャーを拡散モードで撃ち放ちその場の開幕の火蓋を切り早速ビームサーベルを初期ジムの頭部に突きつけ

その背後からジムキャノンの背部ロケット砲が火を噴いてその実弾がダブルオーガンダムセグエンテのバックパックを狙うがこちらは沙希のGーアルケインフルブラスタターの対艦ビームライフルに撃ち抜かれ爆発が起こる。

「なんかジム！ジム！ジム！みたいな話だかクエストなかったっけ！」

「あつたような気もしますが、ちよつと思い出せないですね…」

その後も襲いかかってくるジムたちを退けていると唐突に少し離れたところにいたジムが爆発を起こし周辺にいたジムが離脱していきよくよく目を凝らすと見覚えのある遠隔操作兵器が周囲を旋回していた。

「お？ああ拓哉か。思ってたより遅かったな。」

「武装に偏りがありすぎてな！なんで射撃武装がドラグーンかビームライフルしかないんだよ！」

「そちらはファイターの仕様となっております。それを言うなら、セグエンテだってビームサーベル少なすぎだろ！2本ってなんだよ……」

「あいにく俺はビームサーベルを投擲しないからそこまで必要としてないんだよってそれはともかくお土産を持ってきたんだ。」

「おみや……げえ!?？」

拓哉の指差した方向にはぱつと見でザクウオーリア・ゴトラタン・ターンXの姿は確認できたが他にも複数おり先頭のターンXに至ってはシャイニングフィンガーの構えながら向かってきていた。

その一撃を腰を低く落とし躲すとGNメガランチャーを下から上に振り上げ斬りふせる。

「拓哉おま、え！」

「ははは！恵りい、けどそのメガランチャーの使い方は参考になるな。」

「後で覚えてろよ……」

「制圧砲撃します……！」

「私も手伝いますね！」

拓哉と響の前に躍り出た沙希とマリが全射撃兵装を撃ち放ち、逃げ遅れた機体があるままミサイルやビームに巻き込まれその爆発によりまた違うところで爆発が起き辺りは阿鼻叫喚に包まれた。

「えげつねえな..」

「なあ響。俺たちも負けてられねえと思わないか？」

「当たり前だ、荒れ狂えセグエンテ！トランザム！」

「一回使ってみたかったんだよ！SEED！」

「SEED system standby. Remaining until  
he time limit of 180 seconds.」

紅と蒼に染まった2機が残像を残しながら残っていた機体へ斬り込み周囲に衝撃が走ると不幸なことにその間にいたタイヤ付きのヴィクトリーガンダムがタイヤごと爆発してしまう。

「邪魔だああ!!」

巻き込まれちゃ敵わないとヴァーチェやヴァルヴァア口などが太いビームを撃ち込んでくるがそれ程度で響と拓哉が止まるわけもなく、ムラサフルアイギスストライクは天々斬でビームを引き裂きダブルオーガンダムセグエンテはGNバスターソードで受け流しながらすれ違いざまに斬り込んでいく。

「マリさん大変そう、ですね…。」

「沙希さんも…。」

次々と爆発が起こる中、向かってくる機体を沙希が対艦ビームライフルで冷静に撃ち落とし撃ち漏らした機体に関してはマリがGNランスで串刺しに行つた。

そうして残機がどんどん減つて残り半数を切つた辺りでアラートが鳴り響き、ステージ中央からステージが渓谷から市街地へと更新されていく。

「うお!!? もうそんな時間か…。」

「らしいな。市街地の方が足場が多いし俺は好きだぜ。」

ステージの更新に驚いてしまった響はトランザムを切つてしまいそれにつられて拓哉もSEEDを中断、そんな矢先にビームサーベルを構えたAGE-2が向かってくるがその周囲にはソードドラグーンが展開されており切つ先が2機に触れることもなくダルマにされ地面に落ちていった。

「残り半数を切つたとは言え油断しないでください…。」

「ご、ごめん助かったよ。」

「拓哉さんも気をつけて下さいね?」

「気をつける。響がトランザムを切らなければ…。」

「俺だつて切るつもりは無かつたわ、間違つて押しちやつたんだ。」

ともかく小川さんには後でめちやくちや感謝するわ、と内心思いつつGNビームサーベルを2本抜き上空からこちらを狙っていたバイラリナのヴェスパーによる射撃を前面に展開したGNフィールドで防ぎなら接近し両足を斬り伏せ武装を失ったバイラリナの胸部に1本を突き立てて距離を取ると直後爆発が起こる。

「バイラリナって女性みたいなスタイルしてるよな。」

「ウーンドウイードとかもそうですよね…。」

「確かにそうだね！どちらも小川さんに似合ってると思うよ可愛いし！」

「…!?？」

「おい馬鹿！こんな時に口説いてんじゃねえ！」

「拓哉さん私は！」

「安心しろ、マリは十分可愛いから！」

「えへへ。」

突如糸が切れたように地面に落下しかけたG―アルケインフルブラスターを慌てて響が拾い上げ、近くの高層ビル群に下ろしマリに介抱をお願いすると拓哉を引き連れその場を後にする。

「響、俺とマリに言うことは？」

「ほんつとうに申し訳ございませんでした…。」



「全く、ステージが変わって身を隠しやすくなって良かったな。」

「確かにな…： さてここからどうするよ。数m先でドンパチやってるけどそこ行くか？」

「そうすつか。遅れんなよ！」

そこから数分ほどかけてドンパチ場へ向かうと早速サイサリスのシールドを胸部に装備していて防御力に自信がありそうなミキシング機がこちらに向け多数の手榴弾を投擲してくるがダブルオーガンダムセグエンテはGNメガランチャーを両手で構えフルバーストで撃ち放ちミキシング機ごと薙ぎ払う。

「こんなもんか？意外と使い勝手が良いもんだ。」

「そういうやさっきの可愛いから似合うとかって普段の響なら言わないだろ。誰の入れ知恵だ？」

「さすが拓哉だな。紫織ねえと琴音さんだよ。「沙希ちゃんの事ちゃんと褒めないとダメよ？」ってさ。まあ元から思ってたんだけど背中を押された感じ。」

「これが素で言えていたなら多少はマシだと思っただが…： 待てよ？この通信は何処と繋いでるんだ？」

「ん？そりや拓哉とマリさんと小川さんに決まってるじゃんか。それが何か？」

「どこまで聞いてたのか、いや今もダウンしてると良いんだけどな…：」

拓哉のなにかを考えているのを響は詳細を聞こうと口を開こうとしたその時。

「誰かその怒れる獅子を止めて下さいい！」

「は？マリ？小川さんはつてまさかその怒れる獅子？！おい響！」

「どうした…？！」

「ひもサメ？！？dどi#…？！」

マリの第一声から数秒とかわらず振り返った響の頭上には先ほど寝かせてきたG—アルケインフルブラスターがビームワイヤーを振り下ろそうとしていた。

「ひっ？！？お、小川さんどうしたの！」

「あの…！発言は…！」

「え、なんだって？！」

「嘘だったんですか！」

すんでのところで大型ビームソードを振り抜きビームワイヤーを切断したのだが間髪入れず頭部を拳で殴られているところを見た拓哉が「俺のセグエンター！」叫んでいたがそれは今問題ではない。

（さっきの拓哉との会話が問題なんだろうけど…）

「えっと、似合ってて可愛いって話だよね？！？たしかに言われたのもあるけどそれでも本心で思っ…！」

「信じられ！あ、安藤さん借りますね？」

「響悪いな、俺は自分の身が大事なんだ…。」

「拓哉あ！」

拓哉から奪い取った天羽々斬を真正面から振り下ろしそれを肩のGNドライブを同じく正面に向けGNフィールドを貼りギリギリのところまで持ちこたえるが…

「響さん。なんでエクシアが実体剣を装備していたか覚えてますか？」

「そりゃ、裏切った人が出た時GNフィールドを破るのに…はっ!?」

「正解です♪覚悟は出来てますよね？」

その言葉とほぼ同時ぐらいで前面に貼ったGNフィールドがひび割れていきG―アルケインフルブラスターが更に力を込めた瞬間音を立てて砕け散り右腕がヒジ関節から吹き飛ぶ。

「あはっ！狙いが逸れちゃいましたね？」

「ハイライトってそう簡単に消えないよな…小川さん話し合おうって！人が大事な話をしてるときに割り込んでくるんじゃない！」

ドンパチ場の中心だっただけに場の雰囲気を含んでいないミキシング機がビームサーベルなどの様々な武装を向けてくるがまともにやり合ってられないと吹き飛んだ右腕から大型ビームソードを左手に持ち替え近い敵はすれ違いざまに斬り遠い敵は脚

部ビームシューターでビームを蹴り込んで蹴散らす。

沙希の攻撃を避けながらだったので多少狙いはズレるがまあ仕方ないと改めて沙希の方を向くとソードドラグーンで周囲を撃ち抜きそこを抜けてきた敵機には分割した天羽々斬で切り刻んでいた。

「俺のセグエンテ最後まで形保ってるかな…。」

「拓哉さんどうしました?」

「いや…あの2人がやり合ってるところに漁夫の利を狙おうとして近づいてったやつらが即座にやられてて残機見たら残り8機。つまり俺らと響たちの周囲をぐるぐるしてるクタン参型装備のグシオンともうワンペアしか残ってないんだよ。」

「制限時間まで残り3分ありますね。あれはクタン参型の方にも搭乗者がいる感じですがあそこには行けそうにもないので他のペアを探しに行きましょう!トランザム!つてまだダメか…。」

「そうだなあ。俺らのペア優勝で締めるとするか。つてマリ後で一緒に調整するからちよつと待てて!」

調整が不十分だったのか一瞬だけ紅くなったトランザムが不発に終わってしまったダブルオーガンダムエンドレスファイリアを慰めるように肩を叩きムラマサフルアイギスストライクと共にリーダーに反応があった方角へブーストを噴かしかけていった。

「一旦落ち着こう？話せば分かる。」

「私は落ち着いてます！響さんがちゃんと褒めてくれたと思っていたのに！」

「小川さん：いや沙希に言いたいのは元から紫織ねえ達に言われる前からずっと女性的スタイルの機体が似合うって事を伝えたかったしまだ通い始めて数日だけど権八郎さんの道場に飾ってある生け花をいける時の姿も可愛いと思っただしビート（小川家の猫）と遊んでる時の姿だって可愛らしいと思っただしこの場で伝えるには時間が足りないぐらい可愛いを伝え足りないと思ってる！」

沙希と会話しつつもクタン参型装備のグシオンリベイクにGNバスターソードを振り上げ斬り込むが出力が足りず切断までは至れないと判断し、対象に触れるその時のみトランザムを使い瞬間的にパワーを上げ強引に斬り伏せた。

「：：！城戸、さん：：！」

「だから今度俺と一緒に：：！」

沙希と響の話し合いが終わろうとしている中、拓哉たちは残った1組を見つけ戦闘を仕掛けていた。

「アンカー装備を付けたクロスボーン！お前の相手は俺だ、行けよ粒子ビット！」

「ARM SEED system standby。Remaining until the time limit of 60 seconds。」

勢いよくふるった腕の余剰粒子が様々な形を保ちつつ敵機の周囲を取り囲み、ビームシールドやABCマントを貼ったクロスボーンガンダムに突撃をかけ連続的な攻撃にABCマントの耐久値が切れてしまいそこから侵入した粒子ビットがクロスボーンガンダムに突き刺さり内部から爆発を起こす。

「よし仕留めた…。マリそっちは！」

「すみません逃しました！あっちに！」

「仕方ねえ。そういやあっちって響たちの方角じゃ。」

今からじゃ制限時間に間に合わない、そう判断した拓哉たちはブーストを噴かそうとした手を止めていた。

「さ、小川さん！今度俺と遊びに行つて下さい！」

「は、はい…。喜んで…。！」

制限時間まで残り数秒、一応決着が付き機体同士で手を組もうした時先ほど拓哉たちが逃したF90が両手のガトリングを乱射してくるが良いところを邪魔された2人は改めて獲物を構え。

「良いところ…。！」

「だったのに…。！」

「邪魔をするなあ（しないで下さい）!!!」

ダブルオーガンダムセグエンテの大型ビームソードとGーアルケインフルブラスターの天羽々斬がF90を横一線に薙ぎ払い爆発が起こる。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け授賞式などを終えた響たちは取り敢えず機体を本来の持ち主に戻しスマホを除くと翼からLINEが数件来ており「機体を間違えて入れてしまった。」「大会前に気付いて欲しい。」「既読がついてないという事は大会が始まってしまったんだね、でも君たちならなんとかなんだろう。」

「だ、そうだ。まあなんだその。」

「良い練習になった、と思う。これは翼先輩に感謝しないとな。」

「だな。そういうや2人はもう収まったのか？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「ご迷惑をお掛けしました…。」

「ま、収まったなら良かった。それじゃ俺はマリとトランザムの調整があるからここいらでお暇するわ。」

「それでは失礼します！」

「私もこの辺で…。」

「ああうん！また月曜日に！」

駅とは反対の方へ向かった拓哉たちと別れそれぞれの帰路についた響のスマホがバ  
イブがなる。

「拓哉から？なんだろう…」

「響と小川さんがやり合ってる時の会話がな？フレンドチャンネルで回線繋いでたか  
らこつちに流れてきたんだが、完全に告白の流れだったじゃねえか。最終的には響がへ  
タレて小川さんも何故か流されてたから良かったんだらうけどさ。」

「うわあ…あの時の会話全部聞かれてたのか。めちやくちや恥ずかしいんだがって一  
時的に感情が高ぶっちゃって思わず下の名前で呼んじやったけどホントもうすこし喋  
れるようにならないと…」

あの時の自分のヘタレっぷりを殴ってやりたい感情と今度権八郎さんに相談しよう  
と思った矢先に睡魔がやってきてそこから数分もしないうちに深い眠りに落ちていっ  
た。

そして、今回のこの機体を交換して戦ったデータが新機に生かされたの言うまでも  
ない。



## Another story 6～時に人は譲れぬものがある～

時は一番早く全国大会用の機体が出来上がっていた沙希がベースを決める頃の文化祭の日まで遡る。

「で、委員長さん。寝てた俺言うのもあれなんだけどなんで俺らのクラスの出し物は女装カフェ？なんででしょうか？」

「しかもその賛成票の数だ。比率としては5・5：4・5なのに賛成が7割を上回ってるて・・・」

つまり何人か女装してみたかった男がいたって事だろう。まあ学生時代に一度くらい女装したい人もいるだろ。

そんな事を考えているとこの響たちのクラスの委員長である大崎 佳奈が遠い目をしながら口を開いた。

「寝ていたとしてもそれは当然の質問ですね。ですが、簡単に纏めると以前このクラスを受け持っていた先生が去年は男装喫茶をやっていたから今回は女装喫茶で良いんじゃないか？と言う事でこれに決まりました。」

「決め方適當過ぎないか!?？」

「私もそう思ったんですけど。： クラスの人たちが異様にやる気を見せていたのでもうこれでいいかって思ったんです。」

佳奈の説明を聞きここで嫌がったらクラスの女子からバツシングを受けるんだろかなど軽くため息を吐いてもう受け止めることにしようかと心に決める。

「分かった。やるからには特別賞目指して女装してやろうじゃねえか!」

「でも響はともかく俺みたいなのは女装したら違和感あるんじゃないか?」

「いえ、心配には及ばないですよ。どちらかと言えば中性的な顔立ちの城戸さんはより完璧に安藤さんはクラスから数名の化粧担当を手配しました、抜かりはありません!」

「準備良すぎない?もしかして、今回の女装喫茶手配したの委員長では。：」

その後、裁縫部の人たちの採寸を終え自分たちのクラス準備の他にガンプラバトル部の方でもバトル体験会を催す事となった。

そして準備期間を終え当日を迎える。

「似合ってるぞ響、お前は名前変えなくても行けそうだな。」

「そうかい、ありがとよ。そう言うお前も似合ってるぞ拓子。」

「やめてくれえ!マリアにこれをやる話したら写真送れってうるさいのに、まあ呼んでないからいいけどさ。」

「え？呼んじやダメだったの？なんか部長がメグ姉さん呼ぶついでにって招待状送ってたよ？」

「見てたなら止めろよ！この姿を見られてみる？撮影会が始まる、それにこれはお前も言えるからな？」

「は？？そう言えばこの服で部活の方も行かないと行けないのか！今からでも遅くない、脱ごう・・・」

だが背中のでファスナーに手を伸ばそうとした響の手がピタリと止まる。

「どうした響？あーそうか南京錠の鍵置いてきたもんなあ。」

「いくらコンセプトがちよつと悪い系のメイドだからって南京錠を付けるって誰が言い出したんだよ・・・」

「確か俺だ・・・服の意見求められた時に南京錠付けたらカツコよくな？って言ったら何故か採用されたは良いけどまさかファスナーの所に付けられるなんて思わなかった。って俺の服もそうじゃん！」

教室を出たところで2人して頭を抱え膝をついていたがその行為自体が周囲の注目を集めていた事に数秒たってから気づき俯きながら部室へと駆けて行った。

「すみません遅くなりました！」

「ねえ2人とも記念写真撮らない？」

「アンタは鬼か!!!」

部室に入るや否や木乃香、翼、奏の3人に囲まれてジロジロと見られて逃げ出したい気持ちに駆られたが、1人囲みから離れていた沙希を見つけ響が声を掛ける。

「小川さんのクラスって出し物なんだったっけ?」

「ひゃい!!? お化け屋敷なんですけど…。それより何枚なら写真とつても良いですか…。」

「ん? あんまり撮られたくないけど、小川さんならいつかな。なんなら2ショットで撮ろうか?」

「そ、それは恐れ多いと言いますか…。!で、でも撮りたいって言うのも…。!」

そんなわたふたしてる2人を放置し改めて木乃香が口を開いた。

「拓哉くん残念だったわね。メグとマリちゃんなら部活が忙しいみたいで来ないわよ?」

「そうなんすね…。命拾いしたわ。それより既に体験コース並んでるんですか?」

「並んでるね。折角だから経験してみたいって人が多いみたいだよ、貸し出し用のガンダムにみんなの戦闘データから作ったサポートAI「6」を搭載してるから緊急時は自動回避してくれるし程よい感じを出してくれるって好評なんだ。」

「翼さん嬉しそうだなあ…。あつちは置いとくとして俺も受け付け行こうかな。」

「そしたらたつくくんは体験者コースをよろしく！あ、新しい人たちだ。こんにちは！どのコースにしますか？」

「えっと、俺とコイツが初心者コースを体験したくてあいつが…おい斗真？」

3人いるうちの経験者らしい斗真と呼ばれたいかにも運動部っぽい彼が響の方を向いたかと思うと突然その手を取った！

「めっちゃタイプな女性だ！貴女のお名前を教えてくださいないだろうか！」

「は？」

「え？」

「「ええ〜!!!」」

突如響の頭の中でガンブラバトル議決が開始していた。

木乃香：却下、翼：却下、奏：却下、拓哉：賛成、沙希：却下、舞姫：却下

まあ当然だな、って拓哉お前覚えてろよ？

（断るにしても本名だと俺が男だって気付いて後、彼が傷つくかもしれない…何か源氏名？）拓子、違う！小川さん？そうだ小川だ！

出来る限りの高めの声を出し正面にいる斗真に向け若干遠くの方を向きつつ

「わ、私は小川 響です。」

「響さん！良い名前だ、どうでしょう、これから俺と学園祭を回らないか！」

「すみません、これから部活の活動が…」

「なるほど！では活動が終わってからはどうだろうか！」

「えっと、お誘いは嬉しいのですが…」

その問答に痺れを切らした拓哉が割って入り会話を終了に導こうとしたのだが一向に彼「望月 斗真」が譲る気配を見せず話が平行線を辿ろうとしたその時、沙希が机をバンツと叩き響の腕を掴む。

（お、小川さ…）

（突然でビックリしましたが状況が状況なので今は私が城戸さんで行きますね…）

「あ、あの…！騒ぎを大きくしたくないので…」

「む…それはそうだ。なら話を手っ取り早くするため、ここで。」

そう言った斗真がカバンからガンプラの入ったポーチを取り出して筐体を指差す。

「俺とガンプラバトルでどちらが響さんと学園祭へ行けるか決めようじゃないか！俺が勝つたら言わずもがな負けたらそちらの案に従おう。」

「分かりました…！貴方に響は譲れません…！」

珍しく沙希の目付きが鋭いものとなりそれでも斗真の自信満々の顔つきは変わらず2人はGPベースをセットする。

《 Damage level set to B 》

《Beginning Plavsky particle dispersal.  
i ard3, Forest》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 沙希、ガンダムルールブレイク。推して参ります。：。」

ゲートから飛び出して近くの岩場に砂埃を巻き上げながら降り立った沙希は、早速追加コンテナを地面に下ろして武装をいくつか装着し望遠レンズから敵機の方角を確認する。

「金と青のクロスボーンガンダムですか。： 真っ直ぐ正面から向かってきてますね、私  
が本来のアルケインだったら撃ち落とさせたのに。：。」

誰に言うわけでもなく独り言を呟きつつ近くの木々間を飛び跳ねながら移動を開始した。

「さあ！俺はここに来たぞ！響さんを巡って争おうじゃないか！」

「もうバトルは始まっているのに正面には立てません。： もとより最初からぶつかる気  
はありませんので。：。」

オープンチャンネルで二言残し通信を切った沙希がスロットから以前翼が沙希に貸

していた物の完成形である「光学迷彩 ver. 2」を選択、レーダーの熱源反応が消えバーニアを使わずに移動する事で簡単に感知はさせない形態が出来上がる。

『ん？小川さんの機体、レオパルドでもアルケインでもないのか。』

『みたいだな、でもあの機体確か翼先輩がおんみつこうどに特化した機体を作ってる時にベースにしてた機体に似てる気が…』

『あの機体の完成形がアレだよ。全国大会用の機体の基礎設計は僕がしてて預かってるから代わりの機体としてあのガンダムルールブレイクを渡したんだ。』

『へえ〜〜』

「何処だ何処から撃ってるんだ！」

「貴方に私の姿は捉えられませんよ…」

斗真のクロスボーンガンダム×7が先程から姿が見えないガンダムルールブレイクに苛立ちを見せ闇雲にビームザンパーを振り回しており、その中でも沙希は冷静にビームガンでABCマントから見えるスラストターを一つ一つ撃ち抜いていく。

「そろそろ終わりにしましょう…」

「クソ…このシノビもどきちよこまかと！」

光学迷彩を脱ぎ捨て初期スタート位置に戻って追加コンテナから近接装備に持ち替え、今もなお複数のシノビビットと戦闘を繰り返している戦場へバックパックからトリ



アイナを抜いてそのまま振り下ろしながら接近を仕掛ける。

「お前はホントにさっきコソコソしてた奴なのか？今度は堂々としてるな。」

「あの人の見よう見まねですけど、ね……！」

ビームガンパーによる斬撃を右手のトリアイナでいなしつつ左手のビームガンで地面を抉り近くの木々を撃ち抜いて倒す事で進路を塞いだりしながら気づかれないように徐々に退路を絶つていく。

その様子をモニターから覗いていた響たちは普段とは違う戦い方をしている沙希に違和感を覚え。

『なあアレって小川さんだよな……』

『俺の間違いじゃなければそのはずだ。それにしても……』

『切り返し方が俺と同じような気がするんだよ。』

『やっぱりそうだよな？俺もどことなくお前に似てると思ってたんだよ。』

響たちがモニターを眺めて疑問を問いかけてあっている間に沙希はバトルを終わらせようと、最後の策を仕掛けていた。

「シノビさんお願いします……」

「この動き……？一つ一つ手動で動かしてるのか！」

ビームクナイを手に持ち飛び回るシノビビットにビームガンパーを振り下ろしたク

ロスボーンガンダム×7だったがぐるりと避けられ前のめりによろけてしまう。

「タイムミングは今…！」

「なんとおおおお!!!」

バックパックが変形したかと思うと左手にかかる形で弓を型取りそこにトリアイナをかけ即座に撃ち放ち何とか最後にシノビビットを蹴散らした斗真の目に写っていたのはビームを展開しながらバチバチと音を立てすごい速度で向かってくるトリアイナの切っ先だった。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが解け響が目にしたのは珍しくテンション高めに見える沙希が上空にコブシを掲げておりその向かいでは斗真が「まさか…！」みたいな顔をして膝をついていた。

「望月さん。」

「は、はい！」

「この勝負、私の勝ちなので響は貰って良いですよね？」

「ひゃい！す、すみませんでしたあああ！」

「あ、おい斗真！」

飛び出すように部屋から飛び出していった斗真たちを見送っていたが

その時、にこやかに見えた沙希の目の奥は笑っていなかったと後々拓哉は語ったとい  
う。

「いやあ、城戸さんありがと！これで彼は気まずい思いをしなくてもすみそうだよ。」

「そんな！響の助けになれて私も嬉しかったですから…」

「そ、そっか…」

沈黙が続く時計の秒針が一周した頃、木乃香が口を開いた。

「さ！城戸くんと安藤くんはそろそろ教室に戻った方が良いんじゃない？」

「ん？あ！おい拓子もう交代の時間だぞ！」

「委員長に怒られる！後、響もう小川さんのこと城戸って呼ばなくて良いんだからな？  
もしくはもう未来予想図ってか。」

「喧しいわ！じゃ、すみません俺たち行きます！小川さんありがとう、嬉しかったよ！」

響と拓哉がスカートを翻しながら急いで部室を飛び出しそれを見送った木乃香たち  
は室内に戻り改めて沙希を取り囲む。

「嬉しかったって！良かったわね沙希ちゃん。」

「自然と響って呼べてたしね！」

「ふえり？あ、いえ、え…」

その後、文化祭の終了を告げるアナウンスが校内に鳴り響くまで違う意味で戦闘不能

になった沙希の介抱が続き

ちなみにこの文化祭はガンブラトル部の斗真の沙希のバトルがエキシビジョン  
マッチとして扱われ特別賞という形で幕を下ろした。

# Another story 7～サンダーボルト中域

（

「サンダーボルトのバトルをしてみたいんだ。」

「いきなりどうしたのさ翼くん。」

それはある日の放課後、読んでいた漫画を置きながら目を輝かせた翼の一言から始まった。

「さてはその漫画サンダーボルトでした？」

「ご名答、こういうバトルをしてみたい。」

「まあいいんじゃないかな？そしたらバトルステージをサンダーボルト中域に設定して・・・」

「いや、ガンプラも拘りたいからサンダーボルトで使いたいものがあれば明日までに準備してこよう。」

「「ガチだ・・・」」

そうしてなんやかんやで各員翼に要望を伝えた次の日

「さあバトルを始めよう。つていうとこだけど先にルールを説明しておこうか。」

・男組女組に分かれ3 on 3の殲滅戦

「分かりやすいルールじゃない!」

6人はバラバラにGPベースをセットし読み取り機にガンプラを置く。

《Damage level set to C》

《Beginning「Plavsky particle dispersal. F  
i ardl, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、フルアーマーザク。推して参る!」

「安藤 拓哉、ドム(TB仕様)。飛び立てるか分からないけど飛び立つ!」

「十六夜 翼、ブラウブロ。さあ行こうか。」

「今井 木乃香、陸戦型ガンダムS型。殲滅を始めましょうか!」

「滝沢 奏、ジム(TB仕様)。出るよ!」

「小川 沙希、サイコガンダム。い、行きます!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは当初の予定通りサンダーボルト中域だった。

ゲートから飛び出して移動中のブラウブロに響と拓哉が乗り込む。

「2人は僕の後ろへ。目的地まで送りとどけよう。」

「頼もしいタクシーです。」

ブラウブロの背にのって周囲の警戒を行っていると遠くの方で凄い雷がなつていたのを横目にリーダーを見直すと前方から高速で接近する機影が映る。

「翼さん、正面に機影3です！内2機はコルベットブースターなんてまさか…」

「そう僕が渡した。」

「「ですよね!?!」」

「僕がブラウブロ使うんだからその辺は考慮しないとね。」

そうなんです。と意識を持ち直し2連ビームライフルを構えブラウブロから離脱、追加ブースターを噴かしコルベットブースターにぶら下がっていたジムへ連射モードで撃ち出す。

だが、そのビームは1発もジムへ当たる事はなく逆にジムのビームスプレーガンのビームが自身のシールドに命中していた。

「そのセンスなんとかならんか。」

「ホントなんでなんだろうなあ…」

「同じ近接型の滝沢先輩ですら射撃は出来るのにな。」

「ちよつと、たつくん！バカにしてない!?？」

「ソナコトナイデスヨ。」

F Aザクのシールドを踏み台に跳躍したドムのヒートサーベルがジムのビームスプレーガンを斬り落とし、2枚あるシールドの内1枚に突きつけ蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた先にある鉄柱を見た奏は回避運動を行わず鉄柱を軸に旋回、帰ってくる勢いを利用して加速したジムのビームサーベルがすれ違いざまに懸架していたドムバズーカを斬り伏せていく。

「そろそろビックガン飽きてきたなあ・・・」

「そういうのであればインコムの有線を狙い撃つてくるのをやめてくれないかな。」

コルベットブースターに飛び乗って両手で構えたビックガンでインコムによる射撃を回避しつつも的確に有線を撃ち続け翼もビームの来る位置にフィールドを展開して撃ち落とされるのを防いでいた。

「こつも攻められ続けると返しようが・・・」

「逃げるなんてさせないわ！」

「ビックガンを使うとはね。」

ラチが明かないと一旦射撃を諦め廃棄コロニーの残骸に沈んでいき攻め手と判断した翼がメガ粒子砲でその残骸を吹き飛ばすがそこにあつたのは砲身の焼き焦げたビツ



クガンのみで近付こうとしたその時、何処からか放たれたビームがビツクガンを撃ち抜き爆発による閃光が視界を染める。

「これだけ近ければインコムは使えないでしょ！」

「確かに、それにサーベルは持ってきてたとてなんだけど。」

閃光が晴れ首を振ってモニターを見なおすとコックピットブロックにかなり近い位置にコルベットブースターとドツキングした陸戦型ガンダムS型が姿を見せており位置的にもかなり近かったためインコムが息をしておらず、接近戦をしようにもビームサーベルを搭載していなかった事と人型でない事を後悔していた。

ブラウブロは木乃香に翻弄され止まっていたその巨体を強引にブースターを噴かしながら進みだし自身の損害はIフィールドで防ごうと考え再びオールレンジ兵装を展開して撃ち墜とそうとする。

「Iフィールドがあつたってね！実弾には勝てないのよ！」

「響くんか拓哉くんを護衛に付けるんだった…」

フラウブロのオールレンジ攻撃は周囲を旋回しているコルベットブースターとドツキングした陸戦型ガンダムS型の動きを捉える事が出来ず、とうとうコックピットブロックのある位置に取り憑かれてしまい零距离でのバズーカ砲撃で煙を上げながら落ちていく。

「ジムがそんなスピーディーな動きをして良いのかよ!?？」

「もーまんたい!」

「問題ありだろお!?？」

ザクマシンガンを乱射して自身からジムを遠ざけようしていたのだが、コルベットブースターから離脱したジムが器用に廃墟の建物を使った戦法に業を煮やしていた。

痺れを切らした拓哉は半端折れてしまったヒートサーベルを抜刀、こちらも真似る形で廃墟の建物の上を蹴って接近し振り下ろす。

「ドムでその動きは辞めた方が良いよ!」

「なんでです?」

「こうなるからっ!」

「は?え...」

ヒートサーベルを持っていた腕を掴んだジムがドムのひざ関節を蹴ると先ほどの建物跳躍で関節部がダメージを受けていたらしく簡単に砕け散り尻餅をついてしまう。

尻餅の勢いで手放したヒートサーベルを奪い取った勢いでサンダーボルト系特有のバックパックに突き立て機動性を潰していく。

「そーいや原作でも建物跳躍するドムなんて見てねえな...」

「でしょう!だから私のマネせずにブースター使って飛ばば良かったのに!」

バックパツクのシールド2枚をパージしてビームサーベルを2本抜きブースターを噴かしながらドムの周囲を動き回り時折ドムの殴りかかって来る腕を斬り飛ばし、残っていた左脚を斬り飛ばす。

「セグエンテってホント使いやすかったんだな…。」

「今度ジオン系の機体の扱い方教えてあげるから！」

バックパツクを壊されながらも必死にジムのビームサーベルを捌いていた拓哉だったが最後は再び尻餅をついたドムの上部からビームサーベルを振り下ろし両断されたドムが爆発を起こした。

「何処から撃ってるんだ!?!？」

拓哉と奏の戦闘が始まって1人余った響は同じく戦闘を開始した直後に姿を消した沙希を探している最中、突如ビームがFAザクを襲っていた。

「そこです…!！」

「何処なんだよ…。」

シールドを4枚各方面に展開し周囲の警戒を強めていた矢先に1枚のシールドにビームが命中しそのビームが撃たれたであろう方角に向かっていこうとブースターを噴かそうとしたその時…

(雷がビームを歪めるなんて原作通り過ぎて怖いですね…。)

放たれた一本のビームは確実にF Aザクを落とすには十分なはずだった。だがそのビームは時を同じくして起きた落雷がビームを歪め逸れていく。

「そこにいたのかあ！」

ビツクガンによる射撃を諦めてザクマシンガンを乱れ撃っていたサイコガンダムにシールドを掲げながら強引にブーストを噴かしタツクルを仕掛ける。

吹き飛ばされそうになった沙希はF Aザクが射程距離に入った瞬間シュツルムファウストを撃ち出し衝撃で宙に押し出され、そのままコロニーの影に姿を消していく。

「バツクパツクだけ!?」

「貰ったあああ！」

追撃が無い事を確認し顔だけ覗かせると廃墟の上部にF Aザクの大型ビーム砲が見え射角的に撃てない事を判断しながらヒートアックスを振り下ろすがそこにいたのはバツクパツクのみだった。

直後、後方から覇気の乗った勢いと共にライダーキックがサイコガンダムの背中を襲いコロニーの外壁に叩きつけられる。

「ワキが甘いです…！」

「原作通りかよ…！」

続けてビームサーベルを抜刀し眼前のサイコガンダムへ向かうがそのビームサーベ

ルはサイコガンダムを貫通する事はなく逆にシュトルムファウストがF Aザクの頭部を吹き飛ばしていた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け満足げな翼を筆頭にほかの部員たちもやりがいはあつたらしく早速、機体をセットして第2ラウンドを始めていきその日のバトルは警備員の人々が注意しに来るまで続いたそうなの。

## 第1章くガンプラバトル・チュートリアルく

### 第1話くそして俺はガンプラバトルに魅入られたく

学校終わりのゲームセンターは、今日も賑やかだ。プリクラを撮る集団やクレーンゲームで1000円玉をタワーの様に積み立てて欲しいぬいぐるみを狙うカップルなど多種多様な人達が楽しんでいる。

そんな中2人の男子高校生は、最近ハマっているガンダムゲームのシヨップ大会を目にするのだった…

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

「そこだあああああ!!!」

スクリーンに映し出されたのは、自分よりも年上だろうか? 同じ制服に身を包んだ女子生徒の操る所々に金色の装飾が施されたストライクの改造機がサーベルを振りかざし対戦相手の機体を、一刀両断する瞬間だった。

「YOU!WIN!」

女子生徒がガッツポーズを取るなか勝利を示す機械音が流れ、会場は盛大な歓声に包まれ大会は終了した。

## 帰宅途中

「いや、それにしても凄かったよなああのバトル！勝利を決めたストライクもカッコ良かったけど、なによりあのファイターのお姉さんも美人だったし！」

そんな事を唐突に話し始めたのは俺の同級生で、腐れ縁の安藤 拓哉だ。

そういや自己紹介がまだだった、俺の名前は

城戸 響。天ヶ崎高校にこの春から通い始めた高校1年生だ。

「確かにストライクはカッコ良かったけどさ、よくもまあファイターまで見てたな。」

拓哉の視野の広さには、正直驚かされるのだがこれを直接言う調子に乗り始めるの  
で言ったことはない

「ファイターも見ないと損だぞ、いつ素敵な出会いに繋がるか分からないからな」

そんな発言に俺は少し皮肉混じりで、

「その素敵な出会いってやつはあったのか？」と、聞いてみた。

するとさつきまで自信満々に話していたのが分かりやすく落ち込みはじめ

「まだ無いんだよお！これからあるかもしれないだろ!!？」

それを見て気の毒に思ってしまった俺は、慰めるように

「そう気を落とすなって、今度あの店行って気晴らしにバトルしようぜ」

すると、その発言を待ってましたと言わんばかりに

「マジか！今度なんて言わずに明日行くぞ！」

さっきの落ち込んでます感など、どうやらガン普拉バトルに比べたら大した事じゃないらしい

その発言を聞き、即答かよ… まあ俺自身さっきの見てバトルしたくて仕方なかったからその答えを待つてたようなもんだけど

「よし、明日の放課後にあの店でガン普拉バトルだ！」

「おう！その約束忘れんなよ？」

そんな会話をして帰路を別れた。

次の日々

「おーい！響く、ガン普拉バトルしに行くぞ」

拓哉に急かされながら

「分かってるからそんな急ぐなよ、ガン普拉バトルは逃げないだろうに」

「早くバトルしたいじゃん！おっ！店舗が見えてきた！俺、お前の分も受付してくるから使用機体だけ教えてくれ」

「エールストライクで頼む、普通の奴で」

そうあの店とは、ガン普拉バトルが出来るのはもちろんのこと自分のガンプラを持つてなくてもお店の方でレンタルで貸してもらえてガン普拉バトルが出来る店の事だっ



た。

ちなみに通うようになってから1週間の間に3〜4日は来ているのでほぼ常連になりつつある

正直来すぎだろ、と内心自己ツツコミをしてると

「ほい、お前の分の機体とGPベース」

と、HGのエアールストライクとガンブラバトルの戦闘データを記録するGPベースの2つを手渡された。

「いつもありがとな、そういやお前の機体は？前はアルケーだっただろ」

そう拓哉は、OOが好きで使用機体もそれ系の機体が多かった。

「今回はエクシアにした。追加武装は付けてない普通の奴」

エクシアか、前から近接に向いてたのでちようどいいなと思っっていると

「お！筐体空いたぞ、やるなら今しかないだろ。さあガンブラバトルしようぜ！」

「分かったよ、俺の機体エールだけど射撃のセンスがほぼ無いに等しいからな？まともなバトルになるかどうか、」

悲しい事に射撃の腕がアレな為、ライフルの使用率が極端に少ないのは自分でも直そうとは思ってるんだけどね

「それはバトルの回数を重ねればなんとかなるんじゃないか？」

「それもそうだな、よしいつちよやったるか！」  
筐体にGPベースをセットする。

《Beginning「Plavsky particle」dispersal. Faird3, corony》

《Please set your GANPLA》

音声に従いガンプラを置く

《BATTLE START》

「響！エールストライクガンダム！出るよ！」

レバーを前に押し出し、カタパルトからガンダムが射出された。

今回のステージはコロニーか…

「さてと、あいつは何処にいるんだ？」

そんな事を呟いた途端に、1発のビームがストライクの頬を掠めていった。

「いきなりかよ！全然気付かなかったぞ」

「ガンダムエクシア、目標を駆逐するってな！」

エクシアがGNソードを展開し、振りかざしてきたのに合わせこちらもサーベルを抜き応戦する。

「うわあ！少しは手加減してくれよ、こっちはエールストライカー試運転だつてのに」

「それはすまねえな、だけど試運転だからこそ全力でやるんだ！」

「だと思つたよ！けどいつまでも受けっぱなしの俺じゃないぞ、こいつで！」

この発言と共にエクシアとの斬り合いを中断して、サーベルをしまい代わりにライフルを手に取りビームを放った

当たる？？？そう思つたエクシアはGNシールドを前にかざしガード行動を取ろうとしたのだが

「おい、なんでこんなに近いのに当たらないんだよ…」

なんと放つたビームは、斬り合いが出来る距離にもかかわらず明後日の方に飛んでいっただけだったのだ

「うわ、自分でも引くほどの射撃センスのなさ」

そう言うと、ライフルをエクシアに投げつけた。これは狙い変わらずGNシールドに命中しひしゃげて落ちていった

「だから、ライフルは投げるもんじゃないっての」

拓哉は笑いながらスラストスターを吹かしGNブレイドを手に取りストライクの背後に回るとエールストライカーを破壊し

こちらが振り返ろうと後ろを向いた所で、コックピット付近にGNソードの銃口が当

てられていた

「これは完全に俺の負けだな、降参だ」

コンソールから降参を選択し、勝敗が決定した。

試合が終わって顔を合わせるなり

「なんで毎回射撃当たらないとライフフル投げて来るんだよ！」

これについては弁解の余地はないので、話をはぐらかそうと

「おっ次の人達がバトルが始まるし見に行かないとな」

逃げるようにスクリーンに向かって駆け出したのだがすぐに足を止めた

その様子を見た拓哉が

「どうしたよ、そんな出撃したは良いけどバーニアの推力が足りなくてゲートから落ちていった奴みたいな顔して」

と、言ってきたので

「どんな顔だよ！と内心ツッコんだがそんなことは気にせずスクリーンを指さし  
「あのストライクだ、やっぱり動きが違う」

映っていたのは、昨日見た金色の装飾が施されたストライクなのだが装備が明らかに  
違い前のが近接特化なら今回は射撃に特化しているみたいだ。

「ホントだあのストライク相手ごとに装備を変えているのか、なんだかエクストリームみたいだな」

と、拓哉は笑っていた。

そんな話を話しているうちに決着がつき勝ったのはストライクで、全身の重火器を使つてのフルバーストが勝負の決め手になったみたいだ。

試合終了後、スクリーンを見ながら

「俺もいつかあんな凄いガンブラを作つてバトルして見たいもんだ」

それを聞いた拓哉も共感できると言わんばかりに

「そうだな、その為にはまず自分だけのガンブラを作らないと」

それもそうだと、受付にガンブラとGPベースを返却しお店を後にしようと扉に手をかけた時

「ねえ、そこのお二人さん、私たちと一緒にガンブラバトルの全国大会を目指してみない？」

後ろからかけられた声に返事をしようと振り返る

それが、俺たちの本格的なガンブラバトルライフの始まりだった

## 第2話く新たな舞台、新たな出会いく

「失礼ですけど、貴女は？」

唐突に掛けられた声に、警戒心丸出しで尋ねる

「昨日も会ってるんだけど、覚えてない？」

こんな答えが返って来た

しかし覚えてない？って言われた時には、新手のたかりかと思ったけど横の友人が呆れていたの違うようだ。

拓哉はこの人が誰か知っているみたいだが、俺はこんな美人と知り合いになった覚えがない。

不思議に思った俺は、

「昨日って事は、学校だよな？クラスメイトにこんな人いたっけ？」

そんな俺に対し拓哉はバカを見るような顔で

「おまえのその人の顔を見ない所直したほうがいいぞ、昨日ゲーセンで見ただろ」

そう言われ、頭の中で昨日の記憶を呼び起こしてみる

「ゲーセン： あ！あのストライクのファイター!?？」

「そーあのストライクのファイターで、初めましてって言うのもおかしいけど天ヶ崎高校2年の今井 木乃香よ。宜しくね。」

丁寧到自己紹介までされてしまったからには、こちらも返さねば失礼だろう。

「初めまして、1年の城戸 響です。お、お願いします。」

「同じく1年の安藤 拓哉って言います、よろしくお願いします。」

と、軽く自己紹介を済ませ休憩スペースに移動し先ほどの内容について聞いてみた。

「すみません今井先輩、さっきのお話なんですけどあれってどう言う事ですか?」

「さっきの言葉通りよ、私たちと一緒にガン普拉バトルの全国大会を目指して欲しいの」

ふむふむ、ガン普拉バトルで全国ね。なるほど全国かー、って全国!??

頭の中でパニックになり、1人であたふたしているとそれを見た拓哉が代わりに

「全国目指すって話は分かりました、気を悪くするようで申し訳ないんですけどなんで俺たちなんです?バトルの腕だって楽しめればいいやってぐらいしかなしい、自分のガン普拉だって持っていない俺たちに」と、

おお、俺が絶対に口に出せないような事をズバツと言つてのけた!我が友人ながら、恐ろしいぜ

すると木乃香は、気を悪くする訳でもなく

「実は前々から2人の事は知ってたの、それで楽しそうにバトルしてる所を何回か見て

てこの2人なら私たちと一緒に全国目指してくれるって思ってたね♪」

見られてたと知った時は、なんか恥ずかしいような嬉しいような気持ちに襲われたが「でも、天ヶ崎高校にガン普拉バトルする部活ってありましたっけ？ウチの高校は運動に力を入れているのだけは知ってるんですけど」

「確かに、運動部の話ならよく聞くけどそれらの話って聞かないな」

2人して同じような事を言いガン普拉バトル出来る所かーと考えていると

「君たちもしかして部活動紹介の冊子見てないの？ガン普拉バトル部もそこに乗ってたんだけど…」

確かに部活動紹介の冊子のような物は貰ったけど部活動への加入は任意だと聞いていたので、読む気がせずすぐにカバンにしまっていたのを思い出した。

横を見ると拓哉も同じような事をしていたらしく、こちらと目線が合い木乃香の方を向き2人して見てませんでしたと素直に謝罪した。

「見てもらえてなかったのは少し残念だったけどそんな事はどうでもいいの、それで話を戻すけどこれは強制ではないし君たちが良ければで良いんだけどガン普拉バトル部に入って全国目指さない？」

その問いに対し

学校で部活動に入って内申点が貰える上にガン普拉バトルが出来るなら、こちらとし



ては有難い限りだし何より困ってる人を見過ごす訳にいかないしこんな美人の誘いを断るのも悪いしな！そう思い

「分かりました！ガンプラバトル部に入部します。」

と、返すと隣の拓哉も同じ考えに至ったのだろう「よろしくお願ひします」と返していた。

「2人ともありがとう！よろしくね！それで早速なんだけど、明日の放課後2人のガンプラを用意したいから管理棟1階の奥にある部室に来てもらえるかしら」

「管理棟の1階奥ですね？分かりました。」

「同じく分かりました。」

そんな会話をし店を出て、先輩と別れた。

帰路途中、

響が

「まさかこんな事になるなんて誰が想像できただろうかいや出来ないだろう、少なくとも俺は出来ない！」

「お前が女性と会話慣れしてないのは、見てて分かったよ。：悲しい奴め」

と、拓哉は憐れむような視線で見てきた。

「失礼な！俺だって女性と会話した事ぐらいあるわ！思い出すから後20分、いや30

分待つてくれ」

「もういい！もう辞めてくれ、聞いてるだけで涙が出てきそうだ。」

思い出す為に、しゃがみこみ頭をフル回転させていると拓哉に中断させられてしまった。

「そ、それは置いといて、明日から学校でガン普拉バトルが出来るぞ！でも、ホント夢見たいだよちよつとほつぺたつねつてくれない？夢じやないか確かめたいからさ」

「男のほつぺた触る趣味なんて無いが、俺も少し夢心地だからつねつてやるよ。」

そして、拓哉にほつぺたを赤くなるまでつねられ夢じやない事を確信していると

「しかし嘘みたいだよな、学校でガン普拉バトルが出来る上にガン普拉まで貰えるなんて」

「確かになつと、予定の時間もだいぶ過ぎちまつたから今日はここで解散するか！」

「あいよくまた明日な」

響、寝室にて

「俺もとうとうファイターの仲間入りかー！どんなガン普拉が貰えんだろどちらにせよ気持ち切り替えて今まで通り負けても良いやじやなく真剣にガン普拉バトルに取り組むぞー！けど楽しみ過ぎて眠れな、い…」

その発言が終わるか終わらないかぐらいのタイミングで、急に眠気が襲ってきて眠っ

てしまった。

次の日、

「管理棟なんて授業以外で来たことなんてあんまりないから分らなかったんだな」

「部活ある人とかしか来ないだろうしな、おここが部室か？」

中を少しのぞいて見るとお店にあるのよりかは小型だが、ガンプラバトルが出来る筐体がありバトルの真つ最中だった。

戦っているのは自分たちより年上だろう女性と大人しそうな外見をした男性がバトルしていてちょうど女性の操るGセルフ（宇宙用パック）が男性の操っているフラッグにサーベルを突き刺そうとしている所で

「はい、今日はそこまでしておきましょうか！それでいつまでそこで見ているの？君たちは」

気づかれてたのか、大人しく中に入り先ほどバトルしていた2人の他にもう1人小柄な女性を見て軽く会釈して挨拶をする。

「初めまして！今日からお世話になる城戸 響です。よ、よろしく願います。」

「同じくお世話になります。安藤 拓哉と言います。よろしく願います。」

どうもこうという自己紹介って慣れないんだよな、地味に緊張しちゃうし普通に出来る拓哉が羨ましいよ。

「私は昨日も挨拶したけど、今井 木乃香よ！この部長をしているの。それでこの人がウチの副部長で」

「2年の十六夜 翼だよ。ここではファイター兼整備全般をしている。部員のガンプラは大体僕が直したり新しい装備の製作もしてるから今回2人のガンプラ製作も僕がやらせてもらう事になってるからよろしく」

次に小柄な女性が

「そして、翼さんのグットパートナーと言つても過言ではない頼れる相方で同じく2年、滝沢 奏つて言います！よろしくです！」

僕に固定の相方なんて居たっけ？と頭を傾げる翼に対し奏は私が決めました！と自信満々に答えるのを見て木乃香は、またかと言わんばかりに頭を抱えていた。

「つと、話を戻すわね、それでこの子が君たちの他の新入部員よ。彼女は部活動紹介の冊子を見て来たそうよ。」

冊子見なかったのを根に持つてるんだらうか…

拓哉と顔を合わせ申し訳ないと木乃香の方を向き頭を下げたおいた

「1年の小川 沙希です。よろしく…」

随分と大人しい子だな、同じ学年って事は何処かで会ってるか

そんな事を考えているなと拓哉は思っていたのだろう小声で「ちなみに隣のクラスで

体育の時に会ってるからな？

そして、球技の時は存在感が消える事からインビシブルエアって異名がある」

「その異名ってイジメられてない？大丈夫？しかし隣のクラスか全然知らなかった」

そんな失礼な事を喋っていると、木乃香は話を遮るように

「さて！自己紹介が済んだところで、君たちのガンプラを選びたいんだけど何か希望ある？」

「ストライクでお願いします！」

「エクシアでお願いします。」

「ストライクとエクシアね、分かったわ。翼くん用意できる？」

「問題ない、試験型という名目で3mm穴を増やし色々と付けられるようにしよう。色は君たちの好みの色を知らないからサフだけ吹いておくよ。」

1時間経過

「取り敢えずここに、大剣・刀・槍・棍棒・ナイフ・ナックルガード・ヒートロッド・ランス・双剣・ライフル・サーベル・ファンネルなど基本的な物を用意したから1人ずつ順番に試して言ってくれ」

それから適応力が高い武装をガンプラに装備していこうと思う。」

それを聞いた2人はミッションモードの殲滅戦を選択し、片っ端から装備。

「最初は俺が行く！」

響！ストライクガンダム！出るよ！」

発進と同時に遠くの山からモックの集団がこちらに向かつて来る。

よし、まずはグランドスラム（大剣）を持ちその威力存分に振るわせてもらう！」

響は、スラストアーを吹かすと大地を踏みしめモックに大剣を振りかざす

「チエストおおおお！」

狙い違わずモックは、一刀両断されて落ちていった。

使い勝手は良いな、一撃一撃にスキが生じるのは欠点だけど…

「次は刀でも使ってみるかな、大剣と同じ感じで振らないように気を付けな」と

そうして、武器を一つ一つ試していき全部の武器を斬ったり刺したり薙ぎ払ったり飛ばしたり投げたりして色々と試してみたのだが近接武器は軒並み高い水準で使えたがライフルはやはり途中で投げてしまつてファンネルに撃たせてしまい自分でライフルの爆発に巻き込まれるなど散々な結果になつてしまつた。

「よし、次は俺だな。拓哉！ガンダムエクシア、目標を駆逐する！」

ゲートから出て大地に降り立ったエクシアは、後方に近接武器を地面に置き最初は中国伝承に出てくる干将・莫耶を模した双剣とファンネルを装備した。機動力が高い機体なのに武器で重量オーバーなんて笑えないからな。

「行けよーファンネル！」

掛け声と共に背中中のHiiレガンダムフィンファンネルをGN粒子でも動かせるように調整したファンネルを飛ばしモックの集団に向かわせエクシア自身も敵軍に向かつて行き、一体一体斬り伏せる。

右足を左腕をバツクバツクを首を切り続け何体か切ったあたりから切れ味が悪くなっていき次のモックが振り下ろしてきたアックスに合わせて双剣をクロスさせてガードの構えを取った瞬間、双剣はぶつかった所からひび割れ刃の部分は完全に折れてしまった。

「双剣の細い刀身で真正面からぶつかり続けたら剣が保たないけど、やり方次第で合いな気がするな」

そう判断し根元だけ残った双剣を投げ捨て、次はナツクルガードを選択しさながらボクサーのように次々とモックを殴る、殴る、殴る

連続で殴り続けるとミシミシと音がして腕の関節部に亀裂が入る

「殴る系の武装使うとしたら関節部強化しないとダメだけど、エクシアで殴るかって言われるとちよつと…」

ホント設定がB（パーツが外れるだけ）にしてて良かった。

双剣、ファンネル、ナツクルガードなど様々な武器を響と同じく試していきミツシヨ

ンモードを終えた。

ひと休憩した後

「ねえ、ガンプラと装備が決まった事だし折角だから私とバトルしない？ ハンデとして2対1で良いわよ。」

まさか憧れに近かったストライクとこんな所でバトル出来るなんて夢にも思わなかったけど、2対1とは随分と自信があるんだな

「是非お願いします！ 拓哉！ やろうぜ！」

「相手のあのストライクだからってテンション高すぎだろ、でもバトル出来る良い機会だからな！ やってやろうじゃねーか」

「やる気になってくれて嬉しいわ、でもその自信はいつまで保つかしらね」

3人は、筐体を真ん中に挟み立ちGPベースをセットする

《Beginning Plavsky particle dispersion field 4, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》



「城戸 響！ストライクガンダム！出るよ！」

「安藤 拓哉！ガンダムエクシア！目標を駆逐する！」

「今井 木乃香！ストライクガンダムバンダースナッチ！殲滅を始めましょうか！」

掛け声と共に、各々レバーを前に動かしガン普拉を発進させる。

### 第3話く腕試しと言つてもく

「バトルが始まったね！どうなるのかな」

奏がスクリーンを見てこう言うと、それに対し翼は

「勝敗は決まっているようなものだけど、2人がどんな動きをするか見ものだね」

奏と翼の会話を聞いていた響と拓哉は、絶対に見返してやろうと決めた

「それにしても勝敗は決まっている、か。確かにそうなんだろうけど気持ち切り替えてガン普拉バトルするって決めたんだから例え負けたとしても腕の一本は、もらつてやる！」

「その心意気や良しつてやつだな。お、惑星が見えてきたぞ」

今回のステージは、宇宙なのだがすぐ近くに惑星を開拓したのでらう基地が見えた。

その近くの地面に降り立ち

「この基地は、使えるか？誘い込んで爆破させるとか」

「確かに、その手は使えるけど問題は以下にして誘い込むかなんだよな」

そんな事を話しつつ、周辺を探索する為に少し歩いて木乃香のガンプラを探しているとリーダーの検索範囲ギリギリに反応がしたと思った時にはさっきまで自分たちがい

た所にコロニーレーザーのような高出力のビームが放たれていた。

「な?」

「な?」

「「なんじゃそりやー!」」

声を揃えて叫ぶと、バーニアを全力で吹かしその場を離れ敵ガンプラの目視を急ぎ辺りを見渡すと少し離れた別惑星の大地に見たことはあるけれど、セラヴィーのビームバズーカをストライクでも持ちやすいように小型化しバックパックの動力炉とケーブルで繋がったビーム砲（アスタロト）をこちらに向けて構えたストライクがそこには立っていた。

「「昨日と昨日見た装備じゃない!?」」

「見た感じPストに近いけど…」

「これが私のガンプラ、ストライクガンダムバンダースナッチよ!ストライカーで例えるなら一昨日のがソードで昨日のがランチャーでこれはオオトリストライカーって所かしらね!」

所々に金の装飾が施されてるのは、以前と変わらずだが大きく違う所が背負っているストライカーと装備だ。

背中にはエールストライカーを改造したのだろう特徴的な2枚羽根とスラスタは

そのまま残っており、エネルギーパックが増設されていたのとサーベルが付いていた所にはあの高出力のビームを放てるまでのエネルギーを供給するガンダムSEED designの核動力を思わせる動力源の外付け式動力炉と右腕にシールドとファンネルを左腕にはパンツァーアイゼンを手には対艦刀を装備し両足には、スラストアーバニアが増設されていて高機動高出力が売りのガンプラなのが見て取れた。

それを見て響は

「強そうだな……けど、拓哉。少しだけあれの相手頼めるか？俺に策がある」

「少しだけならなんとか稼げると思うが、何をする気だ？」

「それは、見てのお楽しみって事で！行けよ！拓哉あ！」

「人をファンングみたいに言うんじゃないやねえ！だがその作戦の道先案内人、引き受けた！」

ストライクとエクシアは、左右からバンダースナッチに向けて駆け出した。

「挟撃って事ね？考えたじゃない、でも甘いわ！いきなさいDファンネル！」

右腕のシールドから、Cファンネルをより切断に特化したDファンネルが5機とも2人に向けて飛んでくる

「ファンネルを飛ばしてくる事は読んでたぜ！拓哉！」

「分かってる！行けよ、ファンネル！」

エクシアの背中から6機のファンネルがDファンネルと交戦しお互いに撃ち落とさ

れたり斬られたりして全て落ちていった。

ファンネルに気を取られ木乃香が目を離した瞬間響は

「これでえええええ！」

射撃を練習しようとして持ってきていたライフルをバンダースナッチに投げつけついでに腰裏のサーベルをダガーにして投げるとライフルを起爆させアスタロトの破壊に成功し、あの高出力のビームが放たれる事はなくなった。

「これが狙いだっただの!? それにファンネルまで落とされるとは思わなかったけど！でも、これはどう！」

バツクパツクからミサイルが放たれ、2機に襲いかかり

「ミサイルは正直予想外だった！こういう時にロックオンがいれば、全部狙い落とせるのに……」

「バカな事を言っていないで、落とすのに集中しろよ！バルカンがあるだろ！」

エクシアは、やっぱり使い慣れた武装を使いたいとの事で付けてきたGNソード（ライフルモード）で次々とミサイルを撃ち落とし

ストライクも、エクシア程ではないがミサイルをバルカンで撃ち落としているうちに辺り一面黒い黒い煙に包まれ何も見えなくなつた。

自分に向かつてくるミサイルを撃ち落とし拓哉は

「離れた所から撃ち落としたいせいか俺の周りは煙が晴れるの早かったな」

ふと横を見るとストライクの周りは煙が充満していて視界が悪そうだった。

「さてと、響には悪いけど決着をつけましょうか？今井先輩」

「あら、1人で勝てるだけでも？私も甘く見られたものね」

「1人では勝てないかもしれないかもしれませんが、でも先輩の武装を破壊出来たのは全てあいつのアイデアなんですよ。だからあいつにばかり良い格好させられないので俺だって足掻いてみせます！」

「なら、その足掻きを見せてもらいましょうか！」

「後悔しないでくださいいね！行くぞエクシアアアア！トランザム！」

トランザムとは、機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで機体が赤く発光し、一定時間そのスペックを3倍以上に上げることができる。また発動中は残像が生まれるほどの高速機動が可能となる。

しかし、このシステムは大量のGN粒子を消費するため、使用後は粒子の再チャージまで機体性能が大幅に低下するなど、諸刃の剣だった。

だが紅い残像と化したエクシアは、バンダースナッチに向かってGNソードを振り上げ

対するバンダースナッチは、対艦刀を振り下ろした。

「トランザム中のエクシアの動きに対応出来るなんてさすがですね！」

「トランザムをよく使ってくる知人がいてね、慣れちゃったのよ！」

お互いに一度距離を取りもう一度切り込もうとする所で

「おっと、そろそろ響の所の煙も晴れるな。その前にケリをつけさせてもらいますよ。今井先輩！」

「やって見なさい！次の一撃で終わりだけだね！」

トランザム中のエクシアは、GNソードを構えるとバンダースナッチの背後に回りスライカーの羽の部分を掴み右腕を斬り落とした。

「腕一本貰いましたよ！さあ、このままって思ったけど無理そうですね…！」

「そうね、伊達にこの部の部長は名乗ってないわ。」

エクシアが右腕を斬り落とした瞬間、トランザムが終わり機動力が低下した所をバンダースナッチが腰に付いていたサーベルをエクシアの胸部に突き刺していた。

「ありがとね。楽しかったわ」

その声と共にエクシアの目から光が失われ撃墜判定の表示が出て、動きを止めた。

(ここまでだな響、後は任せたぞ)

相方の撃墜判定が表示され回りの煙を晴らした響が目にしたのは

右腕を失ってはいるのがまだ十分戦えそうなバンダースナッチと胸部を貫かれ倒れ

込んでいるエクシアだった。

「拓哉がやられたのか!? それでも右腕を斬り落とすってあいつ凄いな」

そう笑いながら、これからどうするか考えていると

「まずは一機、次は君の番だよ。」

（残り時間が少ないからこれが真正正銘のラストアタックになるわね）

対艦刀を構え、ストライカーをパージするとこちらに突撃の構えをとり

「残り時間が少ないから次の一撃で決めようって事か。」

ストライクは自身とおなじぐらいの槍を水平に突き構えを取った。

「私の意思を読み取ってくれて嬉しいわ! ここまで私を楽しませてくれた人も久々よ!

もっと楽しませてちょうだい!」

（この期待に俺は答えるんだ!）

「勝てなくても! 両腕もらつていくぞ、ストライク!」

バーニアを極限まで吹かし、お互いのストライクはそれぞれの獲物を構え目の前の敵を倒さんとするものはそれを振り下ろし、またあるものはそれを突きうがった。

激しい衝突音と共にバトル終了を知らせるバナーが鳴り響いた。

「YOU! WIN!」

その表示が出たのは、残念ながら響ではなく木乃香の方で



最後の衝突の際、響のストライクの槍は、確かにバンダースナッチの胸部を捉えていたのだが木乃香は、それをパンツァーアイゼンで受け止めそれを流すと対艦刀を振りおろし響のストライクを右肩の辺りから斬り裂いたのだった。

バトルが終わり

「負けちまったかー！良いところまで行っただけだと思っただけど…」

「ホントだよな、でも右腕を持っていけただけでも誇ろうぜ」

2人して落ち込んでいると木乃香がやってきて

「安藤くんも城戸くんも楽しいバトルをありがとう！やっぱり2人に声を掛けて正解だったようね」

両手を出すと差し出された手を2人も握り返した。

その様子を端から見ていた十六夜と滝沢と小川も2人に近寄り

「胸の熱くなるバトルをありがとう、早速だが君たちのガンプラの塗装をしましょう。希望のカラーリングを教えてください。武装の配置はこちらで決めてしまいが構わないかな？」

響と拓哉が、カラーリング等を伝えると十六夜は塗装ブースに籠ってしまった。

滝沢と小川は、十六夜が塗装ブースに籠るのを見届けると

「ホントに2人とも凄いよ！部長のガンプラをあそこまでやるなんて」

「城戸君も安藤君も、凄かったです…。」

それを聞いた今井も

「私もあそこまで熱くなつたのはホント久しぶりね、君たちは十分に素質あるしこれからバトルの腕をどんどん積んでいけばもつと楽しいバトルになるわ!」

みんなからの賞賛を受け、響と拓哉は照れながら

「ぜ、善処します」

と精一杯の返事をした。

1時間ほどすると十六夜が出てきて

「今日はこのまま置いて帰るよ、もう時間だからね。けど明日には出来上がってると思う」

そう言われ十六夜以外のみんなが時計を見て

「もうこんな時間!早く帰らないと生徒会の連中がうるさいのよね」と、言うわけで今日はここで開き!明日から本格的な部活を始めるわよ!」

「分かりました!」

部室の施錠をし、生徒会に見つかる事なく学校を後にする

拓哉とも別れ1人、響は家に帰ると自室のベッドに座りまだ手元のない愛機に向かつて

「明日からよろしくなストライク」  
と、呟くのだった。

## 第4話く予期しない展開く

次の日、ガンブラを見たい気持ちでいつもより1時間以上早く学校へ行ったがガンブラバトル部は朝練をやっていないと言うのを知らずに部室の前でHRのチャイムがなるまで待っていて遅刻扱いになってしまい拓哉に笑われたのは内緒だ

HRが終わると

「拓哉は知ってたのか？朝部活がない事」

「ああ、響には言うのを忘れてたけど昨日十六夜先輩から連絡きてたからな」

（こいつ！俺が今日どうやって連絡先を聞こうか悩んでたつてのにもう聞いていた、だと…？）

「昨日連絡先聞いてる時間なかったはずだろ？いつ聞いたんだよ」

「それがさ、偶然にも十六夜先輩と途中まで帰り道が一緒でさその時に聞いたんだよ」

「そういう事だったのか、じゃあ他の人のはまだ知らないんだな」

「いや、十六夜先輩に連絡先聞いた後あの部活のグループに招待されたから全員知ってる」

（え、という事は知らないのは俺だけ？）

その事実を聞かされ軽く落ち込んでいると

「まあ、響も部活行ったら俺が誘っても良いけどやっぱり先輩達に誘ってもらうのが良いと思うし、拒否られないと思うから」

「拒否られたら凹むどころじゃ済まないぞ… それにしても早く放課後にならないかな」

1限、2限と過ぎて昼ご飯を食べて5限が始まる前に

「次の授業体育だぞ、着替えなくて良いのか？」

そう言った拓哉は既に着替え終わっていた

「忘れてた！先に行つててくれ追いつくからさ」

「おう、遅刻すんなよ〜」

拓哉は教室を出て行つた

「さてと、急ぐとするか。なんやかんやでもう着替え終わったしな」

(この時間なら何とか間に合いそうだ)

教室を出て走つて校庭に向かうために下駄箱へ行く曲がり角で誰かとぶつかつた

「うお！なんだ!?!」

「きやつー!」

体格差があつたせいかわ自分は倒れず相手だけが倒れてしまったので手を出し

上からだったのでかろうじて女性と言うことだけは分かったが

「すいません！急いでてケガはありませんか？つて小川さん？」

「こちらこそ前を見てなくて……城戸、さん？」

ぶつかったのは昨日部室にいた小川 沙希だった。そんな彼女を立たせると

「あれ、次の時間俺と同じ体育だよな？こんなところでどうしたの？」

「忘れ物を取りに行こうと……」

一瞬、忘れ物？と思ったがこれ以上聞くのも悪いと思い

「そっか！それはそうとさっきはごめん！体育頑張つてね！」

「はい、ありがとうございます……」

そんな会話をし校庭に出て拓哉と合流した後5分くらい過ぎた辺りでチャイムが鳴り授業が始まった。

そして、女子側の試合を見ていたが結局彼女を発見する事は出来なかった

6限も何事もなく終わり放課後になり部活へ

「やっと、ガンプラが貰える！この時を昨日の夜から待つてたぜ！」

「そんなはしやぐなつて、こつちが恥ずかしくなつてくる」

拓哉は笑いながらまあ気持ちには分からなくもないけど、と言葉を足していた

部室のドアを開けると既に全員いてテーブルの上には自分と拓哉の分であろうガン

プラが置いてあった

「やあ待ってたよ。これが君たちのガンプラだ名前は君たちが付けると良い。後、まだ試運転だから城戸くんのガンプラにしか付けられなかったけどあるシステムを仕込ませて貰った」

（あるシステム？なんだろうGPベースを見ると何か設定してあるけど、今の時点じゃ確認できない…）

翼にそう告げられ響と拓哉はガンプラを受け取ると名前をGPベースに登録する

「早速なんだけど、今日は交流と2人のガンプラの試運転も兼ねて3on3でバトルしましょうか！メンバーは私と沙希ちゃんと城戸くんvs翼くと奏と安藤くんで」

残る5人は大きく頷き今井を含め筐体に向かい

6人は筐体を真ん中に挟み立つとGPベースをセットする

《Beginning Plavsky particle dispersal. Faird4, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響！ストライクルージュ黄昏！出るよ！」

「安藤 拓哉！エクシアデイスターブ！目標を駆逐する！」

「今井 木乃香！ストライクガンダムバンダースナッチ！殲滅を始めましょうか！」

「小川 沙希、Gセルフサーガ。行きます！」

「十六夜 翼、イチイバルッグ。行こうか」

「滝沢 奏！ゲルググ！狩りの時間だよ！」

各々レバーを前に動かし、ガンプラを発進させる

「さてと、偶然なのか昨日と同じステーションな訳だけど全身赤だとやっぱり目立つか…

つとそれより、今井先輩、小川さん今回はよろしくお願いします！」

「ええ、よろしくね」

「よろしく、お願いします…」

スタートした位置が昨日と同じ場所だったので、近くにあつた基地に降り立つと今井が

「今回のバトルの指揮は私が取るから！翼君は遠距離タイプで奏と安藤君が近距離タイプだから作戦としては、私と沙希ちゃんが後方から援護するから城戸君が斬り込んで人ずつ落として行きましょう！」

「了解です！」



「分かりました」

その頃、

「お、昨日と同じステージだけドスタート位置は逆だったか。そんな事より、十六夜先輩！・滝沢先輩！・よろしくお願いします！」

「ああ、よろしく頼む」

「うん！・よろしくね」

前回バンダースナッチが高出力ビームを打った辺りに降り立つと

「多分相手側の作戦は今井くんが考えているだろうから、僕が指揮をとろう」

「作戦の前に、ちょっと疑問に思ってる事があって滝沢先輩のゲルググって改造してるのに見えましたけど名前普通なんですか？」

それを聞いた瞬間、十六夜は頭を抱える

「彼女はね：：以前、名前を付けてって言うから僕が名前を付けても長い！って呼ばないからもう諦めたんだ」

「だって、翼さんの付ける名前長いんだもん！」

その2人のやり取りを見ていた拓哉は

「2人とも仲良いっすね。もしかして付き合ってるんですか？」

「ないね」

拓哉の発言が終わるか終わらないかあたりで否定されてしまった

「気を取り直して作戦会議と行こうか。昨日戦った通り今井くんはオールラウンダーだから僕が抑えるけど、小川くんが後方支援タイプだから奏くんが抑えてくれ。そして、城戸くんの相手を安藤くんが」

「了解!!」

大地を蹴りスラスターを吹かしレーダーに反応が出た目標を定めると

「先行しますー！行けよー！ファンゲウー！」

拓哉は背中でのファンゲを4基射出すると、真正面から斬り込んだ

「そう来ると思ってたぜ拓哉！ここから先には行かせない！」

同じく正面から出てきた響はヒップブレイヴのソードをランスに改良したトリアイナを構え

拓哉のGNソードによる斬り込みを響は受け止めると鏢迫り合いを始めた

「あつちも始めたようね、私たちも行きましょうか」

「分かりました。作戦通り私は城戸くんの援護に……」

そう話し行動に移ろうとした瞬間、CAUTION!!?の表示が出てガトリングによる攻撃を受け

「ちっ！この攻撃の仕方翼くんね！」

「ご名答、あの装備じゃなければバンダースナッチとでも撃ち合いは出来るからね」

翼の言う通り木乃香のガンプラはハンデとして昨日の装備ではなくランチャー装備だった

「ほらほら！行くよ沙希ちゃん！」

「早い……！何とかして離れないと」

翼と木乃香が戦い始めた頃、奏と沙希も遭遇していてGセルフがゲルググから逃げ回っていた

Gセルフは射撃に特化しすぎてサーベルなどの近接武装を積んできていなかったのだが、対するゲルググは逆に近接武装しか積んでいなかった為に離れなければ撃てないガンプラと近づかなければ斬れないガンプラで壮絶な鬼ごっこが繰り広げられていた

「見事にタイマンに誘い込まれたわ！やるわね翼くん！」

「お褒めに預かり光栄だよ。でも援護には行かせないけどね」

一方、響たちは  
「あのファングが邪魔だ！こうなったら……当たるか分からないけどあれをやるしかないか」

ファングや拓哉の攻撃をいなしつつ出来るだけファングを引きつけるとサーベルを

抜きフアングに投げつけた

「フアングを落とす気か？させるかよ！」

拓哉は投げつけられたサーベルを撃ち落とそうと大地の少し山になつてゐる所から飛びGNソードをライフルモードにして射撃体勢に移行した辺りで

「掛かったな！これでも喰らえ！」

響はもう一本サーベルを抜くとビームが出てゐる状態でさつきと同じような位置に投げるとライフルでそのサーベルを撃ち抜き

撃ち抜かれたサーベルはビームを拡散しながら爆発し周りのフアングを誘爆させた

「な？？？ビームコンフューズ？？」

そう響がやったこの技はカミーユがハマーンのキュベレイのフアンネルを撃ち落としたりしたのが有名だがついこの前マキオンをやつていた時に隣の人が使つていたZガンダムを見て思いつき

「こんなふうに行くとは思わなかつたけど、これでフアングはもうない！さあ、斬り合ひを続けようぜ！」

「ああやってやるよ！後悔すんなよトランザム！」

紅い残像と化したエクシアはストライクに向かつてGNソードを構えると右から、左から、様々な方向から斬り込んできた

「トランザム!!? そういやエクシアなんだから積んでるに決まってるよな。でも待てよ? そういや十六夜先輩がなにかのシステムを積んでるって言ってたなそれがこのするか!!?」

エクシアのトランザムに対抗できるなら何でも良いと思っていた響には使わずにいられなかった

## 第5話〈目覚める種〉

「十六夜先輩が言っていたシステムか……エクシアのトランザムに対応出来るとしたら使わない手はないだろ！」

響は球体を操作し名前が明記されていないスロットを選択する。

「SEED、使用可能まで後70%」

そんな機械音がコックピット内で響いたかと思うと今まで明記されていなかったスロットにSEEDと刻まれているのを見つけた。

「SEEDシステム!? ってすぐ使えないのかよ!」

そんな1人ツッコミをした直後に通信が入る。

「やあ、どうやら起動は出来たみたいだね。SEEDシステムを」

「十六夜先輩! このSEEDシステムって一体なんですか?」

未だにトランザム中のエクシアの攻撃をなんとか交わしながら翼に尋ねる。

「元は部長のストライクに付ける予定だったんだけど、何故か起動しなくてね。トランザムの様なものだと思ってくれて構わないよ」

「トランザム。この機体も何かの残像と化すんですかね?」

「それは僕にも分からない」

と、通信の向こうで大きな爆発があったのだがそれがなんだったのかわからないまま通信を切られてしまいもう一度スロットを確認する。

(残り15%か：)

「だとしても！なんとか耐え切って使ってやらあ！」

「何を企んでるかは知らんがファンクを落とすぐらいで勝った気になるなよ！」

トランザムを中断したエクシアは、ストライクに向かってビームダガーを投げつける。

「しまっ!?？」

その発言の直後にエクシアの投げたダガーがライフルに刺さり爆発した衝撃でライフルを持っていた左腕と腰に付いていたサーベルも誘爆してしまう。

「どうだ！これで武装の半分は無くなったんじゃないか？」

「でも！ようやく溜まったこのシステムで俺は！」

改めてSEEDシステムのスロットを選択する

「SEED、スタンバイ。システム終了まで残り120秒」

ストライクが蒼く光り輝くと、粒子による残像をその場に残しエクシアの背後を取り左腕をサーベルで斬り落とす。

「早い！これなら行ける！」

「クソ！これが十六夜先輩の言つてたやつか？残り粒子が心許ないがやるしかない！トランザム！」

再び紅い残像と化したエクシアは蒼い残像と化しているストライクに向かってGNソードを振り上げ、対するストライクもトリアイナを振り下ろした。

お互い一步も引かずにバーニアを極限まで稼働させて空中戦を始める。

「そろそろ決めようぜ！なあ響い！」

「望むところだ！来いよ拓哉あ！」

それは側から見ると紅と蒼がぶつかり合つてるようにしか見えず

響は残り少なくなったサーベルをダガーにするとエクシアに向かって投げつける。

「今更、ダガーを投げたところで！」

ライフルモードでダガーを撃ち落そうと何発か打つと自身に刺さる前に爆発し辺りに煙が立ち込めた。

直後、煙を晴らすかの様にストライクが持つていたはずのトリアイナが飛んでくる。

「な？あのダガーは囷か！」

「SEED終了まで残り、3. 2. 1」

「これで終わりだあああああ！」



トリアイナを何とか弾いたエクシアだったが、それに気を取られ後ろからストライクが接近していた事に気付かず胸部をサーベルによって貫かれその動きを止める。

「0 SEED終了、機体を強制停止します。」

機械音と共にストライクは、棒立ちになってしまったが幸い1分程でストライクは動けるようになった。

「ちよー！こんな副作用があつたのか迂闊に使えないなこのSEEDつてやつは。」

しかし、先ほどの激闘で所々が悲鳴をあげていることに気づく

「これトリアイナ持てないじゃん！持つて移動しようもんなら腕が持たずに関節が逝くよね!? はあく仕方ない置いてくか」

泣く泣くストライクのメイン武装であるトリアイナを放置し残り1本となったサーベルをバックパックから腰に移動させた。

「そう言えば、拓哉とタイマンに入る前に小川さんが滝沢先輩に追われてたな。反応はとと…残ってる！小川さんの援護に行かないと！」

軋む関節のギシギシという音を聞かなかつた事にしてその場を後にする。

一方その頃

バンダースナッチと撃ち合いをしていた翼だったが

煙に紛れ距離を置くと

「このままではラチが明かないな、奏くんビームガトリングとナイフを交換しよう」  
「今沙希ちゃんと鬼ごっこ中なんだけど！でも良いよ！その代わり実弾の方ね！」

Gセルフサーガを追いかけていた奏は、途中で翼の方へ行くとイチイバルッグの右腕で差し出していたビームの方ではなく左腕に付いていた実弾入りのガトリングを奪い取るとゲルググに装備し実体ナイフを投げ渡した。

「やれやれ、相変わらず強引だな。ん？安藤くんがやられたか」

奏が翼から装備を変更するために呼ばれた事で難を逃れた沙希は手持ちのライフルを置くとバックパックに付けていたケルデイルガンダムIIのビームガンIIを両手に持つ。

「これで、大丈夫かな？滝沢先輩は何処に…」

ゲルググを探そうと歩き出した矢先

「沙希ちゃんお待たせー！」

軽快な言葉とは裏腹にガトリングが火を噴きGセルフサーガを大胆にかつ正確に装甲を削っていく。

「もう!?これだけ撃たれると狙いが付けられないっ！」

「鬼ごっこはおしまいだよー！」

ガトリングに気を取られていた沙希は、それがオートに切り替えられていたことに気づかずゲルググの接近を許してしまった。

「じゃあねー」

(もうダメなの…?)

諦めかけていた沙希だったが、いつこうにやられた表示が出ない事を不思議に思い前方に視界を向けるとゲルググはそこにはおらず

「え…?」

「ごめんね小川さん!遅くなった!」

隣を見るともういつ倒れてもおかしくないぐらいボロボロのストライクがゲルググをタツクルで吹き飛ばしていた。

「城戸さん?大丈夫なんですか?」

「一応ね、けど長くは持ちそうにないかな」

響は笑いながら沙希に話しかける。

「あー!もー!何そこでイチヤイチヤしてるの!私いるんですけどー!」

奏は体制を立て直し左手にビームサーベルを構えると壁を蹴り速度を上げて向かってくる。

「イチヤイチヤ!?って危ない!」

すんでの所で交わした響だったがその際、普通の状態であれば問題はなかっただろう。

しかし、今は立ってるのもやっとの状態だったので膝の関節が耐えられず右足が関節の部分から折れてしまう。

「足折れたー！小川さん逃げつて小川さん!?？聴いてます!?？」

「イチヤ、イチヤ..」

プシューつと煙が出そうなくらい顔を赤くした沙希がそこにはいた。

「沙希ちゃん純真だったね.. 後で城戸くん謝つておいてー！」

奏は、ビームサーベルでGセルフサーガのコックピット部分をそつと貫くと壁に寄りかからせ地面に這いつくばっているストライクに向けてGセルフサーガから奪ったライフルを数発撃つ。

「こんな死に方あんまりだー！」

ストライクの爆発に合わせて近くに寄りかかっていたGセルフも揃って誘爆した。

翼が奏から実体ナイフを借りる為に通信していた頃

「全く翼くんは何処に行ったの?この付近まとめて吹き飛ばそうかしら」

「やれやれ、部長はせっかちでいけないよ。この前だつてそれでやられかけたじゃないか」

バンダースナッチの前にイチイバルッグが降りたつ。

「あれは勝てたじゃない!最後に勝てば良いのよ勝てばね！」

アグニを構え砲撃を始める。

「作戦を考える僕の身になってほしいものだ」

イチイバルツグは、持っていたガトリングを背中にマウントしベース機のフラッグと同じ可変をするとアクロバティックな動きで砲撃を避ける。

しばらく撃つては避け撃つては避けを繰り返すと爆発音が止む。

「おや？部長は射撃戦では終わりが見えないと踏んで接近戦に持ち込む気かな」

アグニをパージしたバンダースナッチは腰からアーマーシユナイダーを抜くとスラストターを吹かし接近してくる。

「そう言えば、沙希ちゃん達大丈夫かしらってやられてるじゃない！こうなったら私がやるしかないわね」

アーマーシユナイダーを逆手に持ちイチイバルの上空を取るとそれを振り下ろし対するイチイバルも奏から借りた実体ナイフで応戦しようと振り上げた瞬間

「TIME UP!!!」

試合時間として定めていた20分が経過したので強制的にスクリーンが溶けバトルが終了した。

3 on 3では時間切れになった場合その時点で稼働状態にあるガンプラが多いチームの勝ちになるルールなので

「私たちの負けねえ。なんで沙希ちゃん顔真つ赤なの？城戸くん何したの？」  
「えっ！俺ですか？！」

「木乃香ちゃん！それ城戸くんじゃなくて私なの！」

その後なんとか沙希を落ち着かせて、話を始める

「それでどうだろう、君たちのガンプラの初陣は？」

「とても良いっすよ！ファンングが無くなった後の武装の少なさがあれですけど」

「同じくです！SEEDの使うタイミングは考えないとですけどね…」

「ふむ、2機とも更なる改良が必要と言うことか」

翼はそれだけ言うと会話から外れ拓哉のガンプラの改修案をスケッチしだした

「あのモードに入ると翼くんは長いのよねえ。それはそうと！ねえ3人は今度の休み空  
いているかしら？」

「休みですか、拓哉とガンプラショップでバトルする予定でしたけど大丈夫ですよ！」

「右に同じく」

「私も大丈夫です…」

3人の了承を得ると木乃香は目を輝かせ

「ガンプラバトルの店舗大会に出ましよう！」

「店舗大会？」

また新たな発見や出会いがありそうな予感がした瞬間だった。

## 第6話〈初めての店舗大会・前編〉

「そう、店舗大会。今度の土曜日にこの前私たちが初めて会ったゲームセンターでやるんだけど人数が3人程足りないみたいでね〜」

「3人？先輩たちは出ないんですか？後、その情報は何処から…」

響の問いに対し他の2人とも同じ意見だったのだろう、首を頷かせていた

「私たちは見学つてところね！特に私は頻繁に出入りしてるからゲームセンターのスタッフとは顔なじみのよ」

「なるほど、それでですか。まあ、自分の腕を磨く良い機会だしな！拓哉と小川さんはどうする？」

「俺も腕を磨ける良い機会だし、異論はねえよ」

「私も、せっかくなので…」

満場一致で参加が決まった瞬間だった

「決まりね！そっちには私の方から連絡しておくから今日は解散で、明日は部活休みだから土曜日にゲームセンターで会いましょう」

木乃香の話が終わると荷物をまとめた部員から次々と退出していきそこから時間は



流れ土曜日を迎える

最初に着いたのは響で

「俺が一番乗りか、なんか緊張してきたな」

と緊張をほぐすために深呼吸をしていると

「ゲーセンの入り口で何やってんだよ……通報待ったなしじゃん」

拓哉がやってきた

その後も続々とメンバーが集まり最後に木乃香が到着した

「遅れてごめんなさい！妹を撒いてたら遅くなったわ」

それを聞いた1年生メンバーは頭の上に「？」が浮かんでいたが2年生メンバーは

「あー」と納得した顔をしていた

そんな1年生メンバーの顔見てた奏は小声で

「木乃香ちゃんの妹さんね、お姉ちゃん大好きなの」

なるほどーと地味に納得してしまった

「確かにこんな美人が姉なら仕方ないよな」

思わず出た言葉に対し

「響……発言する場所は考えようぜ」

拓哉から冷静なツツコミがはいり、ふと横を見ると不機嫌そうな沙希がこちらを見て

いた

「え、なんで？俺なんかしたっけ？」

拓哉はもちろんのこと翼までため息をつき

「そんなんだからビツキーなんだよ〜」

と、奏に言われついにてアダ名を付けられてしまった

「お話はここまですべてに会場に行きましようか、もう受付は済ませてあるから問題ないけどお店の入り口だしね」

木乃香によって締められた会話だったが、大会が始まるまで沙希は響と目を合わせてくれなかった

会場に行くと参加者が集まっていて今まさに大会が始まろうとしていた

「今回はお集まりいただきありがとうございます！これより店舗大会を開催したいと思いますー！」

司会の店員さんの掛け声により会場はウォー!!と盛り上がっていた

「それでは第1試合！」

店員さんが対戦する選手の番号を呼びあげる

「お、いきなり俺か…。」

「必ず勝てば言わないけど、ベストを尽くしてこいよ！」

拓哉に励まされた響は顔を上げ

「よし！行ってくる！」

筐体に向かって走って行くと対戦相手は既におりこちらを待っている状態だった

対戦相手に軽く会釈してGPベースとガンプラをセットする

「まずは一戦！目の前の敵からだ！」

「城戸 響、ストライクルージュ黄昏！出るよ！」

レバーを前に動かしかしガンプラを発進させる

今回のステージは、Gセルフが高トルクパックを装備して戦った森林で木々が生い茂っていた

周りに身を隠せそうなところが無かった為

「こうも木々が多いと姿が見づらいな、いつそのこと俺の周り斬り落とすか？」

どう動こうか悩んでいると

「CAUTION!!!」

木々の隙間を抜けスパローが迫ってきていた

「こんだだけ赤ければ見つけやすいか！でもこれで見つける手間が省けた！」

突き出してきたシグルブレイドをトリアイナの腹の部分で受け止めスパローの腕を掴むと至近距離でバルカンを撃ち続け頭部を破壊する

「これで終わりだああ!!」

メインカメラを失ったスパローはさつきまでの勢いはなく落とすなら今だと確信して腰からサーベルを抜くと周りの木々とスパローを横薙にし、爆発とともに勝敗が決まる

スクリーンが解け拓哉たちが立っているところに行く

「お疲れさん、幸先良いじゃねーか」

「ありがとう。おっと、もう次の試合のアナウンスか次の試合は拓哉だな頑張れよ！」

おうっと軽い返事をし筐体に向かっていく

「響に負けてられないしな、この試合勝たせてもらう！」

筐体にGPベースとガンプラをセットする

「安藤 拓哉、ガンダムエクシアディスタープ！目標を殲滅する！」

レバーを前に動かしてガンプラを発進させる

「サイド7か、見通しは良いが相手と少し距離があるな」

今回、センサーを強化するためにエクシアにはアストレアのセンサーマスクを装備してきていたので普段より索敵範囲が広がっていた

「さて敵さんはつとこれは初代ガンダムか？このステージにはピッタリだけどまだ気がついてないな、早々に落とさせて貰うぜ！」

近接武器ばかりでは相手が射撃機だった場合辛くなってしまうので、その時に備えて練習中のGNスナイパーライフルを構えるとガンダムに向けて数発撃つと命中したのだから爆発が起きた

「よし！ついでにちよつと試したい事があるからこいつも！トランザム！」

紅い残像と化したエクシアは急速にガンダムに迫るとGNスナイパーライフルを上に掲げビームによる大型ビームソードを作り出し

「ライザアアアソオオド！」

ダブルオーライザーの様に振り下ろすとガンダムを一刀両断し地面にも大きくクレーターを作り

その直後スナイパーライフルの銃身がビーム量に耐えきれず暴発してしまった  
「出来なくもなかったな、一回限りだけど」

スクリーンが解け先ほどまで自分がいたところに戻る  
そこに響たちが待っていて

「無茶するなく、GNソードIIIIじゃないライザーソードなんてさ」

「同感だね、でも可能性が無いわけじゃなかった。今度スナイパーライフルでも暴発しない様に調整してみよう」

と、呆れる響に対し翼は乗り気だった

その後も第3試合、第4試合とバトルが進んでいきとうとう最後の試合になった  
「やつと沙希ちゃんね！これに勝って3人揃って2回戦に進みましょう」

「小川さんなら大丈夫だって！」

木乃香と響に応援され沙希は少し照れながら頷いた

対戦相手と軽く挨拶した沙希は筐体を真ん中に挟みGPベースとガンプラをセットする

「小川 沙希、Gセルフサーガ。行きます！」

レバーを前に動かしてガンプラを発進させる

今回のステージは、ユニコーンでユニコーンとシャンプロが戦った市街地だった

沙希がガンプラを発進させた頃、外野は

「さつきちらつとだけ対戦相手の子が見えたけどボーイッシュな女の子だったな」

「相変わらず拓哉はよく見てんなくまあ今回は俺も見てたけどなんか雰囲気は今井先輩に似てたような…」

その発言と同時に木乃香たちの方を見ると

木乃香は「まさか…」と少し暗い顔をし

奏と翼は「おや？」みたいな顔をしていた

その頃

「シャンブロの残骸も良く出来てる…これなら盾にもなりそう」

シャンブロの残骸を後ろに索敵モニターを確認するとロックオンアラートが鳴り

「CAUTION!!!」

先程まで自分がいた所にSEED特有の赤と青のビームが放たれていて

「何処から?!?上?」

砲撃を避けながら上空を確認すると黒いガンプラが迫っていた

「黒い…フリーダム?」

このフリーダムとの出会いが響たちを巻き込んだ波乱の幕開けとなるのだった

## 第7話〈初めての店舗大会・後編〉

「ロストフリーダムって呼んで欲しいな♪」

黒いフリーダムのファイターは沙希に向かって通信を入れ追加砲撃をおこなってくる。

「失った自由……けれど、ここで負けるわけにはいかないの!」

ビームライフルを両腰に預けると前回の奏でたちとのバトルで射撃武装のみだともともに戦えない事が分かったため、今回はバックパックにGN-Xのバスターソードを積んでいたそれを抜きながらロストフリーダムに振り下ろす。

「射撃戦じゃラチが明かないって判断したんだね! 思い切りが良いのは嫌いじゃないよ。」

振り下ろしてきたバスターソードをスロットを操作しフィンガーユニットを起動させると片手でそれを防ぐ。

「防がれた!? ならこれは!」

一旦ロストフリーダムから離れたGセルフは、足に装備していたビームピストルを投げつけた。



「ライフルを投げてくるなんて、粒子でも尽きた？」

飛んできたビームピストルを撃ち落そうとビームライフルを構え今まさにビームを撃とうとしてる瞬間。

「タイミングは今！」

いつのまにか精密射撃用のロングレンジライフルを構えていたGセルフは、引き金を引き正確にビームピストルを撃ち抜き爆発させロストフリーダムを誘爆させた。

それを見ていた響たち

「なんかあの戦法を何処かで見たような気がする。」

「「お前のだよ」」

一同から一斉に突っ込まれた響はバツが悪そうに話題を逸らす。

「でもこれでライフルが無くなったから、戦いやすくなりましたよ。」

「いえ、本来あの子は城戸くんと同じ近接特化型なのよ。それなのに今までほとんど射撃で戦ってるのが気になるわね。」

その予感が的中するとはこの時の響は想像が出来なかった。

く

「ライフルを破壊されるとは思わなかったよ。良いねえ面白くなってきた！」

ロストフリーダムは右手のフィンガーユニットを展開するとシャンブロの残骸を掴みGセルフに向かって投げつけた。

「頭だけでも結構な大きさなのにそれを片手で…?」

なんとか避けた沙希だったが、ロストフリーダムを見失う。

「いない…? 一体何処に…?」

「CAUTION!!」

表示に驚きながらもその場に居てはマズイと判断して、後方にスラスターを吹かし避けようとしたが突然Gセルフが動かなくなってしまった。

「え…どうしつ?!?!」

動かなくなった事に疑問を抱いた沙希だったが、その原因はすぐに分かった。

なんと、両足にビームサーベルが突き刺さっていたのである。

「貴女とのバトルは、面白かったけどもうお終い。」

ロストフリーダムはフィンガーユニットを展開すると、動けなくなったGセルフの胸部を貫き爆発させた。

スクリーンが解けて、ロストフリーダムのファイターは沙希に向かって

「ありがとう、楽しかったよ。」

と、言葉をかけた。その後その様子を見ていた木乃香を見つけ目を輝かせ迫ってくる

る。

「おねええちやああん！会いたかったよー！」

抱きつこうとしてきたので、木乃香はそれを避ける。

「さつきも会ったじゃない！それに撒いたはずなのになんでここにいるの？！」

避けられた事に対し特に気にする様子もなく

「この大会には元から参加する予定だったんだけど、まさかお姉ちゃんがいるなんて思わないよ〜」

と、笑っていた。

その言葉を聞いた木乃香は頭を抱えながらも

「一応紹介しておくわね。この子は私の妹の舞姫《まき》よ。」

「舞姫です♪気軽に姫ちゃんって呼んでも良いよ？」

あまりのハイテンションに若干引き下がった響たちだったが、気を取り直し挨拶する。

「小川 沙希です：：よろしく、お願いします。」

「安藤 拓哉だ。よろしくな。」

「城戸 響です。よろしく！」

拓哉と響の名前を聞いた瞬間、舞姫の表情が固まり次第に目線は鋭くなっていく。

「へえ、貴方たちが。まあいいや、よろしく。」

先ほどまでのハイテンションが嘘かのように雰囲気冷たくなりそのまま人混みに消えていった。

「なんだつたんだ？最後の冷たさは…。」

「さあな、腹でも壊したんだろう。」

そんな会話をしていると、木乃香が2人に向かつて

「なんかごめんなさいね？いつもはあんな感じじゃないんだけど、私が男の子の話をするとああなのよ。」

拓哉と響は「なんでだ？」と頭の上に？が浮かんでいた。

「まあ、いずれ分かるわ。そろそろ2回戦が始まるからこの話はまた今度しましょう。」

## 2回戦

「今回はサイド7か…：さっきの拓哉と同じ場所からのスタートなのは良いんだけど、敵がさっぱり見つからない。」

さて、どうしたものかと建物の陰ごと移動を繰り返しステージの中央付近まで進む。

「ここまで来ても見つからないとは、ってリーダーに反応？あれは、ジムスナか。」

ステージ端近くの建物の陰にスナイパーライフルを構えていたジムスナイパーがい

てこちららに向けてビームを数発撃ってきた。

「姿が見つかりやこつちのもんだ！こいつで！」

トリアイナを盾にしながら、徐々に徐々に前進してこのままラチが明かないと判断したのかジムスナイパーが移動しようしているスキを狙ってトリアイナのビームモードを展開して投擲する。

その一撃はスナイパーライフルを破壊しただけに過ぎなかったが、ジムスナイパーを誘き出す事には成功しそれに合わせてストライクはスラストターを稼働させると肉薄してビームサーベルで、ジムスナイパーを横薙ぎになぎはらった。

その後も試合は順調に進み残るは響と舞姫の2人で決勝戦を行うのみになった。

ちなみに拓哉はというと

「ユニコーンじゃないと思ってた奴がホントはユニコーンで、サイコミュジャックしてくるとは思わなかった。何を言ってるか分からないと思うが俺も分からなかった。：もつとも恐ろしいものの片鱗を味わったぜ。」

と、2回戦目でサイコミュジャックを使ったユニコーンの改造機によつて負けてしまっていた。

決勝が行われるまでに少し時間があり、この前翼がSEEDを調整してくれたと聞いていたので尋ねてみた。

「あれからSEEDってどうなったんですか?」

「ああ、一応改良はしたんだけどね。元々SEEDを想定してストライクを作つてなくて、効果がトランザムと同じになってたからエクストリームを参考にユニットを作つたんだ、ぶっつけ本番になるが君ならなんとか使えるだろう。」

イメージ的にはAGEのウェア換装で、両腕と両足を交換し最後に可動域を確認する。

「よし、大丈夫そうだ。感覚はゴッドやゼノンだと思つてくれ。」

ストライクを手渡され、付け加えられた装備を確認すると特徴的なのは腕部のバンカーユニットと脚部のダッシュユニットだった。

「さつきと比べると大分ゴツくなつたけど、改めてよろしくなストライク。」

ストライクをポーチに収めるとちょうど進行の店員さんによるアナウンスが始まる。ところだった。

「さー! 今回の大会もとうとう決勝戦になりましたあ! 最後のバトルは城戸 響選手と今井 舞姫選手です! それでは張り切つていきましよう!」

響と舞姫は、アナウンスにうなづきながら筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

「待つてたよ。城戸くん、お姉ちゃんに手を出す奴は誰であろうと容赦しないから。」

「なんの事かは知らないが、全力を尽くしてバトルしよう！」

《Beginning Plavsky particle dispersal. Bird4, sity》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響！ストライクルージュ黄昏！出るよ！」

「今井 舞姫、ロストフリーダム。殲滅を始める。」

レバーを前に動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、住宅街なのだが生活感がなく割れたガラスが目立つマンションや半壊した家がそびえ立つステージだった。

「隠れる所が多くて助かるけど、探すのが一苦労だな……ってなんだありや？」

視線の先にはseed特有の赤と青白のビームが無造作に近くのマンションに向かって放たれていた。

「そこか！悪いけど早々に決めさせてもらおう！」

ストライクは、トリアイナを構えると未だこちらに気づいていない様子のフリーダム

に突貫する。

「誘い出されてるとも知らずにのこのこと出てくるとは。」

対するフリーダムは、自身に刺さる直前でトリアイナを掴みストライク毎放り投げた。

「つてゝ… やつぱりそう簡単にはいかねえか！」

先程投げられた事でバッグバックに多少のダメージは、あつたものの稼働には問題なかった為再びバックバックのスラスターを稼働させる。

「そういうえば聞いてなかったけど、なんで初対面の俺らに対して当たりが強かつたんだ？もしかして男嫌いだったとかか？」

ふと思つた事を素直に舞姫に尋ねた。

「お姉ちゃんに手を出す奴はみんな嫌いだ。お前もあの安藤つて人も！」

その頃外野は

「やつぱりこういう事だったね。僕は何故か敵視されてなかったけど。」

翼はホントに何故だろうと言う顔をしていた。

「翼さんと恋愛は程遠いから、それを姉ちゃんは察したんじゃないかな」

奏は、多分と最後に言葉を付け足し木乃香の方を見る

「喋る時期を間違えたわ…。」



その言葉を聞いた拓哉も

「なるほどなあ、そういう事か。」

と納得し、知らないのは肝心の響だけになった。

、

「お前も！お姉ちゃんに付き纏う男か！」

ロストフリーダムは右腕のフィンガーユニットを起動させると、ストライクの右腕を二の腕のあたりからトリアイナごと強引に引きちぎった。

「んなり!? なんでもありかよー！」

引きちぎられた衝撃を利用してロストフリーダムを蹴り飛ばす。

「ストライク、俺に力を貸せ！SEED！」

スロットを操作しSEEDを選択する

「SEED、スタンバイ。システム終了まで残り120秒」

翼が調整してくれたお陰で、チャージタイムを必要とせず使えるようになったSEEDだが先ほどの攻撃で右腕を二の腕のあたりから失っていたのでそこから粒子が垂れ流れていた。

「まだ粒子に余裕があるとは言えこれだからな… 尽きるまでに決着をつけてやる！」

脚部ダツシユユニットを起動させると蒼い残像を残しながらロストフリーダムに接

近する。

「極限！全力！ストライクバンカアアア！！」

残った左腕のバンカーユニットを展開すると、ロストフリーダムは持つていたビームライフルを握りつぶす。

「お前！お前！お前えええええ！！」

ロストフリーダムは、背中のウイングバインダーを展開しハイマツトフルバーストを放った。

響はスロットを操作しながら何か防げる手はないか探す。

「何かないか？これはシールド表記のアイコン？一か八か！」

見つけたそれを起動させるとバンカーユニットが展開し蒼い粒子による大型のビームシールドを形成しそれに当たったフルバーストのビームや実体弾は全て掻き消えた。

「これが新しいストライクの力か：でも粒子の消費が激しくてもう一撃ぐらいしかパワーが残ってないや。」

「SEED終了。これ以上の粒子消費を抑える為ビーム兵器の起動を制限します。」

この機械音が響いた後、ビームサーベルやビームシールドのアイコンは使用不可の表示が出て実質このバトルでの使用は出来なくなった。

「機体がクールタイムに入らなくなったのは嬉しいけど、ビームサーベルが使えないの

は少し痛いなあ。」

ガンプラの関節が所々ヒビが入っている状態だったが、ハイマットフルバーストの照射が終わりちょうど地面に降り立ったばかりのロストフリーダムを確認しいつでも動ける様に構えた。

「なんで生きている!? たしかにフルバーストは当たったはずなのに! なら、この一撃で仕留めてやるよ!」

ロストフリーダムは、フィンガーユニットを展開するとゴッドガンダムのように背中のウイングを広げながらストライクに向かい対するストライクも左腕のバンカーユニットを展開しロストフリーダムに向かってくる。

「チエストオオオオオ!!!」

「城戸響いいいい!」

ストライクの一撃はロストフリーダムの胸部を貫き、ロストフリーダムの一撃はストライクの胸部を同じく貫いていた。

〔Draw〕

そして決勝戦はまさかの引き分けで、響と舞姫は同率1位と言う結果に終わった。

大会の結果発表が終わりに木乃香や他のメンバーの所に向かう直前、舞姫がこちらに來

て

「この借りははずれ地区大会で返すから。」

と言いつ残すと立ち去っていった。

その後メンバーと合流し、今回の事の経緯を教えてもらったがイマイチ理解できなかった響なのであった。

経緯説明の後、翼にストライクを改良すると言われたのでストライクを預け各々の帰路を別れた。

木乃香は自宅へ戻ると、舞姫に今日の事を注意し後日謝るようにと念を押すと部屋に戻りベッドに寝転んだ。

「久しぶりに見てるだけの大会も良いものね。そうだわ！今度彼女たちにも会わせて見ましよう、新しい発見があるかもしれないし。」

善は急げとスマホを開くとある友達に電話をかける。

「あ、もしもしメグ？今時間大丈夫かな、近々交流試合しない？」

この時のことを響たちが知る由もなかった。

## 第8話～宇宙の中で煌めいて～

「と言うわけで明後日の放課後、交流試合するわよ！」

店舗大会が終わって一息ついた月曜日の放課後、奏と射撃オンリーのテストバトルをしている最中に唐突にその話は切り出された。

「了解した。」

「久しぶりだなくあの子達とやるのも！」

察しが早い2年生組に対して状況が殆ど読み込めていない響達1年生組

「交流試合？他校とバトルするって事ですか？」

「そう！バトルするのは私の友達の高校なんだけど店舗大会の日の夜に連絡したら快く受け入れてくれたわ。」

何とか状況が分かったので、どんな人なのか尋ねてみた。

「部長の友達ってどんな人なんですか？」

「一言で言えば良い人、ガンダムキャラで例えるならOOのアレルヤみたいな感じね。それで交流試合の日はこちらに来てくれるそうだから迎えに行くだけよ。」

「分かりました！他の人はどんな感じの人なんだろう…。」

「それは会ってみれば分かるわ。明後日が交流試合だから明日は部活お休みね！」  
響達は頷くと先ほどまでしていた作業に戻る。ちなみにこの時していたテストバトルの結果は響の惨敗だった。

次の日

授業も終わり残るは放課後だけだが、今日は部活がないので拓哉に何処か行くか尋ねた。

「今日部活ないけど、ゲーセンでも行くか？」

「わりい、今日は用事が入ってるんだ。」

「そっか、んじやまた明日な。」

そう言い拓哉と別れた響は

「ストライクもメンテナンス中だけど、シヨップ行って他の人の戦い方で見るとなにかの参考になるかもしれないし。」

行きつけのシヨップへと足を運ぶ。

シヨップに入り筐体の近くまで行くと何やら騒ぎがあったようで揉めていた。

「順番を守りなさいって言ってるのよ！この子達だって並んでたのに割り込むなんて！」

「そんなガキが使うより俺たちが使った方が有意義に過ごせるだろうよ！」

少し遠くだったので姿は見えないがどうやら並んでいた人を飛ばして割り込んだ奴が居たらしい。

「しかし、この声は聞いたことがあるような。つて部長!!?」

人の輪に亀裂が少し入ったので、この騒ぎの人物を見る為に身体を滑り込むとそこにいたのは如何にも不良ですと言わんばかりの不良とその舎弟?が1人と響が入部しているガンプラバトル部の部長今井 木乃香だった。

「雰囲気は今にも殴るぞって感じなんだけど…」

そう感じた響は自身が代わりに殴られるのを覚悟で、騒ぎの中心に割って入る。

「女性相手に2対1は卑怯だと思っけど。」

「なんだてめえは、関係ない奴は引っ込んでろ!」

「関係はあるさ、この人はウチの部長なんぞね。それにここはガンプラシヨップだ、なら物事はガンプラバトルで決めるべきじゃないか?」

いつになく強気だったが、肝心な事を思い出す。

(ストライクメンテナンス中なの忘れてたあああああ!!!)

「は!おもしれえ、ならその女と2 on 2でバトルだ!」

「良いわよ、負けても吠え面かない事ね!」

木乃香は啖呵を切った後、筐体に向かおうとして響に呼び止められる。

「すみません、ストライク持って来てないの忘れてました…」

「ええ!? あんなに強気だったのに!?」

「今から受付で貸し出し用のガンプラ借りてきます。」

「あんなに啖呵切った手前そんな事出来ないわよ、私の予備機で良かったら貸すから。」  
 「ありがとうございます。部長の予備機お借りします。」

響は木乃香から予備機を借りた。

4人は2人ずつに別れ筐体を真ん中に挟むとGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. Faird2, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「今井 木乃香、ストライクガンダムバンダースナッチ! 殲滅を始めましょうか!」

「城戸 響、エクストリームガンダムブレイヴァーフエース! 出るよ!」

レバーを前に動かしてガンプラを発進させる。

今回のステージは、ガンダムseed destinyに登場した機動要塞メサイア



だった。

「城戸くんは関係ないのに、巻き込む形になってしまつてごめんなさい。」

「いえ！2対1は見逃せませんでしたし何より部長の助けになれば光栄です。それにガンプラも貸してもらつてますし。」

「そう言つてもらえると巻き込んだこちらとしても救われるわ。それでそのガンプラはどう？動かせそうかな。」

「稼働とかも特に問題なしですよ！流石部長の予備機なだけありますね。」

貸してもらつた際、メイン武装だった弓は響では使いこなせないだろうとの事で自身のストライクで使っているトリアイナを装備してきていた。

「なら良かったわ。あら、話してる内にあいての方から来てくれたみたいよ。先に私がデカイのお見舞いするから！城戸くんはシールドを地面に突き刺して吹き飛ばされないうように。」

目視で確認できるまでに近づいて来た敵機は、ジンクスとジンクスⅡだった。

バンダースナッチは、地面をしっかりと踏み込むとバックパックからケーブルに繋がったビーム砲を取り出し小脇に抱える。

それは初めて響と拓哉と戦つた時に小惑星の基地を丸ごと消すような高威力を誇つた高出力ビーム砲アスタロトだった。

「跡形もなく吹き飛びなさいアスタロト！」

充填が始まりそれに敵が気づき回避行動を取ろうとした時には既にそれは放たれていた。

逃げ遅れたジンクスがその砲撃をもろに受けて爆散し、ジンクスⅡも左脚を失う。

「ちよつと今冷却中で動けないから城戸くん残りの1機よろしく！」

「了解です！手負いを攻撃するのもあれだけど、圧倒させてもらおう！」

響はそう言うのとレバーを操作しファンネルを選択する。

初めの頃は上手くファンネル系が扱えず使うのを躊躇っていた響だったが、拓哉から使い方を教わり徐々にだが使えるようになってきていた。

「行くよ、ブレイヴファンネル！」

ルガンダムフィンファンネルをエクストリームでも使えるように改造したものを全て飛ばした。

飛んでいったファンネルは、ジンクスⅡの周りを周回し装甲を少しずつ焼いていくがそれに気を取られながらもこちらに向けてビームを撃ってきたのでそれを周りの浮遊している石を蹴り軌道を変えながら突貫する。

「クソ！お前はなんなんだ！」

ビームライフルによる射撃を諦めたジンクスⅡは手持ち仕様にしたスローネアイン

のGNメガランチャーを取り出すとこちらに向けて恐らく最大出力で放ってきた。

「近づきすぎた！これじゃ回避出来ない！」

なんとか避けようと出来る限りガンプラを捻らせたが、それでも完全に避け切ることが出来ずに左腕を失ってしまう。

「まずはお前からだ！」

先程までの優位性は消え、左腕を失ったエクストリームは左脚を失ってはいるが両腕が健在のジンクスに追われる事になってしまった。

「情けない！片腕ないとやっぱり不便だ、こういう時槍って使いづらいな。」

「何をごちゃごちゃ言ってるやがる。お前はこれからやられるのによ！」

ジンクスIIはメガランチャーを構えトドメと言わんばかりに撃とうとした瞬間、何かが発射にあたり爆発した。

「ごめんお待たせ！冷却時間勿体なかったから、結局アスタロト置いてきちゃった。」

「部長！」

その何かを確かめようとその投擲した位置を見てみるとバックパックを切り離し、腰に付いていたビームサーベルをダガーにして投げたであろう部長のストライクが立っていた。

「もう来やがったのか、けどなあ新人戦ベスト8だった俺がこんな所で負けられないん

だよ！」

ジンクスⅡは砲身を失ったメガランチャーを捨てると肩にマウントしていたバスターソードを振り抜き響達に向かって突っ込んでくる。

「俺だつて！」

響はそれをトリアイナで受け止め、ファンネルによつて右腕を射抜いた。

「私を忘れてもらっちゃ困るわ！」

ストライクは対艦刀を構えると右腕を射抜かれた事に気を取られていたジンクスⅡの右脚を斬り飛ばす。

「これで終わりだあああああ！」

残っていた左腕を斬り落とし、トドメと言わんばかりに胴体のコックピット部分にトリアイナを突き刺す。

「YOU WIN!!!」

爆発と共に勝敗が決した。

負けた不良達は今度の新人戦で覚えてるよと捨てゼリフを吐くと逃げるように去っていった。

お店から出て帰路の途中

「部長のガンプラに傷を付けてしまつてすみませんでした……」

「ダメージ設定がBだったから全然大丈夫よ。それに今回は助かったからそれで帳消しね！私こっちの道だからまた明日会いましょう。」

「はい！また明日！」

そうして、帰路を別れた。

響は家に帰ると自身の部屋戻り寝巻きに着替えるとベッドに潜る。

「とうとう明日交流試合か、どんな人たちなんだろう。：。」

そんな事を考えていると途端に睡魔が襲ってきて眠りについてしまった。

## 第9話〈初めての交流試合・前編〉

朝登校してHRが始まる前の教室

「とうとう今日が来ちまったな、って響大丈夫か？なんか疲れた顔してるけど。」

「あ、ああ……昨日色々あってな。でも放課後の交流試合までには何とかするから安心してくれ。」

昨日？と不思議そうな顔をしていたが、拓哉はあまり踏み込むタイプでは無かったので話を變えてくれた。

「そっか、なら良いんだが。それはそうと今日の交流試合は俺が昨日作った秘策が火を噴くぜ。」

「秘策？なんか作ったのか？」

「昨日遊び行くの断ったろ？その用事ってやつでな！」

自信満々に話してくれたので、何を作ったのか見せてもらおうとしたが断られてしまった。

（今の話って見せてくれる流れじゃね!?）と思ったは心に伏せておく。

「そ、そうか。それはそうと昨日部室行くなり教えてくれても良かったじゃないか。」

「お前には秘密にしておきたかったんだよ、最近負けっぱなしの俺が勝つための秘策を作るのに。それと先輩方や小川さんも色々作ったみたいだぜ？何を作ってたのかは教えてくれなかったが。」

「昨日部室に俺と今井先輩以外居たのか？」

「何で今井先輩が居なかったの知ってるんだ」

「つてそろそろHR始まるな、また後でな。」

その後1限目、2限目と終わり5限目の体育でやはり居るはずの沙希を見つける事は出来なかった。

6限目が終わり部室に向かうとまだ鍵が開いておらず開くの待っているとそこから10分して2年生組が到着した頃にちょうど相手側の高校が到着したらしいので部長が迎えに行った。

そして、部室のドアが開き違う制服に身を包んだ高校生がこちらと同じ6人入ってきて部長らしき人が前に出てくる。

「初めまして、城西高校の石川 恵美つて言います。早速んですけど時間が惜しいから自己紹介はバトルを始めてからでも良いかな。」

「ええ、その方が良いかもね。私は天ヶ崎高校の今井 木乃香よ。それじゃ始めましょうか。」

「最初は挨拶も兼ねてこの私石川とこのソーマが相手するよ。」

「石動 相馬つす！よろしく。」

「こっちは城戸くんと沙希ちゃんを出すわ。」

「城戸 響です。よ、よろしくお願いします。」

「小川 沙希です。… よろしくお願いします。」

4人はペアで別れ筐体を真ん中に挟むとGPベースをセットする。

《Beginning「Plavесky partіcіe」dіspersal.  
Fіrd5, Desert》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ストライクルージュ黄昏。出るよ！」

「小川 沙希、Gセルフセブンガン／BS。行きます。」

「石川 恵美、ガンダムアリオス。目標に飛翔する！」

「石動 相馬、GNアーチャーTYPE B。行くつすよ！」

レバーを動かしてガンプラを発進させる。



今回のステージは、ガンダムseedでキラ達が初めて降りた地球でバルトフェルド隊と戦った砂漠地帯だった。

「それにしても今回はなんか重武装だね？」

近くの岩場に降り立った響は周囲の警戒をしながらも、隣に降り立った沙希のGセルフを眺める。

「以前は近接寄りだったので、今回は遠近対応型にしてみました。どれが私に向いてるかまだ分からないので…。」

そう発言した沙希に対しどちらかというところ射撃の方が小川さんに向いてる気はするけど、と響は内心思ったが口に出さなくておく。

「ポロっと出た言葉で何度修羅場になりかけた事か分かったもんじゃなからな。っと何かが高速で接近してる？」

リーダーに反応があり改めて前方を確認すると何かが高速で迫ってきていた。

「前方に可変型が2機来てます。私が牽制するので、斬り込みお願いします。！」

沙希はスロットを操作し、バックバックに背負っていた大型のビームランチャーを起動させる。

「これで消し飛んでっ！」

周辺の砂を巻き上げながら放たれたそれは迫ってきた可変型を呑み込む。

「やったか？砂煙が酷くてよく見えないな、ちよつと接近してみるか。」

響はそう言うのと、バックバックのスラストを稼働させると先ほどまで敵機が居たところまで近づく。予想では2機とも撃破まではいかなくともどちらか片方はやられもう1機も撃破寸前までやられているはずだったが、予想は大きく裏切られ砂煙の中でカメラアイが光ったかと思うとストライクの持つていたビームライフルが爆発した。

「な？！あれ喰らって普通に動けるのか？！」

ビームライフルの爆発から自身を守るようにバックブーストで下がろうとしたが砂煙から伸びてきた腕によって捕まってしまう。

「まさかいきなりあんなビームが放たれるとは思わなかったけど、迂闊に近寄ってくるなんて考えが甘いんじゃない？！」

その発言とともにアリオスは、掴んだストライクの左腕を肩からもぎ取った。

「なんつー力だ！部長のバンダースナッチに匹敵するんじゃないか。つて呑気な発言してる場合じゃないな、何とか離脱しないと。」

もぎ取られた衝撃を利用して、シールドをアリオスに投げつける。

「シールドは身を守る為にあるんだよ？投げちや意味ないでしょ。」

「知ってますよ！でも今はこれが最善策でね。小川さん！」

「任せてください、この距離なら外しません！」

ロングレンジライフルを構えたGセルフは、アリオスに向けてではなく飛んでいったシールドに向けて引き金を引いた。

すると、シールドに当たったビームは反射してアリオスの左肩に命中する。

「これが狙いだっただ、一度体制を立て直した方が良さそうかな。ソーマー！」

「あいよ姐さん！弾幕張らせてもらいますよっと。」

直後GNアーチャーから大量のGNマイクロミサイルが響達に向けて放たれ対応に追われなんとか全てのミサイルを迎撃し終えた時には既に消えていた。

「居ないか、それはそれとして小川さん大丈夫？」

「私は大丈夫、です……でもストライクの腕が。」

沙希のGセルフは特に目立った損傷は無かったが、響のストライクはビームライフルと左腕を根本から失い接続部のポリキヤップが丸見えになっていて。

「にしても俺よく腕挽がれるな。でも小川さんにケガがなくて良かった。」

「……！も、もし良かったらこれ使って下さい！」

差し出されたのは、ストライクの腕だった。

「城戸くん、腕をよく失ってたような気がしてたから何が起きても良いようにコンテナに入れてたんです……もし迷惑じゃなければ。」

「迷惑だなんてとんでもない！むしろありがとうだよ、小川さんみたいな人がいつも隣

にいてくれたら凄いい助かるな。まあ、絶対にないけど！はっはっは。」

響は笑いながら、貰った腕をストライクに取り付け規格は同じだったので勿論稼働状態に問題はなかった。

「それじゃ行くこうかって小川さんなんか拗ねてます？」

「拗ねてないですっ！」

（小川さんの拗ねた顔可愛いー！もしかして俺に気があるのか!?？いやこれはそういう思い込みに陥る彼女いない歴〃年齢の悲しいやつのおれだ！ああ、彼女作りたい…。そもそも彼女とかどうやって作るんだよ。プラ板でフルスクラッチすればいいのか!?？）

などと心の中で一人議論をしているうちに、レーダーに反応があった。

「もう体制立て直したのか！小川さん腕ありがとね！俺突っ込むから援護よろしく！」

そう言うのと先程ダメージは負っていたが、稼働するには問題なかった。脚部スラストを吹かすとアリオスとGNアーチャーに向かって突っ込む。

「もう油断はしないですよ。でも早々に退場してもらいます！SEED！」

スロットを操作してSPのアイコンを選択する。

「SEED、スタンバイ。システム終了まで残り120秒」

蒼い残像と化したストライクはGNアーチャーに急速で接近して右腰のコンテナを斬り落とした。

そして、もう片方のコンテナも斬り落とそうとビームサーベルを振りかざしたがアリオスによって止められてしまう。

「これが、木乃香の言ってたシステムか…。」

「なんで当たらないんだ！」

スピードやパワーがSEEDにより上がっているはずのストライクの攻撃は一度もアリオスには当たらない。

「SEEDに頼ってばかりで私に勝てる訳ないでしょ！トランザム！」

紅い残像と化したアリオスはストライクの背後に回りバックパックに向けてサブマシンガンを連射すると爆発が起き

「クツソオオオ！」

バックパックの推力を失ったストライクは、先ほどまでの俊敏さはなくなり地面に落下してしまう。

それを見ていた沙希は援護しようとしてロングレンジライフルを再び構えるが

「城戸くん！今援護に…！」

「行かせないっすよ！トランザム！」

GNアーチャーはアリオスと同じ様に紅い残像を残しながらGセルフの目の前に降り立つとロングレンジライフルを斬り落とす。

「GNアーチャーがトランザム!?？」

「原作だけが全てじゃないっすから!このまま押し切らせてもらいますよ!」

Gセルフは爆発から身を守る様にライフルを捨て、腰にマウントしていたビームライフルを抜くとGNアーチャーに向けて数発放つ。

「切り替えが早いっすね、迂闊に近づいてたらやられてたけど。これはどうですかね!」  
放たれていた射撃を全て避けるとGセルフに肉薄しビームサーベルを振り上げる。

「やられる!?？」

持っていたビームライフルを再び斬られ素早くスロットを操作しビームサーベルを持つがそれも払われてしまう。

「中々渋とい!でもこれで終わり!?!?」

残っていた左腰のコンテナからGNマイクロミサイルを放つがその攻撃がGセルフに届くことはなく蒼い線が見えたと思うと全て爆発し黒煙が立ち込める。

そして、煙がようやく晴れGNアーチャーがGセルフのいた方を確認するとそこには体の至る所から煙が出ているストライクが立っていた。

「悪いけど小川さんをやらせる訳にはいかないよ!」

バックパックがやられた為に全身のスラスタを全力で稼働させなんとかGセルフの支援に訪れたがミサイルを迎撃し終えたと同時にスラスタがオーバーヒートを起

「よしSEEDも終了してしまおう。」

「SEED終了。これ以上の粒子消費を抑える為ビーム兵器の使用を制限します。」

「まだ生きてたんすね、てつきり姐さんにやられたと思つてましたよ。」

「ああ、やられる寸前までボロボロにされたけどまだ行けるぞ。」

ストライクはトリアイナを構えGNアーチャーに向けて走り出すが、砂漠の地形に足を取られ思ふ様に動けず次第に埋もれていく。

「クソっ！動けねえ…。」

「ようやく追いついたよー、つてもう終わりそうな感じ?」

砂に埋もれ抜け出そうと必死になっている時にトランザムを中断したアリオスが追いついた。

「姐さんの手を煩わせるまでもないっす！後は俺に任せてゆっくりしてて下さい。」

トランザムが終了したGNアーチャーは、ビームサーベルを抜くと今も砂に埋もれているストライクに接近しそれを突き刺す。

「これでトドメだ！」

「タダじゃ死なねえええええ！」

その一撃はたしかにストライクを仕留めるには十分だったが、同じようにGNアーチャーもその動きを止める。

なぜなら、GNアーチャーのサーベルは確かにストライクの胸部を貫いたがその直前ストライクも右腕のラックからアーマーシユナイダーを抜き同じくGNアーチャーの胸部を貫いていた。

「中々やるじゃないですか…」

「あんたもな…」

2機は寄り添うように崩れ落ちるとカメラアイから光が消えその動きを止めた。

「男組が落ちた所で女子組も勝負を決めよつか。」

「望むところです…!」

GセルフはOOガンダムセブンスソードのバスターソードをGセルフ対応型に改造したフォトンバスタードブレイカーを構えアリオスに向けて振り下ろす。

対するアリオスは避けるわけでもなくシザーシールドでそれを受け止め受け流した。

「パワーはまずまず、けどスピードはどうかな!」

Gセルフの攻撃を受け流した後、アリオスは可変形態になると飛行速度を上げGセルフの全身を切り刻んで行く。

「早い!でもこれなら…!」

次の攻撃に移るためにこちらに向かってくるアリオスに向けてビームサーベルを投げ



「そんな攻撃じゃアリオスは落とせないよ！」

飛んできたビームサーベルを避けたアリオスだったが、恵美は違和感を覚え飛んで行ったビームサーベルの方を振り返る。

するとビームサーベルは大きな岩に刺さると岩が割れ中からそれが起動スイッチになつていたのかいつのまに仕掛けていたビームランチャーがその砲身を覗かせビームが発射された。

「これが狙いか！完全に避け切るのは難しいけど…トランザム！」

紅い残像と化したアリオスは避ける為に上げていたスピードを更に上げビームの渦に飲み込まれる前に離脱する事に成功したが、完全に避け切る事は出来ず右腕と右脚を失つてしまう。

「中々やるねー。けど、次の攻撃で終わりになるのかな？」

「そうかもしれませんね…でも負けません！」

Gセルフはバスタードを構えるとアリオスに向けて砂塵を巻き上げながら突進し、対するアリオスも可変形態をとるとビームシールドを展開しそのシザーを大きく広げぶつかった。

そのぶつかり合いは最初のうちは互角かと思われたが、Gセルフの方が先ほどまでの戦いでガタがきてたのか次第に押される。

「このままじゃバスタードも保たない、どうすれば……」

何かないかと周りを見渡した沙希だが、ふと視界の隅に動かなくなったストライクとGNアーチャーを見つけた。

「これしかない…… Gセルフ！私に力を貸して！」

押され気味だったGセルフは、バスタードをそのままアリオスに押し付けるとそれを盾にその場を離脱する。

「逃がさないよー！今度こそ仕留めてあげる。」

押し付けられたバスタードをビームシールドで真つ二つにするとその勢いで再びGセルフに迫った。

「城戸くん、これ借ります！」

ストライクの側まで行き砂に埋まりかけのトリアイナを抜くとアリオスに向け構える。

「亡き友達の武器を借りる。良いね！盛り上がってきたよ！」

アリオスはそのスピードを更に加えGセルフをビームシールドで挟み込みGセルフはトリアイナをビームシールドの根元部分を突き刺した。

爆発が起き周りが黒煙に包まれる。

そして、黒煙が晴れ立っていたのは胴体の部分から2つになったGセルフとビーム

シールドを失ってはいるが未だに動いてるアリオスだった。

「YOU WIN!!!」

その表示が出て機会音がコックピット内に響き渡り1：0で石川&石動ぐみの勝利が決定した。

バトルが終わりお互いの健闘をみんなで讃えながら握手を交わした後、次の対戦メンバーが部長達から発表される。

「十六夜 翼、ツールギスIIIイガリマ。目標を切り刻もうか。」

「滝沢 奏、バーザム！狩りの時間だよ！」

「雨宮 雫、ジェガン現地改修型。行きます。」

「雨宮 明日香、アストレイガイアフレーム！行くよ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

続く2試合目の幕が上がった。

## 第10話〈初めての交流試合・後編〉

今回のステージは、機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズで鉄華団がカルタ部隊と衝突した孤島だった。

「さて、今回の作戦はと言いたい所だけど君は好きに暴れるといい。援護は僕がするから。」

「さすが翼さん！私の性格読んでるね。」

この発言を聞いた翼は、それはいつも君が僕の作戦を最後まで聞いたためしがないからね……. . . と思っただが気を取り直し索敵を開始する。

「あそこの岩場の陰に一機、もう一機は見当たらない。別の所に隠れて機会を待ってるのかな？」

「じゃあ、岩場の方から行くね！援護よろしく！」

バーザムは水しぶきを上げながら、岩場に接近し

「まずは一機！切り刻めデュランダル！」

文字通りバックバックから自身の背丈と同じぐらいの大剣、デュランダルを抜刀すると岩場ごとその場を切り刻む。

だが、実際に切り刻んだのは相手のジエガンが装備していたであろうシールドだった。

「掛かったね！」

「その言葉そのまま返すよ！」

シールドに気を取られていると思い込み接近したジエガンだったが、奏は既にその存在に気づいていた。

「わざわざ出てきてくれたお礼に腕を一本もらってあげるよ！」

デュランダルをバックパックに一旦戻すと今度はリアアーマーからビーム太刀の柄を抜きそれをジエガンの右腕の付け根にねじ込みビーム太刀を起動し根元から斬り落とす。

「この人強引だよ!?ここは一度離脱して明日香と合流しないと。」

「そんな事させると思ukai?」

バーザムを蹴飛ばし離脱する為に方向転換しようとしたジエガンだったが、気付いた時には頭部が地面に斬り落とされ

「死神を見たものはみんな死んでしまうんだ、君も落とさないよ。」

方向転換した先には、全体が黒く所々に白の装飾が施されたツールギスが待ち構えていた。

「黒い、死神…」

「さあこれで終わりにしようか…！」

ツールギスがビームサイズ、イガリマを振り上げジェガンを真つ二つしようとして振り下ろした瞬間

「CAUTION!!!」

後方からseed特有の赤と青のビームが放たれそれに気付いたツールギスは紙一重の所で躲す。

ビームが放たれた位置を見るとそこにはガイアガンダムの可変形態をとったアストレイが突撃の構えをとっていた。

「零大丈夫?!? だから前と後ろから挟撃するのやめようって言ったんだよ。」

「ごめんごめん、次から気をつける。」

手負いのジェガンを庇ってビームウイングを展開するとツールギスに向け突進する。

「思い切りの良い突進力だ、その正々堂々さに免じて正面から受けてあげよう。」

イガリマのビーム出力を上げアストレイの突撃を真正面から受けきると後ろに投げ飛ばした。

「やってくれたね！これはもう倍返ししないとだよ！」

右腰からビームサーベルを抜いたアストレイは、ツールギスに向けてそれを振り下ろ

し対するトールギスはイガリマで応戦する。

「いける！これなら勝てそうだよ。」

「勝てる、か… 僕も甘く見られたものだね。」

翼はスロットを操作し「ハイパー ज्याマー」を選択する。

バックパックから光学迷彩用のウイングが前面に展開されトールギスの姿は見えなくなつた。

「トールギスは何処に!?」

「僕はここだよ。」

トールギスはヒートロッドでアストレイのバックパックにあるウイングスラスタを絡めて破壊しながら答える。

「斬り合っている時の実力差はそんなに離れてなかったはずなのにどうして!」

「それは僕の本来の戦闘スタイルが射撃だからさ。慣れない事はするものじゃないね。」

「なら、もう一度斬り合いに持ち込ませてもらうよ!」

「話しておいてなんだけど、それはご遠慮願いたいかな。」

アストレイがビームサーベルを抜き振り回してくるのをトールギスは、イガリマでいなしながら右肩に装備しているドーバーガンで牽制しその距離を徐々に離していった。

アストレイがトールギスを連れ去つた頃

「手負いを仕留めるのも気が引けちゃうけど、これもバトルだから仕方ないよね！」  
バーザムはビーム太刀で残った左腕を斬り落とす。

両腕を失ったジエガンはどうする事も出来ずその場から逃げ出しアストレイの方へ向かう。

「この距離ならアストレイとジエガンを両方仕留められるかもしれないこの武装を試す機会だし、翼さんなら上手くタイミング合わせてくれるから撃つ前に通信入れれば良いか！」

奏はそう言うとバックパックのメインスラスタ兼ビーム砲、ハイパーメガランチャー零式を起動しエネルギー充填を始める。

「翼さんあれいくよ！タイミング任せた。」

「了解した、任せてくれ。」

ツールギスは距離を離すのをやめ、アストレイのビームサーベルを器用に避けながらジエガンが近づいて来るのを待った。

そして、ジエガンがアストレイに合流しツールギスを蹴って少し距離を開けようとした瞬間

「今だ。」

「りょーかい！ハイパーメガランチャー発射！」



最大出力で放たれたそれは所々飛び出ていた岩石を消しとぼしながらアストレイとジエガンをまとめて呑み込む。

「うわああああああ!!!」

「YOU WIN!!!」

コックピットに表示が出てその勝利を示す機会音が響き渡り十六夜・滝沢ペアの勝利が決定した。

両選手は握手を交わし続く3試合目が始まる。

「今井 木乃香、ストライクガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましょうか!」

「安藤 拓哉、ガンダムアヴァランチアスールエクシア。目標を打ち砕く!」

「三上 良太郎、ジムバットエンペラー。lady Go!」

「安藤 茉莉乃、陸戦型ガンダムクーフリーン。私に見合う勇士はいるかしら。」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、アレックスがシャトルで打ち上げられた北極基地だった。

「外の風景を見るだけでも凍えそうだ、ってそんなことより先輩と合流しないと。」

スタートしたゲートが木乃香と離れていたの、合流する為に予め決めておいたポイントに行くとバンダースナッチがこちらに向けて手を振っていた。

「すみません、お待ちせしました。」

「大丈夫だよ、私もさつき来た所だから。それで合流するまでに、あっちの氷壁影に一機と基地の地下施設入り口付近に一機見つけたんだけど安藤くんどっちに行く？ 2人で一機ずつ仕留めるでもいいけど。」

「あえて、バラバラで行かせてください。俺は基地の方に行きます。」

「じゃあ私は氷壁影へ行くけど、すぐやられちゃダメだからね！」

了解です、そう言うのとエクシアのダッシュユニットを展開しスキーマの要領で斜面を高速で下っていった。

「どっちかは知らんが、早々に決めさせてもらおう！」

両腕のGNソード（ライフルモード）で地下施設入り口に向けビームを乱射する。

すると、ビーム音に気付いたのかこちらと同じような青色をした陸ガンが紅いランスIIゲイボルグを構えたかと思うとビームが全て掻き消えた。

「甘いわ！そんなんじや落ちてあげないんだから！」

エクシアはGNソードをブレードモードにするとクローリンに斬りかかり対する陸ガンもゲイボルグを横向きで構えて応戦する。

「パワーはこっちの方が上だ！お前の力を見せてやろうぜエクシア！」

エクシアのカメラアイが光り振り下ろしているパワーを更に上げ陸ガンを地面に叩き伏せた。

「強引な戦い方ね！嫌いじゃないわ！」

叩き伏せられた陸ガンは、脚部ミサイルを放つとエクシアと距離をとる。

「流石に近距離でのミサイルは効くな、GNソードが1つ使い物にならなくなっちゃまった。」

左腕に装備していたシールド部分がひしゃげたGNソードを廃棄し、代わりにバックパックからGNショートブレイドを抜いた。

「これでも食らつてもらおうか！」

エクシアはショートブレイドを陸ガンに投擲する。

「その台詞はそのままお返しします！」

陸ガンは投擲されたショートブレイドを交わすと通りすぎる前にその柄を握りエクシアに投げ返した。

「マジかよ!? 自分の武器を受ける事になるなんてな。」

返されたショートブレイドをエクシアはGNバルカンで撃ち落とし、反撃と言わんばかりにGNソードで斬りかかる。

「貴方の戦い方素晴らしいわ! どう? 私の勇士にならない?」

「そんなfake(偽)に出てくるメ○ヴみたいいな事言われても、残念ながらその誘いはノーセンキューだ。」

再び斬り合いに発展したエクシアと陸ガンはそのまま地下施設へとなだれ込んでいく。

「なんなのよ！あの仮面○イダーみたいな奴は！」

拓哉と茉莉乃が斬り合いに発展した頃木乃香は拓哉と別れた後、氷壁影に向かい先制攻撃の意味合いの射撃でビームライフルを放ったがコウモリをモチーフにした某仮面ラ○ダーカラーのジムにビームシールドで防がれてしまっていた。

「俺のジムバットエンペラーに死角はない！行くぞウエイクアップ！」

ジムの脚部装甲が羽のように開くと足元にビームによるコウモリの紋章が現れバンダースナッチに向けてキックを放つ。

「やられっぱなしでいられるかっての！これで消し飛びなさいアスタロト！」

逃げるのをやめバックバックからアームを伸ばしアスタロトを起動させると出力を抑えてジムのキックに迎え撃つように放った。

「その程度ならばこのまま押し切らせてもらおう！」

紋章がビームシールドになりその出力を上げアスタロトによる砲撃をキックで散らしながらなおもバンダースナッチに迫る。

「キックで割くなんてなんでもありね……ならこれはどう？」

砲撃を続けながらもビームブーメラン、マイダスメッサーを投擲する。

「なんとおおおおお!!」

キックで決める事に夢中になっていたジムは、マイダスメッサーに気付かず両脚を切断された。

「普通に死角あるじゃない、このままトドメといきましょうか!」

ロケットアンカーを射出しジムをこちらに引き寄せ対艦刀を抜刀すると袈裟斬りにした。

「貴女は忠実さよりもうちよつと周りに気を配った方が良いかもね。」

「忠告、感謝する…。」

袈裟斬りにされたジムは爆発四散し、バンダースナッチはその場を後にする。

「クソー! ラチがあかねえ。」

斬り合いはほとんど互角でこのままではラチがあかねいと判断したエクシアは陸ガ  
ンに向けてビームダガーを投擲する。

「迎撃して下さいって言うてるようなものね!」

投擲されたダガーを突き落とそうとゲイボルグを構えた瞬間

「この瞬間を待っていたんだ!」

GNソード(ライフルモード)で、落とされる寸前のダガーを狙い撃ち爆発を起こし  
追加と言わんばかりに白煙弾を投擲し辺り一面煙に囲まれた。

「これが狙いだっただの!?!?」

「響の戦法がこんな所で役に立つとはな…:」

弾幕を張ったエクシアはその場を離れ少し距離を取る。

「今こそ翼先輩に手伝わってもらったコイツを試す時だ! トランザムバースト!」

増設したダツシユユニットの各所に仕込んだビーム発生器からビームが展開されガンダムAGEFXのFXバーストのように全身にビームを纏い紅い残像と化したエクシアは未だ煙に包まれている陸ガンに突進する。

「この煙の中正確に狙われてるの!?!?」

「センサー系統を強化してるんでな!」

今回もセンサー強化の為にアストレアのセンサーマスクを装備して来ていたので煙の中でも正確に陸ガンの位置を捉えることが出来、煙が晴れた頃には突進を正面から受け更に全身を切り刻まれ落ちる一步手前の陸ガンと五体満足でトランザム継続中のエクシアが向かい合っていた。

「落とされる前に1つだけいいですか?」

どうぞと通信を入れる拓哉

「貴方のことが気に入りました、同じ安藤繋がりです連絡先交換して友達から始めませんか?」

「なんか気に入られる要素あったかな…。まあ連絡先交換とかは全然構わないよ。」

ほんじゃ改めてと、エクシアはGNソードを正面に構えるとOO2ndシーズンのラストのように突撃する。

「これで俺の勝ちだああああ!!!」

「死してなお一片の悔いなし!」

エクシアの切っ先は陸ガンの胴体を貫きカメラアイから光が失われ倒れるのを抱きかかえる形で受け止めた。

「YOU WIN!!!」

コックピットに表示がされその勝利を示す機械音が鳴り響き安藤・今井ペアの勝利が決定した。

そして拓哉と茉莉乃は、連絡先を交換しその様子を見ていた響と沙希以外は微笑ましく見守り沙希は羨ましそうに見ている。響は周りが微笑ましく見ていたのが理解出来ず首を傾げていたが…

その後も時間の許す限り2校は試合を続けとても有意義な時を過ごしたのであった。

## 第11話　来るべき新人戦

「早速だけど、来たるべく新人戦に向けて公式戦だと思つて練習試合をしましょう。」

交流試合を終え2日後の放課後、木乃香により告げられる。

「新人戦！つてもう5日後じゃないですか、早く教えてくださいよ！」

「初耳なんだけど、ゆつくり雑誌読んでる場合じゃない！」

「私は、聞いてました。」

「この前チラツと言つたけど、君達は交流試合の方に気を取られてたから仕方ないかと、そんな話は置いてちようどいいから本番を意識して城戸くんと安藤くんペアと私と沙希ちゃんペアでバトル開始よ！」

「「分かりました。」」

4人は2人組に別れ筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning「Plavsky particle」dispersal.  
iard2, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従つてガンプラを置く



《BATTLE START》

「城戸 響、ストライクルージュプロミネンス。出るよ！」

「安藤 拓哉、ガンダムエクシアデイスターブ。目標を打ち砕く！」

「今井 木乃香、ストライクガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましょうか。」

「小川 沙希、Gアルケイン。行きます！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、小惑星や隕石が漂っているそのままの宇宙だった。

ゲートから少し離れ近くの小惑星に降り立った響と拓哉は

「すごいや、響と組むの久々だな。」

「確かに、よろしくな拓哉。」

任せとくと、腕をぶつけ索敵を開始するとリーダーに反応が映る。

「あっちか！」

小惑星から離れリーダーに反応が出た方角へスラストを吹かしながら向かうと、前方から肩などは赤だが全体的にオレンジ色をした可変形態のGアルケインとその上に乗っかっている所々に金色の装飾が施されたバンダースナッチがこちらに向かって来ていた。

「いたわ！挨拶代わりに軽いの一発撃ちましょう沙希ちゃん！」

「分かりました、悪く思わないで下さいね。」

可変したままのアルケインは機体下部に装備していたビームランチャー、ラーヴァナを起動させると出力軽めでそれを放つ。

「ここは俺が抑えるから響は突っ込め！」

「任せた！」

エクシアはフアングを飛ばすとビームバリアを展開しアルケインの一撃を受け止め、その隙にストライクはバックパックからトリアイナを抜刀しながらアルケインの背から離れたバンダースナッチに向け振り下ろす。

「先輩！行きますよ！」

「ええ、存分にその力を振るいなさい。」

振り下ろしたそれをバンダースナッチは少し身体を動かして避け刃の部分を掴みストライクごと放り投げる。

「やっぱり一筋縄じゃ行かないよな、ならこっちで！」

ストライクはバックパックにトリアイナを戻すと代わりにライフルソード、プロミネンスを右腕に付けるとライフルモードにしビームを放つ。

だが、ストライクが放ったビームの殆どは明後日の方向へと飛んで行った。

「ちゃんと赤ロックで捉えないと当たるものも当たらないよ！」

「分かってるんだだけ、どー！」

諦めずまた数発撃つが全く当たらず、シビレを切らした響は射撃を止めソードモードに戻しバンダースナッチに接近する。

「はあああああああ！」

「射撃止めちやつたか？まあ仕方ない。」

ストライクが下からの斬りあげに対しバンダースナッチは対艦刀を振り下ろした。

「剣筋は悪くないけど私にばかり気を取られて良いのかな？」

「それはどういう…。」

木乃香の問いかけに対し響が答え終わる前に何かの接近を知らせるアラートが鳴り、ストライクの左腕がビームワイヤーによつて絡め取られる。

「ごめんなさい…。」

ビームワイヤーが射出された方向を見ると最初は何も見えなかったが徐々にGアルケインの姿が露わになった。

「これって翼先輩の？アルケインにも付けられたのか！」

その響が驚く様をモニターで見ていた翼は満足そうな顔で

「試験的にアルケインで試してみたが上手くいったようだ。ただ、適応する塗料が宇宙空間用しか無かったからそこでしか使えないのが難点だけだね。」

「翼さん、誰に説明してるの？」

と、2人で平穏な雰囲気醸し出していた。

左腕を持つていかれた後、腰からビームサーベルを抜き自ら爆発させ弾幕を張ったストライクはその場を離れ近くの漂っている隕石に身を隠しGアルケインと戦っていたはずの拓哉に通信を入れる。

「拓哉、何処だ？こっちにアルケインが現れて左腕を持つていかれた。」

「そっちに行つてたのか！さっきまでアルケインを追つてただけど急に姿が見えなくなつてリーダーにも映らなかつたんだ。ブースト吹かしてるなら熱感知できる筈なのに…。」

「それは恐らく小川さんはスラスター類を使わずに隕石を蹴つて俺の所まで来たんだ。」  
「マジかよ、シヤアもビックリのスピードだな。取り敢えず今からトランザムでそっちに行く。」

「分かつた、それまで俺もなんとか持ちこたえる。」

拓哉はスロットから「トランザム」を選択する。

「トランザム！」

紅い残像と化したエクシアは進んでいた方向とは逆に漂っていた隕石を交わしながらストライクの元へ急いだ。

「さてと、俺も拓哉が来るまで持ちこたえますかね。」

アルケインとバンダースナッチの位置を確認した響はその身を隠していた隕石にバックパックのサブスターをめり込ませると2機に向けて蹴り付けた。

「これで良しと、行動開始だ。SEED!」

「SEEDスタンバイ、システム終了まで残り120秒」

2機の方に向かって行く隕石を見届けた後、ストライクは蒼い残像を残しながら回り込むように別方向へ移動を開始する。

「あの隕石、動いてる…?」

「多分あれは罠だと思うわ、私が粉碎するから沙希ちゃんも周囲を警戒して。」

アスタロトを起動させたバンダースナッチは、高出力ビームを放ち周りの隕石ごと動いてくるものを飲み込み跡形もなく消し去った。

直後、そこから少し離れた所で蒼い残像が見えた瞬間再びその姿を消す。

「SEED!?!?」

「その通り! バトルはこれからだあ!」

蒼い残像を残しながらプロミネンスを構え直しバンダースナッチに接近して振り下ろされた対艦刀を交わしながら背後に回りマルチプルストライカーをアスタロトごと斬り落とす。

「このお！ちよこまかと！」

ストライカーを落とされたバンダースナッチは、背後に回ったストライクに対艦刀を振り翳すがこれも交わされる。

「これなら行ける！ってこれは……」

再び接近しバンダースナッチの前に現れもう一度プロミネンスを振り下ろせば勝てるという所でその勢いは呆気ないほど簡単に止められ、ストライクのバックパックと右足が撃ち抜かれていたのである。

「狙いは外しません……！」

射撃位置を特定してその方向を見るとスナイパーライフルを構えたGアルケインがその姿を現した。

「小川さん、その姿消えるのズルくない？」

爆発寸前の右足を自ら斬り落としたストライクは根元だけ残っていたバックパックを切り離し続く追撃をシールドで防ぎながらGアルケインに接近するが既にあちらはラーヴァナを起動しており次の瞬間それは放たれ、やられると敗北を覚悟したがいつまで経つてもビームが自身の身を飲み込むことは無かった。

「どういう事だ、Gアルケインの武装が斬られてるのか？」

「待たせたな響い！」

通信の入り音がした方向を見るとラーヴァナの砲身を斬り落としたトランザム中のエクシアが佇んでいた。

「おっせーんだよ拓哉！」

「悪いな、途中よく分かんねえけどすつげー太いビームが飛んできてその破片に行く手を阻まれてたんだ。」

一瞬分からなかったが、先程のダミー隕石を思い出し心の中で謝っておいた。

「と、とにかく反撃開始だ。トランザムの残り時間は？」

「残り30秒つてとこだな、そういう響は？」

「こつちも似たようなもんだ、時間が惜しい。突っ込むぞー！」

おうー、と腕をぶつけ紅と蒼の残像を残しながらエクシアとストライクはGアルケインバンダースナッチに向けてスラストスターを吹かした。

「来たよ、沙希ちゃん！」

「何とかします：。ソードファンネル！」

ソードファンネルを射出したGアルケインは、スナイパーライフルを構え近づいてくる2機を狙撃しその動きを乱す。

「ファンネルにはファンネルをぶつけるんだよ！行ってこいファンング！」

Gアルケインと同じようにファンングを射出したエクシアは自身もGNソードを構え

ソードファンネルを1つ1つ落としながら接近しそれを振り下ろそうとしたが、その一撃はGアルケインのコックピットを捉えることはなく代わりにエクシアのコックピット部分にショートビームライフルの銃口が当てられていた。

「おう…。」

「私の勝ち、です！」

コックピットを正確に撃ち抜かれたエクシアはその動きを止め、ファンングが最後のソードファンネルを貫き同じく動きを止める。

「拓哉が落ちたんだな。さてと今井先輩、このバトルに幕を下ろしましょうか！」

「望むところよ！来なさい！」

プロミネンスを構えたストライクは、バンダースナッチに向けてそれを振り下ろし対するバンダースナッチは対艦刀を振り上げた。

両者の力は互角かと思われたが、徐々にバンダースナッチが押され始める。

「初勝利は貰いました！」

「それはどうかな？そろそろ時間切れだと思うけど。」

「だとしても！」

だが、肝心な所でSEEDが終了してしまい

「SEED終了、これ以上のエネルギー消費を抑える為ビームの使用を制限します。」



今まで押していたストライクだったが、いとも簡単にバンダースナッチに跳ね除けられてしまう。

跳ね除けられた際にプロミネンスはストライクの手を離れ宇宙の彼方に飛んでいてしまい完全に手持ち武装を失って残るはバルカンのみになった。

「武装がなくてもこの身だけでもいつてやる！」

ストライクはバルカンを射出しながら、脚部スラスターを吹かし突進するがバンダースナッチに腹部辺りを両断される。

「武装を失った後の手段を新人戦までに考えよつか。」

「そうですね…。」

「YOU WIN!!!」

バトル終了を知らせる機械音がコックピット内に鳴り響き木乃香・沙希ペアの勝利が決定した。

「このバトルでの経験を生かして新人戦ではベストを尽くせるように頑張りましょう！」

「「はい!!!」」

新人戦まで残り5日



い。」

「え、いきなり!??部長どうしましょう!」

「そんな焦らないの。落ち着いて移動しましょう。」

第1コートに移動した響たちは見覚えのある顔を目撃する。

「あー!お前らはあの時の女とガキじゃねえか。」

「そういう貴方は、子供のガンプラバトルを邪魔しようとしてた方々じゃないですか。」

「冷静に全部解説しなくて良いんだよ!ちようど良いリベンジの機会が巡ってきやがった、覚悟しろよ。」

「自分が出るとは限りませんけどね。」

(周りに冷静じゃない奴がいるとこっちが冷静になるってホントだったんだな。)

と、響は思い誰が出るかの話し合いに戻る。

「響と先輩は、あの連中と関わりあったんだな。」

「交流試合の前に部長があいつらに絡まれてたからほっとけなくてさ。」

「お前!知らない所でフラグたてやがって!」

「なんの話だ!??」

話し合いが別方向に流れそうになったのを木乃香は制すとメンバーを発表した。

「第1試合は試合の雰囲気にも慣れてもらいたいのもあるしあの不良が城戸くんと戦い

たがってるからメンバーは私と城戸くんで行くわ！」

「りよ、了解です！」

「派手に暴れてこい！」

「頑張つて下さい……！」

他の部員たちからも励まされいつもの勢いが戻った響は

「おう！行つてくるよ。」

と、筐体に向かって歩き出した。

真ん中に筐体を挟んで各選手はGPベースをセットする。

《Beginning「Plavесky particle」dispersal.  
F i a r d 3 , f o r e s t 》

《Please set your GUNPLA》

音声に従つてガンプラを置く

《BATTLE START》

「今井 木乃香、エクストリームガンダムブレイヴアーフエース。殲滅を始めましょう

か！」

「城戸 響、ストライクルージュ黄昏。出るよ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

「さてと、いくら前にも勝ってるからって油断しちゃダメだよ?」

「はい、それに今までの戦い方じゃダメだって石川さんや部長に気づかされましたからね…」

「そう、なら良いけど! さあ、行きましようか。」

全身が黒に染め上げられているエクストリームは、背中のウイングを展開すると飛翔を開始し続くストライクも置いていかれてはたまらないとバーニアスラスタを噴かしながらついて行く。

少し進んだ所に森林が生い茂っていない拓けた場所を見つけ降り立つ。

「居ませんね、何処にいるんでしょう。」

「うーん、あそこの岩場とか怪しいけどそこに行くまでにトラップがあったら厄介だし… あ、城戸くんトリアイナの他に近接武装持ってきてる?」

「え、一応持ってきてますけど。どうしたんですか?」

「ちよつと前シュミレーションバトルでトリアイナをぶん投げたら凄いや威力になった一撃あつたじゃない? それを今やろうと思って。」

「あれって確かSEED発動してビームランス展開中だったからできた奴じゃないですか、今やります?」

「いいえ、SEEDはまだ見せたくないしその点私のこれなら何回か見てる人もいるか

ら問題なしって訳でトリアイナ貸してもらえる？」

「分かりました、壊さないで下さいね。」

ストライクからトリアイナを受け取ったエクストリームはそれをビーム弓、オリオニアスにかけるとSPモード「射撃強化」を選択する。

「善処します。爆ぜろ！壊れた幻想！」

トリアイナをビームランス展開モードにし射撃強化により普段よりビーム出力が強化され放たれると目標にしていた岩場を抉り取り次の瞬間、岩場に隠れていた敵ガンブラが粉碎した岩に押し出される形で姿を現した。

「ビンゴーさあ、狩りの時間よー！」

「マジで隠れてた……っと俺も行くか。」

エクストリームはオリオニアスをソードモードにストライクはバックパックからふた振りの剣、プロミネンスツインブレードを構え姿を見せた敵ガンブラに接近する。

姿を現したガンプラは、緑色のジンクスIIキャノンと薄い水色をしたアルケーのカスタム機でその内のアルケー以前響が戦ったファイター松本 大揮が通信を入れてくる。

「あのエクストリームはお前のじゃなかったのか、舐めやがって！このアルケーブリザードで叩きのめしてやるよ！」

アルケーは左腕に装備していたビームガンを連射しストライクに襲いかかり、ストラ

イクはそれをプロミネンスでさばきながら応戦した。

「あれには理由があつて！ って言っても聞いてくれる玉じゃないよな。」

ビームガンによる連射を止めバスターソードを抜いたアルケーはストライクに振り下ろし対するストライクはプロミネンスをクロスさせてガードする。

「城戸くん避けて！」

突如木乃香から通信が入りアルケーを蹴り飛ばしその場から離れると代わりにエクストリームがオリオニアスを振りかざし割って入った。

「アルケーはお願いします！ 俺はこっちをやります！」

エクストリームを追ってきたのだろう少し遅れてジンクスがこの場に現れる。

「アニキの邪魔はさせないっす！」

「アンタのアニキはむしろ俺の方に用があつたみたいなんだけど……」

問答無用と言わんばかりにビームライフルを撃ってきたので、ストライクもビームピストルを抜き応戦しお互いに装甲を少しづつだが削っていく。

「前よりは当たるようになったけど、それでも4割くらいか。」

ストライクは射撃を止めビームピストルをジンクスに投げつけそのすぐ後にビームサーベルも投擲しビームピストルに当てる事でジンクスのビームキャノンを誘爆させ、爆発による煙が辺りに立ち込めストライクは煙が晴れる前に仕掛けようとプロミネン

スを構え突撃したが先程まで戦っていたジnkスの持つていないはずの武装で防がれる。

「なに!? このバスターソードっていやでもアルケーだったら先輩が抑えてるはず。」

直後木乃香から通信が入る。

「ごめん、抜かれちゃった。どうしても彼は城戸くんと戦いたみたいで引き下がってくれないからお願いしていいかな。」

「分かりました！なんとかやってみます。」

さっきの一撃を止められたストライクはふた振りのプロミネンスを繋げナギナタモードにすると大きく振り回しアルケーを引き剥がす。

「ようやくやる気になったか。そうこなくっちゃなあ!」

引き剥がされたアルケーはパックに折りたたんでいたGNメガランチャーを両肩に固定しサテライトキャノンのように構えるとそれを放つ。

「2本に増えてる!? けど、前と違ってこの機体なら防げるはずだ! ドラグリーン展開、SEEDアームver!」

今までスラストターとして使っていたプロトドラグーンを射出するとドラグーンによるビームバリアを展開しそれでは足りないところでは使わないと決めていたSEEDを腕部のみ発動しビームシールドを展開する。



「SEEDスタンバイ、アームのみ発動します。」

メガランチャーの一撃はドラグーンバリアの時点で大幅に威力を落とし腕部ビームシールドで完全に防ぎきる。

「こいつを防ぐだと!? なら直接叩つ斬つてやるよ! トランザム!」

再びバスターソードを構えトランザムを発動し紅い残像と化したアルケーはストライクに肉薄しバスターソードを振り下ろす。

「俺はこんな所で負けてなんていられない! SEED全体だ!」

「SEEDオールポディ、システム終了まで残り100秒」

アルケーのバスターソードを身体を少しずらして避け蒼い粒子を纏わせたストライクはSEEDにより出力が上がったビームサーベルを抜きアルケーの手首を切断し、手首ごと落ちたバスターソードが音を立てて地面に突き刺さった。

「クソがああああ!」

「これで! 俺の! 勝ちだ!」

両手を失ったアルケーは再びメガランチャーを構え狙いなど定めずガムシヤラに放つがストライクはメガランチャーをビームサーベルで両断し武装を失ったアルケーはその場から逃げ出す。ストライクはブーストをかけてタックルで押し倒すとガラ空きになった胸部にビームサーベルを突き立てる。

トランザムがちょうど終わりGN粒子の放出が止まったアルケーはその動きを止めた。

ストライクがアルケーを倒した同時期

ジンクスのキャノンを使いながらもビームライフルによる射撃をブレイヴファンネルで防ぎながら、エクストリームはオリオニアスでこちらに向かってくるジンクスの両脚を射抜く。

「もう、貴方に勝ち目はないしこれ以上ガンプラを傷つけないから降参してくれないかな？」

両脚を射抜かれた事により、脚部ブースターを失い前のめりに転倒したジンクスのファイター草島 牧雄に通信を入れた。

「撃墜判定が出てない内はまだ負けてないっす！アニキの分もおおお！」

再び起き上がる為、バックパックに増設されていた長距離移動用のタンクブースターを使い無理やりガンプラを起こすとこちらにぶつかってきてその場から連れ去られる。

「くっく画面が揺れて気持ち悪い……ん？あそこに突き刺さってるのって。」

ジンクスにぶつかられブレイヴファンネルによる妨害は行なったがそんな事御構い無しに場外へ連れていかれそうになったエクストリームは、ステージ端に近い大木に先程矢にしたトリアイナが突き刺さってるのを見つけた。

「一か八か！城戸くんまた借りるね！」

連れていかれる寸前大木に刺さっているトリアイナの柄を握りステージアウトをす  
んでの所で回避すると同じく踏みとどまったジnkスもライフルを構えビームサーベ  
ルを展開し振り下ろす。

「私だってランスは使えるんだから！」

エクストリームは振り下ろしてきた一撃を真正面から受けてたち手首ごとコック  
ピットを貫き地面に叩きつけるとその衝撃でタンクブースターが爆発を起こしその爆  
発にジnkスも巻き込まれ誘爆した。

「YOU WIN!!!」

勝利を告げる機械音がコックピット内に響き渡り響・木乃香ペアの勝利が決定し、バ  
トルが終わって不良たちはこの借りは地区大会で返すと言い残すと帰って行った。

「城戸くんお疲れ様！ごめんねく任せちゃって。」

「大丈夫ですよって言いたい所なんですけど。使わない予定のSEED使っちゃいまし  
た・・・」

「仕方ないわ、けどやられなかったんだからもっと誇りなさい！」

「は、はい！」

木乃香に褒められ喜んだ響はにやけた顔のまま他の部員の所に戻る。

その頃別のコートでは

「おい！なんだよあのガンプラは、ビームが全然通らないぞ！」

目の前に立つガンプラにビームを放つが全く効いていないことに相方のゴトラタンが既に撃墜されているV2のプレイヤーは叫びをあげた。

「そんなビームがコイツに効くとも思ってるのか！」

マントの隙間から手を伸ばした瞬間、V2は上半身と下半身が切断される。

「なんなんだよ！」

「じゃあね、弱い人。」

勝利アナウンスが鳴り響くまでそのガンプラのファイターは、宙に漂うV2を見つめていた。

## 第13話～新人戦・2回戦～

海山高校を破って1回戦を終えるとスタンドに戻りガンプラの修復を行うのだが、今回の新人戦からダメージレベルがAになったらしくダメージを受けた部位をちゃんと直さないと次のバトルでは前のバトルで受けたダメージがそのままガンプラに残るそう。

「翼先輩、俺のストライク直りそうですか？」

先程のバトルで少し無茶なバトルをしたため、腕部ビームシールドは焼け焦げ装甲の各所が削れていたストライクを見てもらっている響が翼に心配そうに声を掛ける。

「この程度なら直せるよ、けど次の試合には間に合いそうもないし君も部長も休ませたいから2回戦は奏と拓哉くんに行ってもらおう。」

「まっかせて！行くよ、たつくん！」

「たつくん!!? まあ良いか... 了解です！」

「私のセリフなのにー！」

木乃香の嘆きを聞かなかった事にして奏と拓哉は呼ばれたらすぐ行けるようコート付近に行くところちょうど一回戦が終わったらしく全体の半分ほどが減って続く2回戦の

組み合わせが発表され、全体の1/4を発表し終えた辺りで天ヶ崎高校も呼ばれコートに向かつて行く。

「相手は白桜高校か、先輩聞いた事あります?」

「二応ね、噂だけどここの高校にはチームが効かないガンダムがいるらしいよ。」

「チームが効かない?と、拓哉が声に出そうとした所で相手方の選手がコートに現れたので拓哉は黙っておく事にした。

「初めまして、僕は白桜高校の部長で鳴瀬 淳也です。それでこっちは何故か着いてきた一色 ほかりだよ。」

「ちよつとー何故かって酷くないですか、こんなにも先輩事を慕ってるのにー!」

口論を始めた2人を見て拓哉は自己紹介の機会を逃し奏は早く終わらせてどのお菓子を食べようか考えていた。

更にエスカレートしそうな所で、運営から早く始めるようにアナウンスが入り各高校の選手は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. Field 5, Desert》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

## 《BATTLE START》

「安藤 拓哉、ガンダムエクシアデイスターブ。目標を狙い撃つ！」

「滝沢 奏、ケンプファー。狩りの時間だよ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージはガンダムAGEでAGE-3がフォートレスに換装した砂漠だが砂嵐が酷くなっていて少し離れると味方機ですらレーダーに感知出来なくなる所だった。

「それにしても砂嵐が酷いな…。先輩、俺の姿見えてますか？」

地表に降り立った拓哉のエクシアは近くにいるであろう奏に声をかける。

「うーん、メタリックブルーだから陽の光に反射して薄っすら見えてる程度だよ。逆に私のケンプファーあまり見えないでしょ？」

「そうっすね、バックパックの武装コンテナだけははっきりと見えるんですけど。そっ  
いや中に何を入れてきたんですか？」

ケンプファーの背部には武装コンテナがアームに繋がれて片方3つずつで系6コンテナを積んできているのを確認できた。

「1つは実弾バズーカ、もう1つは実弾ライフル残り後の秘密！」

「秘密ですか。っとそれでこれからどうしましょう、周り砂嵐しか見えなくて。」

周りを見渡す限り岩も無ければ動いているものも無い。

「取り敢えず、ステージ中央まで行こつか。砂嵐が起きてなさそうだし！」

「そうですね、じゃあファングを先行させます。」

ファングを4基射出したエクシアは自らもケンプファーの前に出てステージ中央を  
目指し、砂嵐が最初拓哉達がいた所と比べ落ち着いていた中央に着いた辺りで黒っぽい  
マントを羽織った機体を発見する。

「いた！このまま行かせてもらう！行けよファング！」

4基のファングを目の前の機体の周囲に漂わせるとほぼ同時にエクシアも含めて  
ビームを乱射した。

だが、一向に撃墜判定は出ず射撃を止め様子を見に行こうとスラストを噴かした瞬  
間ファングが全て謎の爆発を起こす。

「なんだあ？撃ち落とされた形跡もなくサーベルで斬られたわけでもない、どうなっ  
てんだ？」

「たつくんは一回下がって！ここは私が！」

実弾ライフルをフルオートで撃ちながら接近したケンプファーは、コンテナからビー  
ム太刀を振り抜くと目の前のレコードプレイヤー白銀に正面から振り下ろす。

「普通の機体ならこれで落ちてくれるだけ、ど！」



「そう、普通の機体ならね。けどこの白銀にビームは効かないよ。」

振り下ろされたビーム太刀は白銀に当たる前に霞んでしまいビームがかき消えてしまった。

「なら！俺の出番だよなあエクシア！」

GNソードを展開すると白銀の真下から斬りあげ白銀が纏っていたマントが剥ぎ取られる。

「君のエクシアは早いね、この姿を見せるのは久々だよ。」

マントが剥ぎ取られた白銀の全身を見るとビームが効かない理由がすぐに分かった。

何故なら両膝・両腕・両肩にIフィールド発生器が付いておりそれをタイミングよく使う事でビームが効かないように見せていたのだ。

「なるほどな、ビームが効かないなら切り刻めば良い話なだけだ！」

GNソードを真正面から突き立てるが白銀に身体を逸らして避けられるとエクシアの腹部を蹴られ吹き飛ばされる。

「君のトランザムは厄介そうだから封じさせてもらうよ。」

「あ？そんなもん発動しちゃえば封じられないだろ！トランザム！」

紅い残像と化したエクシアは、トランザムを更にオーバードライブさせた。

「これを止められもんなら止めてみな！トランザムエクスプロージョン！」

各所に仕込んだビーム発生器からビームが展開されガンダムAGEFXのFXバーストのように全身からビームを展開させながら白銀に突撃する。

「封じるって言ってるだろ、ジャマービット。」

トランザムエクスポージョンを使用していたエクシアだったが、白銀から射出されたローゼンズールの物を改良したジャマービットが周囲を囲い八面体が形成されたかと思うとエクシアのトランザムが強制的に終了してしまう。

「なんだこりゃ!??なんでトランザムが強制的に終了しちまうんだ、粒子は尽きてないのに!」

それをエクシアが白銀と格闘戦に入った直後ケンプファーの前に飛んできたライトニングガンダムヴァルキリアのBWSの右翼を斬り落とした奏は

「あれってサイコジャマー!??でもトランザムはサイコミュじゃないよね。」

その問いにBWSの右翼を切り落とされたばかりが答える。

「驚いたでしょ、あのジャマーはあらゆる粒子変化を強制的に終了させるの!貴女も試してみたら?」

「試したいけど、私のケンプファーは粒子が変化するような機能付けてないんだ!ごめんねっ!」

再び距離を詰めながら今度はBWSのビームランチャーを蹴り飛ばしその背に乗り

上げた。

「この！離れなさい！」

「丁度いい、このまま援護に向かわせてね！」

BWSに太刀を食い込ませたケンプファーはBWSと本体を繋いでるアームを固定すると可変状態から戻れなくして強引に白銀の方へ向かわせ、向かった先では八面体から抜け出せず未だに縛られたエクシアと今まさにトドメを刺そうとしている白銀にケンプファーは食い込ませていた太刀を抜くと投擲する。

「連れてきちゃったのか、邪魔をしないでくれるかな。」

向かっていった太刀は白銀が右手を降つて何かを出したと思うと白銀に届く前に弾かれちようどその攻撃の範囲内に入っていたらしく相方のヴァルキリアとケンプファーの右武装コンテナが接続部から切り落とされ地面に落下してしまう。

コンテナが音を立てて地面に落下したと同時にヴァルキリアが爆発を起こす。

「先輩あんまりですよ〜！」

「あれほど僕の間合いに入るなって言っておいたのに…。」

「あら、やっぱり見えないか。けど腕の動きに合わせれば！」

右側が軽くなった事で続く2撃目を前のめりになりながらも交わすと本来当たるはずだった地点で抉れたような跡が付いた瞬間ケンプファーはビームサーベルを抜き何

かを真ん中らへんで切断した。

「やった！つてこれはウィップ？ということは一！」

拓哉に向かって切断した物の正体を告げようと通信を入れる前にケンプファーは、白銀によって胸部をビームライフルで撃ち抜かれてしまいカメラアイから輝きが失われ動きを止めた。

「先輩!? お前らもう知らないからな！全方位アーマーパージ！」

機体各所に増設したビーム発生器をビームを展開したまま強制的にパージし先程落とされたケンプファーの武装コンテナごと八面体を形成していたジャマービットを吹き飛ばした。

「なんて強引な！ならばもう一度…！」

「おっと！同じ手は食わないぜ！」

もう一度ジャマービットを射出しようとした白銀に対しエクシアはGNソードⅡの先端を飛ばしビットコンテナを破壊する。

ビットコンテナを破壊された白銀は、先程ケンプファーの武装コンテナを切断したウィップの様な物でGNソードの刀身を捻じ曲げた。

「ビームが効かない問題は解決したがこればかりはわけわかんねえ！」

「ふははは！短くなっても切断力は変わらない！」

その後もなんとか避け続けたエクシアだが、逃げてる先であるものを見つけ。

「あれは先輩のコンテナとこれはあの機体の武器？あれの正体はクロスボーンのスクリューウィップだったのか。ちょうど良い先輩ちよつと借ります。」

先程白銀によってへし折られた刀身ごとGNソードを破棄し新しくケンプファアの武装コンテナをこじ開け実弾バズーカとガーベラストレットを構える。

「新しい武装を得た所で僕には勝てない！」

短くなったスクリューウィップを再び振るが動きを見切り武器の正体を知ったエクシアには当たらずバズーカによる直撃を受けた。

「ぐうう！何故だ！なんで当たらない！」

「先輩が短くしてくれたのとその正体さえ分かれば！」

エクシアはバズーカを残弾が無くなるまで撃ち続け白銀がスクリューウィップを振って全て爆発させると辺り一面が黒煙に包まれる。

「前回3位の僕らがこんな序盤で負けるわけにはいかないんだ！」

「前回の新人戦がどうだったかは知らないけど、俺らは優勝を目指すんだ！」

「理想を語るなあああ！」

白銀がバルカンを周囲に乱射すると次第黒煙が晴れていき撃ち尽くす頃には黒煙は消えたがエクシアの姿が見えない。

「エクシアがいない…。」

「これで！俺の！勝ちだ！」

白銀の背後に回ったエクシアはガーベラストレートを構えて振り下ろし右腕を斬り落とし返す刀で胴体を腹の部分から斬りはらう。

「……まで、か。」

「今度は大会じゃなくて普通にやろうぜ。」

斬り払われた白銀が爆発を起こし天ヶ崎高校の勝利が決定する。

各校の選手は握手を交わしスタンドに帰ろうとすると淳也に止められる。

「安藤くん、ちよつと良いかな。」

「何かありました？それとも早速バトルしたいとかですかね。」

「バトルはまた今度で良いんだ、要件というのは今大会のダークホースと言われている機体の事を教えようと思ってる。」

「ダークホース？」

「そう、黒いフリーダムを使うファイターが相手の機体をたつた一機で倒したみたいだよ。」

「気をつけなよ、と忠告を残すと淳也もその場を後にする。」

「黒いフリーダム、か。まさかね…。」

た。  
階段を登り始めていた奏に急かさされ拓哉は一旦考えるのをやめると階段に駆け出し

## 第14話〈新人戦・3回戦〉

スタンドに戻った拓哉は先程、白桜高校の鳴瀬 淳也に言われた事を他のメンバーに伝える。

「さっき戦った人が言ってたんだけどこの大会で黒いフリーダムを使うファイターに気を付けろってさ。」

何処かで戦った事のある機体を頭の中で思い浮かべて自分で否定する。

「ん？黒いフリーダム… まさかね。」

「おそらくそのまさかでしょうね、今日行くって言ってたから。ホントは連れてきてこの前の事を謝らせようと思ったんだけど上手い具合に逃げられちゃって。」

「ごめんなさい、と木乃香に頭を下げられる。

「大丈夫ですって！頭上げてください、ほら3回戦のアナウンスが始まりますよ！」

初期に比べて大分人が少なくなり順番が早くなった為早々に呼ばれる。

「第14コートで天ヶ崎高校対洛陽高校の試合を行いますので選手はコートに移動して下さい。」

「奏と安藤くんは機体の修理が終わってないから出せないから部長、分かってるね？」



「分かつてるわ、と言うわけで沙希ちゃんと城戸くん出番よ！」

「分かりました！」

「わ、分かりました…。」

「ああそうだ、城戸くんのストライクに新装備を付けておいたからぶつつけ本番にはなるが君なら使えると思う。」

「ありがとうございますとストライクを受け取り、響と沙希はコートに移動し着いたとほぼ同時期に相手方の選手もコートに現れた。」

「初めまして、洛陽高校の丸岡 彩って言います。」

「私は白鷺 花音、よろしくね！」

「こちらと同じく挨拶を返す。」

「天ヶ崎高校の城戸 響です。」

「同じく小川 沙希、です…。」

挨拶が終わりふと拓哉に言われた事を思い出し相手方を見ると彩と目が合いウインクされると響は思わず目を逸らしてしまう。

ふと隣を見ると笑顔と言う仮面を被った沙希がこちらを見ていた。

「えーと、小川さん？俺なにかしましたっけ…。」

「何もありませんよ？さあ行きましようか。」

「は、はい。」

各選手は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. Faird6, city》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ビルドストライクセンチネル。行くよー!」

「小川 沙希、Gーアルケインフルブラスター。行きますー!」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、ユニコーンEP4で連邦とジオンが戦っていた市街だった。

ゲートを出て近くのビル陰に降り立った響は主武装であるソードライフルのセンチネルソードを動かしてみる。

「動作は問題ない。けど小川さんの機嫌損ねちゃったな。」

（拓哉が相手ファイターの顔も見ないと損だぞなんて言うから）

そんな事を思っていると少し遅れて沙希も隣に降り立った。

「ごめんなさい、遅れてしまって…」

「大丈夫だよ、俺もさっき降りた所だから。」

隣に降り立った機体を改めて見ると武装が少し変わっているのに気付く。

機体カラーはオレンジがメインで所々に赤色が入ってるのは変わらずで今回腰付近のサブスラスタが大型化していたのとバックパックにジャイオンのビッグアームユニットが転用されていた。

「機体重量は増しましたがけど、スラスタを増設したので移動速度は変わりません。」

「それは良かった、さてと取り敢えず動こうかいつまでも同じ所にいけないし。」

そうですね、とアルケインはサブスラスタを噴かし移動を開始してストライクも置いていかれてはたまらないと脚部ビームスラスタを噴かしついて行く。

そして、移動から少し経ったあたりでビルの上に堂々と待ち構えている機体を発見した。

「あれは、零丸のフルアーマー仕様とクロスボーンガンダムx2にフルクロス装備か？」

「そうだと、思います。」

響と沙希を視界に捉えた零丸のファイター彩が通信を入れる。

「もしかしてだけどさつき、怒られてた？」

「え？小川さん怒って？」

「な、に、か、言いました？」

「いえ… なんでもないです…」

響は沙希の怒っていた理由が分からなかったが、彩と花音は理由が分かっていたのだろう2人してやつぱりかーと笑う。

「なんで怒られてるのか分からないけど、これだけは分かる。ケンカ売ってるんだよな？」

ストライクはセンチネルソードを構えメインスラスターを噴かし突撃する。

「捨てるほど売ってる！」

零丸もビームクナイを構えビルから飛び降り、ストライクと零丸がぶつかり合い激しい火花が発生した。

「城戸さん下がって下さい！」

背後から聞こえた声に反応し零丸から離れると入れ替わりでアルケインが零丸に接近してビームピストルを連射する。

撃ち合いに発展しながらも彩が尋ねる。

「ねえ、城戸くんって彼女いないの？ いなかったら私貰っちゃおうかな。案外好みの顔だし。」

この突然の発言に沙希は驚いた様子で

「!??それはダメです！」

アルケインがブースターを噴かし零丸を蹴り飛ばす。

「小川さん大丈夫!?ここは俺が:」

一旦離れ体制を立て直してアルケインの援護をする為に戻るが

「いいえ!この人は私がやります!城戸さんは手を出さないで下さい!」

普段の雰囲気からは想像出来ないくらい強い気迫を感じ大人しく引き下がろうと方向転換をした所で、バックバックから制御スラスター兼実体剣のスラスターブレードを2本アルケインによって抜かれる。

「え、俺のスラスターブレード:」

「貴女だけは:落とす!」

ストライクからスラスターブレードを2本強奪に近い形で借りたアルケインは苦手としていた格闘戦で零丸に斬り込んで行く。

その様子を遠くから見ていた響は女性を怒らせると怖いと言う事を改めて思い知らされた。

「CAUTION!!!」

零丸とアルケインの戦いに気を取られていたストライクはフルクロスの接近に気付かず至近距離まで迫られる。

「彼女さんが心配なのは分かるけど、今はバトル中だよ!」

「だから彼女じゃないって、確かにあんな子が彼女だったら嬉しいけどさ！」

そして、フルクロスの攻撃を何とかよけ反撃と言わんばかりにバルカンを乱射する。

「この朴念仁！貴方周りから鈍いって言われない？」

「言われた事無くもないけど、何で俺は相手に説教されてるんだよ……」

バルカンの発射口をフルクロスにヒートダガーで潰されると今度はセンチネルソードを構えフルクロスを引き剥がした。

その様子をモニターで見っていた天ヶ崎メンバーも

「これであいつ気付きますかね、解説の滝沢先輩？」

「いやー気付かないでしょうこれはどうなるか見ものですね、解説の木乃香ちゃん？」

「解説何人いるの……でもまあ無理でしょうね。相手にも心配されるなんて沙希ちゃん  
が可哀想になってきたわ。」

エクシアを修復していた翼のみが何も語らず黙々と作業に没頭していた。

「まさかこんな所で使う事になるとはね！リアルモード。」

零丸のバックパックが変形し、それが足と腕にくつつきSDの頭部が後ろに移動するとHGの頭が姿を表す。

「変形した!?？先に仕留めないと、ファンネル！」

アルケインはソードファンネルを4基射出すると零丸に向かわせるが射程圏内に

入った途端、動きを止めた。

「なんでファンネル動かないの、まさかNT-D?」

「正解だけど、ユニコーンの改造機なんだから積んでるかもしれないって思っておかないと!これでファンネルは私の思うがまま。」

所有権が零丸に移ったファンネルが沙希に向けて砲撃を開始しアルケインもスラストブレードを放り投げビームライフルを取り出し応戦しながら徐々に撤退する。

その様子を見ていた響はフルクロスを押し込む形でアルケインの方へ誘導し

「小川さんは一旦離れて!ここは俺が引きつける!」

「すみません。」

フルクロスを蹴り飛ばしそばに突き刺さっていたスラストブレードを抜いて零丸に振り下ろしてアルケインから引き剥がすが背後にビルが迫っていた。

「2人を相手にして勝てると思わないでね。」

「蹴り飛ばしたお礼はさせてもらおうよ!」

(小川さんをあいつらから遠ざけられたのは良かったけど、どう考えてもこの状況ヤバイな...)。

そう思いせめてどちらか片方だけでも道連れにしようとしてスラストブレードを構えスラストターを噴かそうとした瞬間、沙希から通信が入る。

「響くん！」

初めて下の名前と呼ばれた響は相方の言おうとしてる事を察する。

「分かったよ、小川さん！」

「これで終わり！」

前方から零丸が右方向からフルクロスがそれぞれの獲物を構えながらストライクに迫るが響は自身の獲物を正面ではなく右方向にだけ構え少し身を屈めた次の瞬間、どこからかビーム音が鳴り響き零丸の胸部を正確に撃ち抜く。

「え、何？まさかあのビルの窓枠から？タイミングがズレてたらストライクに当たってたかもしれないのに……!?？」

彩が言い終える前に零丸は爆散し、残されたフルクロスもストライクが振り上げたスラストブレードによる一撃でムラマサブレードがバキィ！と嫌な音を立てて砕け散った。

「なんで彼女をあそこまで信頼出来るの!?？試合開始時は険悪な感じだったのに！」

「俺は小川さんを信じてるしあれは俺の未熟さが起こした事故だ！さあ、散々人をコケにしてくれたお礼はたっぷりとさせてもらうぜ。」

零丸が爆散した事によりファンネルの所有権が戻ってくる。

「城戸さん！私のファンネルを！」



「ありがとう！全基砲撃構え！目標フルクロス、フルブラスト!!!」

周囲をファンネルやストライクの射出したドラグーンに囲まれたフルクロスはがむしやらにストライクに向かってくるがいつのまにかこちらに合流したアルケインによる射撃やオールレンジ兵装によって残っていたABCマントが脱げそれでもストライクに先の折れたムラマサブレードを振り下ろすが、それをストライクはビームダガーを投擲して軌道を逸らすとセンチネルソードを真正面で構え突撃する。

さながらそれはOO2ndシーズンの最終決戦のようだった。

「チエストオオオオオ！」

「ちよつとお節介すぎたかな…。」

ソードの刀身がフルクロスの胸部を貫通しカメラアイから輝きが失われ天ヶ崎高校の勝利が決定した。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け彩と花音がバトル中挑発した事を謝罪し響たちもそれを許した後日改めてバトルしようとする連絡先を交換する。

「「それじゃ準決勝頑張つてね！」」

「ありがとう！優勝目指して頑張るよ。」

響がスタンドに戻ろうと彩たちに背を向け歩き出し沙希も会釈をして追いかけてよう

とした時、彩に呼び止められる。

「沙希ちゃんなら彼と良いペアになれると思うからそっちの意味でも頑張つて！」

「……<sup>!!</sup>? あ、ありがとうございます。」

顔から湯気が出そうなほど赤くなった沙希は、その場を離れ響と合流してスタンドに戻る。

「ねえ、小川さんあの時下の名前で呼んだのつて。」

どうして、と言いつ終える前に木乃香に止められた。

「城戸くん、そこから先は踏み込んじやダメよ?」

「そっだぞ、この朴念仁。」

「何でだあ!」

木乃香と拓哉に注意され、沙希に助けを求めようとするが沙希は次の試合のアナウンスが流れるまで目を合わせてくれなかった。

## 第15話～新人戦・準決勝～

沙希がようやく響と話してくれるようになった頃、準決勝のアナウンスが流れる。

「第3コートで城西高校対天ヶ崎高校の試合を行いますので、選手はコートに移動して下さい。」

「城西高校って石川さんの所ですよね？」

「そうよ、そして間違いなく彼女が出て来るわ。」

響と木乃香が会話を交わし、その後翼の方を見る。

「ん？ああ、部長のストライカーパックと安藤くんの追加武装の準備は出来てるよ。ホントは奏が行ければ良かったんだけど、今お菓子の食べ過ぎでトイレとお友達になってるからね。」

呆れた様子でため息をつく翼を見て乾いた笑いを取る響たち。

「よし、それじゃ安藤くん行きませうか！」

「了解！んじや行って来るわ。」

「おお、派手に暴れてこい！」

響の発言が終わったぐらいでこちらに背を向けた拓哉は軽く手を振りコートへ向か

う。

コートに着くと既に城西高校の選手はおり挨拶を交わす。

「今回は私と茉莉乃だよ。あの時の交流試合以来だね。」

「拓哉さん！この前はありがとうございました！」

「石川さんお久しぶりです。茉莉乃もまた遊びに行こうな。」

「出て来るとは思ってたわ。それにしてもこの2人はここまでの仲になってたとは……」

試合とは関係ない話に流れそうになったので、恵美と木乃香は2人を制すと筐体に向かいそれを真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning「Plavесky particle」dispersal.  
iard2, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「安藤 拓哉、ガンダムエクシアデイスターブwithGNアームズタイプE！圧倒させてもらう！」

「今井 木乃香、ムサシードストライク！殲滅を始めましょうか！」

レバーを動かしてガンプラを発進させる。

今回のステージは周りに戦艦やMSの残骸が漂う月面基地だった。

月基地入り口付近で木乃香のストライクと拓哉のエクシアは辺りを見渡し敵影がないことを確認し降り立つ。

「さてと、安藤くんGNアームズは使えそう？ホントはフアングが直ってるか私がそっちを動かせば良いだけの話なんだけど…」

GNアームズなどの支援兵装は1人で操作する場合のチームは2体+1で支援兵装を別の人が操作するなら1体+1になるので人によっては2体+2も可能だが大抵は同士討ちをしてしまう事の方が多いのでむしろ支援兵装無しの方が多いというわけだ。

「フアングが使えなくなる事を想定して翼先輩がGNアームズを持ってきてくれて良かったですよ。それに今は戦力を削るわけにはいかないんでこれで大丈夫です。」

エクシアはGNアームズの大型ビームサーベルを起動して漂っていた戦艦の残骸を切断してみた。

「出来る限り前に出るけど、無茶はしないでね。」

了解、と返事を返しストライクがGNアームズの上に乗る移動しながら索敵を行う。移動を開始して少し経った辺りでリーダーに敵影が映る。

「安藤くん！右斜め前方に敵影感知したからGNアームズは砲撃を行いながら援護して！」

「任せて下さい、砲撃しながら援護します！」

GNアームズの大型ビーム砲を起動し威力を抑える事で連続射撃可能にした連続射撃モードで連射する。

その砲撃に合わせストライクもバックパックから対艦刀を抜きいつでも斬り掛かれるよう構えた。

直後軽い爆発が起きるが相変わらずレーダーから敵影反応は消えない。

「化け物か?？」

「それ本人に言ったら怒られるからね。って来るわよ！」

木乃香の発言通り、GNアームズが連続射撃モードを中断した辺りで可変形態の黒を基調としたアリオスと新たに増設された牽引用のアンカーに捕まった所々に赤色が入ったブルーデイスティニーがこちらに迫っていた。

「今なら変形解除できないだろ！」

エクシアは腰からビームダガーを抜き投擲するがビームダガーはアリオスのビームシールドに挟まれ跡形もなくその姿を消した。

「とんだご挨拶だね、茉莉乃の彼氏は。」

「まだ彼氏じゃないですよ！」

慌てながら否定した茉莉乃に対し恵美はまだ、ねと意味ありげな表情をしながら拓哉

たちの目の前に降り立つ。

「私のアリオスにそんなデカイので来るなんてやって下さいって言うてるようなものだよ。むしろやられたいの？」

「え、拓哉さんつてもしかして…」

（GNアームズを装備してきただけで、この言われようとは…）

「やめてくれ！俺はMじゃないからな！後、先輩は機体を屈めてくれ！」

ストライクが機体を屈めたのを確認すると、GNアームズの大形ビームサーベルを起動し周りのMSの残骸ごとアリオスとブルーデイスティニーを薙ぎ払う。

しかし、その一撃は2機に軽々しく避けられアリオスが再び可変形態を取りエクシアの背後に回るとビームマシンガンでGNアームズのブースター部位に連射する。

直後、ブースターは爆発を起こし拓哉は誘爆を防ぐためにブースター部位を切り離れた。

「クソ！機動性を失ったら良いのだ！」

泣く泣くGNアームズもこの場に破棄しアリオスの追撃を躲した。

追い討ちを掛けようとするアリオスにストライクがスペースデブリを器用に蹴りながらビームブーメラン「マイダスメッサー」を投擲しアリオスの追撃を中断させる。

マイダスメッサーを躲したアリオスと入れ替わるようにブルーデイスティニーが1

80mmマシンガンを連射し帰投途中のマイダスメツサーを撃ち落とす。

「今のは危なかったね。当たってたら危なかったよ。」

「どうせこの程度なら避けると思ってたわ。これからが本番よ!」

ストライクは対艦刀をバックパックに戻すと今度は両腰からビームサーベルを抜き二刀流の構えを取り先程と同じようにスペースステブリを蹴りながら移動を繰り返しアリオスに肉薄する。

「切り返せるか!」

「接近戦は苦手なだけだな...」

右側からの一撃は右肩のビームシールドで左側の一撃は同じようにビームサーベルを抜き斬り結ぶ。

その様子を見ていた茉莉乃はストライクの背後からサーベルを構えて突撃するがGNアームズをパージして身軽になったエクシアのGNソードに防がれる。

「そんな!?」

「お前の相手は俺だ!」

エクシアに押し出される形でその場から連れ出され少し離れた所で解放された。

「いくら拓哉さんだからって手加減はしませんよ! EXAM!」

[exam system stand by]



目が赤く光りオーラのようなものを纏ったブルーデイスティニーがエクシアに迫り  
ビームサーベルを振り下ろし装備していたGNシールドごと左腕を斬り落とす。

「やっぱり積んでたか！この威力は俺も本気出さないとヤバイかな。トランザム！」

紅い残像と化したエクシアも負けじとGNソードを振り上げブルーデイスティニー  
の右腕を斬り飛ばし、その後しばらくの間激しい鏖迫り合いが続いた。

拓哉が茉莉乃を連れ去った頃

「これは心置きなくやりあえて後輩たちの気遣いかな？」

「そう見たいね、じゃあ早速続きをしましょうか！」

アリオスを蹴り飛ばし右手のビームサーベルを逆手で持ちそれを投擲すると、アリオ  
スはビームマシンガンを連射し撃ち落とし代わりにGNマイクロミサイルをコンテナ  
が空になるまで撃ち続ける。

「楽しいよねえ！木乃香！」

「人格変わってるじゃない、あのアレルヤもどき！」

スペースデブリをミサイルにぶつけて相殺しそれに紛れてビームダガーをアリオス  
に投擲し突然の事に対処出来なかったアリオスは右肩のビームシールドを失う。

「このまま押し切らせてもらおうわ！翼くん今こそ使うからね！」

木乃香はスロットからSP「??」を選択すると、普段響が使っているシステムによく

似た名前が浮かび上がる。

「SEED system ツヴァイ II stand by機能終了まで残り30秒。」

恵美との対決を前に翼に無理言つて本来使えないはずのシステムを強引に組み込んだ為、終了時間が極端に短くなっていた。

「30秒もあれば十分！」

蒼い粒子を纏ったストライクはビームサーベルを構えながら接近しアリオスの残った左肩のビームシールドを斬り落とす。

「そうこなくつちやあああ！・トランザム！」

ストライクの追撃を紅い残像と化す事で躲したアリオスはお返しと言わんばかりにビームマシンガンを連射し右手のサーベルを撃ち落とす。

その後も激しい接戦の末にSEEDやトランザムは終了し、ストライクはサーベルと対艦刀を失い手持ち武装はアーマーシユナイダー一本のみにアリオスは両腕のビームマシンガンは潰されコンテナも失い右脚の右翼をブレード代わりに持つのみとなった。

お互いにそれぞれの獲物を構え互いを倒さんとブーストをかける。

「恵美いいいい！」

「木乃香あああ！」

その後激しい衝突音がして、周囲に沈黙が訪れる。

「決着はつかなかったね…。」

「ええ、後は後輩たちに任せましょうか。」

ストライクとアリオスはお互いに身体を預け寄り添うようにその動きを止めた。

その頃、絶賛戦闘中の拓哉と茉莉乃

EXAMが終了したブルーデイスティニーに至近距離で3連ミサイルを食らったエクシアは、直撃をもらい受けトランザムが強制終了し吹き飛ばされる。

宇宙空間なので止めるものが何もなくブルーデイスティニーの姿が見えなくなるまで飛ばされた辺りで何かにぶつかった。

「GNアームズ…ここまで流されてたのか。」

先程ブースターをやられ放棄したはずのGNアームズが漂いに漂ってこちらの中域まで流されてきていた。

「ブースターはやられたけどまだサーベル発生器は使えるな。GNアームズ、最後まで付き合ってくれ！」

GNアームズから大型ビームサーベル発生器を斬り出しエクシアの失った左腕に嵌る。

「さてと、戻らないと。ブーストランザム！」

エクシアはスラストー部位のみトランザムを発動しブルーデイスティニーの元へ向かう。

「拓哉さんは何処まで飛ばされたんでしょう…。」

ミサイルを放った側の茉莉乃はまさかあんなに飛ぶとは思わずに索敵を開始する。

「!? 高速でこちらに向かっている機体はって、拓哉さんしか居ませんよね。」

「その通り！地獄の底から死神が帰って来たぜってなあ！」

ブーストランザムを中断したエクシアは大型ビームサーベルを振り下ろし、ブルーデイスティニーもビームランスを突き出して応戦する。

「くっ！なんて質量なんですか！」

「GNアームズは伊達じゃない！」

直後、ビームランスがその質量に耐えきれずビームから引き裂かれランス部分も折れてしまう。

「ビームランスが！」

「ここで終わりにさせてもらおうか、トランザムエクスプロージョン！」

機体各所に増設したビームサーベル発生器からビームを展開しAGE—FXのFXバーストのようにビームを纏いブルーデイスティニーにタックルを仕掛ける。

タックルを受けたブルーデイスティニーは先程のエクシアのように吹き飛ばされた。

「姿勢制御が出来ない!!?」

「貰った!これで決める!」

ビームの出力を左腕の大型ビームサーベルに集中し現段階でエクシアの出来る最高の一撃を放つ。

「ライザアアアソオオオド!!!」

高く掲げた大型ビームサーベルのビームは月を一回りできるほど大きくなりそれをブルーデイスティニーに向けて振り下ろし月基地ごと両断した。

「YOU WIN!!!」

勝利を示す機械音がコックピット内に響き渡り天ヶ崎高校の勝利が決定し、スクリーンが溶け恵美と茉莉乃と握手を交わしコートを後にする。

そして、スタンドに戻るとちょうどもう片方のコートで行われていた試合がモニターに映し出される。

「あれが最後の対戦相手、やっぱり先輩の妹さんか…」

響がモニターに映った黒いストフリを見て思わず声を出す。

波乱の決勝が今行われようとしていた。

## 第16話〈新人戦・終幕〉

「と、言うわけで今現在の被害状況を報告してくれるかな。部長から順に」

決勝のアナウンスが掛かるまでに最後の試合に出る選手を決めておかなければいけないそうで、翼の提案で自分の置かれてる状況を報告する事となった。

木乃香↓「先程の試合で武装の大半は使用不能、また本体のダメージも修復は難しい。」

奏↓「機体の修理は終わっているが、本人の状態が良くないため（翼談）」

響↓「ストライカーに多少のダメージはあるが、本体はほぼ無傷に近いので換装すれば対応可能。」

拓哉↓「左腕・フアングがなくGNアームズも次の試合には間に合わない。」

沙希↓「メインのライフルを失っているだけで、本体はほぼ無傷。ライフルを補充すれば対応可能。」

一通り報告が済んだ所で翼が口を開く。

「次の試合には城戸くん和小川くんに出てもらおう、良いね？部長。」

「もちろん、それしか手がないからね。2人とも全力で楽しんで来なさい。」

「はー！」

会話がひと段落あたりでアナウンスが掛かる。

「それでは、第1コートにて天ヶ崎高校対皇帝鷲宮高校の試合を行いますので選手はコートに移動して下さい。」

「よし！行こう小川さん！」

席から立った響は沙希に手を差しのべる。

「は、はい……！」

差し伸ばされた手を取り沙希も立ち上がりコートへ向かうと、時を同じくして相手方の選手もコートに現れる。

やはり予想していた通りロストフリーダムのファイター今井 舞姫ともう1人は見たことがない女性だった。

「この前の借りを返させてもらうからね。」

「今度は勝たせてもらう！」

響と舞姫は以前の引き分けを今度は勝ち星にする為、沙希ともう1人は何も語らず筐体へ向かいGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. Field 5, site》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ビルドストライクセンチネル。行くよ!」

「小川 沙希、G—アルケインフルプラスター。行きます!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは以前沙希が舞姫と戦ったトリントン基地近くの市街だった。

以前、舞姫と戦った時と同じように視線の先でSEED特有の赤と白のビームがビルに向かって放たれていた。

「これは、前回と同じ通り今井さんが誘ってるな。小川さん行けそう?」

「はい、大丈夫です。」

ストライクとアルケインの2機がステージ中央まで移動するとロストフリーダムともう1機、AGE—2がこちらを待ち構えていた。

「さあ、始めようか。」

「望むところだ!行くぞストライク!」

センチネルソード(ソードモード)を構えるとロストフリーダムに向けてブーストを噴かし突撃する。



「前と同じ先制の仕方じゃないか。」

突撃し振り上げたセンチネルソードをロストフリーダムは右腕部のシールドで防ぎ左手のロストフィンガーでストライクの右アンテナをへし折り、アンテナをへし折られたストライクはその場から距離を取るためセンチネルソード（ライフルモード）を撃ち込んでロストフリーダムを遠ざける。

「そう簡単には行かないか。」

「2度同じ攻撃は受けない。」

再びロストフィンガーを展開してお返しと言わんばかりにエネルギー弾を飛ばす。

「獅子咆哮!!?」

エネルギー弾にセンチネルソードを当てて機体への損傷を最低限に抑えようとした響だったがエネルギー弾の質量が大きく逸らすのが精一杯だった。

「城戸さん!」

逸らした直後、沙希のアルケインが対艦ビームライフルをロストフリーダムに向けてビームを撃ち込んで追撃を中断させる。

「へえ、中々やるね。でも、美玲!」

「分かってるって! 姬ちゃんは何使いが荒いんだから!」

美玲、と呼ばれた女性の操るAGE-2がロストフリーダムの前に現れ人型からブラ

ストモードへ変形を始め脚部からビーム砲がせり出し肩部から持ち手が現れそれを口ストフリーダムが掴みAGE-2もといAGE砲が放たれる。

「ファイ〇ルアタ〇クライド!?？」

「それは違うと思います!」

一瞬判断の遅れた響のストライクに沙希はアルケインでわき腹を蹴って退避させ、自身も上空に逃れる。

「あいつだから可哀想とは思わないけど、ふつうに蹴りを入れられるようになったんだね…。立派だよ沙希ちゃん。」

「そんなところで褒められても嬉しくありません!」

アルケインはAGE-2に向けてビームワイヤーを射出し回避を行わせる事で砲撃を終わらせる。

「小川さん助かった!今度はこっちの番だ。」

直後、蹴り飛ばされて何を逃れたストライクが大型ビームランチャーを起動しチャーヂ無しで撃てる限界で大型ビームランチャーを放つ。

だが、その一撃はロストフリーダムのビームシールドによって防がれ本体へのダメージはほぼ皆無だった。

「化け物か…!」

「女性に対してその発言はあんまりだと思うが。」

ロストフリーダムがドラグーンを4基射出しストライクの周りを取り囲んだ。

「しまっ!?？」

射出されたドラグーンが砲撃を行うがストライクも負けじとビームダガーを次々投擲して1つまた1つと数を減らしていきたちまち射出された4基はその姿を消す。

「やられたらやり返す! 倍返しだ!」

センチネルソード(ライフルモード)をロストフリーダムに向けて撃ち込むがロストフリーダムには当たらずその後ろのビルに当たってしまう。

「そう言えば、射撃はノーコンなんだっけ!」

「何で知っ、て…!」

ロストフリーダムの後ろを見た響はストライクにバックブーストをかけ下がらせる。

「いきなり逃走? 何にビビってええええ!?？」

響を煽っていた舞姫だったが、下がり方が尋常じゃなかったので後方を見ると巨大なビルがこちらに倒れてきていた。

くく

その頃、美玲のAGE-2ナルカミは肩部の持ち手を掴むとそれを引き抜きビームサーベルを形成しアルケインの右側プラスチックスターユニットを貫く。

「片方だけならあげます…！」

爆発寸前のブラスタユニットを根元でパージしてAGE―2に投げつける。

「どうせなら両方頂戴、よー！」

投げつけられたブラスタユニットをサーベルで斬り裂きその勢いでアルケインの残されたブラスタユニットにサーベルを突き立て爆発させる。

機体の半数以上のブラスタを失ったアルケインはこれでは移動の障害になると思いいバックパックのビッグアームユニットをソードファンネルのみ射出した状態で破棄した。

「ソードファンネル！」

射出したソードファンネル6基をAGE―2に向かわせる。

「ファンネル戦でもやる？ 私得意なんだよ、Fファンネル！」

AGE―2も両肩から肩部ウイングをファンネルにしたFファンネル4基射出し、ソードファンネルを次々と撃たれたビームを弾いたり斬り落として行く。

そして、30秒もしないうちに沙希のソードファンネルはその姿を消してしまった。

「だから言ったじゃない、得意だつてさあ！」

Fファンネルを戻したAGE―2は代わりにシングルブレードを抜きアルケインに襲いかかる。

「切り替えが早い…！」

対艦ビームライフルのビームサーベルを起動し、襲いかかってきたAGE-2のシグルブレードを弾くが対艦ビームライフルに貯蔵していた分のエネルギーが底を尽きサーベルモードが終了してしまう。

「サーベル終わっちゃったね？どうするのかな！」

一度弾かれた後、即座にシグルブレードからビームサーベルに持ち替えてアルケインの左肩にビームサーベルを突き立てる。

「まだ手はあります…！」

ビームサーベルが刺さっている左肩を腕ごとパージすると体制の崩れたAGE-2にビームガン（サーベルモード）を振り下ろす。

AGE-2はそれを横に転がって避けるとシグルシールドをビームガンの銃口に押し当て暴発させる。

「ここで貴女に悲しいお知らせがあります！私のFファンネル1機は何処に行ったでしょうか。」

AGE-2から距離を取って次の手を考えていた沙希だったが突然の質問に戸惑ってしまふ。

「そう言えば…後ろ!?？」

「正解！ やつちやえFファンネル！」

アルケインが後ろを振り返ったと同時にアルケインの胸部にFファンネルが突き刺さりカメラアイから輝きが失われたその動きを止めた。

くくく

倒れてきたビルを避けきれないと踏んだ舞姫は残っているドラグーンを全基射出し全身の銃火器を用いハイマツトフルバーストでビルを吹き飛ばすが砕け散った際、破片がドラグーンに当たって爆発してしまう。

だが、何とか倒れてきたビルの下敷きになるのを免れた舞姫は響に尋ねる。

「もしかしてお前、あのビルは狙ってたの？」

「もももちろんじゃないか、これで邪魔なドラグーンは潰させて貰った！」

（まさかフリーダムを狙ったけど後ろのビルに当たるなんてな……）

「まあ、それはいいとしてこの前の事は私の誤解だったらしいけどそれでもお姉ちゃんと一緒に部活ってだけで私にはお前を倒す理由がある！」

「……で響は言っってはならない疑問を口にする。」

「今井さんって俺とタメだよな？ そんなに部長と同じ部活に入りたかったら同じ学校に進学すれば良かったのに。」

沈黙が数秒続いたのち舞姫の肩がワナワナと震えだす。

「お前は今言ってはならない事を言った！それは学力が足りなくて落ちた事だ！」

「自分で言っちゃってるし！なんかごめん…。」

「お前だけは絶対に許さない！美玲いるんでしょ!!?」

砕けたビルの瓦礫からAGE-2がひよっこり顔を覗かせる。

「はいはい、アシストでしょ。分かってるって！」

AGE-2がハイパードズライフルを構えストライクのバックパックを狙ってビームを狙い撃ち大型ビームランチャーの根元を撃ち落とす。

「くっ！まだだ！」

6連ミサイルをロストフリーだむとAGE-2に向けて残弾が無くなるまで撃ち続けたりには黒煙が立ち込めた。

「弾幕のつもりか。美玲、AGE砲はまだいける？」

「後一発ならいけるけど、私もさつき戦闘してきたばかりだから撃ったらマトモに動けなくなるけどそれでもいい？」

「あいつなら私一人でも十分だよ。」

りよーかい、とAGE-2はブラストモードへ変形しロストフリーダムがそれを掴み目の前の黒煙にAGE砲を撃ち込んで近くの瓦礫ごと黒煙を散らすそこにストライクの姿は見えない。

直後、真横の辺りからヒュンと投擲音が聞こえたかと思った瞬間未だブラストモードのAGGE-2にビームダガーが突き刺さっており人型に戻る事もなくその動きを止めた。

「そこか!」

先程投擲音が聞こえた位置に腹部ビーム砲「カリドウス」を撃ち込んでその場を丸裸にする。

そこにはストライクのバックパックだけ残されていた。

「囧だど!?」

「俺はこつちだ! SEED、俺に力を貸してくれ!」

「SEED system stand by 終了まで残り120秒」

蒼の粒子を纏ったストライクはストライカー接続部から粒子によるブースターを形成しロストフリーダムの背後に回りセンチネルソード（ライフルモード）を連射してロストフリーダムのバックパックスラスター部位を潰し、その場から離脱しようとする。

「逃すかあああ!」

ロストフィンガーを展開してSEED発動中のストライクを捕まえ頭部を殴る、殴る、殴る。

頭部が揺れ酔いを感じていた響だったが、負けじとセンチネルソード（ソードモード）



ロストフリーダムを装甲を斬り返し2機は殴る斬るの罅迫り合いへ発展していった。

そうして、幾度かの応戦したのちお互いに距離を取る。

「何とか防げてはいるけど、頼みの綱のSEEDがもう終わる…。」

「SEED終了、粒子低下を防ぐためビームの使用を制限します。」

発言とほぼ同じタイミングで、SEEDが終了してしまう。

ストライクのセンチネルソードは既に刀身がボロボロでサーベルも残り一本になってしまった響はセンチネルソードを破棄しビームサーベルの柄を握る。

「へえ、よく持ちこたえたと思うけど次の一撃で終わりにしてあげるよ。」

「泣いても笑ってもこれが最後だ、やってやる！」

ストライクは脚部スラスターを噴かしロストフリーダムに接近し、ロストフリーダムもロストフィンガーを展開してお互いに最後の1撃を放つ。

だが、ストライクのサーベルは使用制限の所為でビームダガーぐらいのビームしか出ずロストフリーダムの胸部に切っ先が触れただけでロストフィンガーによって胸部を貫かれその動きを止めた。

「クツソオオオオオ!!」

「私の勝ちだ!アハ、アハハハ!」

直後、カメラアイから輝きが失われ動かなくなったストライクを投げ捨て爆発が起き

る。

そして、響たちが初めて参加した公式戦は準優勝と言う結果で幕を閉じるのだった。

## 第17話～その先にあるもの～

新人戦が終わった次の日の放課後

部室中央の机にはポテチなどのお菓子やジュースが置かれお疲れ様会が行われていた。

「みんなコップは持った？それじゃ、新人戦お疲れ様でしたー！」

「「お疲れ様でした!!!」」

ポテチなどをつまみながらワイワイしていると新人戦の決勝戦の話題になる。

「それにしても先輩の妹さんは強かったな。」

「ああ、相方の子もそうだけど連携が取れていた上に個々の実力も凄かった。だからもつと経験を積んで技を磨いて次会うときは俺が勝つてやる。」

そのいきだと、ポテチを口に放り込む拓哉を横目にポーチに入れてるストライクに視線を移す。

（ごめんなストライク、俺がもつと強ければ。）

「…くん！城戸くん！」

はっとした響は斜め前に座った木乃香に声をかけられている事に気づく。

「急に黙るからビックリしたよ。ねえ、もっと強くなりたいと思う?」  
「俺もつと強くなりたいです!」

「なら、自分でガンプラ作ってみない?」

突然の木乃香の発言に目を丸くする響。

「え、今ですか!?!?」

「今だからでしょ!ほら自分で実際に作ってみれば可動域とか色々と把握しやすいですよ。」

確かに、と考え込む響の横で拓哉と沙希が手をあげる。

「じゃあ、俺が作ります。」

「わ、私も...」

2人が手を上げて響の方を見る。流れ的にダ○ウ倶楽部のノリを思い浮かべたがこういうのは考えたから負けだと思って自ら手を上げ。

「いや!俺が作る!」

「!どぞどぞどぞ!」

(はい、予想していた通りの展開でした。)

「やっぱりかー!」

「決まりみたいね、折角だから安藤くんと沙希ちゃんも作る?」

「作ります！（たいです…）」

「じゃあ、今日はもう遅いから明日（土曜日）に駅前集合で！」

「はっ！！」

途中職員室に呼ばれ奏が出ていき数分後戻ってきた後翼に何かを話したため息をはきながら分かったと頷いていた。

土曜日

結果というか後日談、奏の会話の内容として奏の追試に付き合うことになった翼は来れないと言うことで奏と翼を除き駅前に集合した4人は早速行きつけのプラモショップへ足を運んだ。

「俺はどれにするかな、剣を存分に振れば良いんだけど…」

取り敢えず店内を見回しながら歩いていると拓哉が何か見つけたのか声をかける。

「お、ならこれ良いんじゃないか？」

覗き込んだ響に拓哉が差し出してきたのはビルドファイターズトライに出てきたトライバーニングガンダムだった。

「運動性は高そうだけど、武装をどうするか。」

「最初の内はストライクのやつを流用すりゃ良い、まずは素体を選ばないとだろ？」

「確かにそうだな、よしこれに決めた！」

響はトライバーニングの箱とオプションパーツでバーニアやプラ板も一緒にカゴに入れる。

「そういや、拓哉はどのガンプラにするか決めたのか?」

「まだ悩み中なんだよ、またエクシア系にするか思い切って違う奴にするか。」

本人曰く使い慣れてるエクシアで別装備を作る案か別の機体にするかなんでいるらしい。

「中には同じ期待を使い続けるファイターもいるけど、他の機体を使ってみて違うと思ったらエクシアに戻って来れば良い。」

「響にしては珍しく説得力があるな、それなら俺はコイツにする。」

そう言いながら拓哉が棚から降ろしたのはVガンダムに登場したV2ガンダムABだった。

「どうやら俺の戦い方は中距離タイプみたいでさ、この前マリとバトルした時に言われたんだよ。」

「マリって城西高校の子だよな? 新人戦以外でいつバトルしたんだ。」

「それは…」

拓哉が続きを言いかけた所で、木乃香と沙希がガンプラを選んだのか箱を持つてくる。

「お待たせくごめんね待たせちゃった？」

「お、お待たせしました…。」

「俺らも今決めた所なんで、小川さんは何にしたの？」

「私はレオパルドにしました…。」

沙希が見せてきたのはガンダムXに登場したレオパルドだった。

「レオパルドか、って先輩も新しいの作るんですか？」

てつきり小川さんのガンプラと一緒に選んでるのかと、と響が頭に疑問符を浮かべているとその様子に気づいた木乃香が。

「私もこの前、メグと戦っててやっぱり同じ機体を使い続けるのは厳しいなあって思ってたね！」

なるほどと納得した響を連れ4人はあらかじめ予約しておいた作業ブースへ移動する。

「さあって！早速作りましょうか、安藤さんと沙希ちゃんも一緒に作る？」

「あー俺の事は気にしないでください。」

「私も多分大丈夫、です。」

「何かあったらすぐ呼んでね、じゃあ城戸くん始めましょうか。」

「は、はい！よろしくお願ひします。」

響は箱から出したランナー類のパーツをチェックしニツパーを握りしめる。

「そんなに硬くならないで良いんだけど、まあいいわ。後、ガツチリはめると塗装する時に変な所が染まらなかつたりするから気を付けて?」

となりに座った木乃香が切り出すパーツとランナーを教えてくれたが響はその内容がマトモに頭に入つてこない。

(先輩が隣に座つてる?!? 夢か、いや夢じゃないよなこんな美人が隣に?!?)

ガン普拉作りとは違う思考が頭の中を埋め尽くそうとしていた途端、誤つてパーツを落としてしまう。

「パーツが?!? この辺に落ちたと思つたんだだけ、ど:~:」

しゃがみ込み落ちたパーツを探していると目の前にタイツを履いた足が現れた。

「先輩は今日タイツ履いてなかつたし、そういや小川さんが履いてたようなな:~:?!?」

そして、状態を確認しようとした響が完全に顔を上げる前に沙希は顔を赤らめながら。

「キヤアアア!」

「ご、ごめ! ワザとじゃ、ゲフツ!」

顔を踏まれ倒れる直前、目に入った物を思い浮かべる。

(赤、か:~:)



その時の響は幸せそうな顔をしていたと後の拓哉は語ったという。

結局落としたブーツは椅子の下に落ちていたらしく木乃香が拾ってくれていてニヤニヤしながら響の方を向く。

「後でちゃんと沙希ちゃんに謝りなさい？それでお詫びにデートとかしてあげたらいいと思うけど。」

「それは勿論！お詫びのデートってそれは付き合ってる人達がするもので俺は違くないですか？」

「あーとにかく遊びに誘ってって事！続きをしましょう。」

木乃香が拾ってくれたブーツを付け頭を作ると続いてボディに取り掛かる。

しかし取り掛かってちょっとした後響の手が止まる。

「ボディからなんだけどポリキヤップっていうのがあってはめるの忘れがちだから気を付けてね。」

「先輩、もう遅いです。」

恐る恐る響の手元を見ると本来ポリキヤップが入っているべき場所に何も入っていないなかった。

「ごめんね、もっと早く言うべきだった。ボディならまだ外しやすいから気を付けて外して、今度はポリキヤップを忘れずに。」

了解です、とボディを完成させた後腕に取り掛かり着々と組み上げていく。

「出来た！俺の、俺が初めて作ったトライバーニングガンダム。」

出来上がったトライバーニングに木乃香から塗装のやり方を教えてもらいながら塗装も行い色変えを進め、数時間ほど乾燥させたトライバーニングを再び組み立てクリアパーツをはめる。

時を同じくして他の人たちも出来たらしく響のトライバーニングを中心として拓哉のV2ガンダムAB・沙希のれお、響に教えながら木乃香が作っていたフリーダムも机に置かれた。

「実際に作ってみると楽しいですね！」

「でしょ？まあ武装とかは明後日あたり翼くんに作ってもらおうとして。」

その後、カフェに移動してトライバーニングの武装をどうするか話し合い武装案をまとめながら楽しい時間を過ごし帰路につく。

家に帰り寝巻きに着替えた響は頭上近くにある棚にトライバーニングを飾って布団にくるまりながら。

「いつまでも元の名前はあれだな。今日からお前の名前、は。」

トライバーニングの新しい名前を告げる前に深い眠りに落ちていった。

## 第18話～その引き金を引くのは誰～

「つて事だから、この図面通りに作って！」

それはガンプラを作って2日後の部室で奏に勉強を教えていた翼に向けて木乃香が放った一言から部活が始まった。

「取り敢えず、どういう経緯でそうなったか教えてくれないか？こちらは奏が中々数式を覚えてくれなくて頭を抱えているんだ。」

翼があきれた様子で奏を見ると奏も悪いのは自分だけじゃないと抗議する。

「だいたいこの数式を覚えた所で社会に出ても役立つわけじゃないでしょ！」  
「分かる。」

これには響も共感したようで大きくうなづいていた。

「城戸さん、私で良かったら数学教えますよ…？」  
「ホント?!?今度の期末前にお願ひ！」

響は目を輝かせると沙希の手を握りぶんぶんとふる。

するとみるみる沙希の耳が赤くなり湯気が出るんじゃないかと思つた所で、木乃香が割って入り話を戻す。

「はい、この話はこれまでで経緯としては…」

木乃香は響が初めてガンプラを作った事・標準武装を何にするか話し合った結果など土曜日に起きた内容を事細かに翼に説明した。（響が沙希に踏まれた事も）

「なるほど、大体分かった。けど今は奏の勉強が最重要案件だから追試が終わってからでも大丈夫かな？」

「大丈夫です！予備機としてだつたんで時間のある時で。」

「すまないね、それまでは今のストライクで自分の苦手分野とかを練習するのも良いのではないだろうか。」

「苦手分野…射撃センスが皆無な事ですかね。」

響の発言にピンときたのか木乃香がガンプラバトルの筐体に歩いていき何やら設定をいじっていた。

「城戸くんの射撃センスを磨こうと練習用に設定し直したから射撃なら沙希ちゃんがいる中で上手いからセコンドに入ってもらって練習しましょうか。」

「よろしくお願ひします！」

「こちらこそ、よろしくお願ひします…。」

「ガンプラはどうしましょうっか。」

私のを使得って下さいと、ポーチからレオパルドを取り出しバックパックを軽装備仕様

に換装して響に渡した。

「ありがとう小川さん！」

「とんでもないです…。」

《Beginning Plavsky particle dispersal.  
i ardl, colony》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ガンダムレオパルド。行くよ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

「よし、行きますか。小川さんセコンドよろしくね！」

「は、はい。よろしくお願いします…。」

軽く挨拶を交わしステージ中央まで移動すると、一機目のザクが投入され視界に入る。

「早速貫きますか！」

いつも通りビームをザクに向けて撃ち込むが当たらない。

続けて数発撃つがやはり当たたる気配はせず。

「何で当たらないんだよ…。」

「あ、私が照準を付けるので…。」

軽く落ち込んだ響に沙希が慰めるようザクへ照準を付け引き金を引く。

この一撃はザクの胴体を貫通し爆散し、続く2機目から4機目のザクも沙希が照準を付け響がガンダムを操作して撃つというなんとも情けない結果となってしまった。

「この距離ならー！」

ようやく自身で照準を付けライフルを再び構え5機目のザクをライフルが誘爆しないギリギリの距離で打ち抜いた瞬間。

「CAUTION!!!」

何者かの乱入を知らせる警告が鳴りステージ設定が練習から戦闘へ変更された。

「乱入!?？小川さん何か聞いてる?」

乱入の知らせを受けセコンドに入っている沙希に尋ねるが沙希も焦った様子で何も知らないようだ。

しかしその疑問はすぐに解決する事となった。

「人が勉強して横でバトルしたらやりたくなっちゃうでしょー！」

「すまないね、どうしてもやりたいって駄々をこねるものだから。少しだけ付き合ってくれないか?」

「どうやら響が射撃機の扱いを学ぶためにバトルをしていたのが気になって勉強に身が入らなくなり乱入する事にしたらしい。」

「それはいいですけど、でも滝沢先輩ガンブラ置いてきたって言ってませんでした?」

「私のは置いてきたよ!だから木乃香から借りた!」

乱入された事により練習ステージからバトルステージに書き換えが起こりステージもコロニーから市街地になって目の前に見たことのある機体が現れる。

「部長のつて…それバンダースナッチじゃないですか!」

バンダースナッチの姿を確認したのと同時にモニターに木乃香と翼から通信が入る。

「なんか面白そうだから貸しちゃった。」

「珍しく奏がガンダムに興味を示すものだから僕も嬉しくなつてつい乗ってしまったんだ、本当にすまない。」

モニター越しに頭を下げられここまでされたら許すしかないと思はれ響は軽く溜息を吐き奏に問いかける。

「滝沢先輩、バンダースナッチの使い方分かるんですか?」

「勿論だよ!何回戦つたと思つてるの、まあ私が使いやすいストライカーパックに換装したけどね!」

そう言いながらバンダースナッチが手に持ったビームライフルで数発レオパルドの

足元に連射し砂煙を舞わせて視界を遮る。

「いきなりか！小川さんこんな事になっちゃったけど行ける？」

「私は大丈夫、です…。行きましよう。」

バンダースナッチが距離をとったと思い改めて射撃の構えを取りスコープに目線合わせようとした途端目の前から対艦刀で砂煙を切り裂いてバンダースナッチが現れる。

「近接機を相手にしてる時にスコープなんて覗いてたらすぐに落とされるよ！」

バンダースナッチが対艦刀を振り下ろしそれより少し遅れて覗き込んでいたスコープから視線を外してライフルから手を引く事でライフルごと腕を斬られずに済んだ。

「小川さん！動きながらもちゃんと当てられるのってコツとが必要？」

バックパックからアームで伸ばしたビームガトリングをバンダースナッチに向けて連射しながら沙希に尋ねる。

「えつと、ターゲットが二重の赤ロククになれば大抵は当たるので後は敵と自分の立ち位置を確認しながらライフルの発射口と敵が真正面に重なったら撃つタイミング、です。」

斬るなら楽なんだけどな、とバックパックからビームダガーを抜き投擲するとそのダガーは狙い違わずバンダースナッチの対艦刀に命中し誘爆させる。



「相変わらずダガーの命中率だけは良いよね！」

「ん、このタイミングなのか？ 試しに！」

ビームライフルをダガーを投擲するように持ちバンダースナッチが少し動きを緩めた瞬間、ライフルを振り下ろしながらトリガーを引く。

するとその一撃はダガーを投擲したような命中率でバンダースナッチの右肩に命中した。

「城戸くんのライフルに当たるなんて！」

「その発言は軽く凹みますよ、でもこの感覚ならやれる！」

再びライフルをダガー構えで持ち何発か放ち肩部3連ミサイルも一斉射するが、バンダースナッチは肩を負傷した右腕をパージしてミサイル群に投げつけそれを爆発させる。

「危なかったら、でもそろそろ終わりにしないとね！」

「望む所ですよ！ 最後は近接で行きますけど。」

バンダースナッチは左手でフラッシュエッジを、レオパルドはビームサーベルを構えバーニアを噴かしながら突撃。

お互いにそれぞれの獲物を振り下ろそうとした瞬間、ブザー音が鳴り響く。

「TIME UP!!」

「あ、練習だから時間決めておいた方が良いと思って設定してたの忘れてた。」  
木乃香がやつちやつたと小首を傾げる。

「は?」

「え?」

「何じゃ(だ)そりゃー!」

そうして当初、射撃訓練として行っていたバトルは奏とのバトルへ発展し時間切れという形で幕を閉じるのだった。

## 第19話～何事も覚悟が必要～

奏でとのバトルの次の日

珍しく女性メンバーのみが各々の違う用事で遅れるらしく男性メンバーのみが先に来ていた。

「十六夜先輩、お疲れ様です。」

「お疲れ様、昨日はすまなかったね。お詫びと言ってはなんだけど、ストライクの武装調整をこの時間がある時にさせてくれないか？」

「ストライクですか？是非お願いしたいんですけど、今から作るとなると結構時間かかりません？」

「それは大丈夫だよ、以前部長用に作ってた武装が何種類かあるから今すぐでも調整できてる。」

「ホントですか！ありがとうございます。」

響は翼に今まで取り付けていた武装を全て取り外しストライクを手渡した。

ストライクを受け取った翼は早速近接戦闘用のストライカーパックへと換装し他の手持ち武装なども変えていく様子を、見ていた響たちは他愛ない話をする。

「もうそろそろ夏休みか：。拓哉は何か用事あるのか？」

「俺は茉莉乃と遊んだりするぐらいかな。」

「：。？？拓哉お前、俺との彼女いない歴〃年齢タッグを解消する気か！」

「いつ俺はそんな不名誉なタッグを組んだ？というか茉莉乃とはまだ付き合っていないしお前この前小川さんと遊ぶって言ってなかったか？」

拓哉はそういうやと響を見るが響は目をそらしながら虚空を見つめる。

「遊びに行ければ良いなあって思ってからまだ誘えてない：。」

「この軟弱者！ヘタレだとは思ってたけどここまでだったとはな。」

「ここまでで悪かったな！覚悟が決められないんだよ。」

響が膝をつき項垂れる。

「よし、じゃあこうしよう俺がガン普拉バトルで勝ったらこの場で遊びに誘う。負けたらべつにこの場でなくてもいいだろうだ？」

「なんか複雑な心境だけこの際だ、乗ってやるよ！十六夜先輩！」

「ん？ああ終わってるよ、検討を祈る。」

翼は調整の終わったストライクを響に渡して、近くにあったソファへ腰を下ろす。

2人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning》Plavsky particle dispersion. F

iardl, colony》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ヴァリアブルストライクルージュ黄昏。行くよ！」

「安藤 拓哉、アヴァランチアズールエクシアダツシユ。ハデにぶちかませ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、サイド7だった。

ゲートから飛び出た瞬間サイド7は夜だったがステージ中央にストライクとエクシアが降り立つと、コロニーの時間調整で朝日が昇る。

「こうしてタイマンでやり合うのは久々だな。」

「今回は俺が勝たせてもらおう！」

エクシアがGNソード<ソードモード>を展開しストライクに突きつけるが、ストライクはトリアイナの腹を盾がわりにその攻撃を防ぐ。

「いきなりすぎるだろ！そっちがその気なら俺だって、ビームランス展開。」

トリアイナをビームランスモードで振り回して近くの建物ごとエクシアを切り刻もうとする。

「建物を囲にして攻撃するつもりだろうが、あれから改良したエクシアに死角はないんだよ！トランザム！」

紅い残像を残しながら切り刻まれた建物の残骸ごと迫ってくるトリアイナを躲しストライクと距離を取る。

「トランザムとなるとこつちも対抗するには、SEED！」

「SEED system standby. Remaining until the time limit of 120 seconds.」

(とうとう音声已全部英語になって全然分からないけど、120秒だけ分かったから何とかなるだろ。)

機体の周囲に蒼い粒子を纏ったストライクは、トリアイナくビームランスモードを構えこちらは紅色だが同じくオーラのような粒子を纏っているエクシアに向け突貫する。

「俺が躲さないので分かってて正面から来るとはな！」

突貫してきたストライクのトリアイナに合わせる様にエクシアは右腕に装備していた大型のシールドをぶつける。

するとトリアイナの切っ先がシールドに当たった瞬間その部分が爆発を起こす。

「なんだとてっ？」

「上手く機能したようだな、「爆発<sup>リアクトイブアーマー</sup>反応装甲」は！」

爆発により先っぽがひしゃげてしまったトリアイナを投げ捨て代わりにバックパツクから実体剣のエンプレスブレードとこちらも同じく実体剣のヴァリアントブレードを抜き再びエクシアに向けてバーニアを噴かす。

「二度使った所はもう使えないみたいだな！ならそこをもう一度攻めれば…」

「つて響は考えるだろ？だから俺はこうする。」

眼前に迫ったストライクにシールドを押し付けるよう切り離しエクシアはまだ残っていたリアクトイブアーマー目掛けGNソード<ビームモード>を連射し起爆させるとお土産と言わんばかりにGNビームダガーも投擲する。

周辺の建物を巻き込んだ爆発による瓦礫が目の前で山になっていたが拓哉はあの爆発で響のストライクが行動不能になると思いトランザムを中断し勝敗のアナウンスが鳴るのを待ったが一向に鳴る気配がない。

「何かおかしいな、爆散してるなら辺りにストライクの何処かしらのパーツが漂っていても良いのにそれが殆どない…」

直後、目の前の瓦礫の山から突然火柱が上がって瓦礫を燃やし尽くす。

「これがオーバーライドしたSEEDの力だあ！」

周囲の瓦礫が全て燃やし尽くされ中から現れたのは、背中から粒子による羽根を広げ

た蒼く燃え上がるストライクだった。

「なんでもアリか！やられる前にやってやる、トランザムからのエクスプロージョン！」  
紅い残像と化したエクシアは全身のビーム発生器からエクスプロージョンによって余ったエネルギーをビームの刃として放出し残像を残しながら蒼いストライクにGNソードを対するストライクはエンプレスブレードをぶつけ拮抗した勢いのままコロニーを突き破り宇宙へステージを変えた。

「おらあああ!!!」

そして拓哉の気合と共にエクシアのダッシュユニットを使った蹴り技をストライクに叩き込んでコロニーの外壁にめり込ませる。

「かはつつ!!今のは効いたあ..」

エンプレスブレードを杖代わりに立ち上がったストライクは機体の損傷を確認する。

(右肩及び左足ダメージ大、後1撃したら関節損傷か。それなら！)

左手のヴァリアントソードの持ち手を畳み右手のエンプレスブレードに繋ぎ合わせ1つの大型剣を作り出す。

「拓哉！これが俺の最後の1撃だ、全身全霊をかけてふるわせてもらおう！」

ストライクの背部に現れていた粒子による蒼い羽根を先ほど合体した大剣に纏わせ超大型ビームブレードを構えて拓哉のエクシアに突貫する。



「良いぜ！その覚悟受け取ったからにはこっちも全力を出しきる！」

再びトランザムエクスペーションを発動したエクシアはGNソードに突出していたビームのエネルギーを全て集めライザーソードを作り出し突貫してきたストライクの動きに合わせ振り下ろす。

「ライザアアアアソオオオド！」

「行く手を阻むは勇敢なる皇后ウウウ！」

2つの強大なエネルギーがぶつかり合い周辺に漂っていたシャトルの残骸や隕石などが衝撃波で吹き飛び質量の大きいコロニーでさえ動いた。

威力は互角かと思われたがこの鏑迫り合いにダメージを受けていたストライクの右肩が耐えきれず自壊してしまう。

「万全の状態じゃないとこの技は使えないか……」

右肩が自壊したことでブレイヴエンプレスを扱える程の腕力がなくなり、SEEDも終了しそのままライザーソードに両断され勝敗が決した。

「YOU WIN!!!」

「だあああ！負けた！」

響がその場に座り込むと脇から拓哉が現れ手を差し出す。

「お疲れさん、立てるか？」

拓哉の差し出された手を掴んだ響は立ち上がる。

「ありがとう、お陰で決心がついたよ。俺小川さんをデートに誘ってくる！」

「まだデートじゃないとは思うが、行つてこい！」

2人のやり取りを黙って見ていた翼はポツリと一言もらした。

「これが若さというものか……」

響はストライクを筐体から回収し、部屋から出ようと扉に手を掛けた瞬間目の前の扉が開き遅れていた女性メンバーが姿を表す。

そこには当然沙希もいて響は沙希の両肩をグツと掴みこう言った。

「小川さん、今度俺とデートに行きませんか？」

## 第2章くバトルで勝ち取るものく 第20話く何事も目で見て学ぶく

響の発言に至るまでの女性メンバー。

「案外近いうちにデートに誘われるかもよ?」

「からかわないでくださいっ!」

「ふふっ、冗談だつて。」

「あら?もう男子メンバーはいるみたいね。」

手前にいた沙希が扉に手を掛けそのまま開けると目の前に響が立っており突然肩を掴まれ、沙希は一瞬ビクつとしていたが響はそんなの御構い無しに言葉が続ける。

「小川さん、今度デートに行きませんか?」

「え!? あ!? はい...?」

そのはいを肯定と受け取った響はどことなくスッキリした顔をして。

「良かったあ〜!じゃあ詳しい事は後で連絡するからよろしく!」

響は拓哉の所へ行くと拓哉が良くやったと言わんばかりに響に腕をぶつけその後、翼とも話してストライクの微調整を行ない今度は翼と筐体へ向かって行く。

この間も扉の前から沙希は動かず木乃香が声を掛ける。

「沙希ちゃん？おーい。」

そこであろうやく我に帰ったのか沙希がはつと顔を上げ振り返る。

「先輩……わたし、私、ど、どうしましょう……」

「沙希ちゃん、一旦落ち着こうよ。」

「そうね、取り敢えずソファに座りましょうか。」

響と翼がテストバトルを行なっているのを見ながらソファに腰を落ち着け奏が介抱してる間に木乃香が拓哉を呼び出す。

「何か凄い進展具合じゃない？安藤くん何したの？」

「それがですね……」

先ほどの場面になるまでの話を木乃香に話し、それを聞いた木乃香は目を輝かせながら響と沙希を見つめる。

「今回のデートでもしかして行けちゃうかな？」

「どうですかね、なんせあいつがヘタレなもんで。」

そうねー、と木乃香がため息を吐きながら再び響を見る。

「翼先輩、ちよつと良いですか？」

ストライクのエンブレスブレードを翼のツールギスIIIイガリマに振り下ろした所で

翼に尋ねる。

「なんだい？何かまずい所でもあったかな？」

エンプレスブレードをビームサイズで防ぎながら聞き返す。

「いえストライクは良好なんですけど、何故か今井先輩が妙に温かい目で見て来るんです。見守られてるような感じでくすぐりたいというかなんというか。」

「あー…。それはそこまで気にしなくても良いのではないだろうか、それよりちゃんと武装を使ってくれないとデータが取れないからよろしく頼むよ。」

トールギスはストライクを蹴り飛ばすとくハイパージャマーを展開してその場から姿を消す。

「そういや積んでるんだったか、ここは宇宙じゃないからあれが使えるはず。」

エンプレスブレードをバックパックに戻してビームライフルを手に持ち地面に向けて連射し砂煙を巻き起こすと、一ヶ所だけ煙が揺らいでいるところを見つける。

「見つけた！出し惜しみはなしだ、全部持つて行け！」

脚部ミサイルからミサイルを撃てるだけ撃つて空になったコンテナを放棄。

続けて2基のフィンファンネルも射出。

「君が射撃機のような戦いが出るようになったのは嬉しいけど、まだまだだね。」

ハイパージャマーを解除したトールギスはビームサイズを振り回して衝撃波を起こ

しミサイルを全弾爆発させると次はツールギスの周囲を取り囲んでいたフィンファンネルの1つを掴みもう1つに投げつけた所をメガキャノンで木っ端微塵にする。

「まあ、データとしては良いものが取れたからこの辺りにしておこうか。」

練習バトルモードを終了しスクリーンが溶けると響が翼の元へ駆け寄る。

「翼先輩お疲れ様でした！ミサイルの使い方も勉強になりました。」

「それは良かった、それではストライクの調整を続けよう。」

再び翼にストライクを預け椅子に座ろうとした所で木乃香と拓哉に呼ばれた。

「バトルお疲れ様、それでデータのプランとかは出来てるの？」

「拓哉から聞いたんですか・・・それがもう何も考えてなくて。」

「そんな城戸くんの良いお知らせです。沙希ちゃんNT見に行きたいって言ってたわ。」

「ホントですか！ありがとうございます。」

「それでそのあとは、ぶらぶらするで良いんじゃないか？」

「拓哉、こういう時は凄く頼りになるな。」

そしてそこから時間は流れ連絡して決めた約束の土曜日を迎えた。

「ちよつと早く来たけど、こういうのは早めに行動するのが良いって誰かが言った気がする。」

響が待ち合わせの場所に来た数分後に沙希もその場に現れる。

「すみません：．． お待たせしちゃいましたか？」

「俺も今来たばかりだから大丈夫だよ。それじゃ行こうか。」

映画館に移動した響と沙希は上映してる映画一覧を見る。

「小川さん、何か見たい映画ある？」

「もし城戸さんの希望が無ければ、ナラティブが見たいです：．．」

「俺も見えたかったから大丈夫！じゃあ、チケット買ってくるね。」

響はチケット券売機に行つてチケットを2枚買いポップコーン等も買う。

「はい、チケットとポップコーンと飲み物。お茶で良かった？」

「すみませんありますがどうぞございます。あ、そろそろ入場開始ですね。」

「それじゃ行こうか。」

席につき予告が始まつて明かりが落とされると上映が始まる。

(女の人と映画に来るの初めて過ぎて心臓がめっちゃバクバクしてるんだが：．．)

そして、物語も終盤へと近づき心臓の高鳴りも落ち着いた辺りで上映が終わった。

「楽しかったね！あのナラティブA装備カッコ良かった。」

「そうですね：．． 高機動機も良かったです。」

「ナラティブA装備をストライクでも再現できるかな。」

「出来ると思いますよ、やってみます：．．？」

「やりたい！そうと決まったら！」

行きつけのガンプラバトルショップ、〈ホワイトベース〉に来た響たちはナラティブA装備の再現に必要なビルダースパーツやプラ板等を買ってレジに向かって見知った顔を見て声を掛ける。

「お邪魔してます、絢香さん！」

「お？ひさびさに来たと思つたら彼女を連れてくるとはなくお姉さん嬉しいよ。」

響が声を掛けた人物はこのガンプラバトルショップのオーナーの娘で衣笠きぬがさ 絢香あやか だった。

噂だが昔ガンプラバトルの30対1で圧勝したらしい。

「か、彼女じゃないですよ！ちよつと制作ブース借りますね。」

「今はそういう事にしておきますか、あいよあんまり汚すなよ。」

「分かってますって！行こう小川さん。」

制作ブースに移動し先程買って来たプラ板やビルダースパーツなどを机の上に並べる。

「並べたは良いけど、何から手を付ければ良いんだ？」

「最初にそのパーツの基部になる所から始めた方が全体的なイメージが掴みやすいですよ……」



「そうなんだ？よし！じゃあまずはメガ粒子砲から始めるか。」

まず初めに基部としてメテオホッパーを使いそこに粒子砲のパーツを組み込み大型ブースターの制作に移る。

「ここまでは順調に進んでるけど、プラ板の加工初めてだから詰まるのだった。」

「それならこの部分から切り出して繋げていけばやりやすいです。」

「そっか！よし、このまま大型ビーム砲までやつちやおう！」

おー、と空に向けて腕を突き出した響に合わせるように沙希も小さくだが腕を突き出す。

そこから多少アクシデントはあったものの出来上がったパーツが増えていきそれをストライクに組み込んでいった。

「出来た！ナラティブA装備改めストライクブースター装備！」

先程見てきたナラティブを参考にプラ板制作初心者も直しやすいよう何個かのパーツに分けて制作。

サイコキャプチャーは付いていないが、沙希からのアドバイスを受けGNアーチャーのコンテナを拝借しミサイルブースターを装備して機動性が幾度か向上したという設定でGPベースには登録した。

「小川さんありがとう！俺だけだ！ここまで作れなかったよ。」

「そんな事ないですよ。あ、あつちでフリーバトルブースありましたし行きませんか？」

「行く行く！でもなんかあつちは騒がしいね、ちよつと見に行こう。」

沙希の手を引きながら騒ぎのする方へ歩き出す。

方向的にバトルフィールドがある辺りで騒ぎを掻き分け渦の中を見ると絡まれているであろう女性と絡んでいた不良の姿がありその不良の一人にどこか見覚えがあつてよく見ようと前に出た途端その人物と目が合う。

「あー！お前は俺らをボコしたやつ！ちようど良い、ここでその恨み晴らしてやる！」  
「そういうアンタは松本？だかの舎弟！」

この舎弟の兄貴である松本の姿は見えなかったが、響は何がちようど良いのか分からなかったたので絡まれていた女性に声をかけた。

「えつと。悪いんですけど何があつたんですか？話にくいなら話さなくても大丈夫ですのぞ。」

「いえ、心配してくださいありがとうございます。実はこの子とガンプラバトルをしていた時にあの人達が乱入してきて俺たちと遊ばないかって台を占拠したんです。…」

そして先ほどのあの現状になるまでの経緯を聞いた上で響は覚悟を決めたような顔

をする。

「分かった。ちょっと待ってて！今あいつらから台を取り返してくるから！」

彼女達を後ろに移動してもらい改めて不良たちの方を向く。

「事情は大体分かった。だから俺がこのバトルで勝ったら大人しく退いてもらおうか！」

「おもしれえ！俺たち3人に勝てるかな？」

その発言に舎弟らしき2人も前に出てきて腕を組む。

「3対1か…。」

「いや、3対2だね店主として追い出すのは簡単だけどここはガンプラバトルシヨップだ実力を見せつけてやらないと。」

「絢香さん！」

声の方向を見ると響と同じくGPベースを持った絢香が立っており反対の手には絢香の愛機<ウイングゼロドレイク>を持っていた。

そして、GPベースを手に持ち筐体にセットしようとした所で沙希に服の袖を掴まれる。

「小川さん？危ないから下がって」

「私も入れて3対3になるので私にも手伝わせて下さい…。」

沙希の決意した目を見てその気持ちを無下にするわけにもいかず手伝ってもらおう事にした。

「分かった、けど無理はしないでね。」

沙希もGPベースを取り出す。

6人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning [Plavesky particle] dispersal. Faird3, sity》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ムラマサストライク黄昏+ SB装備。行くよ！」

「小川 沙希、レオパルドデュルガー。い、行きます！」

「衣笠 絢香、ガンダムウイングゼロドレイク。ワイルドハントの始まりだ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

## 第21話～ストライクは伊達じゃない～

「さあて、派手に行こうか！」

絢香のウイングゼロドレイクが可変形態に変形すると脚部バーニアを噴かし速度を上げて更に加速。

「絢香さんが速い!??小川さん、Sブースターに捕まって！」

「は、はい！」

沙希のレオパルドデュルガーがストライクSブースターのバックパックに捕まるとメインバーニアで加速を開始し更にコンテナブースターも使い尚も移動中のドレイクの横に追いつく。

「そのブースターは見掛け倒しじゃ無かったみたいだね、敵さんが見えてきた。」

「え?豆粒ぐらいにしか見えてないのに…。あー俺がセンサーを近接仕様に調整してたからか。小川さん、見える?」

「はい、見えます…。確認できるのが2機で1機はEZ8でもう1機はDXみたいですよ。」

送りますね、と沙希から送られてきた映像を響も確認する。

「2機だけ？もう1機は何処に隠れているんだ？」

「そんな事後で考えな！まずは目先の2機を仕留める、私と坊やが突っ込むから彼女さんは支援射撃！」

「いやまあ、今はそんな事言ってる場合じゃないし」

「了解（です…）」

絢香のウイングゼロドレイクが人型に戻り手持ちのシールドにマウントしたままのバスターライフルで撃ち込みビームは確実にEZ8を仕留められたはずだった。

だが、その一撃はEZ8に当たる直前で掻き消える。

「粒子攪乱幕か…あのEZ8の仕業かね。」

「けど、接近さえ出来れば！」

ストライクはバックパックから実体剣のエンプレスブレードを抜きそのまま加速しEZ8とDXの砲撃をすり抜けDXに振り下ろす。

「こんだけ近ければ撃てないだろう！」

「相変わらずの脳筋野郎が!!」

舎弟、石崎 宗吾の発言とともに振り下ろしていたエンプレスブレードごとストライクが吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた先でレオパルドに受け止めてもらいバーニア系統の損傷を軽減でき

た響だったが目の前に通常のガンプラバトルであれば存在しない物が現れる。

「Gファルコン!? バトル中に支援類の投入はルール違反だろ!」

「そんなルール知った事か! サテライトキャノンでくたばりなあ!」

D Xがチャージを始めそれを阻止しようと近づいたりビームなどで狙撃するが、近づこうにもE Z 8のミサイルなどで近づけずビームは粒子攪乱幕によって減退してしまいD Xに当たっても大したダメージにはなっていないかった。

「見せてやろうじゃないか、ウイングゼロドレイクの力を。」

D Xが粒子攪乱幕を散らしながらサテライトキャノンを放つのと時を同じくしてウイングゼロが背部ラックから予備のバスターライフルを持ち既に持っているバスターライフルと合わせて2丁持って構えると最大火力で放つ。

最初の内は互角かと思われていたが、徐々にD Xの方が押され始めマイクロウェーブの送電が終わりサテライトキャノンが終了してしまふ。

D Xがバスターライフルの直撃を避ける為にGファルコンを前面に押し出すが、Gファルコンがバスターライフルの直撃に耐えきれず爆発を起す。

「クソが! 何なんだよアンタはあ!」

Gファルコンが撃墜させると今度はGビットを5機ほど呼び出して絢香のウイングゼロに向かわせるが、ウイングゼロは向かってきたGビットの1機をビームサーベルで

貫く。

「店主（仮）さ。2人にこいつらの相手は任せるよ、私は隠れてる支援機をやる。」

「了解！小川さん支援よろしく！」

「わ、分かりました！」

ウイングゼロが貫いたGビットをぶん投げバルカンで爆発させて可変形態を取ると脚部バーニアを噴かしてこの場から離れていった。

「拓哉の真似するわけじゃないけど、派手にぶちまけようか！」

ストライクがSブラスターを噴かしGビットをビームサーベルで斬り伏せ、残った3機のGビットがビームサーベルをストライクに振りかざそうとするがそれに気付いたストライクがビームダガーを投擲し一機を落とす。

「続けて行かせてもらおう！小川さんは引き続き足止めよろしく！」

「わ、分かりました！」

少し距離の空いてしまったGビットに向けて腰部メガ粒子砲を撃ち込み下から上へ流して1機落として残った最後の1機に、ビームダガーを投擲しGビットを撃墜しその隙にレオパルドがストライクに気を取られていたE Z 8の背後に回り込む。

「これで決めます！」

「そ、宗吾さん！」



EZ8がビームライフルの照準を定める前に、レオパルドはその右手に持ったビームサーベルで右肩から袈裟斬りにした。

姿の见えない1機を探し始めた絢香だったが周辺にそれらしい影は見られず、どうしたものかと思いいコンソールを弄りSPのアイコンを選択する。

「こんな時はこれの使いどきかね。あまり使いたくは無かったんだけど..」

ウイングゼロのゼロシステムが発動し敵予測が始まるとウイングゼロが絢香のコントロール関係なしに動き予測で導き出された方角へバスターライフルでビームを撃ち込み行く手にビル群が迫ろうとビームの出力を強制的にあげ破壊する。

撃ち込んだ方角のビル群がコンクリート片になった辺りで背中にバズーカを背負ったガードフレームを発見した。

「このシステムを使うと大抵武装が1つは使えなくなるから嫌だったんだけどねえ。」

砲身が焼き焦げたバスターライフルを放り投げ代わりにビームサーベルを手に取りながら一歩ずつ着々とガードフレームに迫る。

「く、来るなあ??」

「させないよ!」

ガードフレームがバズーカを構え砲撃しようとするがそれよりも早くウイングゼロのビームサーベルがバズーカの砲身を貫き爆発を起こしガードフレームの右手が誘爆。

持っていたビームサーベルをガードフレームの頭部に突き刺し地面に打ち付けると今度はガードフレームのビームサーベルを奪い左腕の関節にねじ込む。

そして、ウイングゼロのシールドを右腕の関節に突き刺し完全に身動きを取れなくなる。

「捕まえたよ、もうアンタは逃げられない!」

ウイングゼロがガードフレームに跨るとガードフレームの頭部を殴り始め何発か殴った辺りで右手が碎けるが絢香は気にせず殴り続け、最終的に頭部を無理やり引きちぎった所でガードフレームから降参表示が提示された。

「やっ而降参した… 手こずらせてくれたじゃないか。」

ウイングゼロは地面に突き刺していたシールドを回収し可変形態を取るとその場を後にする。

「あの野郎やられやがった!」

D Xが再びサテライトキャノンを放とうとするが展開していたリフレクターの一部をレオパルドに撃ち抜かれる。

「城戸さん!」

「ありがと!これで決める!」

エンプレスブレードとヴァリアントブレードを合わせ大型実体剣<天羽々斬>にす

るとバーニアを噴かしてDXに振り下ろしDXの左腕を斬り落とす。

「クソが！こんな奴に俺らが負けるはず！」

「これで決める、自分のした事を悔い改めろ！」

DXがビームサーベルをストライクの腰部メガ粒子砲に突きつけ爆発するが、それでも響の勢いは止まらずDXの右脇を捉える。

「チエストオオオオオオ！！！」

ストライクが右脇から天羽々斬で横薙ぎにしDXが上半身と下半身に分かれ爆発を起す。

「YOU WIN!!!」

「お、終わったー！」

「お疲れ様、です…」

「2人とも良い動きだったよ。」

絢香が2人の頭をワシワシするとこの騒ぎの発端となっている3人の方へ行き何か話しているのを響は見届けると絡まれていた女性に声をかける。

「もう大丈夫ですよ、これで思う存分にガンプラバトルできますよ！」

「ありがとうございます。あの、もし良かったら連絡先を思いましたけど彼女さんにご迷惑でしたね。」

「か、彼女：：！！？」

顔が赤くなつた沙希をひとまず近くの椅子に座らせ、先ほどの女性と別れる。

「なんか懐かしいような気がするなあ。そういや、絢香さんの方はどうなつたんだろ。」

沙希の座っている椅子のとなりに腰掛け絢香の方を見ると話が終わつたらしくこちらに歩いて来る。

「絢香さん、あいつらはどうなつたんですか？」

「ああ、それはね：：」

そうして、話をまとめると今回は多目に見るが次やったら出禁というガン普拉バトルは好きという彼らに情状酌量の余地を残した絢香の優しさでこの騒動は幕を閉じたのだつた。

## 第22話～もう1機のストライク～

楽しそうにショップへ入る響と沙希の2人を見つめる影が4つあり

その内の1つ、石川 恵美が唐突に疑問を問いかける。

「木乃香に呼ばれて来たただけ…これはどういう状況なのか教えてもらえる？」

木乃香の後ろに付いてきていた恵美が状況の説明を求めている。

「えっと、先日城戸さんと沙希ちゃんがデートする事になってそれが今日だったので  
す。」

「それは分かったんだけど、なんで私は呼ばれたのかな。」

恵美がジトツとした目で木乃香を見るが木乃香は気にせずあっけらかんと言葉を続  
ける。

「だって昨日暇？って聞いたら暇って言ってたじゃない。」

「こんな事になるなら忙しいって言っておけばよかった…。」

後悔先に立たずとはこの事かと、恵美は頭を抱えながら他のメンツを見て再び口を開  
く。

「十六夜さんはこういうのには来ないと思っていたただけど？」

「ホントは来ないつもりだったんだけど、奏がベランダから侵入してきて出ざるを得なかったんだ。」

「どういう状況なんだ?？」

改めて状況説明を求められ今度は翼が口を開いた。

「奏と僕の家が隣同士なのは知ってると思うけど、今朝奏が母親に窓を開けるようにお願いしてたらしく、それに気づかず布団に包まってた僕をベランダからジャンプして侵入してきた奏に布団を奪われてしまっって強制連行と言うわけさ。」

「翼くんのお母さんにも頼まれたんだもの、休みの日にこもってる事が多いから何処か連れ出してあげてって!」

「これを異常と思う私が可笑しいのかむしろこれが普通なのかどっちなんだ?」

虚空を見つめ始めた恵美を放置して前方の監視に戻った木乃香だったが、後ろにいた奏が口を開く。

「ねえ、私尾行するの疲れてきちゃったんだけど」

「え?でもあー、んー:」

(正直のところ最後まで見届けたいけど、結末は沙希ちゃんに聞けばいいかな?)

「それなら尾行はここまですてガンプラバトルしましょうか!ちようど4人いるし。」

木乃香の提案に乗った3人は響と沙希の入っていったホワイトベースを尻目にそこ

から少し歩いた所にあるゲームセンターへ向かい、ガンプラバトルブースへ向かう直前で店員が木乃香に声を掛けた。

「お？今井ちゃん、今日は大会無いけど…。」

「そんな人を大会クラッシュャーみたいに言わないで下さいって、バトルブース空いてます？。」

「今なら丁度空いてるよ！使える設定がBとCまでだからよろしくね！」

ありがとう、と木乃香達はバトルブースへ向かうと筐体を真ん中に挟みGPベースをセツトする。

《Beginning [Plavsky particle] dispersal. Faird2, colony》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「今井 木乃香、ストライクガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましょうか！」  
 「滝沢 奏、ケンプファー。狩りの時間だよ！」

「十六夜 翼、トールギスIIIIイガリマ。さあ、行こうか。」

「石川 恵美、ガンダムアリオス。目標に飛翔する！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

「それにしてもなんで私がこんな事に……」

可変形態で出撃したアリオスが牽引用のアンカーにバンダースナッチを掴まらせ移動を開始しながら愚痴を漏らした。

「まあまあ、いいじゃない。こうしてバトル出来るんだから。」

「それはまあそうなんだけど……!?」

尚も移動中の木乃香と恵美だったが、直後前方から高出力ビームが迫っておりアリオスがギリギリの所で旋回してバンダースナッチを近くのビルに着地させる。

「あちゃー外しちゃったか。」

「まあそう簡単に落とせるとは思ってたから仕方ないよ。」

木乃香達が射撃位置を特定しその方向を見るとメガライダーに乗ったケンプファーとトールギスが姿を現した。

「待たせてしまったかな？」

「いいえ、私達も今来たところだから。さあ私達のバト<sup>デ</sup>ルトを始めましょうか？」

バンダースナッチが対艦刀を構え手前に停められていたメガライダーを蹴り飛ばしながらケンプファーに突撃した勢いで対艦刀を振り下ろし対するケンプファーも武装コンテナから重斬刀を取り出し防ぐ。



「相変わらず木乃香ちゃんはせっかちなんだから！」

「お褒めに預かり光栄ですよっと！」

対艦刀を押し付けたまま足裏アーマーシユナイダーを展開しケンプファーの腰部装甲を削るがこの展開を読んでいたのかケンプファーも左手に持っていたシヨットガンで狙撃しバンダースナッチを吹き飛ばす。

「さてと、あつちは始めてるみたいだからこちらも始めようか？」

「そうだね。」

可変形態に変形したアリオスがツールギス目掛けて突撃するのに合わせてハイメガキャノンを撃ち込むがビームシールドを展開していたので防がれてしまう。

「今度はこっちの番！」

アリオスのビームマシンガンが次々とビル群をコンクリート片に変えながらツールギスに接近する。

「やれやれ、近接戦は苦手なんだけどね。」

ツールギスがハイメガキャノンでアリオスの足元に撃ち込むが直撃する手前で可変形態に変形して躲かれそれを見越していた翼は気にせず続けてビームサーベルをダガーに調整し投擲する。

「前にあの子に食らったからね！同じ手は食わないよ、トランザム！」

一瞬だけ紅い残像と化したアリオスがビームダガーを叩き落とし、トールギスの横に回るとビームサーベルをハイメガキャノンに突き刺す。

「ワンセコンドトランザムとはやるね。」

爆発寸前のハイメガキャノンをパージして、代わりにヒートロッドをアリオスの右足に巻きつけ転ばそうとするがアリオスは躊躇いなく自身の右足をビームマシンガンで撃ち潰しヒートロッドから解放される。

「やれやれそう簡単にはいかないか。」

「今日こそは私が勝たせてもらう！」

再びヒートロッドを射出したトールギスだったがアリオスはビームローターを突き出し、一区切りごとに切り刻まれヒートロッドの付いているシールドを投げ捨てる。

「ハイメガキャノンとヒートロッドが…。」

「十六夜さんのメイン武装は破壊した、ここからは私のステージだ！」

両手でビームサイズを構えたトールギスがアリオスに突撃しアリオスもビームサーベルで応戦しビームサイズとビームサーベルによる罅迫り合いを続けたが、先に根をあげたのはトールギスだった。

「やっぱり近接戦は僕に向かないか。」

「続けて！」

アリオスが残った左脚を蹴り上げビームサイズがトールギスの手元から弾かれ地面に突き刺さる。

「どうやらこれは…。」

「もらったあ！」

逆手に持ったビームサーベルをトールギスの胸部に突き刺すとトールギスのカメラアイから輝きが失われその動きを止めた。

「奏がファンネル使うなんて聞いてない！」

吹き飛ばされた先でケンプファアの武装コンテナから射出された複数のファンネルを避けながら木乃香は嘆いていた。

「そーれ！どんどんいこー！」

追加でファンネルを射出しケンプファアもショットガンで狙撃を行う。

「完全に油断してたわ、でも何？この違和感は…。」

飛んで来たファンネルの一基を対艦刀で斬り伏せ大型ビーム砲くアスタロトを起動しチャージ無しで撃てる限界火力でアスタロトを放ち、そのビームの渦に複数のファンネルが飲みこまれケンプファアも避けようとするがショットガンが巻き込まれて爆発してしまう。

「今のは危なかったね！危うく落ちる所だったよ」

「落ちてくれれば良かったんだ、ど！？」

直後、機体がダメージを負ったアラームが鳴り響き損傷を確認するとケンプファーのファンネルが狙い変わらずアスタロトに突き刺さっていた。

「的確にアスタロトだけをやられた！？奏にそこまでの的中率は無かったはずなのに……まさか！」

木乃香は試しにと足裏アーマーシユナイダーを射出するとケンプファー自身は避けようとしたがファンネルがアーマーシユナイダーに突撃し爆発を起こす。

「ねえ奏？、このファンネルって奏がターゲットを指定すると本体の意思と関係なく破壊するまで追い続けるようにシステムが組まれてるんでしょ？違う？」

「あ、気付いちやった。そうだよ！オートでターゲットを仕留めるまで動いてくれるように翼くんが作ってくれたくオートファンネル＞なんだけど、今の所質量の小さめな奴しか選択できないの。」

そういう事かと、木乃香は納得してバンダースナッチが対艦刀を構え再びファンネルが飛んでくるのに備えるが一向に来る気配がなかったので、アスタロトの潰れたストライカーパックをパージし両手で対艦刀を構えケンプファーに突撃する。

「もしかしてファンネルを使い切ったのかしら！」

「正解だよ！でもメインはこっちだから！」

ケンプフアーも武装コンテナをパージしコンテナから鉄刀を取り出し突撃してきたバンダースナッチにはパージした武装コンテナをぶつけ動きを止めると鉄刀をバンダースナッチの右腕の根元にねじ込む。

「右腕ぐらいあげようじゃない！」

左腕に持ち替えた対艦刀で自ら右腕を斬り落としよけたケンプフアーの背後に回り込みビームサーベルで袈裟斬りに斬り落としケンプフアーが2つに分かれ爆散する。

バトルが終わり木乃香達はシヨップの飲食コーナーに移動して木乃香はカフェオレ、奏はクリームソーダ、翼はMAXコーヒー、恵美はブラックとそれぞれの飲み物を飲みながら今日を振り返る。

「久々に燃え上がったわ〜」

「たまにはこんなのも悪くはないかな。」

「またやろうね！」

「次は普通の時に呼んで。」

「分かったわ、それじゃ今日はこの辺で解散しましょうか！」

3人と駅で別れた木乃香は自分の家に帰って舞姫のお帰りのハグを華麗に躲すと寝る前の日課をこなし布団に入る直前で大事な事を思い出す。

「沙希ちゃんにどうなったか聞くの忘れてたわ：。」

明日学校で聞けばいいかと改めて布団に潜り瞳を閉じると睡魔が来てその睡魔に逆らう事もなく眠りに落ちていった。

## 第23話～燃える剣と煌めきの銃口～

響と沙希のデートから数日たったある日の事

「所で来週から試験期間だけど、城戸くん達はちゃんと勉強してるの?」

「やって、ます…」

「まあボチボチ。」

「ややや、やってまふよ。」

「若干1名、狼狽えすぎて嘔みまくってるけど…とりあえず試験期間中は部活動が禁止だからこの部もお休みね!」

「期間中は僕がメンテナンスをしたい関係もあるから預からせてもらうよ。」

響たちは自身の愛機を翼に預けそこでその日の部活動は終わりになった。

下校途中、響と拓哉はぶらり街中を歩いているとゲーセンを見つける。

「なあ、響。ちよつとゲーセン寄っていかないか?」

「良いけど、勉強しなくて良いのか。」

「そんなもん後でやれば良いだろ!」

ゲーセンに立ち寄った響たちは真つ先にガンプラバトルブースへ足を運ぶ。

「ちようど空いてるし、対戦待ちの人いるから俺声掛けてくる！」

「俺まだビルドプロミネンス調整中なんだけど。」

「俺もV2調整中だから、大丈夫。すみません、俺たちとバトルしませんかー！」

行動の早い拓哉を見習いたいと思う響と早速対戦相手を連れてきた拓哉を合わせ、4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning Plavесky particle dispersal. Fairly, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ビルドプロミネンスガンダム。推していくよ！」

「安藤 拓哉、V2ガンダムアサルトバスター。派手にブチまける！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

スタート位置から中央付近まで進んだ辺りで同じく前方から2機現れる。

「あれはシュバルツリッターとセラヴィー？セラヴィーの方は盾デカイな。」

目の前に現れた紫と金でカラーリングされた槍持ちのシュバルツリッターと緑と黒でカラーリングされた盾持ちのセラヴィーを交互に見た拓哉の横で響は我慢できない



と言わんばかりに前に躍り出た。

「一番槍行かせてもらおう！」

意気揚々とビルドプロミネンスがトリアイナを構えスラスターを噴かしながら突撃する。

その全体重を乗せた攻撃は並のガンプラであれば一撃で貫けていたのだが、目の前のガンプラを貫くことは出来なかった。

「この盾、獅電のやつにプラ板を重ねてあるのか！」

もう一撃とトリアイナを振り下ろそうとしたが横からシユバルツリッターの槍くナイトランス>が突き出されそちらにトリアイナを斬り合わせる。

「これがホントの横槍ってか。拓哉スイッチ！」

「任せとけ！打ち上げ花火！」

響のビルドプロミネンスがシユバルツリッターを蹴り飛ばしたのを見届けるとV2背部のメガビームキャノンが敵機の方を向き1発のビーム弾がある程度いった所で弾け辺り一面にビームの雨が降り注ぐ。

「これならセラヴィーは無理でもシユバルツはつてない!!？」

「おいおい、拓哉なんだって…。」

V2の足元にしゃがみ込んで待機していたビルドプロミネンスが拓哉の驚いていた

方向に向くとシユバルツリッターの上空にシールドビットが陣形を組んでビームを防いでいた。

「セラヴィーの後ろのあれは放熱板じゃなくてシルビだったのかよ！」

呆氣に取られていた響と拓哉は思わず機体の動きを止めてしまい、この動きを止めたのを好機と捉えたのかシユバルツリッターがシールドビットを携えながらナイトランズを真正面で構え突撃してくる。

「うわった！間に合うか!?!？」

ナイトランズの突き出しに合わせトリアイナを突き出すが、踏み込みが足りなかったのか弾かれて手元から飛んでスペースデブリに突き刺さった。

「まだ武装を一つ失っただけだ！」

背部ラックから分割式実体剣くアミノミハシラを分割して両側で持ちシユバルツリッターの周囲に浮遊していたシールドビットを数基斬り伏せ、近くのMSの残骸を蹴り飛ばしながらセラヴィーに接近する。

「見た所レールガンしか射撃武装を持ってないみたいだから近づけば！」

一定の間隔で撃たれるレールガンの砲撃をMSの残骸を盾にししながら近づいたビルドプロミネンスがアミノミハシラを振り下ろすが直後黒い炎のようなものを纏ったシユバルツリッターに止められて蹴り飛ばされてしまう。

「響悪い！抑えきれなかった。」

「いや、仕留められなかった俺のせいだ！それよりもこれはバーニングバーストか……」  
蹴り飛ばされたビルドプロミネンスを庇う形でV2がビームスマートガンを連射するが、シュバルツリッターのナイトランスに突かれた瞬間全て掻き消える。

「あの槍は邪魔だな、俺のV2だと相性悪いという事は？」

「あーはいはい、接近戦なら俺の方が相性いいしな。ほんじゃ作戦開始！」

今もなお周囲を周回していたシールドビットを足場にビルドプロミネンスがブースターを噴かして加速、再びアメノミハシラをシュバルツリッターに振り下ろしそれを防がせると先ほどのお返しで蹴り返す。

「行くぞビルドプロミネンス！バーニングプロミネンス！」

「*Burning Prominence system standby*」

プロミネンスの一部装甲が外れ中から元のトライバーニングと同じ炎のような粒子を煌めかせ周囲の空間を揺らがせながらアメノミハシラを一本の大型実体剣に戻して構え突撃する。

態勢を立て直した黒い炎を纏ったシュバルツリッターもナイトランスを構え直し同じく突撃し剣と槍がぶつかった瞬間、お互いの熱気もぶつかり合い周囲のスペースデブリが吹き飛んでいく。

「今のこの機体ならストライクと同じような事が出来るはず！」

発動中のバーニングプロミネンスのSPスロットから更に以前ストライクが使用した炎を剣に纏わせた技を使えるように登録していた派生スロットを選択、装甲のハズれた箇所から出ていた炎が勢いを増しアメノミハシラに収束すると紅く燃え上がった超大型ビームブレードへと姿を変える。

「そういや、さつきからシールドビットが守る様子を見せないけどビームから守るように設定されてたのか？」

先ほどの衝突から浮遊したままのシールドビットと少し距離を置いたシュバルツリッターが腕部ビームサーベル発生器からビームを撃ち出すが超大型ビームブレードとなったアメノミハシラの刀身に触れた途端、掻き消えてしまう。

「極・限・全・力！隕石ジャンプ斬り！」

アメノミハシラを両手で構え戦艦の残骸や小惑星の間を器用に蹴りながらシュバルツリッターに肉薄するとちやうどシュバルツリッター側のバーニングバーストが終わったらしくバーニングプロミネンスをギリギリの所で抑えていた炎が消えてしまい、巻き込まれたシュバルツリッターのナイトランスの塗装がどんどんハゲていく。

「燃やし尽くせ、ビルドプロミネンス！」

なんとか伏せようと腕部ビームサーベルを展開したシュバルツリッターだったが、出

力全開のアメノミハシラを防げるはずもなくビームサーベルごとシユバルツリッターを跡形もなく燃やし尽くした。

一方その頃拓哉はメガビームランチャーを出力全開でセラヴィーに向けて撃ち込んだV2だったが、戦艦の残骸に足を食い込ませて盾を構えたセラヴィーに防がれていた。

「響の槍で貫けなくても砲撃なら行けるかと思っただが…」

どうしたものかと、続けて頭部・右肩・脚部目掛けてビームスマートガンを連射して様子を見るがどの部位も盾に重ねてGNフィールドを展開され一向に当たる気配がない。

「GNフィールドもありかよ!?俺もエクシアで来れば良かったけど無い物ねだりだな。」

砲撃を諦めビームスマートガンを投げ捨てると代わりにビームサーベルを抜刀、光の翼を展開しながら今もなおGNフィールドを貼り続けているセラヴィーに振り下ろすがGNフィールドに阻まれセラヴィー自体には刺さらなかったがレールガンの砲口だけはGNフィールドが貼られておらず少しだけ斬り落とす。

「粒子消費を抑える為に身体ギリギリに纏わせてたのか！通りで長く続くと思っただぜ…」

セラヴィーが砲口を斬り落とされたレールガンを爆発する前にパージして左手で構えていた盾も捨て先ほどのV2と同じ様にビームサーベルを抜くといきなり機体の色が紅くなり目の前から姿を消した。

「トランザムか！けど、俺だって普段トランザムを使ってるんだ見切ってみせる。」

右から左からビームサーベルでの攻撃によってV2はビームランチャー・メガビームシールドを使用不能になりスラストターバーニアも損傷が酷くまともに動けない状態になるが拓哉は落ち着いてセラヴィーに意識を集中する。

（最初の攻撃は右からその次は左、そしてその次は後ろから……という事は！）

「俺の予測が正しければ、右！」

拓哉の推測通りトランザム中のセラヴィーが右側からビームサーベルを振り下ろしてきたのに合わせV2の右手を持ったビームサーベルを振り上げビームサーベルを弾く。

「よっしや！このまま追撃させてもらおうか響！」

「あーいよー！」

セラヴィーのビームサーベルを弾きV2の右スラストターが温度上昇により煙を上げた瞬間、シュバルツリッターを撃墜した際セラヴィーの元へ戻ろうとしていたシールドビットに乗ったバーニングプロミネンスの終了したビルドプロミネンスが姿を現しア

メノミハシラでセラヴィーの右腕を斬り落とす。

「やっぱりエクシアで来たかった？」

「それさつき思ったよ。それよりその腰に付けたライフルくれ今のV2武装がサーベルしかないんだ。」

ビルドプロミネンスからライフルを受け取ったV2が右腕を斬り落とされた反動でトランザムが終了したセラヴィーに狙いを定める。

「損傷確認、軌道修正、射撃…今！」

V2が引き金を引き発のビームが撃ち込まれると狙い変わらず、セラヴィーの胸部を正確に撃ち抜き爆散していった。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた人達と挨拶を交わして響たちはゲームセンターを後にする。

「いやー盛り上がった！」

「楽しかったな、でも明日から勉強期間だけど数学と英語は試験までに間に合うのか？」

その瞬間、響の満足気な顔が凍りつき額から冷や汗が滲み出る。

「忘れてた…拓哉、数学と英語。」

「人に教えられる程、理解してないぞ。それに近くにいるじゃないかちようど数学と英

語が得意な人が。」

「あー！ちよつと用事思い出したからここで解散という事で！」

「あいよ、じゃあまた明日な。」

響がある人物がいるであろう場所へ走り出したのを拓哉は見届けると駅へ歩き出していった。



## 第24話～悪意なき灯火～

拓哉と別れ駅を通り越した響はおもむろにスマホを取り出しメッセージを送るとちようどスマホを見ていたのかすぐ返信が返ってきた。

「小川さんに頼みがあるんだけど…。」

「急にどうしたんデデスか？」

急いで打ったのだろうか、後半変換ミスしていたが取り敢えず話を続けた。

「試験に出てくる数学と英語を教えて欲しいんだ！」

既読がついてから少し時間を置き続けて文章が打ち込まれる。

「私で良かったら、手伝わせて頂きます。今図書室にいるんですけど、何処か別の所でやりますか？」

「大丈夫！俺戻るから！」

「分かりました。お待ちします。」

来た道を戻りながら響はガッツポーズを取ったが、その様子を同じ高校の生徒に目撃され目を背け高校に走って図書室へ向かうと沙希と合流し席につきノートを広げ早速勉強を始めた。

「これはどうしたらいいの？」

「この式にはこの公式を当てはめるとやりやすいです…。」

「なるほど… すっごい分かりやすい！」

沙希から教えもらった数式を当てはめノートに書かれた式を計算していき解答を埋めていく。

数分後、一通り終わったノートを閉じ響は息を落ち着ける。

「やっと終わったー！これで数学は何とかなりそうだよ。」

「それは良かったです、じゃあ引き続き英語をしましょうか…。」

数学類を片付け代わりに英語類を広げるが英語に関しては割と覚えていたので出て来やすい単語と文章の繋げ方を教えてもらうのみに収まった。

「小川さんありがとう！この礼は近いうちに必ず！」

「ふふ、待ってますね…。」

そうして迎えた試験当日

1日目、2日目と何事もなく試験期間が過ぎ等々最終日となり、最終日の科目は響の苦手な数学・英語の2科目だった。

「よお響、苦手科目のオンパレードだがちゃんと教えてもらって来たか？」

「当たり前だろ。この日の為に小川さんに勉強を教えてもらったんだ、赤点なんてとつ

てたまるかっつてんだ！」

「自信满满だな、小川さんに感謝しながら頑張ってくれ。健闘を祈るよ。」

そこでチャイムが鳴ったので、拓哉と響は席につき1限目の数学が始まった。

最初の内は自信に満ち溢れている顔をしていた響だったが、段々と顔が曇っていく。(赤と青どちらかで求めろって問題、小川さんに教えてもらった数式で解けるはずなのに……)

頭を抱えている間も刻一刻と時間が過ぎ、残り時間が少なくなり響はふと決断する。

(もう、連想でどちらにするか決めるか。数学と言えば小川さん、小川さんと言えばタイツ、タイツと言えば……赤だ！)

先日、ガンブラを作っていた際に見てしまった時の事を思い出してしまい後で沙希に謝ろうと心に決め赤にチェックを付けたところでチャイムがなった。

テストの回収が終わり休憩時間を迎えると拓哉の席へと向かう。

「俺、後で小川さんに謝ってくる……」

「何があった？まあ、大方予想はつくが。」

そして、2限目の英語が始まりこつちの方は沙希の教えてくれた単語が殆ど出てきたので特に難しいところは無かった。

テストが回収され先生が去ると代わりに拓哉が響の席にやってくる。

「お疲れさん、どうだった。」

「バツチリ！拓哉この後予定は？」

「悪い、茉莉乃と遊ぶ予定がある。そんな事よりこの前の小川さんとのデートは散々だったって聞いたが？」

「う、その償いもできてなかった…。俺も用事できたからまた今度。」

拓哉と別れ廊下へ出ると隣のクラスからも数名出てきておりその中に沙希もいたので声を掛ける。

「小川さーん！さつきはごめん！」

「あ、えつと…。大丈夫ですよ…。？」

直後、スマホが鳴り画面を見るとガンプラバトル部のグループメッセージで翼からだった。

「君たちの機体のメンテナンスが終わったので取りに来て欲しい。」

「取り敢えずこの話の続きはまた後でするから行こう！」

「は、はい…。」

先ほど連絡されていた通り、部室へ向かうと既に翼がソファに腰掛けておりその前のテーブルには響たちの愛機が置かれていた。

「お、来たね。拓哉くんは1番に取りに来てもう行ったけど2人の機体の調整も終わっ

てるから持つていっていいよ。」

「ありがとうございます！（…）」

響たちはポーチに愛機をしまい部室を後にする。

「小川さんこの後時間ある？」

「大丈夫…です。」

「じゃあ、デートに行こう！」

沙希の手を引きながら部室を後にすると駅近くのショッピングモールへ向かう。

「このクレープ美味しいんだって！小川さん何食べたい？」

「えっと…イチゴが食べたいです。」

「分かった！買ってくるから座ってて！」

クレープ屋へ駆け出した響はクレープを2つ持つて帰ってきてその内1つを沙希に渡し自分のやつにかぶりつく。

「評判通り美味しいね！」

「美味しいです…でも急にどうしたんですか？」

「この前のデートは散々だったから、どうしても一緒に遊びたくてさ。」

「城戸さん、あの…！」

沙希が何かを言いかけた所で後方から声を掛けられる。

「あれ？もしかしていやもしかしなくても響くと沙希ちゃんじゃん！」  
 「あ、ホントだ。久しぶり〜」

後ろを振り向くとそこに居たのは、新人戦で戦った洛陽高校の丸岡 彩と白鷺 花音  
 だった。

（えつと…しまった。白鷺さんの方は分かるんだけど、もう片方は何とか彩だったよ  
 な… ええいままよ！）

「そうだね。久しぶり白鷺さん、彩さん。」

「お久しぶりです。丸岡さん、白鷺さん。」

直後、隣から殺気のようなものを感じ振り向くが沙希は笑顔だったので響は胸を撫で下  
 ろした。（目は笑っていないが…）

「ここで会ったのも何かの縁だし、ガンプラバトルしていかない？」

「やろう、ガンプラバトル！小川さんも、ね？」

「分かりました、ですが城戸さんには後でお話があります…」

「はい…」

「決まりだね！じゃあいこつか。」

4人は筐体を真ん中に挟むとGPベースをセットする。

《Beginning》Plavsky particle dispersal. F

i a r d 4 , s i t y 》

《P l e a s e s e t y o u r G U N P L A 》

音声に従ってガンプラを置く

《B A T T L E S T A R T 》

「城戸 響、ムラマサストライク。推して行くよ！」

「小川 沙希、Gーアルケインフルブラスタ。い、行きます！」

「丸岡 彩、フルアーマー零丸改。行くよ♪」

「白鷺 花音、ファントムオリジン。出る！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

不思議な巡り合わせをしたバトルの火蓋が切つて落とされた。

## 第25話く ロックオン・ストラトスく

ステージ中央まで移動した響のストライクと沙希のアルケインの目の前に同じく移動していた彩の零丸改と花音のフロントムが姿を現わずと最初に彩が口を開く。

「この前の借りを返しに来たよ！」

「いや、今回も俺たちが勝たせてもらう。行こう小川さん！」

「分かりました…！」

「挨拶はここまででつて事ね。」

エンプレスブレードを抜いたストライクがフロントムに振りおろすがフロントムは可変形態をとつて躲す。

躲された所をアルケインが撃ち抜こうとするが今度は零丸改のシールドで防がれる。

「可変形態も再現してるのかよ！」

「ふふ！ オリジナルのギミックもあるの！」

今度はフロントムが人型に戻り機首になっていたピーコックローターを構え連射モードで撃ち込みながら迫ってくるがストライクはブリアントブレードも抜き天羽々斬に戻しビームを斬り裂いていく。



「前よりも手強くなったね！」

「お褒めに預かり光荣！」

斬り裂きながら進もうとするがフアントムがその勢いを止めることはなくなおも進んでくるので、響は斬り裂きながらの前進を諦め代わりにビームダガーを投擲する。

「その戦い方エクシアみたいだね。」

「そりやそこからアイデアを貰ったからね！あくまで牽制だけだ。」

ビームダガーをフアントムが払いのけるが払いのけ前を向くがストライクは居なかった。

「え、ストライクは何処に!?？」

「もらった！」

フアントムの背後を取ったストライクがもう一本のビームサーベルを振りかざすがフアントムに触れた瞬間歪んでしまう。

「背後のIフィールドも健在か！」

「ふっふっふっ舐めてもらっちゃ困るよ。」

ビームサーベルのビームを歪ませたフアントムのピーコックローターの銃口が光り始める。

「その背中のドラグーンは使わないの？」

「今はまだ使いません…！」

零丸改のビーム手裏剣をステップを踏みながら躲してビームガンで応戦するが装甲が強化されているのか大したダメージにはなっていないかった。

「来ないならこつちからいくよ、ファンネル！」

ビームガトリングシールド3基が零丸改の周囲を漂い一斉にガトリングで掃射しながら迫ってくる。

「ファンネルの対処法なら！」

ガトリングの弾丸をシールドユニットで防ぎつつスナイパーライフルをその隙間から覗かせ引き金を引くとガトリングシールドの弾倉を的確に撃ち抜き爆発させ同じように他の2基も撃ち抜いた。

「こつちもあつさり…！」

「私だつてやる時はやるんです…！」

スナイパーライフルをラックに戻し今度は脚部ラックからビームガン抜きサーベルモードで零丸改に斬りかかる。

「彩さんに聞きたい事があるんですけど、どうやったらさつきみたいの下の名前で呼んでもらえますか…！」

「あーそれね、自分から下の名前で呼んでつて迫れば響くんなら呼んでくれると思うけ

どさっきのは多分私の名字を忘れてたからだと思うよ!」

「私も下の名前で呼びたいです、さっきのはそうだったんですね!」

零丸改がアルケインのビームガンを蹴り上げブーストを噴かして、ファントムの方へ向かうとアルケインも同じくブーストを噴かして追いかける。

向かった先では、ファントムのピーコックローターによる連射を天羽々斬を地面に突き刺し何とか耐えているストライクが視界に映った。

「城戸さん! さっきはすみませんでした!」

「誤解が解けたなら良かった?」

ファントムに合流した零丸改とストライクに合流したアルケインが再び向かい合う。

「誤解が解けたなら速攻でカタをつける! SEED!」

「SEED system standby。Remaining until he time limit of 120 seconds。」

機体に蒼い粒子を纏ったストライクが放出している粒子を天羽々斬に収束し超大型ビームブレードを作り出す。

「これで終わりだ! 行く手をはばむは勇敢なる皇后!」

ストライクの背丈をも優に超えるビームブレードが零丸改とファントムに迫る。

「前ならやられてたかもだけど。」

「今の私達なら防げるよ！」

「サイコフィールド!!」

零丸改がリアルモードに変形し緑色のサイコフィールドを展開しファントムもピーコックローターを投げ捨てフィールドを前面に展開しそれを重ね合わせ2機を包み込む。

「だああらつしやああ!!」

先ほどまで2機がいた位置の周囲のビルが根元から吹き飛んでいったので、ビルが動くぐらいの質量でぶつかったのだから無事ではないだろうと振り下ろしを中断した瞬間驚くべきものを目の当たりにする。

「嘘、だろ…?」

驚愕した響の目の前に現れたのは五体満足とはいかないが、未だに人型の姿を保っている零丸改とファントムがただずんでいた。

「今のは危なかったね…」

「もう機体がボロボロだけど、もうストライクはそんなに動けなそうだよ！」

花音の発言が終わると同時にストライクのSEEDが終了してしまう。

「SEED終了、粒子低下を防ぐためビームの使用を制限します。」

「でもそれは2人も一緒でしょ?だから俺はこのまま攻めさせてもらう！」

天羽々斬をラックに戻し腰からアーマーシューナイダーを抜くとブースターを噴かし再び零丸改に突撃する。

「ここは逃げるが勝ちってね！」

自身に背を向けた零丸改からバズーカやミサイルが迫ってくる。

「小川さん！」

「任せてください……！」

突撃を諦めたストライクが後方へ下がると代わりにアルケインが前に出てスナイパーライフルで迫ってくる砲弾やミサイルを1つ1つの確に撃ち抜いていき第一陣の弾が爆発を起こし続く第二陣の弾が誘爆していった。

「嘘……？なんて命中率なの……？」

もう一撃とスナイパーライフルでビームを撃ち込むが横からファントムが飛び出してきて1フィールドで防がれる。

「こんな時の為に普通のバズーカを背負ってきてきて良かった。」

飛び出してきたファントムの更に横からストライクがバックパックから伸ばしたアームバズーカを構えてファントムの下に回り込み撃ち込んで爆発を起こす。

「タダではやられないよ！」

先ほどの爆発で右足を吹き飛ばされたファントムがその足を掴んでバズーカに叩き

つけ砲身を歪ませる。

「小川さん、後は頼んだ！」

「分かりました．．．！」

バズーカを切り離し腰から抜いたビームサーベル（ビームダガーぐらいの長さのビーム）をフロントムの右肩へ突きつけ同じように腰裏から抜いたアーマーシユナイダーを零丸改に投擲し逃走を防ぐとそこで粒子が尽きたのだろう、ストライクのカメラアイから光が消えその動きを止めそれを見届けたアルケインが上空に上がる。

「あ、やば!?？」

「逃げられない!?？」

「今回は乱れ撃たせてもらいます！」

上空に上がったアルケインがファンネル・ビームガン・バズーカ・バルカン・ミサイルといった全身の銃火器を地上にいる零丸改とフロントムに向け一斉射すると逃げる術もなく爆散していった。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け近くの自販機に移動した響たちが側にあつた椅子に腰を落ち着ける。

「いやー何か誤解も解けたし丸岡さんも白鷺さんもありがとー！」

「その節はご迷惑をお掛けしました…。」

「やっとな私の名字を思い出したみたいね。」

「そう言えばもう夏休みじゃない。という事は2人ともガン普拉合宿には参加するの？」

花音の発言に2人は顔を見合わせこう言った。

「ガン普拉合宿？」

## 第26話く全てを持つ者は宇宙を舞うく

響と沙希がバトルをした次の日の放課後

「言うの忘れてただけけど10日後に他校と合同でガン普拉バトル部合宿を行おうと思ってるんだけど、みんな予定あつたりするかな？」

「俺はないです。」

「右に同じく。」

「私もないです…。」

「どうせ行きたくないって言っても奏に連れ出されるだろうからね。」

「翼くんよく分かつてるく、木乃香ちゃんみんな大丈夫だつてさ！」

部員全員からの返事を聞いた木乃香は満足そうな顔をして何処かへメッセージを送っていた。

「何処かのガン普拉バトルが出来る旅館を貸してもらつてやるみたいだから面白くなるわねー！」

「「旅館を借りる（んですか…。）」「？」」

木乃香以外の部員が驚きの表情を浮かべていると続けて木乃香が口を開く。



「後で必要なものとかは連絡するから！あ、ガンプラは調整しておいてね。」

「ガンプラの調整なら僕がやろう、5日間あれば足りるはずだ。」

「「お願いします！（…）」」

その後、軽い夏休み前の部活の打ち合わせをしたのちその日の部活は終了した。

帰り道、拓哉たちと別れた響は1人ゲーセンへ足を運んでいた。

「軽く一戦して帰ろうかな…ん？あの機体は。」

響の視線の先には対戦中の筐体がありモニターを見ると見覚えのあるエクストリムガンダムとキュベレイの改造機が戦っていた。

そこから終わるまで見ていたが最後はファンネル同士の撃ち合いになった所をエクストリムガンダムがビームサーベルでキュベレイを一刀両断してバトルが終了した。

スクリーンが溶けて相手方と挨拶し後ろを振り返った人と目が合った人に声を掛ける。

「部長お疲れ様でした、華麗な勝利でしたね！」

「見たたのね。こんなところで会ったのも何かの縁だし軽く一戦していいかない？もしくはセコンドとか。」

「部長を相手にするにはまだ機体の調整が不十分なんでやめときますよ。でもセコンドはやってみてください！」

「バトル出来ないのは残念だけど、ちょうどあつちにセコンドありのバトルを所望して  
た人がいたから声掛けてくるわ。」

木乃香がその所望していた人たちに声を掛け二言三言会話を交わすと木乃香がこちらに帰ってきて筐体に向かい、2人ともセコンドありで4人は筐体を真ん中に挟むとGPベースをセットする。

《Beginning [Plavsky particle] dispersal.  
i ardl, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「今井 木乃香、ストライクブランシエ。殲滅を始めましょうか!」

レバーを動かしてガンプラを発進させる。

今回のバトルフィールドは、ガンダムAGEに出てきた月面基地ルナベースだった。

「さてと、今日はよろしくね城戸くん!」

「セコンドは初めてなんで上手くできるか不安ですけどよろしくお願いします、つて部長! なんですとかこの装備は!」

「なんですかって、城戸くんのトリアイナ・安藤くんのGNソード・沙希ちゃんのヴェス

パー・翼くんのメガキャノン・奏のプロトドラグーンを用いたパーフェクトパックよ?」飛行途中にもかかわらずくると回転してお披露目してくれたが、その途中重量過多によりミシミシと関節が悲鳴を上げていたのを響は聞かなかった事にした。

「あ、部長前方から敵影あります。」

「こちらでも確認したよ!先制する行つてプロトドラグーン!」

ストライクブランシエの左マントからプロトドラグーンが4基射出され前方の敵影に向かつていき、ドラグーンが何かを撃ち抜いたのか小規模な爆発が起こる。

「やった!ようやく目視出来るレベルまで来たけど、これはブルーデイスティニーの赤い重武装型で良いのかな?」

機体分析をしている間に赤いブルーデイスティニーもといレッドデイスティニーが爆発の煙を掻き分けるようバックパックの高出力ブースターを噴かしてこちらに突っ込みながらその両手で携えていたアックスを振り降ろしてきたのに合わせストライクブランシエもGNソードを展開し斬り合わせる。

「重武装型だけあって上から来られると重い!城戸くん今使える武装は?」

「えっと、今使えるのが射角的にイーゲルシュテルンか脚部ヴェスパーのみです!」

「仕方ない!脚部ヴェスパーを連射モードで展開距離を取る!」

ヴェスパーを展開したストライクブランシエが連射モードで連射するとレッドデイス

ステイニーは左腕のシールドで防ぎながらアックスを振り上げるとストライクブランシェの右足ヴェスパーが斬り落とされてしまう。

だがストライクブランシェがヴェスパーを失っても距離を取った瞬間、レッドデイスティニーがバックパックのメガビームランチャーが起動しておりビームが6連ミサイルと共に放たれる。

「やばり!? 回避は間に合わないか、使いたくなかったけどドラグーン!」

予め展開していたプロトドラグーンがプラフスキーパワーゲートを形成、メガキャノンが弓形態を取るとそこにトリアイナをビームランスモードで弓にかける。

「え、部長まさか!」

「そのままさかよ! 射撃強化! 貫きなさい!」

スロットから「射撃強化」を選択しビームランス（オーバーブースト状態）のトリアイナを弓矢に見立てて引き金を引き射出。

「俺のトリアイナー!」

響の悲鳴と共に放たれたトリアイナはゴオオと音を立てメガビームランチャーのビームを引き裂きながら進みその衝撃でミサイルが誘爆しレッドデイスティニーの右肩を抉ってステージ外へコースアウトしていった。

「このまま畳み掛ける、ドラグーン!」

右肩が挟られた事により右腕自体がアックスごと宇宙に漂うがレッドデイスティニーはシールドからビームサーベルをパージして宙に漂わせ掴みシールドを捨てるとUCでクシャトリアのファンネルを躲しながら近づいてきたスタークジェガンのようにドラグーンを躲しつつブーストを噴かしてこちらに突撃、対するストライクブランシエもスペースデブリを盾にしながら接近するとレッドデイスティニーの下を取る。

「これで終わり!」

木乃香の気合の乗った声と共に展開したGNソードの刀身がレッドデイスティニーの腹部を捉えそのまま横一閃に斬り裂き、ポーズを取った瞬間レッドデイスティニーが爆発四散する。

「部長それエクバのエクシアですよ…!」

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた人に挨拶して木乃香たちは近くの休憩スペースに移動していた。

「城戸くん今日はセコンドをやってみてどうだった?」

木乃香に尋ねられた響は考える様子を見せた後口を開く。

「射撃武装の管理とか普段やった事なかったので凄い新鮮でしたし、良い経験になりました!」

「それは良かった、今度のガンプラ合宿楽しみましょうね！」  
「はい！」

木乃香と別れ自宅へ帰った響は寝巻きに着替え布団に潜る。

「ガンプラ合宿にはどんな機体が出てくるのかな……」

自身が思いつく限りの機体を数えている内に眠気がやってきて深い眠りに落ちていった。

## 第27話くガンブラ合宿!その1く

ガンブラ合宿当日、響たち天ヶ崎高校ガンブラ部は泊まる事になる旅館へ向かうバスに乗っており他の高校の人たちも乗っていたが響は疑問に思っていた事を木乃香に投げかける。

「それにしてもよく旅館に泊まる部費と行くためのバスの部費が降りましたね。」

「いやーもう大変で、生徒会にガンブラ部の話題性をやめてくれって言われるまで語ってようやく降ろさせたのよ!」

「ホントに大変でしたね..」

部費を降ろすため生徒会に直談判しに行った話を聞き今頃生徒会の会計は頭を悩ませてるんだろうなと思ひ響は密かに手を合わせておいた。

「生徒会の話は置いといて、着く前に改めて着いてからの流れをおさらいしましょうか。今回のガンブラ合宿は2泊3日で初日は旅館に着いたらカギを受け取って部屋に荷物を置く、入浴、高校毎が集まってくるの夕ご飯、レクリエーションでガンブラ部、就寝して流れだから間違えないように!」

「了解(です...)!!」

木乃香から話を聞いているうちに旅館に着いたのだろう、バスが止まりドアが開きバスに乗っていた人たちと共に地上に降り立つ。

「おー！ここが俺たちの泊まる旅館「ニュー大川」か！ガン普拉バトル対応旅館ってありがたい……」

「珍しくテンション高いじゃないか響、まあテンション上がる気持ちも分からなくはないが取り敢えず荷物置きに行こうぜ。」

「そうだな、して翼先輩は何処へ？」

さっきまで一緒にいたはずなのにと周辺を見渡しているとフロント辺りからカギを握りしめた翼がこちらに向かって来ていた。

「響くんがテンション上がっている内にカギは貰ってきた。部屋番号は105号室で部長たちは上の階だから気をつけるんだよ。」

ちなみに響と拓哉が話している間に部長たちは行ったそうだ。

エレベーターで移動しようとその手前まで歩き出した所で見知った顔を複数発見する。

「こつちに来るのは男しかいないが、俺らが新人戦で戦った人たちは軒並み来てるようだな。ほら、あそこにいるの響が執拗に絡まれてる不良連中じゃないか？」

「うげ、まさか来てるとは思わなかった……って目が合ってしまった！バトルは避けら



れない!」

海山高校の松本 大輝とその舎弟数名がこちらを見つけて歩いて来るのと同時に拓哉が響の発言にいやポケモンかよと突っ込んでいた。

「おい、城戸 響!」

「いまバトルは...!」

出来ないと言葉を続けようとした所で、目の前の松本が突然頭を下げてきたので響は呆気にとられてしまう。

「は、はい?なんで頭を下げ...」

「こんななりでもなガンブラバトルは正々堂々やるべきだと思っているからこそ、この前俺の連れが迷惑をかけちゃった事に謝罪をせずにはいられないんだ本当にすまなかった!」

「あー、その事なら気にしてないから頭を上げてくれ。俺も小川さんも良い経験になったし、それにアンタの事誤解してたよ。今度ガンブラバトルをする時はお互いなんのしからもなくバトルをしよう!」

「おう!楽しみにしとくぜ、じゃあな!」

松本と和解しその時ちようどエレベーターが降りてきたので、乗り込み部屋に入り荷物を置き部屋着に着替えると早速風呂に行く事にした。

「やっぱり旅館の風呂は気持ちいいな！」

「ホントになー、もうここに住みたい程だ。」

「分かる。所で話は変わるけど君たちの新武装が出来たから後で渡すよ。」

「「おー！ありがとうございます！」」

その後、翼がのぼせてしまったので響と拓哉は背負って部屋まで帰り冷ますと新武装を受け取って響と拓哉がそれぞれの機体へ組み込む。

夕食を食べたのち宴会会場へ行くと見慣れた筐体が複数配備されていた。

「地面から生やす式なんだな……」

「その方が使わない時は格納できるからスペースを確保出来るみたいよ、それに今回のレクリエーションは一工夫されているみたいだし。」

「「一工夫？」」

部長を除く他のメンバーが疑問に思い木乃香に問いかけようとした所で、司会者によるアナウンスが流れる。

「各ガンプラバトル部の皆様、長らくお待ちせしました！これよりシャツフルバトルを開催したいと思います！」

司会者によるアナウンスが流れた瞬間、至る所からシャツフル？という声が聞こえ響たちもなんだろうと口にした所で司会者から続けて説明がされる。

「シャッフルバトルとは、最初入ってきたときに受け付けで番号を渡されたと思います。それを私が番号で伝えますので呼ばれた方々でバトルを行ってもらおうというルールになっているので、早速参りましょう!」

「普段知らない人とペアを組んでみて、その場での連携力を鍛えるってわけか。」

響たちが呼ばれる順番を待っていると4番目に拓哉の番号が告げられ、拓哉を含めた抽選で選ばれた4人が筐体を真ん中に挟んでGPベースをセットしガンブラを読み取り機に置きスキヤンを開始したタイミングで拓哉は相方になる人に通信を入れた。

「あー相方さん、俺の声聞こえてる?」

「聞こえますよって拓哉さんですか?」

「おお、マリか。頑張ろうな!」

「はい!頑張りましょう!」

《Beginning「Plavsky particle」dispersal. F  
iard2, sity》

《Please set your GUNPLA》  
音声に従ってガンブラを置く

《BATTLE START》

「安藤 拓哉、ガンダムエクシアデイスターブ!派手にぶちかませ!」

「安藤 茉莉乃、ダブルオーガンダムエンドレスファイア！行きます！」  
レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは08小隊でグスカスタムと戦った市街地。

ステージ中央まで移動した拓哉と茉莉乃が目の当たりにしたのは赤と金で塗装されたスクランブルガンダムと所々に金の装飾が施されたキュベレイだった。

「よく見りゃスクランブルの羽ファンネルじゃないか…。」

「ファンネル持ちは面倒ですね、近接戦に持ち込めば迂闊に撃てないので突貫します！」

茉莉乃の言葉が終わると同時にダブルオーガンダムが背後バーニアを噴かしながらキュベレイに突撃しGNソードスピアを振りかざす。

「おい！ってそーいや茉莉乃も射撃戦苦手だったな。滝沢先輩や響といてどうして俺の相手になる人は射撃戦が出来ないんだか…。」

懸架ラックからGNスナイパーライフルを手に持ち替え精密射撃用のバイザーを下ろし呼吸を落ち着かせ今も可変形態のスクランブルに向け何発か撃ち込むがそのビームを可変形態ながら器用に躲すところらに急速接近し人型に戻りビームサーベルを振り下ろすがエクシアはGNスナイパーライフルの下部からビームサーベルを発振しなんとか防ぐ。

「久し振りの対戦かと思いきやリア充になってるだど!!?」

「この声どこかで、あ!アンタ鳴瀬さんの相方の一色さんだな!」

ビームサーベルのぶつかり合いで接触回線で聴こえてきた声は白桜高校の一色 ほかりだった。

「リア充なんてものがあるからあ!!!」

ほかりの叫びと共にサーベルの出力を上げたスクランブルがエクシアを押し倒し近くのビルにめり込ませる。

「この人こんな強かったか!!?このままめり込み続けるのはマズイ!」

スクランブルの逆手に持ち替えたビームサーベルをエクシアの頭部に突き立てる瞬間、横に頭をずらしてなんとか躲すがアンテナの片方が溶けてしまう。

「アンテナ片方ならくれてやる!さて反撃と行こうか!」

躲されると思っていなかったのか、体制の崩れたスクランブルを起き上がる反動で蹴り飛ばすとホルダーからGNビームピストルを取り出し連射してビームサーベルを弾き飛ばす。

「サーベルが!!?けど、ファンネル!」

スクランブルの羽を形成していた6基のファンネルがエクシアに向けて射出されたと同時にエクシアも側に落ちていたGNスナイパーライフルを回収し向かっていく。

「これだからファンネル持ちは！」

一方の茉莉乃というと、キュベレイのファンネルをGNソードスピアで貫いたりGNフィールドを展開してのタックルで粉砕しながらなんとか凌いでいた。

「このままじゃラチがあかない……何か手は。」

武装スロットを漁りながら挽回のチャンスを探しているとふと最近一気見したビルドファイターズのワンシーンを思い出す。

「これだ！」

GNフィールドを解除してキュベレイに背を向けたダブルオーがバーニアを噴かし全力で距離を取り始めそれを好機と捉えたのかキュベレイが追加でファンネルを射出し追ってくるファンネルの数が20を超えた辺りで数えるのをやめた茉莉乃に迫ってきていた。

「今何個ファンネルあるんでしようか……でも後もう少し狭まった道に入れれば！」

ファンネルによる砲撃を躲しつつ市街地のビル群に入りファンネルがそのビル群に入るため一直線に並び始めた瞬間。

「このぐらいなら私でも出来ます！バスターライフル最大出力！」

一直線上に並んだファンネルに向けGNバスターライフルを銃口を合わせおもむろに引き金を引いた。

すると自動操縦だったのか避ける様子を見せずダブルオーを追いかけていたファンネルが全滅する。

「これで良しと、ひとまず拓哉さんと合流しないと。」

最大出力で放ったため銃口のひしゃげてしまったGNバスターライフルを破棄し背部バーニアを噴かしながらその場を後にした。

「エクバでも思ったけど、レガンのファンネルつてずるいよな…。」

一度距離を取ったのは良いが、いざビームを撃ち込んだ所レガンダムのようなファンネルバリアを張られ攻めかねていた。

どうするかと考えていると後方から茉莉乃のダブルオーガンダムがこちらに向かってきていた。

「拓哉さん、すみませんキュベレイは落とせませんでした…。」

「いや、俺もスクランブル落とせなかったからおあいこだ。」

相手側もキュベレイとスクランブルが合流し一度戻されたファンネルが、再び射出されこちらに向かってくる。

「ファンネルだけで俺らを落とせるわけないだろ、「トランザム!」」

紅い残像と化した2機のガンダムは、スクランブルとキュベレイの残ったファンネルを1基ずつ撃ち抜いたり突き伏せていき数分と掛からず戦場に静寂が訪れる。

「さあ、トドメと行こうか！マリやれるな？」

「大丈夫ですよ！」

トランザム中のエクシアがGNスナイパーライフルからこちらも同じくトランザム中のダブルオーがGNソードスピアから自身の背丈を優に超えるビームサーベルを形成。

「はああ！ライザアアアソオオオド！」

「こんな事って……」

最後の抵抗と言わんばかりにキュベレイがビームを撃ち込んでくるがエクシアの横降りのライザーソードに掻き消されそのままの勢いでキュベレイが爆散し可変形態を取り上空に躲したスクランブルをダブルオーが一刀両断し左右に分かれたスクランブルが爆発を起こした。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた人たちの挨拶を交わすと続けて次の対戦する人たちの番号が表示されていた。



## 第28話くガンブラ合宿!その2く

「やっと俺の番かー!」

拓哉の試合が始まった直後、他の筐体でも試合が行われ今か今かと待っていた番号がようやく呼ばれた。

「城戸さん、頑張ってくださいね…!」

「頑張るよ!よーし。」

沙希の応援を受けながら筐体へ向かった響だったが、他の人は既にGPベースのセットが終わっておりスクリーンが投影されていたので誰が一緒かは分からなかった。

(他の人はもう待機状態か、俺も急がないと。)

GPベースとガンブラを筐体にセットしていつも通りスキャンが行われている間に相手になる人に通信を入れる。

「えっと、相手さん?聞こえてるかな?」

「この声、城戸かあ!」

「うわっ!今井さんか…!」

《Beginning [Plavsky particle] dispersal. F

i a r d 4 , f o r e s t 》

《 P l e a s e s e t y o u r G U N P L A 》

音声に従ってガンプラを置く

《 B A T T L E S T A R T 》

「城戸 響 ムラマサストライクゼノンフェース！行くよ！」

「今井 舞姫 ラピットロストフリーダム。殲滅を始めようか。」

レバーを動かして機体を発進させる。

今回のステージはビルドファイターズの最終回でセイとメイジンが戦った森林だった。

「もう既に不安しか無いんだけど……」

「それはこっちのセリフだ、よりにもよってなんでお前と組まないといけない。」

響のストライクがゼノンの要素を組み込んだ為、長時間の飛行が難しくなり地面を走り始めたのに合わせロストフリーダムも低空飛行で合わせてくれたときは以前よりマシになったと思っただけが違おうようだ。

「さきに言っておく、足だけは引つ張るなよ。」

「な!? それはこっちのセリフだつての！部長とは大違いだなこれは。」

「どうやら最初に仕留めて欲しいみたいだな。」

「上等だ！後で後悔すんなよ！」

その足を止めた2機は言葉が終わると同時に距離を取りお互いに右腕のユニットを起動させる。

「ロスト…」

「ブレイク…」

「フィンガー!!!」

黒く燃え上がる手と赤く燃え上がる手がぶつかり合い、周囲の木々に引火し辺り一面が焼け野原になるが構わず殴り合いを続けていた。

「前よりはやるようになったんじゃないか？」

「へえ、そりやどうもっど！」

ストライクが左腕のユニットも起動し火球を放ちロストフリーダムがその火球をシールドで弾いた瞬間、違うところから何かが爆発したような音が響く。

「爆発!? もう敵機が近づいてたのか。」

「そのようだな、この決着はいずれ付けようか。」

爆発のした方向へストライクが走り出すと前方からミサイルポッドがあつたであろう位置から煙を漂わせている重武装型リーオーが、姿を現し右手の実弾バズーカと共にミサイルポッドからミサイルも数発放つ。

「実弾なんかで俺の動きを止められるもんか！バアアルカン！」

向かってきた先頭の実弾にイーゲルシュテルンが当たった瞬間、実弾が爆発し近くのミサイルに誘爆しながら連鎖的に爆発していった。

「おらああああ!!！」

爆発の煙を散らしながらリーオーに近づいたストライクが脚部ビームサーベルを用いた連撃で重武装型リーオーのシールドを破壊しつつ体制を崩すと今回「天羽々斬」の代わりに持つてきた「タクテイカルアームズ極」を大剣モードで抜刀しリーオーの左足を切り落として行く。

「狙いが浅かったか！」

「爪が甘いんじゃない?！」

すれ違いざまに舞姫に悪態をつかれ反論する為に横を向くと、そこにはドラグーンによる足止めを行いながらも背部ビームライフルでザンネックのフライトシステムを的確に撃ち抜いていたロストフリーダム姿が見えた。

「反論できねえ…」

「続けて仕留めさせてもらおう、城戸避けろよ?！」

「お、おい。まさか…」

4機が入り乱れる戦場で、ロストフリーダムは一旦先ほどまで攻め続けていたザン

ネットクを蹴り飛ばすと残っていたドラグーンを全て展開してハイマツトフルバーストを放つ。

その射線上にいたリーオーはザンネットクのビームシールドの陰に隠れてなんとか防いでいたが、当然リーオーと戦闘中だったストライクもおりハイマツトフルバーストに巻き込まれそうになるが腕部ビームシールドを両腕で展開し間一髪で防ぐ。

「ゼノンFじゃなかったら即死だよ……」

そうして、ハイマツトフルバーストが終了しロストフリーダムの排熱が済んで動き出せるようになった所で響が舞姫に詰め寄った。

「おい！俺ごと仕留めようとしたろ！しかも敵機落とせてないし。」

「生きてたんだから良いだろ……!!? 避ける城戸！」

「話はまだ終わって……」

いち早く異変を感じ取った舞姫がストライクを突き飛ばそうとしたが、逆にストライクがロストフリーダムを突き飛ばしたと同時にビームの本流が2機を飲み込んだ。

「お前！どうして……」

「一応相方だからな、けど無事で良かった。」

ロストフリーダムを庇う形で突き飛ばしたストライクはザンネットクのビームキャノンによって、右腕が根元から吹き飛びバックパックのタクティカルアームズ極も右側が

溶けてしまい使い物にならなくなってしまっていた。

「二応2機とも無事だけど、俺は右腕が無くなって左腕も関節が動かないしバックパツクのブースターも逝かれたみたいだ。」

「それなら私に案がある、ロストフリーダムの右腕をストライクに移植するんだ。そうすればお互いまだ動けるだろう。」

「良いのか？つてもう考えてる時間はないな、頼んだ！」

ロストフリーダムが自身の右腕をストライクに移植し何度か腕を回したり握ったりしたが問題なく動いたのでピースサインをとる。

「よし、何とか行けそうだ。俺はリーオーの方に行く、今井さんはザンネックをお願い。」  
「了解した、しくじるなよ。」

ザンネックが2発目を放とうとビームキャノンを構える寸前でロストフリーダムがナタを突き刺し暴発、怯んだ所をビームライフルで殴り仰け反らせひしゃげたビームライフルを投げつけ腰から抜刀したビームサーベルで横一線に斬り裂いた。

「行くぞストライク、ここにはお前とロストフリーダムと俺がいる！」

直後、ストライクの足関節がギシギシと悲鳴を上げながらも立ち上がり拳を握ったと同時に重武装パツクをパージしたリーオーがビームサーベルを構えブーストを噴かしながら迫ってきたのに合わせストライクも右腕のユニットを展開し迎え撃つ。

「ロストオ、ブウレイクウ!!」

リーオーのビームサーベルがストライクの頭部に突き刺さるがストライクの突き出された拳はリーオーの胸部を貫き空に投げると爆発が起きる。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた人と挨拶をして機体を回収しストライクの外れた左腕を探していると突如横から手が差しのばされる。

「探してるのこれでしょ?」

「おお、ありがと!つて今井さん!?」

「話があるんだけど、ここじゃなんだし場所を変えようか。」

そうしてストライクの左腕を舞姫から受け取り、近くの椅子に移動し腰を落ち着け。

「それで話と言うのは?」

「あーその…」

いつもの気の強さはどこに行ったのか急にしおらしくなり、困惑が隠せない響は頭の中で違う事を考える事にした。

(落ち着け城戸 響、おい頭の中の本能落ち着けて「俺は行くんだよ!」「おい待てよ本能!おら!」ふう、ありがとう俺の理性。)

「今までの事はごめんなさい!今回の1件で完全に違うんだなって分かったんだ。今更

謝った所で許されないとと思うけど……」

「いやいや！むしろ謝らないでくれ。俺も何回か失礼な事しちゃってたみたいだから。」

沈黙が数分続いたのち、会場の方が大きな盛り上がりを見せた所で再び舞姫が口を開く。

「ありがとう、けど次も勝つのは私だけどね♪」

「なに!?？次こそ勝つのは俺だ!」

直後、2人は笑い合い出会った頃の険悪な雰囲気はもう見られなくなっていた。

「次は全国大会で会いましょう!」

「おう!舞姫に勝てるよう俺頑張るから!」

響と舞姫が和解しその後も何度か他の人たちと試合を重ねレクリエーションと言う名の楽しい時間はあっという間に過ぎていった。



## 第29話～ガンブラ合宿・その3（終幕）～

ガンブラ合宿2日目の朝、朝食を食べながら響がふと思った事を口にする。

「昨日のバトルを終えて俺のストライクには足りないものがある事に気付いた。」

「ほお、それで足りないものとは？」

同じく隣で朝食を食べていた拓哉が聞き返す。

「俺のストライク、射撃武装も足した方が良くないか？」

「「今更（ですか…）???」」

それを聞いた途端、部員全員が驚愕の表情を浮かべ声を揃えて聞き返した。

「小川さんまで!??こっぴごうなつたらとことん突き詰めてやる!」

朝食を食べ終えるまで、どんな感じにするか話し合いガンブラ制作ルームの一角に集まり制作準備を整えた辺りで木乃香が挙手する。

「はい、部長。」

「ドラグーンは？」

「積みましよう、はい拓哉。」

「フィンガーユニットは？」

「採用、はい小川さん。」

「ビームキャノンはどうでしょうか…。」

「良いね！はい十六夜先輩。」

「SEEDの対応時間を3分に増やせたよ。」

「先輩ありがとうございます！あれ、滝沢先輩どこ行きましたか？」

会話の流れ的に続いてくると思っていた響だったが、周りに奏の姿が見えず思わず翼に尋ねる。

「奏はおやつ食べてくるって部屋に帰ったよ。」

先輩らしい、と改めてストライクを取り出し翼協力のもと武装作成に取り掛かり

数時間後、完成されたものを見て響たちはどこか見覚えを感じていた。

「これエグザFじゃん…。」

「俺も途中からそう思ってたけど…。」

完成したストライクを改めて見ると、頭部と胴体は変わっていないがバックパックが天々々斬専用ジョイントに加えストフリのようなドラグーン付きの羽が付いており羽根と腰にビームキャノンが増え両手にはバスターライフルを腕部にフィンガーユニットも付き見た目は「エクストリームガンダムエグザフェース」だった。

「まあでも、一度は試しだな。拓哉やらないか？」

「そうしてやりたいのは山々だが、俺も今新型作成に取り掛かってな。」

そう言われて、拓哉の机の上を見るといつのまに用意してたのかガンブラの箱が積まれている。

「ベースはダブルオースカイか？」

「おうよ、完成をたのしみにしてくれ。しかし何処かにバトルしてくれそうな人は。」

「あーびつきーにたつくんどうしたの？」

突如現れた奏に先ほどの会話の内容を分かりやすく伝える。

「そっかー、対戦相手を探してるんだ。じゃあ私が相手するよ！けど、タッグマッチの方が良い練習になる気がするし……」

「そういう事なら俺たちとやらないか？」

声の間こえた方向を見ると前日に和解した海山高校の松本 大輝とその舎弟の石崎

宗吾がこちらに歩いてきていた。

「相手してくれるのか！滝沢先輩はどうです？」

「私は良いよー！そしたら、早速行こっか。」

4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. F  
i ard3, sity》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ムラマサストライクエグザF。行くよ！」

「滝沢 奏、ケンプファー。狩りの時間だよ！」

「松本 大輝、アルケーブリザード。出る！」

「石崎 宗吾、ガンダムTX。行く！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージはビルドファイターズで、メイジンのケンプファーアメイジングとレナート兄弟のジムスナイパーK9が死闘を繰り広げた市街だった。

「そう言えば2人で出撃って初めてじゃないですか？」

「そうだねー！でも、私とビッキーフって前衛型じゃない？」

「う、確かに：：この装備は一応遠近対応出来ませけど使うかどうか。」

「そこは使つてよ！私のケンプファー、ショットガンしか持つてないんだから。」

2人が軽く話し込んでいると、どこからか高熱源反応のアラートが鳴り響く。

「CAUTION!!」

「先輩。前方から高熱源、多分サテライトとメガランチャーです。あれを試しても良い

ですか?」

「機体が変わってなければってやつかあ、いいやよろしく!」

「了解です!バスターライフル連結、出力全開、これなら当たるだろ!」

ストライクが左右で持つていたバスターライフルを連結し迫ってくるビームに向け砲撃すると珍しく命中し、お互いに拮抗したままビームの放出が終わる。

「当たった!?」

「なんでやった本人が驚いてるの…」

「いや、なんか当たったのが嬉しくて。」

当たった事に対し喜んだ途端、ビームが放たれた方向から全体が水色でカラーリングされた大輝のアルケープリザードが背部のGNロングメガキャノン折りたたみながら降り立ちその横の宗吾も前に響たちが戦ったDXを改修しサテライトキャノンが3本に増えた機体色変わらないのガンダムTXがサテライトキャノンを戻しながら降り立った。

「挨拶がてらの砲撃だがこんな簡単に防ぐとは…けど俺たちの申し出を受けてくれてありがとな。」

「いや、俺もちようど機体の調整したいと思ってたからありがたいよ。」

「ならば!後は戦うのみだ。」

「兄貴、あのストライクは自分にやらせてもらえないですか。やられっぱなしっていうのも嫌なんです。」

宗吾の言葉を聞いた大輝のアルケーが行ってこいと道を譲ったのを感じとったガンダムTXと前方のストライクも歩き出してくる。

「今回は俺が勝たせてもらおう。」

「いや、今回も勝つのは俺とストライクだ！」

「ほざけ！魔王剣！」

ガンダムTXの背部に背負ったサテライトキャノンの柄が外れリフレクターに接続されると、響の勇敢なる皇后フレイブエンプレスのような超大型ビームブレードが現れた。

「いきなり大技か……なら俺だって、SEED！」

「SEED system standby. Remaining until the time limit of 180 seconds.」

機体から蒼い粒子を放出したストライクがその粒子を天羽々斬に収束し、ガンダムTXの魔王剣に劣らずの超大型ビームブレードを形成するとバーニアを噴かしながら突撃。

「お前の魔王剣と俺の天羽々斬のどちらが先に折れるか一勝負と行こうじゃないか！」

「上等だ、おらあ！」

周囲のビルを次々と斬り倒しながらストライクとガンダムTXは鏢迫り合いへもつれ込んでいった。

「アルケーブリザードに接近戦を挑もうなんてな！」

その頃の奏はというと、大輝の操るアルケーを相手にガーベラストレートで渡り合っていた。

「武装が殆ど近接しかないからね！」

次の瞬間、ケンプファアの持つていたガーベラストレートの刀身が音を立てながら折れてしまう。

「あらら、折れちゃった。けど予備ならまだあるんだよ！」

「ケンプファアが近接戦を仕掛けて来るって滅多に聞かねーぞ！」

アルケーはバスターソードをケンプファアは折れたガーベラストレートを投げ捨てコンテナからビーム太刀を抜刀し再びぶつかり合う。

「トランザムは使わないの？」

「あいにく今は調整中でな、このまま近接戦でやらせてもらう。」

何度か鏢迫り合い、一度距離を取ったケンプファアがコンテナから予備の太刀を引き抜き突撃する。

「そう！てつきりトランザムが無い私への当てつけかと思ってたよ！」

「俺はそんな舐めたバトルはしない！」

言い切ったアルケーがバスターソードを振り下ろすがケンプファーがビーム太刀と太刀をクロスさせて受けきると代わりに腕部ガトリングをアルケーの頭部に押し付けて連射し、数秒で頭部が吹き飛ぶ。

「よりもよつてガンダムNT-1のガトリング?!?!」

「そうだよ、何処にも自分を倒した機体の武装を付けてはいけないとは書いてないからね！」

先ほどから続いているストライクとガンダムTXの鏢迫り合いは更にエスカレートするが、周囲のビルを瓦礫の山と化した辺りで天羽々斬にヒビが入ってしまった。

「天羽々斬が?!?!?ここままだと折れるのも時間の問題か…：こうなったらフィンガーユニット展開！」

天羽々斬を地面に突き立て、代わりに右腕のフィンガーユニットを起動し右手が光り輝く。

「ブレイクフィンガー！」

再び振り下ろされたガンダムTXの魔王剣をブレイクフィンガーで鷲掴みビームを握りつぶすと、その様子を見ていた宗吾も驚きを隠せなかった。

「お前のゴットフィンガーは、ビルドナックルかよ！」



「似たようなもんだけどこれはブレイクフィンガーだ！」

魔王剣をへし折ったストライクがそのままガンダムTXのサテライトキャノンの3本ある砲門のうちの1本を握りつぶし一度距離を取る。

「よし！まずは1本！」

「これ以上やらせるかよ！ダブルサテライトキャノン！」

「いや！俺はやる！ドラグーン展開、スクイーズドアラニア全てを抱きし理想郷！」

爆発寸前の1本をパージしたガンダムTXのサテライトキャノンを迎え撃つ形で両翼を広げ先ほどから展開していたドラグーンに加え、背部のビームキャノン・腰部ビームキャノン・両手に持ち替えたバスターライフルを構えハイマツトフルバーストを放つ。

両者の威力は互角かと思われていたがマイクロウエーブの送電が終わった途端、拮抗が崩れサテライトキャノンの一門を飲み込んだ。

「相変わらずバケモンだなその機体は！」

「お褒めに預かり光栄と言っておこうか！」

爆発の衝撃によって地面に叩きつけられたガンダムTXを追撃する為にビームサーベルを振り下ろそうとしたストライクだったが後一撃の所でSEEDが終了する。

「SEED終了、粒子の消費を抑える為ビームの出力を制限します。」

直後、ビームサーベルのビームが小型ナイフ程に縮みガンダムTXのすぐ脇を突き立てるのみとなりガンダムTXに腹部を蹴り飛ばされ弾き飛ばされてしまう。

「残念だったな！これで俺の勝ちだあ！」

「まだだ！まだ終わるもんか！」

ストライクが体制を立て直し、近くに突き刺さっていた天羽々斬を分割して持ちガンダムTXはビームサーベルを振り抜きお互いに突撃するがここで予め設定している時間が訪れる。

「TIME OUT!!!」

「引き分けか・・・」

そう呟いた響のストライクは左腕が肩から飛ばされており、宗吾のガンダムTXは右腕が肩から飛ばされていた。

スクリーンが溶け響が宗吾と握手を交わしていた横で奏と大輝も握手を交わしており

「どうやら、こちら側も決着がつかずに終わったらしく近々また決着をつけるそうだ。」

その後、大輝達と別れ帰りのバスの中でグツスリと睡眠を取った響たちが最寄りの駅に降り立ち荷物を一度地面に下ろして背伸びをしていた。

「やっと戻ってきたわね！けど、家に帰るまでが合宿だからね。寄り道しないで帰る事、

そして地区予選まで残り1ヶ月！それまでに色々と整えましょう！」

「「おー!!!」」

こうして響達、天ヶ崎高校ガンブラバトル部のガンブラ合宿は幕を下ろすのだった。

## 第30話 く幼馴染は姉として見極めたい件についてく

ガン普拉合宿が終わって数日後の事

学校は夏休み中だが、部活動がある生徒は学校を訪れ部活に励んでおりそんな中唐突に響が口を開いた。

「悪い拓哉、先に行つててくれ。忘れもんしたっぽい。」

「おいおい、まさかさつき行つたバーガーショップに忘れたのか？」

「かもしれない、ちよつとひとつ走りしてくる。」

「りよーかい、早く帰つてこいよ。愛しの小川さんが待つてるからな。」

本人の前では言うなよ！、と走りながら注意喚起した響が校門を出て駆け出していった。

「この暑いのに走るとかあいつ元気だな… まあ普段走らないしいい運動になるだろう、さて部活行くか。」

そして、いつも通り挨拶をしようと部室のドアに手をかけ開いたところで

「なんだこりゃ…」

沙希が部員ではない人物とのバトルが繰り広げられていた。

「おや、拓哉くん。響くんはどうしたんだい？」

「あいつなら忘れ物を取りに帰ってますよ、それよりこれは一体どういう状況で？近接戦で戦ってる真剣な小川さんを見るの鉄血祭以来なんですけど。」

「そうだね、事の始まりを話そうか。」

話の始まりは数十分前に遡る。

部室には響・拓哉以外の部員が集結しており、木乃香と翼は機体の調整、奏はおやつを頬張り沙希は雑誌を読んでいた。

直後、部室のドアが開き響かと思っていた沙希が顔を上げるがそこにいたのは響ではなかった。

「こんにちは響くんいます？」

突如現れた響を訪ねる女性が現れ沙希を含め部員全員が固まるなか木乃香がなんとか口を開いた。

「今はいないけど後から来るわ。それで貴女は？」

「あ、申し遅れました！私、黒羽 紫織って言います。水泳部に所属していて響くんとは幼馴染で今日はちよつと用があつたんですけど、ここで待たせてもらっても良いですか？」

「大丈夫、後数分くらいで来るって連絡はあつたから何もないけどゆつくりしていっ

て。」

「ありがとうございます！あ、そう言えば小川さんって人はいますか？」

「あ、私です…。」

「貴女が小川さんね！よく響くんが話しているからどんな人なんだろうって思ったけど、なるほどね当てはまるわ。」

「何がですか？」

「響くんってめったに女の子の話はしないんだけど、ここ最近嬉しそうに話すもんだから気になってね。そっかあ、響くんの隠してる本のヒロインにそっくりだわ。」

「それって… 何？！」

「わああ、沙希ちゃんしっかりしてー！」

奏が慌てながら沙希を落着かせ団扇でパタパタ風を起こすといつもより早く落着きを取り戻したようだ。

「えっと、話を戻すけど黒羽さんは沙希ちゃんの様子を見に来たって事で良いかしら？」  
「そうですね、ホントは響くんもいたら面白い事になったと思うんですけどそれはさておき小川さんがどんな人か見に来たって言うのが理由ですね。」

「それで結果は？」

「よくもなければ悪くもない感じですが、姉としてもうちよつと…。」

「姉!?」

部員集合くと、奏・翼・沙希を呼び意見を求める事にした。

「幼馴染って言ってなかった?」

「言ってたね、そして響くんの本の詳細を知ってるよ。」

「翼くん家にあるのはまた違う感じだけだね。」

「十六夜先輩の家にもあるんですか…?」

「ちよつと待ってほしい。奏、どこまで知ってるんだい?」

「ストップ! 話が逸れてる。まあ、もうちよつと聞いてみれば教えてくれるかも。」

みんなで紫織の方を向き、木乃香が口を開く前に紫織が口を開いた。

「あ、話し合いは終わりました? 響くんに見合ってるか確かめるのに小川さん、ちようどバトルシステムもあるしバトルしません?」

「分かりました… 望むところです。」

2人が筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal. Fairly, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

## 《BATTLE START》

「小川 沙希、レオパルドデュルガーwithストライクブースター。行きます！」

「黒羽 紫織、ビルドストライクアルテミス。出ます！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、サンダーボルト中域の宇宙だった。

辺りに雷鳴が轟くなか、響のストライクブースターを装備していたレオパルドがステージ中央へ先行し待っているとそれから程なくしてストライクがブースター全開で突っ込んで来る。

「早々に決着をつけます！」

「そんな攻撃！」

ストライクが高出力ビーム砲を起動しビームを放つがレオパルドはストライクブースターの大型ビームサーベルで斬り裂きそのまま接近して大型ビームサーベルを振り下ろすと紫織も砲撃を諦め小型シールド内蔵のビームサーベルで切り結ぶ。

「ビームを斬るなんて響くんみたいだね！」

「……！」

以前響がビームを斬り裂きながら戦っていた所を思い出し見よう見まねでやってみて上手く出来た事に安堵していたが紫織に思考を読まれ、耳が真っ赤になるが頭をブン



ブン振って戦いに集中し直し大型ビームサーベルをバツクバツクに戻して代わりに膝からビームサーベルを抜き振り上げ紫織のストライクの右翼を斬り落とす。

「貴女も取り回しのしやすい武装に変えたところで、鏑迫り合いと行きましよう！」  
「望む、ところですよ！」

そして鏑迫り合いの最中、ストライクのソードライフルが折れてしまいソードライフルを放棄しストライクがその場から離脱しようしたがレオパルドがそれを許すわけもなく更に追撃していく。

「逃がしません！」

「逃げるんですよ、これが！」

「グレネード!?？」

腰裏からグレネードを取り出し膝からビームサーベルを抜き貫こうとしていたレオパルドに投擲、ビームサーベルの切っ先がグレネードを貫いて辺りに黒煙が立ち込め煙に紛れてミサイルがこちらに向かって来る。

「全て薙ぎ払います！」

スロットから「腰部メガ粒子砲」を選択すると、チャージが始まり出力を絞った状態で横一線にビームを流し自身に届く前にミサイルを爆発させ、お返しと言わんばかりに4連ミサイルから残弾が空になるまで撃ち続ける。

「ウソ!?」

「コロニーの中に逃げたって!」

ブースターを噴かしながらコロニーの残骸に紛れ込んだストライクに向け、先程放ったミサイルの他に腰部メガ粒子砲・ブースターキャノン・大型ビームサーベル（ライフルモード）を一斉射すると最初はコロニーの外壁に阻まれ中まで届いていなかったが沙希が更に出力を上げた瞬間バキバキと外壁に亀裂が入りコロニーが真つ二つに引き裂かれる。

すると、中の空気が外に漏れだし始めその隙間からストライクが吸い出され外に吐き出されてくる。

「まずはその邪魔なストライカーを潰します!」

「ならこっちはそのブースターを貰おうかな!」

吸い出されたストライクがバーニアを全開で噴かしその場から急速離脱、こちらにキャノンを向けていたレオパルドに向け高出力ビーム砲を起動し撃ち込む。

そのビームとすれ違うようにブースターキャノンも放たれストライクがミサイルポッドをレオパルドがブースターキャノンを被弾してしまいお互いに損傷箇所をパージする。

「こっとなつたらもう一回近づいて!」

「サーベルは一本だけじゃないんです！」

急速に近づいたストライクが小型ビームシールドから発振したビームサーベルでレオパルドが急いで抜いたビームサーベルを弾くが沙希はバツクパツクの大型ビームサーベルをアームから切り離し、右腕のハードポイントに固定して高出力ビーム砲にねじ込みながら振り回す。

なんとか振りほどこうとしていた紫織だったが、ガツチリとねじ込まれていたのと出力の関係で突き放せず右へ左へ振り回されてしまい視界が大きく揺さぶられ気持ち悪くなるのを我慢しながら仕方なくストライカーをパージする。

「まだ頭がぐわんぐわんするけど、いけるかな。つて戦艦!?？」

レオパルドから逃れるためブースターを噴かしていたストライクの目の前に突然、連邦の戦艦が姿を現しその出撃ハッチに戸惑いながらもストライクが入っていった。

「ゆっくり休んで…」

ねじ込んでいたままのストライカーを撃ち抜きストライクブースターを戦艦上部に待機させ沙希のレオパルドも出撃ハッチに潜り込むと、足元にその戦艦の乗組員だろうかかわらわらと漂っているのを尻目に進み出撃前のジムやボールの陰に隠れていたストライクを見つけ大型ビームサーベルを構え突撃する。

「捉えました！」

「この、はなっ!」

して、と紫織が言い終わる前に障壁へストライクを叩きつけ食い込ませていた大型ビームサーベルを自身への損害など考えず引き金を引き胴体に風穴を開ける。

直後、ストライクが爆発を起こし大型ビームサーベルを食い込ませていたために避けきれずその爆発にみぎ腕と大型ビームサーベルが巻き込まれてしまうがレオパルド自体は形を保ち立っていた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け機体を回収した沙希と紫織がソファに腰掛けていた。

「小川さん、さつきは試すような事言ってごめんね。私貴女の事を誤解してた、これなら響くんを任せられる。」

「…!ありがとうございます。」

「さてと!目的も果たしたしそろそろ帰ります。皆さんもウチの響くんをよろしくお願ひします。それでは失礼しました!」

紫織が部室を去った後、拓哉が思い出したように口を開いた。

「そーいや、あいつの家の隣に同じ年なんだけど誕生日がその子の方が先で引つ張つてくれるお姉さんのキャラであいつもそのまま姉さんって呼んでた人が居た気がするな。」

その発言に部員一同がそれだ！と口を揃えて話しているところ、ちょうど響が汗だくで息を切らしながらやってくる。

「あ、今紫織姉が来てたみたいでみんなに迷惑かけてないですか？さつき廊下ですれ違ったから用があるのか聞いたらもう済んだって言ってたんだけど。ってあれ、小川さんはなんでさつきから顔を合わせてくれないの…？」

自身が内緒にしていた本のヒロインを暴露されていた事を知らない響が、そこから沙希と顔を合わせられるようになるまで時間がかかるのだった。

## 第3章 地区大会

### 第3-1話 纏うは紅、超新星

夏休みも終盤へ差し掛かり課題を全て終わらせていた拓哉は残る数日を新機体の制作に費やしていた。

「ここにコイツを取り付けて、と…出来た！」

机の周りには切り出したランナーや削りカスなどが散乱しており制作に集中していた様子が伺える中、満足そうに背伸びをしていた。

「今までのディスターブ、アヴァランチアズール、スナイパーカスタムに足りなかった高火力と近接戦闘に特化した俺の新しい機体。名付けてダブルオーガンダムセグエンテだ！」

今回、ダブルオーガンダムをベースにディスターブとアヴァランチアズールで足りなかった高火力に加えスナイパーカスタムでは足りなかった近接戦闘能力の2つを拓哉なりに特化させて新造したダブルオーをポーチにしまいウキウキ気分で響に電話をかける。

「もしもし、響か？ようやく俺の新型が出来たんだ、バトルしようぜ！」

「悪い！バトルしたのは山々なんだがまだ夏休みの課題が終わってなくて…え、ここ違う？ありがと小川さんってわけなんだ。」

「お楽しみ中ってわけか、邪魔したな。」

電話を切る直前、響がなにかを言いかけていたがあえて拓哉は聞かなかった事にして電話を切りどうしたもんかと取り敢えず街に出ることにした。

「響の後に電話したマリも実家に帰ってるしさでどうしたもんか、とりあえずゲーセンでも行くか。」

スマホをポケットに滑り込ませ、拓哉はゲーセンへ足を運びUFOキャッチャーなどには目もくれずフリーバトルスペースに向かうと後ろから声を掛けられる。

「おや、拓哉くんじゃないか。こんな所で会うとは奇遇だね。」

「ホントですね、翼先輩はどうしてここへ？」

「筐体がアップデしたと聞いて、早速試そうかと思つたのさ。」

「何か新しい機能が？」

「それは…。」

そこから聞いた翼の話の纏めると、GPベースに登録していた機体の戦闘データを筐体のAIに反映させ自分の過去のデータと戦う事が出来るものだった。

「凄いですね、それで翼先輩は試しに来たんですか。」

「そうなんだけど、拓哉くんはどうしたんだい？ デイスタープの調整かな。」  
「今回はデイスタープじゃなくて新型を作って来たんですよ！」

ポーチからセグエンテを取り出し翼に見せると翼の普段は低いテンションが上がったような気がした拓哉が翼にある事を提案する。

「その過去データとの戦い、俺にやらせてくれませんか？」

「それは願ったりかなったりだ！ 早速試そう、GPベースを借りて行くよ。」

筐体の相手側に翼が周り、拓哉と翼のGPベースをセットしてコマンドを入力し予め拓哉から借りていたデイスタープを読み取り機に置きGPベースのデータをデイスタープに登録するとデイスタープのカメラアイに光が灯り準備が完了した。

「これでよしと、拓哉くん君の新型の性能を思う存分試そう。」

「了解です！ でも、セットするのは俺のGPベースだけで良かったような…。」

「それはバトルしてのお楽しみだよ。」

《Beginnning「Plavesky particle」dispersal. Fairdl, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》



「安藤 拓哉、ダブルオーガンダムセグエンテ。飛び立つ！」

レバーを動かし機体を発進させる。

「よし早速つてGNミサイルだあ!?? そんなもん積んだ覚え…」

「ああ、そうそう普段使つてる武装だけだと対策が立てやすいと思つてね。僕がGN機体に搭載しようと思つてたGNHWを装備させて貰つたのと僕の戦闘データも読み込んだよ。」

拓哉が疑問を口をした途端、それを横で見ている翼が通信を入れ重要な事をしれつと言つていた。

「先輩いークソ、泣き言言つても始まらねえか。薙ぎ払えよGNメガブラスター！」

第1陣のミサイルを掻い潜りながら右手に構えたGNメガブラスターを連射モードで放ち次々と撃ち落としていき、全て撃ち落とす頃にはディスタープとセグエンテの距離は目視で確認できる所まで近づくとディスタープからファンングが射出されており、

「流石は俺の戦闘データだな、行けよ！ランチャービット！」

前方から向かつて来たディスタープのファンングに合わせ、セグエンテがランチャービットを2基射出する。

以前、奏のケンプファーに採用されていたプロトドラグーンのオートターゲットシス

テムを今回ランチャービットにも採用しており、デイスターブのフアングを正確に撃ち抜いていくが数はフアングの方が多く、最後はランチャービットがフアング2基を巻き込んで自爆していった。

「御構い無しか、けどビームは友達ってなあ！」

フアングとビットの空間戦が終わったかと思えば、デイスターブがGNソード（ライフルモード）でビームを撃ち込んだので、拓哉はスロットから脚部反射装甲を選択、膝に付いていた装甲が脛あたりまで降りると、デイスターブの打ち込んだビームを蹴り返し、シールドに命中させ、体制を仰げ反らせたのを確認した拓哉が満足そうにGNバスターソードを構え直し突撃していく。

GNバスターソードがGN粒子を纏い、デイスターブの頭上から振り下ろされ、対するデイスターブがGNソードで受けようとするが、質量の差が生じてGNソードの刀身がバチバチと火花を散らしながら音を立ててへし折れる。

「響の天羽々斬を参考にGNバスターソードを採用して正解だったな……さて性能テストが目的だからな、どんどん行くぜ、トランザム！」

真紅に染まったセグエンテがデイスターブに急速接近し、GNバスターソードを再び振り下ろした瞬間、デイスターブの姿も真紅に染まり、GNバスターソードの斬撃が宇宙を斬り逆にGNビームピストルでGNバスターソードを持っていた手元を狙われて弾

かれてしまう。

そのまま宙に流れていったGNバスターソードを尻目に拓哉はトランザムからの派生スロットを選択する。

「トランザムエクスペロージョン！」

エクシアの状態だと全身のビーム発生器からビームの刃が展開されていたがダブルオーだと各スラスタから噴き出す粒子量が増幅され、GNドライブからGN粒子による翼を展開して戦艦の残骸を足場にしながら加速してGNビームサーベルを振り下ろしそれにぶつけるようにデイスターブがGNカッターを振り上げ何度か鏝迫り合いセグエンテが蹴りを繰り返し出し距離を取るとデイスターブの全身からビームの刃が展開されこちらに突っ込んで来る。

「装備が軽い分あっちの方が身軽か……」

全身からビームによる刃を発振したデイスターブのタツクルを身をよじりながら最低限の動きで躲しつつGNメガブラスタで反撃を試みるが装備量の違いが災いして一向に当たる気配がなく、少し考えた拓哉がGNメガブラスタによる射撃を諦め背部の大型ビームソードをパージし腰裏のビームライフルも破棄し右手にGNビームサーベルを持つ事で推力を装備量分戻しデイスターブへ突撃する。

「っ、れで、どうだあああ!!!」

今もなおビームサーベルを全身から展開しているデイスターブにMSの残骸を投げつけ突進の勢いを弱め、その動きが止まった瞬間セグエンテのGNビームサーベルが左腕を肩から斬り落とす。

斬り落とされた衝撃で「トランザムエクスポロージョン」が終了したデイスターブの頭部を戦艦に押し付けGNビームサーベルをその右肩に突きたて、

「これが俺とダブルオーの新しい力だ！エクスポロージョン・ノヴァー！」

両肩のGNドライブから爆発する勢いで放出されているGN粒子による翼が予備のGNビームサーベルにながれこみ、響のムラマサストライクが持つ勇敢なる皇后ブレイヴエンブレスのような超大型ビームブレードを形成し戦艦の残骸に縫い付けていたデイスターブに向け振り下ろす。

すると、振り下ろされる直前で自身で右腕をパージしたデイスターブが回避を試みるが間に合わず頭上から一刀両断され爆発を起こした。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶けデイスターブとセグエンテを回収し、近くのソファに腰を落ち着け飲み物を片手に話し込んでいた。

「どうでした？俺の新機体、ダブルオーガンダムセグエンテは。」

「うん、どちらかと言えば近接寄りだけど全体で見ればバランスの良い機体に仕上がっ

たね。」

「翼先輩にそこまで言ってもらえるなんて嬉しいですよ！つてすみません、響から電話が・・・もしもし響か？」

（課題全部終わったから遊び行こうぜ、とかか？）

「拓哉！課題手伝ってくれ！」

「は？そこに小川さんもいるんだろ？」

「いてしかも手伝ってくれてんだが、全く手を付けてなくてようやく半分終わった所なんだ。小川さんも優しいから・・・」

「はあ・・・だからあれだけ課題は早めに終わらせておけって言ったよな？仕方ないから今回は手伝ってやるけど、何か奢れよ？」

「奢る奢る！HGでも焼肉でも！」

「それなら、HGナラティブA装備でも買ってもらおうかな。」

「ぐっ・・・分かった、男に二言はない。」

「冗談だ、じゃあまた後で。翼先輩、これからの響の課題を手伝わないといけなくてせっかく機体調整手伝ってくれるって言ってたのに。」

「大丈夫だよ。僕も奏から手伝ってって言われてるの放置していたから帰って手伝って来ようかな。」

「お互い苦勞しますね…」

「そうだね。それじゃまた学校で。」

電話を切りセグエンテを受け取ってポーチにしまった後、翼と分かれた拓哉は待ち合わせ場所へ駆けて行った。

## 第32話～侍は紅を選びストライクは蒼を選びました～

### 新学期の始まり

それは夏休みが終わった生徒たちにとつて久し振りに友達に会えたり夏休みに起きた事を友達同士で共有したりなど交流の場になっておりそんな新学期は拓哉との会話から始まっていた。

「結局、小川さんと付き合えなかった…。」

「しかもいざ言おうとした日が土砂降りで台風が接近するとは誰も思わないよなあ。」

ガンプラ合宿の後、花火大会があり無事に沙希を誘っていた響だったが当日台風の接近により中止になったことを思い出しながら嘆いていたが

「けどまだチャンスはあるんだ。」

「ほお？それは一体なんなんだ？」

「それは、10月が小川さんの誕生日なんだよ！」

「マジかよ…どうとう誕生日を聞いたのか、部長に話して今夜は赤飯しかねえ。」

「普段部長と何話してるの!?!」

そんな事を話しつつ迎えたHRを上ので過ぎ、時が経つのを感じながら放課後

迎えていた。

「やつと、新学期初日が終わったよ。この後ゲーセン行って対戦しないか？」

「悪いなまだ機体の調整が済んでなくて、バトルできる状態じゃないんだ。」

「そっか…。じゃあまた明日な。」

拓哉と別れた響はぶらりと街中を歩いていった。

「さて、一人だしゲーセンでフリーバトルでもして素直に帰りますか。」

思い立ったが吉日と、その足を行きつけのゲーセンへ向け早歩きで自動ドアを潜りフリーバトルスペースへ向かうと騒ぎの中心である5人を囲みながら人だかりが出来るのを見つける。

(服装からしても松本たちじゃないけど、この状況は放っておけないな。)

「ちよつと待った！」

「あ？なんだお前は。」

「えーつと…。この人達の知り合いだ！」

咄嗟の事で思わず言ってしまう上手く合わせてくれよと絡まれていた2人の方を見るとその意思を感じ取ってくれたのか言葉を続けてくれる。

「そうです、知り合いです！」

「知り合いか。」



「やだ、意外に素直…。」

（おっと、あまりにもここにいる人達が素直すぎてオカマになるとこだった。）

「それで、何があつたの？」

「それが…。」

話を聞いたところ、先にいた彼の友人？の彼女が絡まれていた別の女の子を助ける為にバトルをしたが負けてしまいそこに彼が割って入りその会話の途中に自分が入ってきたという事らしい。

「話は大体分かったけど、3対1はフェアじゃないから俺も参戦させてもらう。」

「そんな！元はと言えば僕たちの事なのに手伝ってもらうなんて…。」

「乗りかかった船だ、手伝わせてくれ。」

「すみません…。」

「と言うわけで、俺も入って3対2でやらせてもらうぞ。」

「はっ！おもしれえ、負けて無様な姿を晒せよ！」

5人が筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginnning「Plavsky particle」dispersal.  
Fardl, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「ストライクガンダムアーマメント 城戸 響。推して参るよ!」

「スサノオ 岡田 龍馬。いざ!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは、テロによる爆発が起こる前のラプラス官邸だった。

「城戸って言ったか、よろしく頼む!」

「あーうん、なんか喋り方が変わってるような気がするけどよろしく。」

ブーストを噴かしながら移動をしていると、同じようなタイミングで敵機が姿を現した。

「サザビー、ジ〇、キャベレイ、か。ファンネル持ちが2機とはめんどくさいな。」

「ファンネルなんて斬れば良いだけの話だ。」

「キャラが変わった途端、頼もしくなりすぎだろ。」

「もう射出されてるな、先手はいただくぞ!一の型、蒼龍烈火!」

腰から抜いた日本刀にプラフスキー粒子が蒼い炎へと姿を変えその炎を纏うとそのまま突き出し、蒼い炎が龍の形を形成し放たれていたファンネルをまとめて喰らった。

「俺のSEEDみたいな蒼い炎がファンネルを一直線上に呑み込んで行ったんだが!!」  
「?」

「あいつらの親玉っぽい赤のジ〇に攻撃は仕掛けず俺は手前のサザビーから仕留める!」  
城戸はその隣のキュベレイを頼んだ!」

響が呆気に取りられていた間に言い切った龍馬のスサノオはGN粒子を放出しながらサザビーと鏢迫り合いを繰り返しながら去っていく。

「お、おお…… せっかちな。けど、あいにくファンネルは舞姫のロストフリーダムで慣れてんだよ!」

背部バーニアで加速し、バスターライフル（低出力連射モード）を以前沙希との射撃訓練で身に付けたビームダガー投擲の要領でキュベレイのファンネルを撃ち抜き10基程その数を減らす。

「おらあああ!」

だが肝心な所で貯蔵粒子の尽きてしまったバスターライフルをキュベレイに投げつけそれをファンネルで撃ち抜かせ爆発、煙に紛れてスペースステブリを蹴りながら接近しキュベレイの正面に姿を現わす。

「バスターライフルは囷か?!?」

「その通り!そして終わりだ!SEED!」

「SEED system stand by. Remaining until  
he time limit of 180 seconds.」

キュベレイの正面を陣取り響がスロットからSPを選択、機体に蒼い粒子を纏ったストライクが両腕のフェザーソードを展開しながらキュベレイの右腕を斬り伏せ逆のフェザーソードで胸部を貫き月基地にたたき伏せる。

「よし、と。またライフル投げちゃったよ、拓哉が見てたら言われるだろうな…。」

直後、力を失い宙に漂うファンネルを見ながら地面に串刺しにしたキュベレイからフェザーソードを抜き折りたたむとその場を後にした。

「これで最後か!」

その頃、龍馬のスサノオはサザビーの射出してきたファンネルを全て斬り伏せていた。

「二の型、月華乱舞!」

サザビーのファンネルを全て斬り伏せたスサノオが空いていた左手にも雲龍を持たせると、2刀流でシールドに斬りかかりまるでチーズを割くかのように綺麗な切断面を残しながらシールドを斬り落とすが次の瞬間、トドメを刺そうとしたスサノオの左腕は肩から吹き飛んでいた。

「隠し腕だど? 原作には無かったはず…。」

「かの名人様も言ってるんだろ？ガンプラは自由だってなあ！」

片腕を失った事で一気に優位性が崩れ、サザビーの両手・股間サーベルによる3刀流を右手の日本刀でのみで捌いていたスサノオだったがスペースデブリにぶつかってしまふ。

「これで墮ちろよ、サムライもどきい！」

「残念ながら落ちるわけにはいかないな、トランザム！」

直後、紅い残像を残しながらサザビーの正面から姿を消したスサノオは日本刀を腰に戻し代わりに抜いたGNビームサーベルをサザビーの喉元に押し当て胸部の「トライパニッシャー」を起動し零距离でぶつ放した。

「片腕でもなくなると剣技使えないんだよな…。しかも思いのほかダメージ負ったし…。」

胸部に大穴を開けて宙に漂っていったサザビーを尻目に胸部から煙を出し続けているスサノオもその場を後にして先程いた場所へ戻っていく。

「そんな強敵だったの？」

「いやそこまですりゃただだけど、不意を突かれてつい。って城戸の機体蒼いな。」

「そういう岡田くんの機体だって紅いじゃないか。」

再び合流した響と龍馬がお互いに機体を見ながら感想を零しつつ無事だった事に安

堵していた所には、ジ〇が立ちはだかっていた。

「俺を目の前にしてそんな軽口を叩けるほど余裕そうだな。」

声を聞くだけでも怒っているんだろうな、と内心響は思いつつ口を開く。

「別に余裕じゃないけど。さあ、鬼退治と行こうか！」

「おう！主役は俺たちだ！」

「行けよ、ドラグーン！」

ストライクの両翼から射出された8基のドラグーンは隕石の破片やMSの残骸を盾にしながらジ〇に包囲攻撃を仕掛ける。

「ドラグーン如きで俺を落とせると思ったら大間違いなんだよ！」

ジ〇の背後に付いているブースターかと思っていたボックスが2つに分離し隠し腕へと姿を変え4本のビームサーベルで近づいてきたドラグーンを瞬く間に斬りきざんでいった。

「あん？あいつらの姿が見えねえが一緒に切っちゃったか？」

「ところが！」

「ぎつちよんってな！」

ドラグーンに気を取られていたジ〇にストライクが右から現れ隠し腕の1本をスサノオが左から姿を現し右腕を斬り落とし、体制を崩すと続けてMSの残骸を投げつけ

る。

「クソ！あいつらふざけやがって!?？」

「岡田くんスイツチ！」

「了解！」

ジ〇が投げつけられた残骸をこちらに投げ返してくるのに合わせ、ストライクがSEED粒子による簡易式ドラグーンを飛ばす事で相殺しそこに背後に回ったスサノオがGNビームサーベルを取り出し振り上げ残った左腕も斬り落とす。

「この俺が、こんな、ところで…。」

「俺が」

「俺たちが」

「桃太郎だ！」

何処からか法螺ぶえが聞こえたような気がしてる中、ジ〇の胸部にストライクのフェザーソードとスサノオのGNビームサーベルが突き刺さっておりカメラアイから光が失われていった。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶ける頃には絡んでいた連中は誰も残って居なかったので、諦めて響たちは近くのイスに腰掛けながら響が口を開く。

「あー勝てて良かったね、岡田くん。」

「そ、そうですね…」

「なんかバトルしてる時とキャラ違くない？」

「よく、言われるんです。開放的な気持ちになるとつい出てしまつて…」

「そうなんだ、つて！俺そろそろ行かないと。」

「すみません、助けて貰つてしまつて。」

「ガンプライフアイターは助け合い、だろ？そう言えば、君は何処の学校なんだ？」

「あ！自己紹介が遅れてしまつてすみません。僕は武蔵野高校1年の岡田 龍馬です。」

「よろしく、俺は天ヶ崎高校1年の城戸 響。武蔵野つて事は地区大会で会うかもね。」

「その時は全力でやりましょう。」

「ああ！それじゃ地区大会で！」

呑んでいたMAXコーヒを空き缶入れに捨てると響は自宅へ足を運ぶのだった。



### 第33話～それが最強の矛とするならこちらは～

「と言うわけで、2週間後の地区予選に向けて連携の特訓をしましょう！」

「「おー!!!（おー）」」

「それでね、早速なんだけどクジを作ってきたの。色がついてる人同士でペアを組んで1人だけ休憩って形になるわ。」

「「了解です。」」

木乃香、奏、拓哉、響、沙希の5人が一本ずつクジを引く。

「赤が私と城戸くん、青が奏と安藤くんね。」

「私が休憩ですね…。」

「沙希ちゃん！次があるから、ね？」

「分かってます、機体の調整がありますし…。」

「そ、それじゃ気を取り直して…。」

「いざ尋常に勝負！」

4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning》「Plavsky particle dispersion」. F

iardll, castle》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「ストライクガンダムアーマメント、城戸 響。推して参る！」

「ストライクブランシエ、今井 木乃香。殲滅を始めましょうか！」

「ダブルオーガンダムセグエンテ、安藤 拓哉。飛び立つ！」

「バイアラン、滝沢 奏。狩りの時間だよ！」

レバーを動かしガンプラを発進させる。

今回のステージは、ビルドファイターズトライに出てきた古城だった。

ゲートから飛び出た後、ブースターを吹かしながらの移動最中で響がこのフィールド

雰囲気から気になっていた事を木乃香に聞いてみる。

「そう言えばこのフィールドってオバケは出てくるんですかね？」

「最近の映像は進化してるし出てくるんじゃないかしら。」

「怖い事言わないで下さいよ…。ま、まあ？自分は別に怖くないですけど？」

「あら、そしたら今度みんなでホラーでも見ましようか。」

「ほ、ほら！今はバトル中ですしバトルに集中しましょう！」

「この場はそういう事にしておきましょう。ステージ中央の古城下についたし。」

「助かった…。それにしてもあの2人は何処にいるんですかね?」

「あれの後ろに隠れてる可能性が高そうだし取り敢えず、あの城吹き飛ばすわね。」

「取り敢えずのレベル超えてません!?!?」

突然の発言に驚きを隠せなかった響を横目にメガキャノンを引き、トリアイナをビームランス展開モードでメガキャノンにかけ引き金を引いた。

「でっけー城だなあ、滝沢先輩どうします?」

「うーん、定石なら古城の中で相手を待つんだけどなにせ相手が木乃香ちゃんだからなんとなく中に入るの危険な気がするな。」

「確かに。部長なら古城ごと吹き飛ばしそうですね…。滝沢先輩高熱源反応ありです!」

「回避は間に合わない!伏せて!」

奏の指示に従って地面に伏せた拓哉と奏が顔を上げるとそこにあつたのは古城を消しとばしクレーターの中心に突き刺さっていたトリアイナだった。

「トリアイナ?来たか響!つてストライク違い!?!?」

「残念ながらこつちのストライクなのよ!」

地面に突き刺さっていたトリアイナを見て、てつきり響が来るかと思っていた拓哉

だったが予想に反して木乃香のストライクガンダムブランチエが迫って来ていた。

反射的にバイアランごとGNフィールドを張り防御に徹したダブルオーの目前に響のストライクガンダムアーマメントのドラグーンと木乃香のストライクガンダムブランチエのドラグーンが3重でプラフスキーパワーゲートを展開。

「GNフィールドなんて私たちからしたらただの的よ、城戸くん！」

「任せました！バスターライフル連結、これで吹き飛ばせ！簡易式全てを抱きし理想郷  
！」

ダブルオーとバイアランを正面に捉え引き金を引き放たれたバスターライフルの一撃は、3重のプラフスキーパワーゲートを通してSEED発動状態に近い威力を伴ってGNフィールドに直撃し最初のうちは防げていたダブルオーのGNフィールドが徐々に押し始められる。

「たつくん、私が合図したらGNフィールドを解除して右にズレて！このままだと2人まとめて落ちちやうし私に策があるの。」

「滝沢先輩、信じますよ！」

「行くよ。3、2、1、今！」

直後、拓哉がGNフィールドを解除し右にズレると奏のバイアランが追加プロペラントタンクをパージし左に回避する。

「やった!?？」

「いえ、奏たちは落ちてないわ!あれは囷よ!」

アーマメントが砲撃を中断した瞬間、バスターライフルの砲身にビームが命中し爆発を起こした。

「狙いが少しズレたか。悪運の強いヤツめ。」

「拓哉か!やってくれたな...」

ビームの放たれた方向を向くとGNメガブラスターを構えていたダブルオーセグエントがただずんでおり、続く2発目はアーマメントのシールドで防ぎビームダガーを投擲した。

「2発目は喰らわれないぞ!今度は俺からやらせてもらおうか!」

「今度は私が言うよ、残念ながらってね!」

投擲したビームダガーはバイアランのビームガトリングによって爆発を起こすが、アーマメントと入れ替わるようにブランシエが前に躍り出る。

「行きなさい!ヴェスパークビット、ドラグリーン!」

「もう、遠隔操作兵装なんて!」

ブランシエがヴェスパークビット2基とドラグリーンを4基射出しながら自身もGNソードで突撃、バイアランが抜刀モーション無しでビームサーベルをヴェスパークビット

に突き付け、それを足場に跳躍し上空に舞い上がる。

全身のありとあらゆる銃火器を出し惜しみなくばら撒くとあつという間に残ったヴェスパービットとドラグーンを撃ち落とした。

「中々やるじゃない、ならこれはどうかしら？」

GNソードを右手に展開、バイアランをアンカーで引き摺り落としすれちがいざまに右腕を肩から斬り落としてつつ右肩のユニットを落ちてきたバイアランに押し付ける。

「これは弓のはずじゃ……!?？」

「所がどっこいメガランチャーなのよ！」

弓の形を保っていたそれはバイアランの胴体を挟み込むとおもむろにぶつ放すと上半身と下半身で別れ爆発を起こす。

一方木乃香が奏を連れ去った頃、響と拓哉も鏑迫り合いを繰り広げていた。

「早速だが落ちてもらうぞ、トランザム！」

「やっぱりそうくるよな……」

紅い粒子を纏ったダブルオーが残像を残しながら、アーマメントに接近しGNメガブラスタアの砲身でストライクの正面を叩きつける。

「荒い歓迎じゃねえか、ならこつちもやってやる！SEED！」

[SEED] system standby. Remaining until

he time limit of 180 seconds.」

紅とは逆の蒼い粒子を纏いお返しと言わんばかりにダブルオーの頭部を殴りつけ体制を崩しフェザーソードを展開しGNメガブラスターの砲身を斬りつけ。

「この際だ、拓哉の紅と俺の蒼どちらが強いか！」

「証明しようじゃねえか！トランザムエクスプロージョン！」

纏っていた紅い粒子が両肩のGNドライブに流れ翼へとその姿を変え手に握った大型ビームソードのビーム出力を上げアーマメントをフェザーソードごと弾き飛ばす。

「トドメだ、エクスプロージョンノヴァ！」

両肩のGNドライブから勢いよく放出されていたGN粒子の翼が右腕の大型ビームソードに収束、大型ビームソードを作り出しそのまま振り下ろす。

「一か八かの勝負！SEED最大出力！」

振り下ろされる直前、ストライクの両翼から展開されていたSEEDによる蒼い粒子の翼がストライクの全身を包み込んだ。

「なんだよそれは…」

「いや、俺にも分からん…」

ダブルオーセグエンテの「エクスプロージョンノヴァ」を矛とするなら今現れたストライクアーマメントのそれは翼の形をした盾だった。

「どうする？続けるか？」

「続けたいんだがもう粒子が尽きるし、拓哉の勝ちだ……」

響の言葉が終わると同時にストライクのカメラアイから光が失われ膝をついた。

「TIME UP!!」

スクリーンが溶け機体を回収した響が翼の元に寄り先程の現象について尋ねる。

「翼先輩あれは一体……」

「それは僕も分からないけど、地区予選までに使えるように機体含めて調整しておくよ。」

「お願いします！」

「城戸くん！次の対戦相手を決めるよー！」

「はーい、今行きます！」

この特訓は日が暮れて下校を促すチャイムが流れるまで続いた。



## 第34話～剣と銃士のドッキング～

地区大会当日～

「懐かしいなこの会場とこの感じ！」

「相変わらず早いわね、私ができる1時間前からスタンバってるなんて…」

「部長、こいつはいつもこんなですよ。」

「城戸くん元気だね！トツポ食べる？」

「奏が人に食べ物をあげるなんて、今日は何か良くない事が起こりそうだ。」

そして、受付を済ませて会場内に入り予め指定されていた席に荷物を置き下に降りると少し遅れて開会式が始まった。

「それでは、ここに地区大会の開催を宣言します。」

「「「うおおおおお!!!」」」

盛大な盛り上がりを見せ早速第1試合の組み合わせが発表されていき、第1コートから順番に呼ばれていく中響たちは出場選手を決めるためクジ引きを行っていた。

「1番はもらった！」

「私も1番でした…」

「それなら一番目は城戸くんと沙希ちゃんね、全力で楽しんでください！」

「はい(・・)！」

「第38コートで春日浦高校対天ヶ崎高校の試合を行います。選手はコートへ移動してください。」

「お、出番か。それじゃ…」

「ああ城戸くん、アーマメント装備じゃなくて今回は使い慣れてるオールレンジ対応型のムラマサストライカーに換装しよう。」

「分かりました！」

ムラマサストライカーに換装したストライクを受け取りコートへ向かうと既に対戦相手が待機しておりこちらに気づいた男の方が先に口を開いた。

「春日浦高校の平川 蓮太郎だ、よろしくな。」

「同じく三上 日菜です。」

そこから響たちも自己紹介をして4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning》Plavsky particle dispersal.  
Faird8, sky》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「ムラマサストライク、城戸 響。推して参る！」

「レオパルドデュルガー、小川 沙希。い、行きます！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは、障害物として戦艦が航行している上空だった。

「戦つてる最中に上がる事はあるけど最初から空のステージって初めてだな。」

「ホントですね…。」

「CAUTION!!!」

ゆるい雰囲気突然、アラートが鳴り響きステージについての感想を述べる戦艦を足場に跳躍を繰り返すストライクと同じように移動しているレオパルドの真横をミサイルが通り過ぎていった。

「なんじゃとて!？」

「前方に敵機確認しました…！送ります…！」

続く第2陣のミサイル郡を天羽々斬の斬り払いによる衝撃波を起こしその爆発によつて落ちていく戦艦を尻目に違う戦艦に乗り移り送られてきたデータを見つめると「バエルとガードフレームかな？バエルは目立った改造はしてないみたいだけど、ガー

ドフレームは追加武装のオンパレードか。」

「ならガードフレームの相手は私ですね…。」

ステージ中央まで移動した響たちが目にしたのは、ドダイに乗っていたバエルとガードフレームだったがお互いに出会った瞬間それぞれの獲物を構え突撃する。

「撃ち落とします…！」

「今のこの時代にリボルバー式!？」

ガードフレームから放たれた数えきれないミサイルに向けレオパルドが2丁のリボルバーマガジンで先頭のミサイルを撃ち落とし続くミサイルを誘爆させる。

「今です、城戸さん!」

「了解! 殿は任された! でりやあああ!!」

レオパルドがガトリングによって飛んできたミサイルを全て撃ち落としながら後退し代わりに飛び出たストライクが天羽々斬をガードフレームに振り下ろそうとした瞬間、その横から出てきたバエルに方向をズラされ戦艦に突き刺さってしまう。

「あ! 抜けない抜けないよ!」

「馬鹿め!」

続くバエルの追撃を天羽々斬を突き刺したまま軸にしてバエルを蹴り飛ばし、その遠心力を利用して天羽々斬を振り抜きドダイに飛びついた。

「行けよ、ドダイー！」

「それは俺らのドダイだろう!？」

ブースター全開でドダイを押し出しながら自身も天羽々斬をバツクパツクに戻してビームライフルに持ち替え、フルオートで連射するがその連射されたビームをバエルがドダイを盾に受け止めると反撃と言わんばかりにバエルソードを二刀流で振り下ろし腕部ナツクルガードでそれを防ぐ。

「ミサイル全弾落としなんて気軽に出来ることじゃないよね！」

「お褒めに預かり光栄、です…！」

ドダイを持つていかれたガードフレームが残っていたミサイルを全弾一斉射するがレオパルドの両腕で携えたガトリングにこれもまた撃ち落とされる。

「なら近接はどうっ！」

「早い…！」

ガードフレームがビームサーベルを抜き、ブースターを吹かし向かってくるのをレオパルドがガトリングで近づかれないように撃ち続けたが追いきれずガトリングを斬り伏せられ戦艦に顔面を押しさえつけられてしまう。

その押さえつけられた瞬間を見ていたストライクが戦闘中だったバエルにビームライフルを投げつけバルカンで爆発させるとガードフレーム目掛け天羽々斬を振り下ろ

す。

「貰ったあー！」

「しまった!?!」

その切っ先は間違いなくガードフレームを斬りふせるはずだったが、上空ということもあり空気圧の抵抗を受け僅かにガードフレームの装甲にキズを残しその隙を突かれ接近したバエルの脚部ヒートダガーの蹴り上げがストライクの胸部に食い込んでその動きを止めた。

「城戸さんー！」

「相方の心配をしてる場合なのー！」

「残るはアンタだけだー！」

近くに倒れ込んでいたストライクから天羽々斬を抜いて分割しその片方をガードフレームに向け投擲、何とか跳ね除けたレオパルドにその横から来たバエルのバエルソードがバックパックを貫き爆発によって膝をつく。

「ーッ！(っ)まで…！」

「諦めるな！まだバトルは終わってない！」

「(っ)の声どこから…！」

「蓮太郎っ！」

直後、膝をついたレオパルドにトドメを刺そうとバエルソードを振り上げたバエルに2本のビームが突き刺さる。

「支援ブースター!？」

「翼先輩に感謝しないとな…アーマメント装備だったら出来なかつた芸当だ。」

日菜と沙希が上空を向くとバエルによって落とされたはずのストライク、のバックパックであるムラマサストライカーが旋回していた。

「これで1対1。5だな、小川さん!ドッキング行ける?」

「は、はい!大丈夫です、ドッキングシークエンス開始3。2。1…」

ムラマサストライカーがバックパック形態へと姿を変えレオパルドに装着、残っていた片方の天羽々斬をバックパックに戻し膝からビームサーベルを抜きレオパルドがブースターを吹かしつつガードフレームへ肉薄する。

「悪あがきを!」

「私は負けられないんです…!」

同じようにビームサーベルを抜いたガードフレームと斬り結び何度か鏝迫り合いを行つたレオパルドがガードフレームを蹴り飛ばしビームサーベルを投擲、右肩に命中し大きく体制を崩したガードフレームにムラマサストライカーのビームキャノンが胸部を撃ち抜き爆発を起こす。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた日菜と蓮太郎と挨拶を交わし観客席へ戻り翼にストライクを見せながら

「一回戦目からストライクをこんなにしちやって…」

「それほど今回の地区大会が強敵揃いって事だろう、3回戦までには直しておくよ。」

「お願いします、とストライクを翼に預け今も戦い続けているスクリーンを除くと見覚えのある機体がボロボロになっていた。

「あれは石川先輩のアリオス…?」

「私も正直目を疑ったわ、あの恵美がこうもいたぶられるなんて。」

「はあ…、なんで今回に限って参加してるのかな、アンタは!」

「なあに、大したことじゃないわ。ただの暇つぶしよ。」

「会話が終わるか終わらないかの所で、突き出されたGNシールドがバキバキと音を立てて崩れ落ち腕が胸部を貫く。」

「さてと、貴方は私を楽しませてくれるのかしら。ねえ?城戸 響くん?」

直後、試合終了を知らせるアナウンスが静かに戦場に鳴り響いた。



## 第35話～見る人によつては地獄絵図～

「石川さんを倒したあの対戦相手！」

「城戸くんどうしたの？」

急に駆け出した響を追いかけた翼を除く木乃香たちがその背を視界に収め声を掛けようと近づくと誰かと話しているのが目に映った。

「ねえ、拓哉くんあの人誰？」

「いや俺も知らないですね…。あいつ人の知らない所で女をつて小川さん一旦落ち着こうぜ。」

「嫌ですね、安藤さん…。私は至つて落ち着いてますよ、ふふふ…。」

「あら、響くんじゃない。奇遇ね。」

「奇遇じゃないですよ何やってるんですか、琴音さん。」

「響くんとイチャイチャしてる彼女をこの手で貫くために来たのよ。」

「え!?!いや小川さんとはまだそこまで…。は！」

「へえ…。その彼女は「小川」って言うのね。覚えてたわ、そろそろ次の試合発表もあるでしょうしまた後でね？」

そう告げた琴音は、先程からこちらを見ていた木乃香たちを一瞥し沙希と目が合うとふっと微笑み観客席へ消えて行った。

「何だったんですかね？」

「沙希ちゃんを見てた感じだったけど……」

「あれ、部長たちどうしたんですか。」

奏と拓哉がこちらを見てきた琴音の様子について話していると少し遅れて響が帰ってきたのでちょうど良いと木乃香は問い詰める事にした。

「城戸くん！さっきの人は……」

「えーと、あれはそのく母の妹の旦那さんのそのまた姉の娘でして自分の従姉妹で昔からやたら面倒を見てくれるですよね、昔は一緒に遊んだり寝たりしてました。」

「ね、寝て……？？」

昔の話だから！と、沙希に必死に説明してある程度落ち着きを取り戻した所次の試合発表のアナウンスが鳴り響く。

「第17コートで天ヶ崎高校対洛陽高校の試合を行います。選手はコートへ移動して下さる。」

「戻ってる時間ないですよ!?!」

「えーい！こうなったら奏、行くわよ！」

「まっかせて、それじゃ行ってくるー!」

観客席に戻ってくじ引きをやる時間が取れず木乃香が奏を指名し、コートへ駆け足で向かい対戦相手である洛陽高校の選手と挨拶を交わした4人が筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginnning Plavsky particle dispersal. Fairdl, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「今井 木乃香、ストライクガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましょうか!」

「滝沢 奏、ケンプファー。狩りの時間だよ!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは、月面基地だった。

ゲートから出て近くの足をつけられる所に降り立った木乃香たちだったが早速バンダースナッチのアスタロトがチャージを始めており

「取り敢えずあの基地を吹き飛ばせば良いのかしら?」

「相変わらずエゲツない事をさらっと言うよね…」

「まあまあいいじゃない、吹き飛びなさいアスタロト!」

木乃香の言葉が終わったと同じぐらいのタイミングでアスタロトのチャージが終了し最大出力で悪魔の口からSEED特有の赤と白のビームが放たれ、前方にそびえ立っていた月面基地が跡形もなく消え去ったが相手方の機体は見当たらなかった。

「あれ? いなかった..」

「ダメだったね、代わりに仕掛けられてたのか分からないけどミサイル飛んできてるし...」

バンダースナッチが逆噴射をかけて後方に下がると、代わりに前に躍り出たケンプファーがコンテナからガトリングを取り出し片手で薙ぎ払うように撃ち続け1つ残らず撃ち尽くした辺りでガガガと突っかかる所を見つける。

「そっ!」

突っかかった所にミサイルを3発放ちすぐさまビームライフルを撃ち込み爆発させ、その際の衝撃で敵機体の光学迷彩が剥がれその姿が露わになった瞬間相手方から通信が入った。

「そのストライク、もしかして貴女がこの周辺の大会を潰して回ってるって噂の大会クラッシュャーですか?」

「何処で聞いてきたの!?!」

「その別名については否定しないんだ。」

木乃香の別名について話していると、突然アラートが鳴り響きバンダースナッチ・ケンプファーの前にいたジェスタが現れた可変機に飛び乗り飛び去っていった。

「あのバックパックはライトニング!?？」

「違う! あれジムスナイパーにフライトユニット付けてる!」

「追いかけるよ(わ)！」

飛び去った方角へ見失わないように適度に距離を取りつつ追いかけるとちやうどコロニーの搬入ゲートから中に入って行ったのを見つけ、その直前で立ち止まる。

「恐らく待ち伏せなんだろうけど、いつも通り突貫しよ!」

「がってん! やられないですよ?」

お互いにね、とコロニーへ入った2人を待ち受けていたのはジェスタとジムスナイパーによる射撃兵装のオンパレードだった。

「やっぱりね! ドラグーン!」

ケンプファーの武装コンテナから射出されたプロトドラグーン8基が打ち出されていたミサイルを誘爆させ、ビーム兵装をビームシールドで防ぎ役目を果たしたドラグーンを足場にバンダースナッチが跳躍する。

「次は私の番ね!」

跳躍したバンダースナッチが砲撃形態のままクールタイムに入っていた2機の間、割り込み対艦刀を振りかざし、ジェスタの左腕を斬り伏せジムスナイパーの方にも振りがこちらはタッチの差でクールタイムが終わって可変形態に移行されてしまい避けられてしまう。

「1機逃した!」

「そっちは私が!」

再び飛び去ったジムスナイパーをケンプファーがバーニアを吹かし追いかけるのを見届けると改めてジェスタの方を向き

「もう片方の腕も貰いましょうか?」

「流星は大会クラッシュャー…!」

「閃光弾?!」

対艦刀をサンライズパースで構え今にもバーニアを吹かして突撃しようとしたバンダースナッチの目の前にジェスタが苦し紛れの閃光弾を投げ距離を取ってくる。

「逃すものか!」

「早い!?!」

距離を取ったジェスタがライフルをこちらに撃ち込んで来るがバンダースナッチは体制を低くぐつと踏み込みジェスタの懐に潜り込むと、そのままの勢いで対艦刀を振り

上げ突き出していた右腕をライフルごと斬りとばす。

「逃がさないって言ったよね？」

「この人怖い！」

逃げようとしていたジェスタに向けバンダースナッチの左腕に装備しているパンツァーフアウストが射出され、左脚に喰い込むと木乃香はこれを思いっきり地面に叩き伏せる。

「これが私の実力よ！」

最後の抵抗と言わんばかりのシールドミサイルをシールドごと対艦刀で斬り落とし、返す刀でジェスタを真っ二つに斬り払い爆発が起きる。

「貫ったー！」

「右側のコンテナがー！」

可変形態のジムスナイパーと撃ち合いを続けていたケンプファーだったが、ライフルによる一撃で右側のコンテナの1つが撃ち落とされてしまい

体制が崩れたケンプファーが近くの廃ビルに顔面から突っ込んだ。

「これで落ちたかな..」

可変形態を戻し太もものホルスターからビームピストルを抜き慎重にケンプファーが突っ込んだ廃ビルに近づいた瞬間、銃声が鳴り響き右手からビームピストルが弾き飛

んでいた。

「まだ落ちて…？？」

「ないんだよ、これがね！」

ビームピストルが弾き飛んでから少し遅れて後方へ下がろうとしていたジムスナイパーの胸部にケンプファーのコンテナが衝突し、体制の崩れたジムスナイパーにトドメを刺そうとケンプファーがビームサーベルを抜き斬り伏せようとしたところで突如ケンプファーのビームサーベルが弾かれてしまう。

「えっ?！」

「勝負はこれから！」

残っていた片方のビームピストルを投げ捨てたジムスナイパーがビームサーベルを抜いて突きを繰り出してくるのをギリギリのところまで避けながら機体分析を試みる事にした。

（まずゴーグルが赤くなってるしEXAMだね、ってこれメイジン対レナート兄弟そのままじゃん！）

若干テンションが上がっていた奏だったが、視界の端に先程落とされたコンテナを見つ

け  
「あれは…よしやってみよ！」



「なんだ逃げるのー！」

近くに落ちていたビームピストルを拾いガトリングで牽制しつつ残っていたコンテナをそのまま射出しジムスナイパーにぶつけ先程、撃ち落とされたコンテナの所へ射出されたコンテナを斬り伏せたまさか誘導されているとも思わなかったジムスナイパーを誘い出しコンテナの横へ滑り込む。

「さっきのコンテナ!? 誘導されて…！」

コンテナに格納されていたパンツァーフアウストを全弾撃ちだし、先程逃走する際拾っておいたビームピストルで起爆させるとケンプファーはビームピストルを投げ捨てシヨットガンに持ち替えブーストを吹かし突撃する。

「よいしょー！」

パンツァーフアウストの爆発による煙をビームサーベルで薙ぎ払って散らした矢先、視界の先にケンプファーが迫ってきておりビームサーベルを振りかざすがその直前でブーストを切つてズサアと懐に潜り込んだケンプファーがシヨットガンを押し当て引き金を引き胸部に風穴を開けた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた洛陽高校の2人と挨拶を交わし観客席へ帰ると木乃香たちは驚愕の場面を目の当たりにする事となる。

「城戸くん…」

「うわあ、沙希ちゃんの目がこわーい…」

何故なら響の右の席には先程出会った女性、笹原 琴音が響の肩に頭を寄せていてその左側には沙希がなにかを言いたそうな目で響を睨んでいた。

「誰かこの状況を何とかして…」

響を中心にしたこの地獄みたいな状況は次の組み合わせ発表まで続いたそうなの。

## 第36話～硬いものこそ力でこじ開けよう～

「ほら試合のアナウンス始まったよ！琴音さん帰らないと、ん？」

「あ、やっと見つけた。笹原先輩帰りますよってあ…。」

一向に帰ってこない琴音を心配してか迎えにきた人の顔を見た響と相手の方も響の顔を見て固まる。

「あの時の」

声为重なつた瞬間、琴音を含むその場にいた全員が首を傾げていた。

「何処かで聞いた高校名だと思ってたけど、まさか琴音さんの所だったとは…。」

「僕もまさか笹原先輩の知り合いだとは…。」

「あら知り合いだったのね、それはまあいいとして龍、帰るわ。」

「え？？分かりましたよ！それじゃ城戸くんまた後で。」

龍馬と琴音が立ち去った後、木乃香達に龍馬との出来事を話し仕切り直すため木乃香が手を叩いた。

「さ、気を取り直してメンバー決めましようか。クジ引きといきたい所だけど城戸くん沙希ちゃん奏は機体の損傷が激しいから3回戦は私と拓哉くんで行きましようか。」

「部長連戦ですけど大丈夫ですか？」

「前の試合で私のバンダースナッチ目立った損傷なかったから大丈夫よ、ブランシエに換装するけどね！」

そう言った木乃香がポーチからブランシエユニットを取り出しバンダースナッチから換装して改めてしまい直した所でアナウンスが流れる。

「第10コートで天ヶ崎高校対星章学園の試合を行います。選手はコートへ移動してください。」

「さあ、行くわよー！」

「了解！」

コートへ向かい挨拶を済ませた4人が筐体を真ん中に挟み移動するとき木乃香が拓哉に疑問を投げかけていた。

「ねえ、拓哉くん。さっきの人拓哉くんの事知ってそんな感じしなかった？」

「そうですか？俺、見覚えないんですけど…。」

腑に落ちなそうな木乃香と拓哉がGPベースをセットする。

《Beginning Plavsky particle dispersal, Faird5, city》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「ストライクブランシエ、今井 木乃香。殲滅を始めましょうか!」

「ダブルオーガンダムセグエンテ、安藤 拓哉。飛び立つ!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージはU C e p i s o d e 4でユニコーンとシャムプロが戦闘を繰り広げた市街だった。

「それにしても、あいつから聞いてた通りてんこ盛りなんですね。」

「それから改修を重ねて関節周りは完璧よ。」

初めて響にお披露目したように空中でぐるりと一回転したが以前のようにギシギシとは言わなかった。

「味方にする頼もしいってこういう事なんだろうな...」

「さて、そろそろ地面に降りる?それとも吹き飛ばす?」

「先輩は手の内を隠すって事を覚えてください、とりあえず降りますよ。」

後輩に呆れられた!?と、多少落ち込んでいた木乃香だったがすぐに思考を切り替え地面に降り立ち、そこでちょうど相手方も同じ事を考えていたのか正面から姿を現わすが現れた機体を見て拓也が口を開く。

「お？何処かしてみた顔だと思ってたけど、相方は違うようだがあの時のセラヴィーか！」  
「やっぱり知り合ってたの？」

「この前、響とフリーで戦った時の人だったんですけど全く顔覚えてなくて今思い出しました。」

「そう… 女の子の顔は覚えてるのに、いつかマリちゃんから刺されても知らないからね…。」

今度は木乃香が呆れつつGNソードを展開し、セラヴィーの隣にいるズゴックに斬りかかる。

「謝っておきます。よし先手は取られたけど、こっちも始めるか！」

GNメガブラスターを両手で構えビームを撃ち込むがこちらはセラヴィーのGNフィールドに防がれてしまい

直後、セラヴィーの全身が紅く染まり拓哉の目の前から姿を消す。

「相変わらずかてえな！しかもいきなりトランザムとは… けどな今回は俺だつて積んでんだよトランザム！」

再び拓哉の目の前に現れたセラヴィーがビームサーベルを振り下ろす直前でセグエンテの全身も紅く染まりビームサーベルが空を斬ったと同時にGNメガブラスターから持ち替えたセグエンテのビームサーベルがその腕を斬りとばし

そのままの勢いで逆手に持ち替えたビームサーベルを突き立てるが横から飛んできたシールドビットに今度は防がれてしまう。

「厄介な盾だな…っ!?」

ビームサーベルを戻し代わりに大型ビームソードを取り出し、1基ずつ斬り伏せていくが数基落としたところでセラヴィーのレールガンによつてセグエンテの右脚が吹き飛ぶ。

「よくあいつこれ対処出来たな!こうなつたら俺のとつておきを見せてやらあ!トランザムエクスプロージョン!」

GNドライブから放出している粒子量が増幅され翼を形成し各コンデンサーからも粒子が漏れ出す中、先程吹き飛ばされた右脚からも噴き出しそれはまるでOOのキュリオスのようだった。

「そういや、セラヴィーの人一切喋らないな…この前もそうだったけどバトル中ら静かになる人なのか?まあいいか、行くぞセグエンテ!」

両肩の翼を羽ばたかせシールドビットを斬り伏せながらセラヴィーに接近すると、再びレールガンとガンビットによる射撃を行ってくるがセグエンテの周囲に貼られたGNフィールドに阻まれ射撃を諦めたセラヴィーが残ったシールドビットを前方のセグエンテに向け展開していた。

「いくらシールドビットを積み重ねようとな… あいつの盾に比べたらどうってことないんだよ！ エクスプロージョンノヴァー！」

近づくのを止め地面にしっかりと脚をつけて両肩のGNドライブから勢いよく噴き出していた粒子による翼が両手で構えた大型ビームソードへ収束、勇敢なる皇后に劣らずの超大型ビームソードを形成しセラヴィーの正面に貼られた4重のシールドビットを次々と粉碎していき最終的にGNフィールドを張ったセラヴィーごと斬り裂いた。

一方で木乃香はというと

「あーもう…なんなのこのアメイジングフルアメイジングフルズゴックはー！」

勢いよく斬りかかった木乃香だったが、腕と一体化しているGNソードに防がれ背部ビームキャノンを撃たれそれを防ぎ距離と取りながら戦っていた。

「ストフリじゃなくてズゴックをベースにした辺り、ジオン好きなのが見て取れるわね。」

続けてドラグーンを4基射出するが、あちらもドラグーンを8基射出し撃ち合いになり残った3基をヴェスパーで撃ち落としメガキャノン（弓モード）にトリアイナをかけるスロットから「射撃強化」を選択する。

「さあ、今回も派手に行きましょう？ 吹き飛ば壊れた幻想！」

メガキャノンに掛けられたトリアイナがビームランスを展開しながら音を立ててズ



ゴックへと突き刺さったように見え辺りに黒煙が立ち込めた。

「これでどうかしらって… 嘘でしょ？」

「この攻撃は予想外だったが、俺のズゴックはタフなんでなあ！」

フィールドに流れた風が黒煙を散らし、正面を向いた木乃香が見たのは左腕を失ってはいるものの十分戦闘が可能なズゴックだった。

「直撃コースじゃなかった？なら近づいて！」

ブランシエがGNソード（ライフルモード）で射撃を行いつつブーストを噴かし近づこうとするがズゴックのミサイルによって距離を詰められずにいると、突然脚部ヴェスパーが爆発を起こす。

「これは、アメズゴの腕のアレ!?？それにしてもアレの名前って何なのかしら…」

爆発が起きた方向を向くと有線によって繋がれたアメイジングクローが蠢いており木乃香がバルカンを連射し有線を切断する。

「ここは一度距離を… きゃあ!?？」

「逃がさん！」

一度距離を取ろうとしたブランシエだったが、追撃で放たれたミサイルを避けきれず地面に叩きつけられてしまう。

「これで終わりだ！」

「私たちはまだ終われない！」

「なにを今更：・ヴオワチュールリュミエールだと!?？」

ズゴックがトドメを刺そうとGNソードを振り下ろした瞬間、ブランシエの右肩にある翼からヴオワチュールリュミエールによる光が迸り地面に叩きつけられるがメガキャンオンでズゴックを挟み引き金を引いたと同時にブランシエの胸部に構わず振り下ろされたGNソードが突き刺さり直後ズゴックは爆発を起こしその爆発にブランシエも巻き込まれ爆発を起こした。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け、対戦してくれた選手と挨拶を交わし客席へ帰るところに来て昼休憩のアナウンスが流れる。

「続く準決勝は、昼休憩を挟んだのち行います。選手は休養をしっかりと行ってください。」

「さすが地区予選ともなると昼休憩挟むか、拓哉お湯入れに行こうぜ。」

試合会場の休憩スペースにあるポッドでお湯を入れ観覧席に戻って3分待っていた響と拓哉だったが、先に響が蓋を開け食べ始め

「おい、まだ3分経ってないぞ…。」

「知らないのか？カップラーメンって2分が美味しんだぞ？」

そうして、響たちは思い思いのご飯を食べながら昼休憩を過ごしたのだった。

### 第37話くそれぞれの想いを胸に秘めてく

昼休憩が終わり客席へ戻った天ヶ崎メンバーだったが翼が全員から機体を預かりメ  
ンテナンスに入ると黙々と作業を開始していた。

「さて、この中で戦える機体を持つてるのは？」

「俺は一応ビルドプロミネンスあるけど、準決勝で通じるかどうか。」

「こっちはまだ脚を直せばセグエンテいけるが連戦はちよつとな…。」

「私はアルケインなら…。」

「シヨットガンしか武装のないケンプファー!」

「そして私はブレイヴァー、と。私と拓哉くんは除外で城戸くん、沙希ちゃん、奏だけど  
城戸くんについては翼くんから発表があります。」

「決勝までにはストライク直せるから準決勝は休んでくれ。」

「という事は？」

「準決勝は沙希ちゃんと奏の2人ね!」

準決勝に出る人が決まった所で会場のアナウンスが流れだした。

「第4コートで潤雪高校対天ヶ崎高校の準決勝試合を行います。選手はコートへ移動

してください。」

「翼くん！私のケンプファーに組み込めそうな武装ある!?!?」

「射撃武装しかないね…。一つ提案なんだが僕のツールギス、奏なら使えるだろ?」

「当たり前でしょ！翼さんに使えて私に使えないはずないよ。」

翼からツールギスIIIイガリマを受け取り、ケンプファーを翼に預けポーチへしまつてコートへ向かおうと沙希に声をかけるため沙希の方を向くと響からなにかを受け取っていたので少し間をおいて

沙希と共にコートへ向かうと少し遅れて相手方の選手がコートに現れ沙希たちと挨拶を交わして4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットする。

《Beginning「Plavsky Particle」dispersal. Faird13, tundra》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「小川 沙希、Gーアルケインフルブラスタ。行きます!」

「滝沢 奏、ツールギスIIIイガリマ。狩りの時間だよ!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは氷柱が軒を連ねる氷山地帯だった。

「映像だから寒くない筈なんだけど、なんだか寒くなってきちゃうね。」

「そう、ですね…。場所がらヒート系武装積んでこなくて良かったです。」

ゲートを通過し氷山を蹴つてジャンプを繰り返すGーアルケインフルブラスターとハイパーバーニアの推力で飛行を継続できるトルギスⅢがステージ中央を目指していたがその途中で改めてアルケインを見た奏が唐突に口を開く。

「あれ？沙希ちゃん左肩のそれって…」

「城戸さんから借りました、使う機会が無いと良いんですけど…」

響から借りた武装の話をしたようにとした所でアラムが鳴り響いた。

「三時の方向に熱源2です…」

「こちらでも確認したよ！相手は… トリコロールカラーのゴッドガンダム？と黒いデステイニーガンダムだね！」

奏の言葉が終わるか終わらないかの辺りで2機の脇をよく分からない熱エネルギーが掠めていきその方向にバーニアを噴かして近づくとゴッドが先ほどの熱エネルギーを打ち出した構えをしていたのとデステイニーが仁王立ちでこちらを待ち構えていた。

「俺のこのマスターゴッドガンダムと踊ってもらおうか、素敵なお嬢さん方！」

「こっちが恥ずかしくなってくるからやめてくれ…」

「ごめんなさい・・・ダンスはちよつと・・・」

「沙希ちゃんたぶんそう言う事じゃないと思う。」

そう言った奏がGーアルケインフルブラスターの前に歩み出ると同じように相手方のデステイニーがこちらに視線を向け

「黒と白、どちらが強いか白黒つけようじゃないか。」

「上手い事言つたつもりか！と言うわけで沙希ちゃん、あのゴッドもどきは任せた！」

直後、トールギスⅢイガリマがビームサイズを目の前のデステイニーはフラッシュエッジをぶつけ罅迫り合いへ発展しその場から急速に離脱していった。

取り残されたGーアルケインフルブラスターとマスターゴッドは離脱していく様を眺めつつ改めてそれぞれの獲物を手にGーアルケインフルブラスターは引き金を引きマスターゴッドはバックパックを展開しブーストを噴かす！

「関節部分を的確に狙つてくるとは中々の腕前だ！」

「ビームを潰して・・・？」

Gーアルケインフルブラスターのスナイパーライフルによる射撃は的確にマスターゴッドの関節を撃ち抜くはずの放たれたビームは全て殴り潰され接近を許してしまうが、胸部を狙つた拳をスナイパーライフル下部のビームジュツテで防ぎつつ一度距離を取り大型ビームブレードを構えたマスターゴッドに対抗する為スナイパーライフルを

ラックに戻し代わりに大型ビームライフルを両手で構える。

「ほお、超近接機体であるこの俺と押されるとはいえ喰いついてくるとはな！近くに近接機体の相方がいて戦い方を見てると見える。」

「そうですね…。私にとつて大切な人が隣に…！」

マスターゴッドの振り下ろされた大型ビームブレードを対艦ライフルのビームサーベルを起動し受け流すと両腰の拡散ビーム砲で吹き飛ばす。

「これで…!?？」

「ふん…はっ！」

マスターゴッドを吹き飛ばした直後展開したソードドラグーンに加えマイクロミサイル、拡散ビーム砲、バルカン、対艦ビームライフル、ビームガン、アームガトリングといった全身の銃火器を用いた攻撃は体制を立て直したマスターゴッドがビームサーベルを2刀流で構えその場で回り始めてると竜巻のような物が発生しGーアルケインフルブラスターの放った弾丸やビームを全て巻き込んでいった。

「正直驚いたがこれで終いで行こう、ばあくねっ！ダークネスゴッドフィンガー！」

「城戸さん力を貸して下さい…！ブレイクフィンガー！」

赤と黒が混じったフィンガーに先ほど響から借りたムラマサストライクのフィンガーユニットを腕にハメ、ぶつけたブレイクフィンガーだったがGーアルケインフルブ



ラストアの機体特性に合わなかったのか出力が思ったよりもでず徐々に押されてきた沙希のブレイクフィンガーがヒビが入った瞬間砕けてしまいそのまま右腕が潰されてしまうがその左腕にはビームガンが握られていて

「ただではやられません…！」

「相打ち覚悟か面白い！」

右腕を握りつぶし過ぎ去ろうとしたマスターゴッドの胸部に突きつけたビームガンからビームが放たれる、その瞬間マスターゴッドの左腕も輝きを放っておりお互いに胸部を貫き爆発を起こした。

一方の奏はというと

「全く…この機体じゃなかったらもうやられてたよ！」

デステイニーの高出力ビーム砲の射撃をハイパージャマーを用いた強制ロックオン解除を交えながら躲していた。

「それらそれら！どうした逃げるだけかあ!?？」

「たしかにこのまま逃げ回っててもいずれ限界がくる…：：なら私がやる事は！」

続く射撃に合わせツールギスⅢイガリマのメガキャノンが火を噴き両者のビームがぶつかったように見えたが実際はギリギリの所ですれ違いデステイニーは高エネルギー長射程ビーム砲をツールギスⅢイガリマは右側のメガキャノンを撃ち抜く形とな

り爆発を起こす。

「やってくれたな…。」

デステイニーが光の翼を展開しながらビームライフルを撃ち込んでくるが、トールギスIIIイガリマは両翼を前方に展開しグローブ形態へ移行しビームを防ぎつつデステイニーの前に躍り出るとグローブ形態を解きビームサイズを振り上げる。

「死神のお通りだよ!」

「そう簡単にやられるか!」

さすが準決勝と言うべきか武装の切り替えが早く振り上げられたビームサイズをバックパックから伸ばしたアロンダイトで受け止めてそのまま掴み斬りはらい

その後もアロンダイトとビームサイズによる罅迫り合いを繰り返していたが、トールギスIIIイガリマのシールドから射出したビームワイヤーがデステイニーの脇腹を貫き体制を崩すとその隙を見逃さずアロンダイトを絡めて斬り捨てる。

「翼くんの言葉を借りるなら死神の姿を見たものは消さないとってね!」

「小癪なあ!」

トールギスIIIイガリマが追撃でビームサイズを振り下ろそうと鎌を振り上げた瞬間、デステイニーの右手が輝き右脚が爆発を起こしよろけてしまうが後方にブーストを噴かして壁に激突しながらもビームサイズで切り取った氷柱を数本投げつけ

「氷柱なんて投げやがって…。」

「氷柱だけだと思おうでしょ？ところがぎつちよん！」

投げられた氷柱をパルマファイオキーナで蒸発させ辺りに舞った雪煙と機体色が白のお陰でデステイニーの視界から外れたツールギスⅢイガリマが再びビームサイズを振り上げデステイニーの片腕を斬り飛ばしそこからタツクルで地面に叩きつける。

「貫け、メガキャノン！」

「離せ離せよお！」

左脇に抱えたメガキャノンをデステイニーの胴体にグツと押し付けチャージを始めている間にもなんとか逃れようとパルマファイオキーナでツールギスⅢイガリマの頭部を鷲掴んで剥がそうとする中とうとう頭部が爆発を起こすがそれと同時にチャージが完了しおもむろにその引き金を引きドゴオオオ！と音を立てながら近くの氷柱ごとその一角を吹き飛ばした。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた選手と挨拶を交わし観覧席に戻った沙希たちは、ちようど試合が終わったらしい映像を見て固唾を飲んだ。

「準決勝で出なかったという事はやっぱり決勝には出てくるよな…。」

「良いじゃねえか、見せてやれよお前の覚悟ってやつを。」

「そうだよ、君に全てを託す。」

そう言い渡された翼から修理の終わったストライクを受け取りポーチへしまった所で、待ちに待ったアナウンスが流れる。

「只今より第一コートで天ヶ崎高校対武蔵野高校の決勝試合を行います。選手はコートへ移動して下さい。」

地区予選決勝が今始まろうとしていた。

## 第38話～その覚悟の先に～

アナウンスを聞きコートへ移動しようとしていた響たちを翼が呼び止めた。

「さっきの試合映像を見たんだけど彼女の機体、アストレイベースで君と似たようなタイプだ、そこでこの前のあのシステムを使えるようにしたからここぞって時に使つてくれ。」

「ありがとうございます！俺、行つてきます。」

「心構えはバッチリだな！さあ、行こうぜ相棒！」

「城戸さん、頑張ってください！..！」

「おう！小川さんも行つてくるね。」

駆け足気味でコートにかけた響たちを涼しい顔で琴音と龍馬が待ち受けており、琴音が口を開く。

「やっぱり勝ち上がったのね..！」

「琴音さん、このバトルに勝つて貴女に証明します。俺の覚悟つてやつを。」

「そう、なら私はその覚悟とやらを叩き潰して私なしではいられなくしてあげる。」

「笹原先輩、その言い方だと多少どころか大きく語弊があります..！」

「確かに、えつと岡田だっけか？の言う通りだ。けどな、勝つのはウチの響だ！」  
筐体を真ん中に挟んだ4人はGPベースをセットする。

《Battle Damage level set to A》

《Beginning Plave sky particle dispersal.  
i ardl, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ムラマサフルアイギスストライク！押して参る！」

「安藤 拓哉、ダブルオーガンダムセグエンテ！飛び立つ！」

レバーを動かし機体を発進させる。

「なあ響、そういうやあの盾は使用できるようになったのか？」

「ん？ああ、翼先輩が組み込んでくれたらしいんだけど今のままでと放出量が多すぎて  
粒子量が足りなくなつて使えないんだよな…。」

「成る程な、確かに初めて使った時SEED発動状態にもかかわらず粒子切れで負けた  
もんなあ。」

「それでこの盾が付いてるんだけど、アプソーバシステムの劣化版で回数が決まってる

らしいんだよね。」

新しく翼から付けてもらった盾を何度か開閉を行い動作に不備がないのを確認した響たちの画面にアラート通知が鳴り響いた。

「やつと来たか。拓哉、いつも通りにな。」

「いつも通り、にな。分かってるって。」

「あら、遅れてしまったかしら？」

「いえいえ俺らも今来たところなんで。」

「あの子との関係を継続したいのであれば私に勝って証明してみなさい。」

「琴音さん……俺、貴女に勝ちます！」

直後、先頭のアストレイグリーズとムラマサフルアイギスストライクがブーストを噴かしながら加速しそれぞれの獲物をぶつけ合う。

「くっ！この腕タイタスか！！？」

「軽いわ、打ち合ってるのか不安になるくらい。」

「言わせておけば！行け、シールドドラグーン！」

ムラマサフルアイギスストライクから射出された6基のシールドドラグーンは不規則な軌道を描きつつアストレイグリーズの周囲を取り囲むが、次の瞬間逞しい追加腕から元のタイタスについていた肩部のビーム剣山がシールドドラグーンを4基ほど貫か

れていた。

その光景に一瞬だが揺らいでしまったムラマサフルアイギスストライクの右肩を思いつきり右ストレートで殴られ弾き飛ばされるが、残っていた2基のシールドドラグーンを足場に体制を立て直しビームダガーを投擲する。

「こんなもので私の動きを止められるとでも。」

「これで良いんだっ！拓哉！」

「任せろ！ダブルオーガンダムセグエンテ、目標を狙い撃つ！」

ダブルオーガンダムセグエンテが両手に持った2丁のビームライフルで連射するかと見せかけて、片方だけ最大出力で撃ち放す。

最大出力で放ったビームライフルが反動で弾かれるが、防御のために掲げられたビームシールド発生器を撃ち抜き体制の崩れたアストレイグリーズの追加腕の手首をもう片方のビームとビームダガーが貫いた。

「笹原先輩、援護する！一の型、蒼龍烈火！」

「その攻撃は一度見た！拓哉は前に行け、ソウルプリデジョンシールド！」

「なんじゃあ!?？」

ムラマサフルアイギスストライクが右腕のシールドを前に掲げるとそのシールドの口が開き、スサノオから放たれた蒼い炎はシールドに吸収され消え失せる。



「炎をエネルギーに変換したのか!?!」

「ぶつつけ本番だけど、上手くいって良かったな…。」

蒼い炎を全て吸収しその粒子がムラマサフルアイギスストライクのエネルギーに変換されるとそのままビームライフを選択、至近距離からスサノオに向け乱射する。

「厄介な盾だな!」

「そりやどうも!」

撃ち出されたビームを斬りながら後退せざるを得なくなったスサノオを追撃している。

「おっと、あの2人の所へ行く前に俺と遊んでもらおうか!」

「邪魔ね…。」

スサノオとムラマサフルアイギスストライクの攻防に加わろうとしたアストレイグリーズの目の前に、GNバスターソードを携えたダブルオーガンダムセグエンテが立ちふさがりブーストをかけて突撃する。

ビーム剣山を展開したアストレイグリーズの飛び膝蹴りに対してガードするが思いのほかの質量にGNバスターソードが根をあげヒビが入ってしまう。

「ああ!?!?嘘だろ?」

「響くんよりは重いけれど…。」

ビビの入ったGNバスターソードを投げ捨て、再びビームライフルを両手で構え撃ち込むと狙い変わらずビーム剣山に当たるはずのビームは残っていたビームシールドに防がれる。

続けてビームサーベルを抜き二刀流で斬り込んでいこうとしたがモニターを見た拓哉は

「おっと、時間かアンタの相手はこれまでだ！」

「目くらまし・・・」

追加腕の拡散ビームによる攻撃にダブルオーガンダムセグエンテが手に持っていたビームライフルを投げつけわざと爆発させ、その隙にその場を後にする。

「最初からこうすりや良かったんだ！」

「そういや、GN機体だったなスサノオは・・・」

ビームライフルによる追撃をしていたムラマサフルアイギスストライクだったが突如思い出したかのように張られたGNフィールドに苦戦を強いられていた。

なんとか攻撃を試みるが一向に通らず逆にGNフィールドを貼ったままのスサノオにタックルを受け吹き飛ばされ小惑星に激突する。

「拓哉にも似たような事をされた気がするな・・・って姿勢制御が!?？」

「これでしまいじゃー！」

激突した衝撃で体制の崩れたムラムサフルアイギスストライクの頭上からスサノオが日本刀を振り下ろそうとするが、唐突にビームダガーが目の前を通過していった。

「悪い響、コイツの相手は俺に任せてくれ。」

「拓哉お前…。」

やられる、そう思った響の目の前に現れたのは武装の半分以上を失っていたダブルオーガンダムセグエンテだった。

スサノオの日本刀を残っていた大型ビームソードで弾き、そのままグツと踏み込みGN粒子を放出しながらスサノオと鏖迫り合いにもつれ込む。

「笹原先輩を相手によくその程度で済んだな。なら…。」

「ああ、正直やられると思ったけど何とか。それじゃ…。」

「始めるかあ！トランザム！」

紅い残像を残しながらそれぞれの獲物をぶつけ合った2機が、行く手を阻む戦艦やMSの残骸を粉碎しつつ再度斬り結んだ。

「スピードとパワーは互角か？」

「らしいな、けどここから先は一方通行だ！トランザムエクスプロージョン！」

両肩のGNドライブから放出されているGN粒子が増幅し翼の形を形成して、スサノオを吹き飛ばし戦艦の残骸を蹴り付けながら加速し大型ビームソードでスサノオの右

脚を斬りつける。

「クソ！どこかでやられてたまるか。参の型、桜雪一閃！」

「な？？粒子変化だあ？？」

すれ違いざまに振られた斬撃をギリギリの所で躲したダブルオーガンダムセグエンテだったが、大型ビームソードとGN粒子による翼が右側は凍りつき左側は桜へと姿を変え砕け散っていった。

しかしすぐ翼が展開したのを見た拓哉は安堵する事なく固唾を飲んだ。

（今のはまぐれで躲せたが次は確実に胴体を突いてくる…。なら俺が取るべき行動は！）

「相打ち覚悟か？？」

「相打ちだ？それはどうだろうな！星屑と化せ、エクスプロージョンノヴァ！」

方向転換したダブルオーガンダムセグエンテがスサノオ目掛けブーストを噴かし、今もなおランザム中のスサノオが両手の日本刀を一つに重ねこちらを迎え撃つがそれよりも早く両肩から勢いよく放出されているGN粒子が右腕に収束、構えた右腕で思いつきりスサノオの顔を殴りつけ弾き飛ばされたスサノオから爆発が起きる。

「はあはあ、これでどうだ…。けどもう動けねえな。後は任せたぞ相棒。」

遠く離れた所で自身と同じく戦っているであろう相棒に想いを託すとカメラアイか

ら輝きが失われ動きを止めた。

「しつこい男は嫌われるわ。」

「リアルではしつこくないんで！多分だけど…。」

アストレイグリーズによる3本腕の連続攻撃を右腕のソウルプリデイジョンシールドと左手に持ったトリアイナで捌いていた。

しかし、ここでトリアイナが音を立てながら碎けてしまう。

「守ってるだけじゃ勝てないよな…。」

残った部分をラックに戻しビームサーベルを振りかざしビームシールドを斬り伏せると、追加腕の関節に突き刺しイーゲルシユテルンで爆発させる。

「私のこの機体をここまで壊したのは響くんたちが初めて。けど、そこまでね。」

未だ乱射しているイーゲルシユテルンの発射口を頭部を鷲掴みにする事で握りつづしそのまま宙に漂わせ全身のビーム兵装を展開、突撃の構えを取っていた。

「この一撃を止められるものなら止めてみなさい。」

「さっきのアブソバでギリギリだけど、溜まってるから行けるか!? SEEDからのオールガードニアスアヴアロニア  
全てを守りし理想郷。」

「SEED system standby. Remaining until  
he time limit of 180 seconds.」

アストレイグリーズの全身から展開しているビーム兵装によるタツクルを受けるため響はスロットからSEEDを選択、更にそこから「SPシールド」へと繋げるとSEEDによる蒼い粒子の翼がソウルプリディジョンシールドに流れ敢えてアブソーバに飲み込ませて吸収しきれなかった分が溢れ出し折りたたんだ翼のようなビームシールドが形成され目の前のアストレイグリーズに叩きつけた。

「盾で殴ってくるなんて…。」

「俺は！盾でブン殴る！」

ビームラリアットをビームシールドで相殺し、そのままの勢いでビームキャノンを撃ち放ち左腕を消しとばした所で想像していたよりも早くSEEDが終了する。

「SEED終了、粒子の消費を抑える為ビームの出力を制限します。」

「今のストライクにビーム兵器はないからちようど良い！」

SEEDの終了した今では重荷でしかない盾をパージし腕部装甲を纏った拳と振り出されていたアストレイグリーズの本来の拳がお互いの頭部に直撃する。

だが、大型化した脚部のお陰でアストレイグリーズが踏ん張りを見せるがムラマサルアイギスストライクの方はよろけてしまう。

「これで終わり。」

「届くか!?？」

よろけて膝をついたアイギスストライクの眼前にビーム剣山を展開したアストレイグリーズが迫り何か逆転の手は無いかと辺りを見渡した響の視界に入ったのは…

「これが、俺の覚悟だ！」

「たしかに受け取ったわ…」

アストレイグリーズのビーム剣山はムラマサフルアイギスストライクの頭部を突き刺し、先ほど手に収まったトリアイナの穂先は胸部を貫いていた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け戦い抜いた響たちが観客席側に振り返るとその試合を見ていた人たちから拍手が起こり、前方から琴音と龍馬が歩み寄ってくる。

「安藤くん、今度またリベンジさせてもらっても良いですか？」

「それは良いんだけど、さっきとキャラ違うくないか。」

拓哉と龍馬が握手を交わしているのを横目に改めて琴音を見る。

「おめでとう、響くんたちの勝ちよ。それと、沙希さん？との交際も認めないといけないわね。」

「え、俺まだ小川さんと付き合っていない…」

「嘘でしょ？紫織から聞いてた話と違うじゃない。」

「もしかしてこんな事になったのって、紫織ねえの仕業かあああ！」

その後、授賞式を終えた響たちの地区予選は優勝という形で幕を下ろしたのだった。



## 第39話～裁定者の判決～

地区予選が終わった次の週、優勝をもぎ取った響たちガン普拉バトル部一行は温泉旅館を訪れていた。

「ったあああ！温泉旅館再び！」

「それにしても地区予選優勝でヤジマ商事から温泉旅行に招待されるなんてな。」

「そういやそうだ、と木乃香の方に視線が集まっていたがとうの本人はあっけらかんとしており

「それ程、ガン普拉バトルに力を入れてるんでしよう。私たち以外にも招待されてるみたいだしね。」

「凄いですね…。」

「立ち話も良いけど、僕ら以外の人たちはもう移動したみたいだよ。」

「そーだよ！早く行かないと！」

「駆け足気味に旅館に入った響たちが見たのは色々な制服に身を包んだ高校生の集団だった。」

「全国から集まってるんだな。」

「当たり前よ、北海道や沖縄の両極端からも来てるんだから。取り敢えずカギを貰ってくるわね。」

フロントでカギを受け取りその内の一つを翼に渡しそれじやまた後でね、と木乃香の解散の命を受け部屋に向かいつつファイタールームの位置を確認し

「翼先輩も宴会の前にやりませんか？」

「いや、僕は遠慮しておこう。ストライクの新武装の調整があるからね。」

「了解です。」

「じゃあ行つてきます。」

部屋に荷物を置き湯浴みに着替えた響と拓哉が宴会前に軽くバトルしていくかと、曲がり角を進んだあたりで誰かとぶつかってしまう。

「いったあ..」

「ん？なんだ今感覚は.. 何？」

数回ほど右手の感触を試していたところ、目の前の女性の顔がみるみる赤くなり振上げたビンタが響の顔を直撃した。

「まだ誰にも触られた事ないのに！」

「え!? いやすみません.. ホントにそう言うつもりじゃなくて不可抗力というか..」  
未だ顔を赤くしている女性に罪悪感しか覚えなかった響にできる事は地面に額をつ

けてひたすら謝る事だった。

「ま、まあ？ 幸いな事にここはガン普拉バトルが出来る旅館ですし？ 私からの挑戦を受けてもらえればこの事を騒ぎ立てるつもりはないけど？」

「ガン普拉バトルで？ それで済むなら願ったりなんだけど…」

バトルを受けるために腰のポーチから愛機を取り出そうとしたところで拓哉がその手を止める。

「おい響、やつちまったな…」

「どうした拓哉、俺の行く先はファイタールームじゃなくて警察か？」

「彼女は、全国ガン普拉バトルレディーストーナメント個人の部優勝の経験を持ち決勝では相手の機体から四肢を引きちぎり頭部すらも斬り落とした事から付いたアルバレイターエンブレス「裁定の皇后」の異名を持つ立花 美咲だ！」

「そつちの地域だと私ってそうやって伝わってるのか、まそういう訳だけどまさかやらないとか言わないよね？」

「当たり前だ、起きた事は最低だけどそんな凄い人と出来るんだやらなきや損だろ。」

「そうこなくつちや、後ダメージレベルはAで。私を辱めた事を後悔させないと。」

「その発言は誤解があるからやめてえ！」

ファイタールームへ足を進め筐体を真ん中に挟んだ2人はGPベースをセットする。

《Battle Damage level set to A》

《Beginning Plavsky particle dispersal. Faird4, sity》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、ムラマサフルアイギスストライク！推して参る！」

「立花 美咲、リブラドミナント。さあ、始めよつか！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは、古びた高層マンションが軒を連ねる廃墟だった。

地区予選決勝での損傷を改修したムラマサフルアイギスストライクが宙を掛け地面に砂煙を立てながら降り立つ。

すると目の前から同じように砂煙を立たせ立花 美咲の機体、リブラドミナントが姿をあらわす。

「これが拓哉の言ってたアルバレイターエンブレ「裁定の皇后」の機体……見た感じペイルライダーベースっぽいな。」

「先に言っておくね、私は今回のバトル本気は出さないよ。」

「前大会優勝だか知らないけど、最後まで同じ台詞を言えるかな！」

「それなら始めよっか、先手は譲ってあげる。」

ムラマサフルアイギスストライクが右手に持ったトリアイナはリブラドミナントを貫く事はなく逆に裏拳を決められ近くの廃ビルに顔面から突っ込んだ。

「いったあ！これがリアルだったら気を失ってるな……」

「そのまま気だけじゃなくて落ちちやいなよ！」

瓦礫を押しつけ起き上がったムラマサフルアイギスストライクの眼前には、リブラドミナントが迫っており突きつけられたビームサーベルをすんでのところで躲し更に違う廃ビルに突っ込むが回避行動を取ってる場合ではない。

腕部からビームライフルを取り撃ち続ける。

「えっと……ビームライフルの撃ち方って分かる？教えてあげようか？」

「今小川さんに教わってる最中だから大丈夫！」

撃ち出されたビームを最小限の動きで躲し振り下ろされたビームサーベルにムラマサフルアイギスストライクもビームサーベルを抜刀、斬り結び横に流しつつ蹴り飛ばし距離を取る。

「よし、この隙に！部長の壊れた幻想をアレンジしたコイツで！」

「お？何を見せてくれるのかな♪」

「強者の余裕ってやつか、なら受けてみる！ライトニングブラスト！」

リブラドミナントを正面に捉えつつ上空へ舞い上がったムラマサフルアイギスストライクはSEEDをトリアイナのみを展開し雲を割きながら急降下、その蒼い粒子を纏った切っ先は間違いなく突き刺さる筈だった。

「嘘だろ？いくら試験的だったとはいえ砂煙を被ったぐらいなんて…」

「うーん、勢いと迫力は満点なんだけど肝心の命中率が悪いね。後数センチあつてれば片腕ぐらいはあげれたかな！」

美咲の助言？を受けた響が見てみると確かに数センチ程ずれており、その後のことを考えていなかったトリアイナは深々と地面に突き刺さつていて抜けず恐る恐る顔を上げるとビームサーベルがムラマサフルアイギスストライクの左肩を抉りさっきのお返しと言わんばかりに蹴り飛ばされる。

「ありや改良が必要だけど今は！行けよ、シールドドラゴン！」

「そのドラゴンもらつちやおうかなあ。」

ムラマサフルアイギスストライクの両翼から射出された6基のシールドドラゴンが勢いよく向かつていったがリブラドミナントの射程距離に入った瞬間その動きを止めしてしまう。

「まさか…」

「そ、「サイコミュジャック」が私のリブラドミナントには組み込まれてるの。それじゃよろしくねドラグーン！」

動きを止めていたシールドドラグーンがリブラドミナントの周囲を飛び始め、指先をムラマサフルアイギスストライクの向けると弾かれたように動き出しビームの刃を放出しながら装甲を少しずつ切り刻んでいく。

「いくら自分の物とは言えめんどくさいな！纏めて薙ぎ払う！」

リブラドミナントに背を向けて少し狭い路地へ逃げ込むと方向転換、ソウルプリデイジョンシールドのビームキャノンを起動しそのまま撃ち放す。

放たれたビームの渦はシールドドラグーンを正面に捉えると5基巻き込みそこから撃ち逃した1基をビームサーベルで斬り伏せる。

「面白い盾だね、ちよつと貸してよ！」

「貸して？それはどういう意味…!?？」

だ？と言葉を続けようとした響のムラマサフルアイギスストライクのシールドを付けていた左腕の付け根にいつのまにか接近していたリブラドミナントのビームサーベルを突き立てられて緩くなった所を強引に引きちぎりソウルプリデイジョンシールドが強奪され

「強引すぎるだろ！」

「褒め言葉として受け取っておくね、アブソーバがついてるんだあ凄い凄い。」

ビームライフルを再び撃ち続けるが、そのビームは全てリブラドミナントのソウルプリデイジョンシールドに飲み込まれ消え失せる。

撃つていたビームライフルを投げつけビームダガーを投擲しようとした瞬間先にリブラドミナントのビームガンがビームライフルを撃ち抜き逆に怯まされ引きちぎられた右腕で顔を思いつき殴られ思わず膝をつく。

「それで？これが君の限界なの？ガツカリ…。」

「クソ！見てろよ、俺の本気はこんなもんじゃない。SEED！」

「SEED system standby. Remaining until  
he time limit of 180 seconds.」

蒼い粒子を纏ったムラマサフルアイギスストライクがリブラドミナントの周囲を高速で移動しながらビームサーベルで斬りつけるが、その一撃一撃を的確に躲かれ背後に回ってビームサーベルを突き立てようと腕を振り上げた瞬間、目の前のリブラドミナントが上半身だけ後ろを向きその腕を掴んだ。

「嘘だろ？俺SEED中なんだけど？？」

「関係ないよ、トランザム系の挙動は頭の中に入ってるからね！」

そう言い切りおもむろに地面に叩き伏せ、ソウルプリデイジョンシールドのアブソー



バをムラマサフルアイギスストライクの胴体に押し付けるとSEEDの蒼い粒子が凄まじい勢いで吸収されていく。

「これ以上吸わせてたまるか！」

「はあ、うざっ。」

イーゲルシュテルンを乱射してアブソーバの開閉口を潰し使い物にならなくした響だったが、お返しと言わんばかりにリブラドミナントがムラマサフルアイギスストライクの頭部を鷲掴んで発射口を潰しそのままビームサーベルで斬り払われる。

「まだだ、まだメインカメラと左腕と左足がやられただけだ…。」

掴まれていた頭部を失った事で自由を取り戻し出来る限り後方に下がったムラマサフルアイギスストライクの蒼い粒子が徐々に弱まってしまふ。

「SEED終了、粒子消費を抑えるためビームの使用を制限します。」

ここで肝心のSEEDが終了し距離を取る事に集中しすぎた結果廢ビルに突っ込む。「今更だけどビル多すぎだろ!??なんで俺の行く先々にビルあんだよ!」

「さあ、懺悔の準備は出来ているか♪」

リブラドミナントがブーストを伴った前蹴りでムラマサフルアイギスストライクを蹴り倒し体制の崩れた所でバキバキと右足を踏み潰すと、最後に残っていた右腕をもビームサーベルで斬り飛ばされる。

「じゃ、さようなら!ん?」

「ぶ、部長!? どうして…!」

「拓哉くんから連絡を受けてね、もうこの辺でいいんじゃないかな? このバトルは貴女の勝ちよ。」

四肢と頭部を失ったムラマサフルアイギスストライクはなす術なく胴体に押し当てられたビームキャノンからビームが放たれるその直前、当初居なかった木乃香のストライクガンダムバンダースナッチが対艦刀を振りかざしながら乱入しリブラドミナントを引きがす。

「YOU WIN…!」

スクリーンが溶け自身の愛機を回収した美咲は

乱入はあったけどスッキリしたしこの程度で許してあげる、と言葉を残すとファイタールームから去っていきこの場に残っているのは胴体のみが残りポロポロになったムラマサフルアイギスストライクと木乃香を含む3人だけだった…

## 第4章く全国大会く

### 第40話く舞い降りる翼く

ムラマサストライクを回収し木乃香と別れ部屋に戻った響たちは、翼に機体を預け事の次第を話していた。

「と言うわけなんです…。それで俺のストライク、直りますか…?」

「僕に直せない機体はないよ。時間は掛かるだろうけど直してみせる。」

「お願いします。」

その後、本来の予定通り宴会が行われ会場に足を踏み入れた響は中心部で先ほど対戦した美咲の姿を見ると隠れるように隅の方へ移動して

始まった宴会も司会の人が出てきて何かを口にしていたが耳が雑音と判断しぼーつとする事しか出来ず美味しいはずのご飯も殆ど喉を通らず箸を置いてしまっていた。

「悪い、ちよつと席外す…。」

「おい響!」

その場から逃げるように会場を飛び出し、飛び出す直前で木乃香が何処かに連絡を取っていたのを尻目にこれからどうするかぼんやり考えながら歩いていると前を見て

なかつた所為で柱に衝突する。

「いった… 気晴らしにちよつと風にでも当たつてくるかな。」

ロビーを出て近くのベンチに腰掛け夜風の気持ち良さを肌を感じながら星を眺めていると両肩に手が置かれていた。

「うおおい!!? は? え? ま、舞姫?」

「そうです、舞姫です。」

「舞姫どうしてここに?」

「どうしてって地区大会突破校は呼ばれてるからでしょ。そんな事より、ねえガンブラバトルしない?」

「残念ながらムラマサストライクは翼さんに預けてるし機体が無いんだ。」

「それなら大丈夫お姉ちゃんからバンダースナッチを預かってきたから。」

「バンダースナッチを? でも俺は今バトルする気がないんだ…」

「その性根を据えるために私はお姉ちゃんに呼ばれたの。」

「部長に?」

「そうだよ。だからやるよ、ガンブラバトル!」

(この押しの強さ部長とそっくりだな…)

舞姫からストライクガンダムバンダースナッチを受け取り2人はファイタールーム

へ足を運び筐体を真ん中に挟んでGPベースをセットする。

《Battle Damage level set to B》

《Beginning Plave sky particle dispersal. Faird2, desert》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「ストライクガンダムバンダースナッチ、城戸 響。推して参る！」

「今井 舞姫、ロストフリーダムレーヴェ。殲滅を始めようか。」

ゲートから飛び出た2機が砂煙を巻き上げながら降り立つ。

「ロスト：：フリーダムだよな：：？」

「そうだよ、改修したの。」

そう言った舞姫のロストフリーダムレーヴェが背部ウイングから実体剣を2本引き抜き、その内の1本を響に突き付ける。

「さ、始めようよ。」

「ホントにやるのか？俺は：：。」

「ごちゃごちゃ言うな！」

もう片方の実体剣を振り上げようとしたのを感じ取り自身に届く直前で腕を押さえつつビームライフルをしまいビームサーベルを抜刀、振り下ろそうとしたところで蹴り飛ばされてしまう。

「な!?? 以前より早い!」

「判断が遅い! 何で今ビームライフルをしまったの! ノーカンでも撃つてれば何処かしらに当たってた!」

蹴り飛ばされた先が悪かったのか、体制を立て直そうと地面についた手がめり込みどんどん沈んでいくがストラライカーパックの推力を全開で使い空中に浮かび上がったところで今度は頭部を殴られ落下していく。

「くあ! 重量の所為で重い...」

「今更!」

地面が砂と言うこともあって落下によるダメージはほとんどなく安心した響はビームライフルに持ち替え撃ち続けるがロストフリーダムレーヴエは臆する事なくブーストを噴かし突撃、すれ違い様にストライクガンダムバンダースナッチのビームライフルを切り刻む。

「ライフルが!??」

「いつもの勢いはどうしたの?」

持ち手だけになってしまったライフルの残骸を投げ捨てイーゲルシュテルンを連射しながらビームサーベルを抜いて振り下ろすとロストフリーダムレーヴェもこちらに向けてアロンドイトを振り上げ鏢迫り合いにもつれ込んだ。

「近接戦闘で負けるのか!?」

「キレがない!」

鏢迫り合いにもつれ込んだ2機だったが、先にストライクガンダムバンダースナッチのビームサーベルの柄が弾かれ地面に膝をついてしまう。

「ほらな、所詮俺の力なんてこんなもんなんだよ!今まで勝ってきたのだからマグレだったって事だ...もうこのまま首をはねてくれ。」

「まぐれだったって?それは今までアンタに負けた人が弱かったってことになるでしょ!??しかも生殺与奪の権利を人に委ねるな!」

膝をついていたストライクガンダムバンダースナッチの頭部を掴み持ち上げながらそのまま放り投げる。

「な!?俺が...」

「私が認めたアンタはそんな軟弱じゃなかった!」

顔を上げた響の目前ではロストフリーダムレーヴェがビームライフルを連結させ充填を始めており「このままでは落ちる」そう判断しビームダガーを投擲、撃ち込まれた

ビームとぶつかり爆発が起きた。

「良いさ、ならとことんやってやる…。」

「そこなくつちやね！」

立ち上がったストライクガンダムバンダースナッチの6連ミサイルから残弾が空になるまで撃ち続け、撃ち終わったポッドをパージするとロストフリーダムレーヴェは向かってきたミサイルを逃げるわけでもなく両手で構えた2本の実体剣を勢いよく振るい衝撃波で先頭が爆発し続けて残ったミサイルを誘爆させる。

「ほら、使える手は何でも使わないと。多少性能は劣るけどお姉ちゃんのバンダースナッチでも使えるやつがあるでしょ？」

「敢えて使わないようにしてたけど、そつちが使えつてんなら…。SEEDⅡ「ツヴァイ」！」

「SEED system standby. Remaining until  
he time limit of 60 seconds.」

蒼い残像を残しながら逆手に持ち替えたビームサーベルで背部ウイングの1枚を貫き、ロストフリーダムレーヴェが実体剣で振り払うがその時には既にその場からは離脱していた。

「行けよ、粒子ビット！」



「これは初めて見るけど、果たして追いつけるかな!」

ストライクガンダムバンダースナッチが振るった腕から余剰粒子がいくつかの形を形成しながら追撃をかけた途端、ロストフリーダムレーヴェがこちらに背を向け背部バーニアを噴かすとあつという間に距離を開けられ追いつけなかった粒子ビットが形を失い消滅していく。

「SEED発動状態なんだぞ?!? こうなりや出来るか分からないけど  
「行く手を阻むは勇敢なる皇后」やるか? いや、仮に追いつけたとしてもこの機体じゃすぐに粒子切れだ。」

「あ、終わった?じゃあ今度はこっちから!」

SEEDⅡを中断し纏っていた蒼い粒子が空に溶けていったのを見届けたロストフリーダムレーヴェが急速旋回し、右手のアロンダイトを正面で構え突撃する。

「これで終わろうよ!」

「いや、まだ終わらせない!喰らえよ。アスタロト!」

ロストフリーダムレーヴェが両手で構えているアロンダイト(ビームランスモード)を背部バーニアの推力をフルで使った高速突撃を敢えて、正面に立ったストライクガンダムバンダースナッチがアスタロトを起動し最大火力で撃ち放す。

アスタロトによって威力を大幅に削がれ貫くには速度が足りなかったのかぶつかる

直前で上空に回避しようと飛び上がったロストフリーダムレーヴェにパンツァーアイゼンのアンカーを射出しバックパックに戻されていた実体剣の一本に食らいつく。

「取った！」

「良いよ、一本と言わず2本あげろ！」

引き寄せられるのを防ぐために食らい付かれていた実体剣を捨てもう片方の実体剣を投擲、咄嗟の事で反応の遅れたストライクガンダムバンダースナッチの右肩に突き刺さる。

「これが俺の！バンダースナッチだ！」

「違う！お姉ちゃんのだから！」

突き刺さった実体剣を抜き捨てバンダースナッチストライカーを射出しロストフリーダムレーヴェがこれをビームサーベルで斬り伏せ再び視線を戻すが目の前にストライクガンダムはおらず、アラームが鳴った方向を向くとストライクガンダムが上空で対艦刀を構えており

「うあああ！」

「なんだ、やれば出来んじゃない。」

上から突き立てた対艦刀の切っ先はロストフリーダムレーヴェの左腕を貫いており、逆にビームサーベルはストライクガンダムバンダースナッチの頭部まで突き立てられ

ていた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶けそこで足に限界がきたのか地面に座り込んでしまった響だったが、こちらとは裏腹に楽しそうに歩いてくる舞姫を見て負けてられないと子羊の誕生のような足にムチを打ち立ち上がった。

「舞姫、俺..」

「あー言わなくて良いよ！これで貸しーつだから。」

「ありがとう！部長にバンダースナッチ返してくる！」

もう宴会は終わっていたが天ヶ崎高校のメンバーは残っており、入り口に立った響を見たみんなが駆け寄ってくる。

「心配掛けやがって！」

「拓哉ごめん。部長、それに皆さんもご迷惑をおかけしました。」

「良いのよ戻ってきてくれたんだから！これでガンプラバトル辞める事になったら、申し訳なさと同時に翼さんに怒られてたわ。」

「翼くんは怒らせると怖いからね。」

「君たちは一体僕をなんだと..」

みんなが安堵している中、唐突に沙希が口を開いた。

「城戸さん、私のお父さんに会いませんか？」

「え、小川さんのお義父さんに？」

## 第41話～武士vs騎士

「なんか今漢字が違ったような気がしたんだけど、気のせいですかね。」

「気のせいって事にしましょう、いちいちツツコミを入れてたら切りが無いわ。」

響が沙希に事の真相を訪ねていた直後、その横で拓哉と木乃香が話していたが聞こえていなかったのか沙希は言葉が続けていた。

「私のお父さんが剣道の師をしてまして… 剣の腕を磨きたいって事なら…。」

「それは是非お願いしたい！ いつなら都合良い？」

「確か土曜日がお父さん休みだと思うので、確認次第私の家に来てください…。」

「ありがとうございます！ 助かるよ！」

あまりの喜びに沙希の手を握り感謝の言葉を拓哉たちから止められるまで言い続けた。

そして旅行から帰宅し時は流れ土曜日のお昼ごろ

「ここが小川さんの家か… 隣に剣道場が併設されてるから間違いないよな？ よし…。」

響がインターホンを押しピンポンと音が聞こえたかと同時に階段を降りるような音と誰かが言い争っている声が聞こえ、身構えていると玄関のドアが開きそこに現れた

のは。

「ようこそ。君が城戸くんだね？」

「そうですけど、えつと？沙希さんのお父さんですか？」

「そうだ。名は小川 権八郎という。話は聞いているよ、上がってくれ。」

「お父さん……！城戸さんごめんなさい……」

「全然大丈夫。それじゃお邪魔します。」

先ほどまで権八郎の後ろにいて見えなかった沙希を改めて見ると家着だったので心拍数上がるのを感じながら進められた席に腰を落ち着けたのは良いが、何故か目の前に権八郎が座っていた。

「単刀直入に聞くが、君は沙希と付き合っているのかね？」

「お父さん……！きゅきゅ急に何を言い出すの……？」

ストレートで聞かれ答えようとした響を遮り沙希が権八郎の口止めを図ろうと勢いよく目の前に立ち塞がっていた光景に驚きながらも腰を上げる。

「あらあら、随分賑やかなね。後お父さん少し落ち着きましようか。」

「真美。だが……ここで聞いておかな……？」

いと、話し終える前に真美と呼ばれた沙希の母によるボディーブローが権八郎のみぞおちに直撃し倒れ込んでいくさまに響は目を見開く事しか出来ず。

しかし、うずくまっていたのもほんの一瞬で顔を上げるとある程度落ち着いたのか腰を落ち着けていた。

「話が逸れてしまったな。申し訳ない、それでその要件と言うのは？」

「だ、大丈夫です…。それでですね。」

「なるほど、以前の戦いで自分に足りなかったところの修行の一貫としてガンプラバトルにいかすため剣術の訓練がしたいと。それで俺の所へ来たのか。」

「は、はい。修行をつけて頂ければなど。」

話を一通り聞いた権八郎は手元にあつたお茶をぐいっと一気に飲み干すと正面に響を捉え。

「よし！可愛い一人娘の頼みだ引き受けよう、と言いたいところだがセンスのない者に教えた所で時間の無駄だそこで俺は君にガンプラバトルを申し込む。」

「お義父さん、ガンプラバトル出来るんですか!?？」

「出来るぞ。ここ最近大会には出ていないがこの周辺で知らぬものはいなかったレベルのな。」

そこから話し合い稽古を付けるかどうかはガンプラバトルしだいとなり小川家と響は近くのガンプラショップに足を運び権八郎が店主と軽く何か会話を交わしバトルブースへ向かうと電源をつけ筐体にプラフスキー粒子が充填される。

「ちなみにルールは一般ですか？」

「いや、特殊ルールだ。君は武装を全部使ってくれて良いが俺は太刀一本のみだ。」

「ハンデありすぎじゃないですか。」

「安心すると良い、元から俺の使用武器はバックパックを除けば太刀一本のみだ。射撃武器は使わん。」

「バルカンもですか？」

「それは勿論、バックパックの特殊機構も使わん。さあやるぞ。」

「ああ、えつとはいい…… ねえ小川さん。」

「…… 何も聞かないで下さい。」

筐体を真ん中に挟んだ2人はGPベースをセットする。

《《Battle Damage level set to B》》

《《Beginning Plavsky particle dispersal. Faird4, sity》》

《《Please set your GUNPLA》》

音声に従ってガンプラを置く

《《BATTLE START》》

「ムラマサフルアイギスストライク、城戸響。推して参る！」



「アストレイブラックフレイムD、小川権八郎。出る。」

今回のステージは以前、響が未来と戦った市街ステージだった。

ゲートから飛び出したムラマサフルアイギスストライクが砂煙を巻き上げながら地面に降り立つと、前方から同じように小川 権八郎の愛機アストレイブラックフレイムDが降り立っていた。

「黒い…アストレイ。」

「かつこいいだろう、本来の武装は全て取り払っている。」

改めて響を見ると、確かにバックパックに何かしらついていたであろう痕跡等が見受けられ手持ち武器は先ほどの宣言通り太刀一本のみ。

言葉が続けようとした響だったが権八郎が制止し、太刀を構えた。

「会話は終わりって事か。よし、行きますよお義父さん！」

「貴様にまだお義父さんと言われる筋合いはない！」

ブーストを利用した振り上げで勢いよく振るった天羽々斬はアストレイブラックフレイムDの大した力を加えていないような太刀に受け止められ蹴り飛ばされる。

(その距離から振りかぶるのか?!? 届かないだろ…?!?)

「って伸びるかよ…」

アストレイブラックフレイムDの振りかぶった太刀は今のままでも当たる事は無い

と判断していた響だったが、次の瞬間ムラマサフルアイギスストライクのソウルプリ  
デイジョンシールドに横一線に亀裂が入っていた。

「多少狙いが甘かったか。次は外さん。」

「どうなってるんですかね!?? 実体剣だよな!??」

改めて確認したソウルプリデイジョンシールドはアブソーバ部分が使用不能になっ  
ていたのみだったので、ビームキャノンを撃ち放ちアストレイブラックフレームDを着  
き放す。

「行けよーシールドドラグーン!」

ムラマサフルアイギスストライクの両翼からシールドドラグーンが6基射出され不  
規則な変動を描きながら周囲を取り囲み、次々とビームを撃ち込んでいくが迫り来る  
ビームをアストレイブラックフレームDはその手に持った太刀で切り刻んでいた。

「めちやくちやだな!」

「おかしな事を言うな? 以前沙希が嬉しそうに見せてくれた動画の君はドラグーンの  
ビームを避けながら落としてたじゃないか。」

「え!?? あそう言えば落としてたわ…」

姿勢をグツと低くしブーストを噴かしながら分割していた右手の天羽々斬を振り下  
ろし敢えて躲させると左手の天羽々斬を横から薙ぎ払うと流石に避けきれなかったの

か太刀で受け止めていた。

「ふむ、狙いは悪くない。だが甘い！」

「3段突き!?」

以前響が戦った龍馬の剣技「蒼龍烈火」に似ていると思ったがその突きよりも技のキレがありなおかつ素早いその明らかに人間業ではない高速突きを、トリアイナを用いギリギリのところであぐらをかいていたが右肩のスラストを貫通しよろけた事で最後の突きを運良く回避できイーゲルシュテルンを乱射し距離を取る。

「さあ君の全力を見せてくれ！」

「行きますよ！SEED！」

「SEED system standby. Remaining until  
 the time limit of 180 seconds。」

蒼い残像を残しながらアストレイブラックフレームDの周囲を高速で建物の屋上を蹴って旋回しつつ、ビームサーベルを振り下ろして行くが権八郎はそれが全て見えていくかのように一太刀一太刀的確に裁かれていた。

「ほう、中々悪くない剣筋だが攻撃に規則性があるな。」

「バレてる!? けどこれならどうだ！」

振るった腕とバックバックの翼から溢れた余剰粒子がいくつかの形を形成しながら

次々と向かいアストレイブラックフレームDが太刀で斬り落としていったが数が多く捌き切れなかった粒子ビッドが背部ウイングに突き刺さる。

「ぬうう！中々やるではないか。」

「まだまだこんなもんじゃないですよ！」

先ほど射出した粒子ビッドが3重のプラフスキーパワーゲットを展開しトリアイナを投擲する構えに入った瞬間、一番最後に張ったプラフスキーパワーゲットにアストレイブラックフレームDが突っ込んできていて何より響が驚いたのは若干とはいえSEED粒子を纏っていた。

「俺のパワーゲット!?？」

「驚く事はないだろう、同じSEED機体だ。」

「そういう事なのか：：？後で翼先輩に聞いてみないとってそんなことよりも！」

「バックパックが分離して：：!?？」

「行けよ、ムラマサフルアイギスストライカー！」

2重のパワーゲットを通過し加速したムラマサフルアイギスストライカーが蒼い粒子を纏いながら正面から同じようにパワーゲットを通過したアストレイブラックフレームDに衝突、機首となっていたソウルプリディジョンシールドは衝撃でひしゃげてしまったが太刀をへし折ることに成功しストライクの元へ戻り再び操作権をストラ

イクへ戻す。

「出し惜しみなんてするものか！」

「なんととおおお!?？」

残っていたビームサーベルを頭部目掛けてダガーにして投擲すると中心からへし折れた太刀で弾くが、続けて2本投擲し捌き切れなかった1本が右肩に突き刺さった所で天羽々斬を上空に向けて掲げ背中に展開していた翼が刀身に収束して行く。

「誰が縦振りだけだつて言ったあ！立ち<sup>ブレ</sup>はだ<sup>イ</sup>かるは勇敢<sup>ウ</sup>なる皇后<sup>ス</sup>！」

「よもや…。」

縦に構えていた天羽々斬を振り下ろす直前で強引に横振りに変更、正面から来ると判断していた権八郎が横に回避しようとするブリストを噴かした所で背後から立ち<sup>ブレ</sup>はだ<sup>イ</sup>かるは勇敢<sup>ウ</sup>なる皇后<sup>ス</sup>が直撃し周りの建物を巻き込みながら両断していった。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶けて機体を回収した響たちは近くのカフェでティータイムを決めこんでいた。

「いやあ、負けた負けた！沙希から聞いていたより良い戦いっぷりだ。」

「ちよつとお父さん…。」

「ホントですか！嬉しいです！」

「それでだな…… 負けた俺が言うのもなんだが最初の話通り全国大会までに君を鍛える、で良いのだろうか。」

「という事は試練は合格ですか？」

「勿論合格だ！明日からよろしく頼む。」

「よろしく願います、師匠！」

「今の君からなら師匠じゃなくてお義父さんでもと言いたいが……」

先ほどまでの元気が打って変わって急に静かになり目線だけ泳いでいたので目線の先を見ると、真美と沙希が顔は笑顔だったのだが冷たい視線で権八郎を射抜いていた。

「と、取り敢えず明日からですね！」

「そうだな！うん…… 今日の夜は食べに行こうか、城戸くんも来なさい。」

「え、でも折角の家族団欒が……」

「城戸くんが来てくれたら沙希も喜ぶわ、ねえ？」

沙希の方を向くと顔を赤らめながらも頷いていたので意を決して。

「いい、戴きます！」

「決まりだな。さあ焼肉食べに出発だ。」

全国大会まで残り一ヶ月。

## 第4 2 話～運用テスト始めます～

「何かが足りないのよ。」

「ああ、何か足りないね。」

「その何かが…。」

「「分らない。」

それは旅行から帰宅し数日たったある日の事

以前素組していたフリーダムに必要なだと思ふものを加えていき一通り組み終えちゃうと近くにいた翼と奏にどうか聞いてみたが2人も同じような反応しか帰って来なかった。

「どうしましょうか。」

「1番はバンダースナッチと似たような武器構成にするのが良いんだけどね。」

「そうなんだけど、フリーダムにミサイルを付けるのはなんか違うっていうか…。」

そう言いつつもミサイルを脚部に付けてみたがしつくりこず代わりに付けてみたヴェスパーも違ったらしい。

「ミサイルはもう付けられないとしてバンダースナッチ・ヴレイヴァー・ブランシエからアイ

デアを取るとしたら弓かメガキャノンなんだけど…。」

「それか他のメンバーから取るとかは？」

「響くんの天羽々斬・拓哉くんのGNソード・小川くんの大型ビームライフルだね。いつそのこと拓哉くんのGNメガランチャーみたく大型ソード+大型ライフルを合わせた兵装を作るっていうのも。」

「そうなのよね、そう言えば今日は沙希ちゃんたちいないの？」

「ん？ああ、響くんは修行に拓哉くんは新型を作るためにOOを全話視聴中で小川くんは響くんの修行の付き添いだそうだよ。」

「もうあの2人くつつけば良いのに… 取り敢えずバトルして今のフリーダムの感覚を確かめたいわ。」

「あ、私もダハツクのテストしたいかも！」

「それは構わないが、1年組は居ないから1人足りないね？」

「そういうと思って呼んでおきました。」

「何をやるのか分からないけど、お姉ちゃんに呼ばれてきました♪」

「断る事を覚えよう?！」

「つていうか舞姫ちゃんの学校からウチの学校までつて早くても30分くらいかかったような気がするんだけど…。」



「そんな細かい事は言いつこなしですよ！」

唐突に木乃香の後ろから木乃香の妹、今井 舞姫が姿を現しその光景に翼と奏は突っ込まずにはいられなかった。

「こほん、まあとにかく試合形式は2対2の時間制でよろしく。」

4人は筐体を真ん中に挟むとGPベースをセットする。

《《Battle Damage level set to B》》

《《Beginning Plave sky particle dispersal. Fairly, space》》

《《Please set your GUNPLA》》

音声に従ってガンプラを置く

《《BATTLE START》》

「今井 木乃香、フリーダムガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましょうか！」

「今井 舞姫、ロストフリーダムレーヴェ。殲滅を始めるか。」

「滝沢 奏、ダハック！狩りの時間だよ！」

「十六夜 翼、ストライクガンダムtype:S。さあ行こうか。」

「「は???」」

「?どうした...」

んだい、と翼の言葉が終わる前に4機はゲートから飛び出していた。

「そのストライカー私知らないんだけど！」

「それはそうだよ。だって最初から響くん用に作ってた試作ストライカーだからね。」

「ずるい！後輩ひいきなの!!？」

「どの口が言ってるのかな？」

「な、何を根拠に…。」

「君が響くんが落ち込んでる時に妹を向かわせたりちよくちよくバンダースナッチとブランシエを貸し出してる事を知ってるからね。」

「んぐつ!!?と、ともかくバトル開始よ！舞姫！」

「分かったよ、お姉ちゃん！」

いつもなら開幕早々大技を撃つ木乃香だが、今回は試運転という事もあり舞姫の基本戦術である一撃離脱を真似る事にしたようだ。

「原作にビームを吸収する機能はなかったよね!!?」

「ふっふっふう、作り込みだよ作り込み！」

「自慢げにしているとこ悪いね。作ったの僕なんだけどつておつと…。」

「ちよこまか避けないでくださいよ十六夜先輩！」

放たれたバラエーナプラズマ収束ビーム砲2門のビームはダハックに触れる直前で

吸収され消え失せ、呆気にとられていた木乃香のちよつと離れた横をウェーブライダー形態のストライクガンダム type : S を実弾バズーカを撃ちながら追いかけてるロストフリーダムレーヴエが通り過ぎて行った。

「ビームはデメリツトでしかない、か…。」

「奏、交代してくれ。どうも彼女とは相性が悪くてね。」

「仕方ないなあ、翼くん変わるからちよつと待つてて！」

ビームによる射撃を諦め両手に対艦刀を構えブーストを噴かしながら接近し、振り上げたダハックは両腕のビームシールドで防ぎバックパックの4本腕を振り回して再度フリーダムガンダムバンダースナッチを突き放すと今度は翼を追いかけていた舞姫のロストフリーダムレーヴエに斬りかかる。

「舞姫ちゃんの相手は私だよ！」

「十六夜先輩より真っ向勝負してくれそうです！」

迫る4本腕をビームシールドで押し返しつつロストフリーダムレーヴエが腰のクスイファイアス3レール砲を撃ち直撃したダハックをよろけさせるとそのまま頭部にヒザ蹴りを食らわせた。

「ビームが効かないなら！」

「変わったは良いけど私も舞姫ちゃんの機体と相性悪すぎるよ…。」

先ほどの木乃香と奏の戦闘を見ていた舞姫は、ビームライフルをしまい代わりに実体剣を抜き背部バーニアを噴かし高速で移動しつつダハックの4本腕の内2本を瞬時に斬り落とす。

「木乃香ちゃんみたいにお大技を撃つてくれないからやりづらいなあ!」

「私も使う時は使いますけど、お姉ちゃんとは違いますからね!」

残った2本と両手でなんとかロストフリーダムレーヴェの攻撃を捌いていたダハックだったが、ビームを全く使わなくなった攻撃に防戦を強いられており制御翼を掴もうものなら逆手に持ち替えた実体剣で腕部を傷つけられ序盤で披露したビーム吸収が使えなくなるといふ結果になってしまっていた。

「こんだけ斬りつけられればビーム吸収は使えないはずだし、決めさせてもらいます!」

「最後まで分からないよって言いたいところなんだけど、欠点が分かっただけでも!」  
バーニアを全開で噴かしながらアロンダイト(ビームランスモード)を正面で構え突撃、最後の抵抗と言わんばかりのからうじて展開した2重のビームシールドごとダハックを貫き近くのスペースステブリに串刺しにすると一旦離れハイマツトフルバーストを放ちスペースステブリと共にダハックが爆発を起こす。

「地球の重力に引つ張られて!?!」

「おや?近づきすぎたかな...!」

奏と舞姫が鏝迫り合いを始めた頃、フリーダムガンダムバンダースナッチのビームウィップをシールドで受け止めていたストライクガンダムtype:Sだった。重力圏内に入ってしまったっていらしくどんなにバーニアをフル稼働しても徐々にだが落下が始まっていた。

「バーニアがヒート?!? しかも両翼損傷有り?!? このままじゃ...」

「やれやれ、今は仕方ない部長。僕の背中に捕まってくれ。」

「翼くん... 恩にきるわ。」

落下に伴いフル稼働していたバーニアがヒートしおまけに両翼も付け根あたりがガタガタと音を立ていつ千切れても仕方ないという状態に陥り燃え尽きるのを覚悟していた木乃香の正面からウェーブライダー形態のストライクガンダムtype:Sが滑り込みゆつくりと大気圏を突き抜ける。

「さあ大気圏は抜けたよ。けど体制は...」

「間違いなく落ちるわああ?!?」

大気圏を抜けた木乃香と翼がそのまま海面に突っ込み近くの砂浜に上陸し改めて自機の損傷を確認すると、フリーダムガンダムバンダースナッチは片翼がやはり千切れ飛びバックパックのバーニアが使い物にならなくなってしまうっており対するストライクガンダムtype:Sの方は所々装甲が焦げ付いていたのみで破損した箇所は無かつ

た。

「落ちたのが海面で良かったじゃないか。それよりもそろそろ時間かな？」

「まだちよつと酔ってるけどそうみたいね、それじゃ決着を付けましょうか！」

フリーダムガンダムバンダースナッチが体制をぐつと低くし腰にビームウィップを携え残っていた脚部スラスターを噴かしながら突撃、間合いに入った瞬間思い切つて振り抜きバックパックの右翼を跳ね続けていこうとするが翼もやられたままでは終われないと頭部にSメガライフルを押し付け引き金を引く。

「死なば諸共よー！」

「僕と一緒に死ぬ予定はないからね。」

直後爆発が起きフリーダムガンダムバンダースナッチが倒れこむが、すぐにSメガライフルを握りつぶし距離を取り再度突撃の態勢に入ると目の前のストライクガンダムtype:Sもメガライフルを投げ捨て代わりに実体ブレードを2本抜きお互いにつかり合うその瞬間アラームが鳴り響いた。

「DRAW」

予め設定していた時間を迎えバトルは引き分けという形で幕を下ろし、4人は予め買っておいたお茶を片手に近くのソファに腰を落ち着けていた。

「やっぱりもう少し武装が欲しいかなあ。」

「そうだね、僕程度にあそこまで手こずるならもう少し攻め手が欲しいものだね。」

「言つとくけど翼くんは自分が言ってるほど弱くないからね!?？むしろ本気でやったら私の次に強いと思うし。」

その様子を横から見ている奏と舞姫も

「1番は譲らないんだ...」

「まあそれがお姉ちゃんですから...」

と、多少呆れていた。

「けど、ある程度考えも纏まったしこのままやりますか!」

「良いんじゃないかな?僕も手伝うし奏のダハックも見ないといけないしね。」

「やった!ありがとう。」

「私も僭越ながら手伝います!」

こうして久しぶりに1年組(舞姫を除く)のいない時間は下校ギリギリまで続いたそうなの。

## 第43話くご注文は砲撃ですか？く

響が小川家に通うようになってはや数日、沙希の父親である小川 権八郎から剣術の稽古をつけてもらっておりその光景を見てるだけでも沙希は満足してしまっていたのだが…

しかしこのままではダメだと思った沙希は近くのゲーセンに足を運び、家を出る際響が俺もついてこうか？と言っていたがいつまでも甘えてられないと断っていた。

「フリースペースがあの日で混んでなくて良かったです…」

普段なら声を掛けるのが苦手な沙希はフリースペースにはあまり行かないのだが最近になって声を掛ける日と並んでやる日の2パターンに自然と別れていて今日この日がそうだと小川家に通うようになった響に教えてもらっており、並んでいた順番を迎え筐体を真ん中に挟んでGPベースをセットし対戦相手に軽く会釈する。

《Battle Damage level set to B》

《Beginning Playesky particle dispersal. Field 4, sity》

《Please set your GUNPLA》



音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「小川 沙希 ドミネイトバストラ。い、行きます!」

今回のステージはガンダムSEED destinyに登場したアーモリーワンだった。

ゲートから飛び出し辺りを警戒しながらも、近くのコテナの上に屋根を若干へこまして降り立つ。

「さて：：まず最初はガトリングで様子を見ましょう：：」

手に持っていたビームライフルをガトリングに持ち替え、感触を試すため構えた瞬間アラートが鳴り響く。

「も、もうですか：：!?」

アラートが教えてくれた方角を向くと回避運動なんて考えてもいないだろう速度を保ちつつメガライダーに乗り実弾ライフルを乱射し近づいてくるアスタロトだった。

「早い、けど：：城戸さんや木乃香さんよりは!」

負けじとこちらもガトリングを連射しながらアスタロトへブーストを噴かし突撃、左手の実体剣付きビームライフルを振り上げ実弾ライフルをすれ違いざまに斬り伏せ上空へ舞う。

「問題はあのメガライダーだけど…!?？」

上空へ舞ったドミネイトバストレアをアスタロトが睨み持ち手だけになつてしまつたライフルを投げ捨ててデモリツションナイフを構え、メガライダーのブーストを噴かしながら肉薄しまさか追いかけてくるとは思つていなかったドミネイトバストレアが振り向くと同時に叩き落とされてしまうが

地面に激突する際に肩部ブーストを全力で吹きなんとかコンテナに片足をめり込ませながらもなんとか着地には成功する。

「考えてる余裕は、ない…!」

叩き落とされたドミネイトバストレアが逆に上を向くと木乃香のバンダースナッチに積まれていた悪魔の名を持つビーム砲「アスタロト」と同じ名を持つアスタロトが乗っていたメガライダーのビームキャノンがコオオ!!と音を立てながらビームが放たれたのを後先考えずに全身のビーム兵装を用いたフルバーストで相殺、両肩両腰からミサイルを一斉に解き放ちクールタイム中であるアスタロトのメガライダーがもろに食らい爆発を起こす。

「爆発量がやけに多いような…?」

メガライダーを落とした沙希だったが、煙が一向に晴れない事に疑問を抱き意を決して一歩ずつ煙を足を運び入れた瞬間見覚えのある手がドミネイトバストレアの左肩を

掴む!

「……………」

左肩の350ミリガンランチャーを掴まれギンギンと火花を散らし始めモニターにはダメージがひどい事を示す赤表示が点滅、このままではまずいと思つた沙希は持つていた実体剣付きビームライフルで接続部を切り離してアスタロトを蹴り飛ばす。

「1つならあげます…!」

そう言いつつも残つていた右肩の94ミリ高エネルギービーム砲で蹴り飛ばした先にある燃料タンクを撃ち抜き地面に叩きつけられたアスタロトめがけ実弾ガトリングを連射し回避を封じ

「責めるなら、今…!」

撃ち尽くしたガトリングを投げ捨て代わりに構えた実体剣付きビームライフルをアスタロトに押し付けそのままの勢いで引き金を引き頭部を吹き飛ばし、膝から抜いたアーマーシユナイダーを右腕の関節に突きつけオマケと言わんばかりにもう一本抜き左腕に突きつける。

「私だって…!」

最後の抵抗とも見える回し蹴りを空いた片手で裁き実体剣付きビームライフルで右脚を地面に串刺すと一度距離を取り全身のミサイルを正面に向け

「これでどうですか…！」

引き金を力強く引きミサイルの残弾が無くなるまで撃ち続けミサイルの先頭がアスタロトに当たるその直前で実体剣付きビームライフルを放ちミサイルの1つを撃ち抜くと他のミサイルへと誘爆しアスタロトを中心に大爆発が起こった。

「YOU WIN!!!」

バトルをしてくれた相手と挨拶を交わした沙希は近くの自販機で水を買って一息ついていた。

「バランスは良さそうですね…」

(ミサイルの撃つ場面を考えないと、だけど…)

そうしてある程度休みもう一戦してから帰ろうかと考えまたフリースペースへ足を向けたあたりで声を掛けられる。

「ねえ君！」

「…？ は、はいなんです…？？」

それがまた一波乱起こるとも知らずに…

## 第44話～時に理性は常識を超える～

「そうそう！君可愛いね、これから俺たちと遊ばない？」

「——！！？」

突然かけられた声にビックリして思わず買った水を落としそうになったがすんでのところで掴みなんとか返答しようと口を開く。

「えっと…その…」

「きつと楽しめると思うからさ、行こうか？」

手を引かれ連れていかれる、その手前もう片方の手を違う人に引かれる。

「いやあ、彼女は俺の連れなんでね？ごめんなさいね。」

「え？城戸さんどうして…。」

「権八郎さんに負けた後言われて来て正解だったよ。沙希が1人でふらふらしてる時はなんか問題に巻き込まれるって。」

（ちなみに武装をフルで戦った権八郎さんには勝てなかったよ…。）

「って言う事なんで帰っても良いですかね？ほら、既にそちらは彼女さんいるじゃないですか。」

「それとこれは話が別だな。さながらのヒーロー気取りか？笑わせるなよ。」

「ヒーローを気取ったつもりはないがそんなに怒らないでくださいよ。俺は小川さんを連れて帰りたいだけなんですけど？」

「横からきて勝手な事いうなつて、その腰に付けてるのガンプラだろ？ならガンプラバトルで勝負しようぜ？」

「そつちからはつきりと提案してくれるなら願ったりだけど、ただどうせそつちは彼女たちを倒してからとか言うんでしよう。」

「分かってんじやん、さあどうする？」

「ここまで堂々と言われるとむしろ清々しいな…面倒だし3対1で挑んでませてもらいます。」

「大した自信だなあ！負かして吠え面かかせてやるよ！」

筐体を真ん中に挟んで3人はGPベースをセットする。

《Battle Damage level set to B》

《Beginning Plavsky particle dispersal.

iard3, Forest》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「城戸 響、アイギスストライクリペアII。推して参る！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージはGレコでモニターロが初登場した森林だった。

近くの岩場に降り立った響が改めてリペアしてる部分を確認しようとしたところでアラームが鳴り響く。

「ジムスナイパー、ジムライトアーマー、ペイルライダーの構成か…」

「逃げずに待つてるとは潔いじゃん。ね？ハニー達？」

「「そうね」」

「無性に腹が立ってきた…このハーレムに小川さんを渡すわけにはいかない…イケメン死すべし…しかもペイルライダー、ね…」

相手方のペイルライダーを見た瞬間、響の脳裏にある人物が浮かんだがすぐに首を振り掻き消しブーストを噴かし3機に斬り込んでいく。

「なんだよ！こいつに何処か見覚えでもあるのか？」

「見覚え無くはないがアンタには関係ない事だ。」

「クールぶるなよ、ヒーローー！」

ペイルライダーにトリアイナを振り下ろす前に横からジムライトアーマーがビーム

サーベルを振りかざして割り込んでくるが足を引つ掛け転ばせると一度距離を取った所を3機がビームライフルで周辺の木々を倒しながら撃ち込んでおりソウルプリデーションシールドを前面に掲げアブソーバを展開しビームを吸収していく。

「俺にビームとか、良いねえもつと撃てよ！」

言ってることは悪役っぽいが多分こちらの方が正しい方だろうと思いきや全て吸収し終えるまで待つ気であったのだがよくよく目を凝らすとペイルライダーのバックパックにエネルギータンクが見えそこからのケーブルに2機のジムのビームライフルが繋がれており

「通りで終わらない訳だ。もう待てる、か！」

ビームライフルによる射撃戦が終わらないと判断した響はソウルプリデーションシールドを掲げブーストを噴かし無理やり突撃し、突然の事に対応が遅れたペイルライダーが弾き飛ばされそこにトリアイナをつきたてようとしたがまたしてもジムライトアーマーに阻まれてしまった。

「あそつか！リペアしたからビームサーベルないのか…！」

振り下ろされたビームサーベルを左側のソウルプリデーションシールドで防ぎ、本来ビームサーベルがあつたであろうアイコンを見るが使用不可になっておりそう言えば外していたことを思い出し遠い目をしながらため息を吐きつつイーゲルシュテルンを



乱射しジムライトアーマーを怯ませ逆に押し倒して頭部に別のビームサーベルを抜いて斬りはらう。

「続けてその岩場に隠れてるジムスナイパーの人！危ないぞ？」

「え？わあ？？」

頭部を斬り飛ばしたジムライトアーマーを庇うようにペイルライダーが威力の問題かビームライフルを180mmキャノンへ持ち替え撃ち込んでくるが距離が空いていたため当たらないと思いいつのまにか姿を消していたジムスナイパーは完全に姿を隠しきれておらず右斜めの岩場で反応があつた熱源の方へソウルプリデーションシールドを向けおもむろに引き金を引き、次の瞬間逃げ遅れたジムスナイパーのスナイパーライフルと右腕が蒸発していた。

「中々やるじゃんか。」

「そういうアンタこそ遠くから撃ってるだけじゃないんだな。」

パシユユユ：と音を立てクールタイムに入ったのを横目にブーストを噴かしながら突撃してきたペイルライダーをビームサーベルを抜き応戦、足蹴りを仕掛けようとしたアイギスストライクリアペアⅡが逆に頭部を殴られる。

「今のは効いたな：部分SEED！」

「PARTSEED system standby. Remaining unit

ill the time limit of 180 seconds.」

体制のよろけを周りの木々を掴み無理やり立て直すと木を蹴って飛び腕部と両翼のみSEEDを展開させ勢いよく振るい粒子ビットを放出しペイルライダーの足止めに向かわせつつその時間を使って片腕のジムスナイパーと頭部の無いジムライトアーマーへと向かい。

「遅い！殺戮する光子盾！」

向かってきたこちらを迎え撃つために残っていたビームサーベルとビームライフルを構えて同じく向かってきた2機のジムによる攻撃を最小限の動きで躲しながらビームライフル・ビームサーベル・頭部・手首を的確にシールドドラグーンで撃ち抜き無力化させると粒子ビットを交えたビームシールドを展開し上空から地面に急降下、立ち尽くす事しか出来なかった2機のジムは徐々にすり潰されていきしまいには爆発を起す。

「な？？2人同時に？？」

「さあ、懺悔の準備は出来ているか……」

粒子ビットによって所々焼け焦げていたペイルライダーへと少量の蒼い残像を残しながら接近し、トリアイナを振り下ろしビームサーベルを持っていた左腕を斬り飛ばすがここで先ほどの無茶が祟ったのかトリアイナを持っていた方の腕の根元が緩くなっ

ていたのに気付かずスポンと抜けてしまう。

「そりやそうだよな!!? ちなみにだけど、なんで声を掛けた?」

「は? そりや可愛いから...」

「そうだよ可愛いんだよ! けどな、俺がずつと可愛いって言えなかったのにぼつと出のお前が気軽に可愛いって言うんじゃねえ!」

抜け落ちた右腕を拾いペイルライダーヘトリアイナごとぶん投げ避けた所へソウルプリデイツジョンシールドのビームキャノンを放ち体制を崩させる。

「小川さんはあああ! 可愛いんだよおおお!」

「ちよ...」

代わりに抜いたビームサーベルの切っ先がペイルライダーの右肩に斬り込むその直前、名前を聞くの忘れていたため彼氏(仮名)はこう言ったという

これが若さかと...

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け相手の方を向くと彼氏(仮名)の方は青ざめた顔をしており響が口を開こうとしたその時

「3人がかりで負けてんじゃねーか!」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ... ああああ!」

「おーい、つて行っちゃったよ…」

取り敢えず挨拶だけでもしようと思つた彼氏(仮名)に声をかける直前で彼女2人が彼氏(仮名)の首根つこを掴んで引きずっていった。

「城戸さん…あの…」

「小川さんもしかしてバトル中の会話聞いてたり、する？」

横からかけてきた沙希の表情から聞かれてた事は分かっていたのだがどうしても聞かなければならない気がしてあえて聞いたところ俯きながらだがうなづいており動揺が隠せずアクションが大きくなりながらも

「ほ、ほら！もう終わったからさ、帰ろう？」

「そ、そうですね…」

そう言った2人は小川家に帰るまでお互いに目を合わせる事が出来なかつたそう。

## 第45話～交錯する蒼と青!そして紅に染まる～

「石川先輩。俺にトランザムの使い方方を教えて下さい。」

それは響が沙希を巡って彼氏（仮）とバトルを繰り広げていた頃、拓哉は单身木乃香のライバルであり友人の石川 恵美のいる城西高校を訪れていた。

「それはともかく、よくここまでたどりつけたね?」

「入り口からはマリに連れてきてもらいました。」

「連れてきました!」

拓哉が後ろの方に視線を向けその視線に合わせるように拓哉の彼女である安藤 茉莉乃がひよっこり出てきてドヤっていたが恵美はあえて触れず。

「それでなんで私のところにきたの?」

「今井先輩がトランザムの上手な扱い方を石川先輩から学んできなさいって。」

拓哉の発言に若干のため息をこぼしつつも正面の拓哉を見上げ。

「あの能天気木乃香……まあ、せっかく来てくれたのだから私が知ってる限りの事は教えるけど私にできるのはそれまでだからその後は自力で探してね?」

「ありがとうございます。よろしくお願ひします!」

筐体を真ん中に挟んだ2人はシステムの起動を確認するとGPベースをセットする。

《Battle Damage level set to B》

《Beginning Plavsky particle dispersal. Fairly, space》

《Please set your GUNPLA》

音声に従ってガンプラを置く

《BATTLE START》

「安藤 拓哉、ダブルオーガンダムセグエンテ！飛び立つ！」

「石川 恵美、ガンダムハルト。目標に飛翔する！」

今回のステージは宇宙要塞ア・バオア・クーだった。

ステージ中央まで進み恵美の愛機であるアリオスガンダムの発展機である青いガンダムハルトと正面で向き合い恵美が口を開いた。

「さて、トランザムの前に安藤くんの実力を見てみようかな。掛かっておいでよ。」

「お願いします！GNメガランチャーフルバーストオ！」

ガンダムハルトが挑発するように手をクイツとしていたのを正面で見た拓哉のダブルオーガンダムセグエンテがGNメガランチャーを起動、フルバーストで放つと辺りが爆炎に包まれる。

「やったか!? いや、今井先輩のライバルだこんな序盤でやられるわけ…!?」

「無いよねえ! 大技を撃った後、無防備に止まっちゃダメだよ!」

爆炎をGNソードライフルで割きながら突き進み咄嗟に前に掲げたGNメガランチャーはまるでチーズを切るように止まる事なく斬り裂かれ頭部をGNソードライフルの柄で殴られた。

「いつてえ! この強引き、今井先輩のライバルたる所以か…」

「別にそういう訳じゃないけど、木乃香と一緒にほしないで欲しいかな。」

持ち手だけになつてしまったGNメガランチャーを投げ捨て代わりにGNバスターソードを振り抜き、そのままの勢いでガンダムハルトへ攻め込むがこれもGNソードライフルに防がれ逆に追加バスターの付いた足で蹴られてしまう。

「響みたいな攻め方も駄目か… こうなると。」

「一つしかないよね?」

「トランザム!」

2機が紅い残像を残し高速で周辺のスぺースデブリを粉碎しながら何度かその手に持った獲物をぶつけ合い一旦距離が開いたところでガンダムハルトがGNミサイルを放ち続けダブルオーガンダムセグエンテはGNバスターソードを戻してなんとかGNフィールドを展開し防ぐが衝撃でダブルオーガンダムセグエンテのトランザムが強

制終了する。

「くあ!? 普段今井先輩や響が爆風に斬り込んで行ってるけどまともな奴は敢えて距離取る方が多いよな……ってそんな事考えてる場合じゃねえ!」

「へえ、ワンセコンドトランザム? けどね、発動から終了まで8秒掛かっているのは遅すぎる!」

再び接近したガンダムハルルトがGNソードライフルを突き立てるがダブルオーガンダムセグエンテがギリギリでワンセコンドトランザムを使い回避には成功、しかし感覚で使った為回り込みが上手くいかずガンダムハルルトの周りを一周してしまい反対側のGNソードライフルで右腕が斬り飛んでいく。

「使うタイミングとしては悪くない。さ、気を取り直して頑張ろうか。」

「トランザムエクスポーション!」

両肩のGNドライブから勢いよくGN粒子が噴き出し翼の形を形成、その翼をはためかせながらガンダムハルルトに肉薄すると手に持ったGNビームソードで斬り込むがそれは即座に反応されGNソードライフルに弾かれる。

「狙いが甘かったか!?」

「……こんな感じかな?」

恵美が何かを弄ったかと思うと追加ブラスターのコーンスラスターからGN粒子が



勢いよく噴き出しこちらは槍の形を形成していた。

「マジか…。ならこれはどうだ!ランチャービット!」

「まあそうなるよねえ。それじゃ行ってきなシザービット。」

GNランチャービットを精密さには欠けるが手動で動かしつつ拓哉は改めて前方に目を向ける。

狙うとしたら「トランザムエクスペロージョン」を模したGN粒子を放出している追加ブースター。

「思ってたより硬い…。」

「俺のランチャービットはタフさが売りなんでね!」

向かってきたGNシザービットには目もくれずガンダムハルートの追加ブースター目指し加速、途中GNシザービットがすれ違いざまに切り刻もうとその切っ先がGNランチャービットに食い込んだままなのに速度を落とさず一直線に右脚の追加ブースターに突き刺さり爆発を起こす。

「やつと一矢報いたぞ…!」

「ふうん、中々やるね。」

追加ブースターごと右脚が吹き飛ぶが恵美は気にせずもう一基のGNランチャービットを蹴り飛ばしGNソードライフルで牽制しダブルオーガンダムセグエンテと距

離を取り一息起きつつ。

「エクスプロージョンノヴァ！」

「名称未定！」

両肩のGNドライブに展開していたGN粒子による翼が両手で構えたGNビームソードに収束、そのまま振り下ろすがガンダムハルトも残った追加ブースターのGN粒子のビームが伸び蹴り上げ激しい衝突が起き周辺のスペースデブリが吹き飛ぶ。

「ブースターだけ、だど？」

「とんだ隠し玉だね。私じゃなかったらやられてたかも。」

「エクスプロージョンノヴァ」が終了し、片方のGNドライブから煙が出ており五体満足とはいかなかったが打ち負けなかった事だけは確かだった。

そんな中貯蔵粒子の確認を終え再び視線を向けるとそこにあつたのは黒焦げの追加ブースターのみ。

「ハルトは何処行つた!?？」

「大技撃つた後とまるなつてきつきも教えたでしょうが！」

「これから気を付けます…！」

直後アライトが鳴り響きアライトの方向へ視線を向けようとしたその時、右肩のラックに付けていたGNバスターソードが爆発を起こす。

「これは根本から叩き直す必要がありそうだね。結果は合格だよ!」

「だいぶスタボロですけどね… あれ? 合否判定式だったつけ…」

反射的に抜いたダブルオーガンダムセグエンテのGNビームサーベルがその頭部を貫くよりも早くガンダムハルトのGNソードライフルがその胸部を貫いていた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け地べたに座り込んだ拓哉を回り込んだ恵美が手を出して立ち上がらせ、バトルする前から疑問に思っていたことを口にした。

「そう言えばここに入る時に事務室で出入り許可証ってもらったの?」

「はっ!? 貰ってない(ですね)…」

「はあ… 今日事務室で出入り許可証発行して貰って帰ろうか。」

「はい… じゃ先に貰ってくるのでしばしお待ちを!」

「私案内しますね! メグ先輩お待ちを!」

そこからマリと事務室へ行き出入り許可証を出してもらい帰り道、恵美と共にハンバーガーを食べて帰った。

## 第46話　喫茶ステラと鏡の国のアリス

「全国大会まで残り半分を切った所で申し訳ないんだけど、明日の土曜日は私休んでも良い？」

「息抜きも必要だろうから問題はないよ。」

「信用されてる？とはいえ理由を聞かれないのもアレだし私、友達のカフェを手伝いに行くのよ。」

「言ったかったのかな…。」

一同のツツコミを聞かなかった事にした木乃香は言葉を続ける。

「んん！ともかく大会まで調整は怠らないしやれる事はやるつもり。良かったら来てくださいね。さ！と言うわけで今日は解散しましょうか。」

「既にお店のURLがLINEで送られてきてる…。」

独り言のように呟いた響は部室の隅っこの方にあるゴミ箱にちようど飲み終えたココアの缶を投げ入れた。

そして時は流れ土曜日の正午ごろ

「さっきのバトルは惜しかったなあ。」

「そうか？可変機体の練習したいからって翼先輩からファランクス借りたは良いけど最終的に可変しなくなってたし最後ヤケクソで可変形態を取ろうした所を撃たれてただろ。」

「最初渡した時から3ヶ月以上経っているから乗りこなせるようになったかと思っただけだね…。」

「翼先輩その悲しそうな顔やめてくださいよ！次こそは…！」

木乃香が働く事になっている喫茶店近くの駅周辺のゲーセンで響、拓哉、翼の3人はガンプラバトルをしており最後に行った試合が悲しい結果となっていた…。

「そう言えば翼先輩、滝沢先輩は？」

「ああ奏は「私ちよつと沙希ちゃんと用事あるからー！」って事さ。でもそろそろ着くみたいだよ。」

相変わらずの仲の良さを見せられた響の後ろで拓哉が何かを言おうとしていたがそれよりも早く沙希の声がしそちらを向く。

「お待たせしました…。」

「あ、小川さ…ん？」

振り返った響が目にしたのは髪型がツインテールでオフショルダーの服をきて少し恥ずかしそうな表情を浮かべていた沙希とその後ろでこのコーディネートは私がやり

ましたと言わんばかりの奏の姿だった。

「変、でしょうか…？」

「いや！そんな事ないよ！バツチリ似合ってる！うん！」

「響、一旦落ち着け？相手が知らない人だったら通報もんの顔してるぞ。」

「いやだつてさ…小川さんの服見てみるよ、いや見ないでくれ。」

「どっちだよ…確かにオフシヨルダーの服を着てくるとは思ってたけどな？」

「拓哉教えてくれ、俺はこれからどういふ顔をして小川さんと話せば良い？」

「普通に話してくれ。ここで気持ち悪くなると俺はもうお手上げだ。」

そうして何事もなかったかのように店内に入りやはり居ても違和感のない木乃香を一同で眺め、予め用意されていた席に着く。

すると木乃香が手配していたのであろう人数分のパフエを持って女性が現れた。

「紹介するわね。この人が…」

「初めまして！私がこの喫茶ステラオーナーの結城 星菜です。今日はゆつくりして  
いってね。」

せっかちな性格なのか木乃香の紹介を遮りそれだけ言い残すと接客のため席を離れていった。

「美人だ…」

響と拓哉が声を揃えて発した言葉に若干1名を除いてあちやーと表情をとっておりその若干1名と響が後日遊びに出かけたのだがそれはまた別の話で、

店主は喫茶店の名前の通りガンダムSEED destinyに登場したステラにそっくりだった。毎週日曜日は店主とバトル出来る日でファンが押しかけるらしく木乃香曰く搭乗機体はオレンジカラーのガイアインパルスらしい。

「このパフェ美味しいな。あ、小川さんイチゴ好きだったよね？はいあーん。」

「ふえり？あ、あーん…。」

「どう？美味しい？」

「お、美味しい、です…。」

「そっかあ！良かった。」

その光景を見ていた拓哉、翼、奏、木乃香の4人は2人に聞こえないように後ろを向きながら当然の疑問を投げかけあっていた。

「あの2人って付き合ってる？」

「ないっすよ。あいつは意識すると出来ないけど無意識だとあれを平気で出来るんです。」

「朴念仁って言葉使うときがきた？」

「間違えてはいないけど…。」

と、ここにきて入り口から見て奥手の方がなにやら賑わっていた。

「なんか騒がしいな？」

「ホントですね…。」

「いーじやねーか、俺らとガンプラバトルしようぜ？」

「私まだバトルできないんです！もうやめてください！」

「そんな固い事言うなよお。俺らが教えてやるし絶対に楽しいからよお。」

どうやら客の数人がウエイトレスの女性にガンプラバトルの誘いをしており筐体があるから出来るのだろうか声が掛けていた人は入ったばかりの新人でガンプラバトルはまだ出来ないらしくかった。

「時々ああいうのがいるらしいのよ。さて、用心棒兼ウエイトレスとして行ってきましようか♪」

「部長、用心棒だったんですか…？」

「そ、なんか嫌な予感がするから来てって言われたからね。」

それじゃ行ってくるわね、と騒ぎの中心へ歩き出した木乃香の後ろを心配になった響たちもついていき。

「お、こっちの姉ちゃんも可愛いな。俺らとガンプラバトルしない？」

「お褒めに預かり光栄です。良いですよ、ただメンバーが足りないので後2人選出させ



「許可も頂いてますので。」

「良いぜ？俺たちが勝つたら外にデートしに行く条件でな！」

「おいアンタら…。」

「良いのよ城戸くん、私たちに任せといて。奏、翼くん行ける？」

「んん？大丈夫だよ！」

「行けるよ。」

「これなら問題ないでしょう？」

「問題ねえけど、負けてからやっぱり無しですは無しだからな！」

「約束は守るわ。貴方たちも負けたらこのお店から出て行くの忘れないでね？」

そうしてお店の中心にある筐体を真ん中に挟み各員GPベースをセットしていく中、翼が拓哉に声を掛けていた。

「ああそうだ。拓哉君に渡す用の武装なんだけど試運転がまだだから今回ちよつと試させてもらっても良いかな？」

「はい！むしろお願いします！」

《《 Damage level set to B 》》

《《 Beginning Plavsky particle dispersal. F

i a r d 4 , s i t y 》

《 P l e a s e s e t y o u r G U N P L A 》

音声に従ってガンプラを置く

《 B A T T L E S T A R T 》

「今井 木乃香、ガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましょうか!」

「滝沢 奏、ダハック! 狩りの時間だよ!」

「十六夜 翼、A G E — 3 セグエンテ。さあ行こうか。」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは既に人々が地球を捨てて宇宙に居を構え放置された東京だった。

「うーん。相手の1人が近くのビル群をバカスカと倒してるんだけど、これって誘ってるよね?」

「そのようだね…。偵察用に飛ばしたキャプチャービットが敵機の姿を捉えた瞬間に映像が途切れたから考えなしの馬鹿集団ではないようだ。」

「それに加えてその映像から見るに、ソードシルエット装備のエクストリームと頭部にシールドがくっ付いているエクストリームこれがキャプチャービットを撃ち落としたやつね。そして最後の恐らくビルをなぎ倒しているであろうこれは…。」

改めて送られてきた映像を見てみるが紛れもなくガンダム S E E D d e s t i n

Yに登場したゲルズゲーなのだがそこに収まっていたのはこれもまたエクストリームだった。

「SEEDよりかと思いきやくロスボーン要素も入れててまあエクストリームガンダムだからありっちゃありなのかしらね？」

「どうだろうね。とにかく1番の問題はゲルズゲーエクストリームと見た。奏、あれは突破できそうかい？」

「メガライダーかイガリマで来てれば行けたかもだけど、ダハックだと高火力による制圧砲撃とかの攻め手が無いから無理そう!?？」

ここに来て痺れを切らしたゲルズゲーエクストリームがSEED特有の一機落とすには十分な量のビームを撃ち込まれ木乃香たちが隠れていたビルが倒れその倒れた時の風圧で飛ばされてしまう。

「時間だ。あれを落とすのは部長に任せるよ。それじゃいつも通りに。」

「分かった!そしたら..。」

「各機散開!」

「おや、部長。方向を間違えてないかな?」

そう言った木乃香は右側のソードエクストリームへ奏が左側のシールド付きエクストリームに向かって行ってしまったため、仕方なく翼は目前のゲルズゲーエクストリー

ムを相手することになりGNランチャービット2基を射出しながらビームサーベルを振り下ろす。

「冗談よ。けどちよつとだけ面倒見てくれない?」

「ホント部長の冗談は冗談じゃなかったね…」

交戦中のソードエクストリームと幾度か鏖迫り合いを繰り返したガンダムバンダースナッチは左腕のパンツァーアイゼンをソードエクストリームに押し付けそのまま射出、突然の事に対応出来ずなんとかパンツァーアイゼンのワイヤーを切断した頃には離れたここにいたAGE-3セグエンテの近くにまで押し出されていた。

「やれやれ、少しの間だけゲルズゲーエクストリームとソードエクストリームは引き受けたよ。」

「翼くんごめんなさいね。高火力ビーム兵装「天照」照準、ゲルズゲーエクストリーム。ここで撃ち落とすわ!」

「ありやスターゲイザーの…!?」

周囲の異常に気付いたゲルズゲーエクストリームが交戦中のAGE-3セグエンテのビームサーベルを弾き飛ばしながら兵装を展開しているガンダムバンダースナッチに接近するが気づくのがほんの数秒をほど足りず…

今もなおビームシールドを展開しているゲルズゲーエクストリームの下半身に向け

出力を一点のみに絞った「天照」の一撃は2重ビームシールドをいとも容易く突破し動力炉を貫いた。

「僕が目の前にいるのによそ見とは。」

「早いな!?？」

動力炉が爆発を起こすその直前で脱出したエクストリームに気を取られたソードエクストリームを見逃さなかった翼は、GNビームサーベルを抜きバーニアを吹かしながら接近しすれ違いざまに左腕を根本から斬りとばしそのまますり抜けていく。

「ええ！私そつちが良いんだけど！」

「俺がいんのものによそ見なんてすんなよな！」

先ほどの翼と同じ台詞をまんま返され多数のミサイルがダハックに放たれるがアームの4本を前面に展開し勢いよく回転、即席のビームシールドを作り直撃コースは外す事に成功する。

「Gセルフみたいな動きしてるな！いや、同じGレコ機体だから良いのか？」

「自分で言ってる落ち着かないですよ…。」

なんだか調子狂うなあと思いつつも続けて放たれようとしているミサイルの発射口にその辺に落ちていたビルの破片で叩きひしゃげさせシールド付きエクストリームガンダムが爆発に巻き込まれまいとビームサーベルで切断し蹴り飛ばす。

「奏、気を付けてね！」

「木乃香ちゃんこそ気をつけるんだよ！あ、翼くんもだからね！」

「善処する。」

そう言いながら翼はGNビームサーベルの代わりにサイドアーマーから2丁のGNビームガンを引き抜きガンガタの構えで乱れ撃つ。

「そこについてる肩のコーンは飾りかあ！」

「あいにくだけどGN機体じゃないからトランザムは出来ないんだ。」

「は！このままぶった斬ってやるよ！」

「それは困るな。武装のテストがまだ終わってない。」

そう自信満々にダメージ量の少ないGNビームガンによる射撃を物ともせずフラッシュエッジを振り下ろしたソードエクストリームの一撃を肩のGNフィールドで防ぎ、勢いよく振るったGNビームガン（サーベルモード）をフラッシュエッジの基部に当て弾き飛ばす。

「小賢しい手ばかり使いやがって！」

「お褒めに預かり光栄だよ。これが僕の戦い方だからね。」

弾け飛んでいったフラッシュエッジの代わりにビーム対艦刀を振り抜くとそのままブーストをかけ今度は下から振り上げその振りがガンダムAGE-3セグエンテに当

たる直前でGNビームガンを取ってビーム対艦刀にぶつけ爆発を起こすとソードエクストリームを背にブーストを噴かし先ほどから周囲を旋回しているGNランチャービットとともにその場を離れていく。

「ああそれ以上は歩かない方が。」

「いつの間に仕掛けた…?!?あのビットもどきか?!?」

ものの数分と掛からずソードエクストリームに追いつかれるがビルを背にしながらか何処か余裕そうなAGE-3セグエンテに目線を外さずジリジリと滲み寄っていき途中翼から助言を掛けられるも掛けられた翼の助言を受け止めなかったソードエクストリームがもう一歩足を踏み出した瞬間足元が爆発を起こし瓦礫が宙に舞い爆風で地面に崩れ落ちる。

「だから言っただろう?僕に近づくと危険だって。」

「俺もトラップ系武装作るか…?」

「あ…仕掛けすぎた…」

予め射出していたGNランチャービットのビームサーベルがソードエクストリームガンダムの右腕を貫き地面に縫い付け、GNメガランチャーをその胸部に押し付けるとおもむろに引き金を引きソードエクストリームが爆発を起こすが爆発するソードエクストリームに吊られてほかに仕掛けていた地雷も誘爆して自らも爆発に巻き込まれて

しまう。

先ほどのミサイル攻防の後、ビームサーベルによる罅迫り合いへ発展したシールド付きエクストリームとダハックは周辺のビル群の屋上を飛び跳ねたりしていたのだがここに来て奏が勝負を仕掛けていた。

「ねえ！ダハックの腕って何本だと思う？」

「は？そりゃバックバックも足して6本だろ、それがどうしたよ！」

「んー惜しい！私のダハックはね膝のアームも足して8本なんだよ！」

「そんなビームサーベル増やしてどうすんだよ!?？」

6本ものビームサーベルを防ぎきったのは横から見えていた響も凄いと思っていた、だがそこからさらに伸びてきた2本のビームサーベルまでは防げなかった。

というよりも余程の実力者でもなければ8本なんて防げないだろ…

「それじゃばいばい！」

「セラヴィーじゃねえんだから…」

シールド付きエクストリームの両腕を斬り飛ばし胴体に8本のビームサーベルを突き刺すとそのまま8方向に斬り払う。

そして残った木乃香はというと、原作のフリーダムのようにクルクル回転してビームを躲したりすれ違いざまに武装のみを斬るなどして一方的な試合になっていた。



「ふざけやがってえええ!!?」

「ふざけてるわけないじゃない。戦力を削いでるのよ!」

ルールなんて無視して持ってきた大型ビームサーベル搭載MAがその自慢のビームサーベルを振り回してくるが、木乃香はこちらも変わらさずクルクル回転しながら躲しコアユニットであるエクストリームガンダムに直接クスイファイアス・レール砲を撃ち放すと大型ビームサーベル搭載MAから爆発が起こり先ほどと同じくエクストリームが宙に投げ出される。

「ゲルズゲームもそうだけど、MAだけに頼ってるようなら私にはまだ届かないわ!」

「こんなの納得いかねええ!!!」

宙を舞ったエクストリームに向けバンダースナッチはその手に持っていたアロンドイトをぶん投げその切っ先が勢いよく突き刺さり爆発を起こす。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け満足そうな木乃香たちとは対照的に不満足感を隠し切る様子もなくもう一度勝負をするため筐体の正面に立ち止まっていた。

「くそ! なにかの間違いだ!.. もう一度だ!」

「なら俺らとやりませんか? 部長が良ければですけど。」

「そうね、後は後輩に任せようかな♪」

「決まりだ。よろしくお願いしますね？」

「お、おう・・・」

再選を挑んできた彼らと我慢の限界を迎えた響たち1年組の戦いはほぼほぼ響たちの圧勝で最後通告を店主から受けすぎごとお店を出て行く。

その後、店主から感謝の気持ちとしてDXパフェを進呈された響たち（奏が特に）は目を輝かせてパフェを小分けして食べ舌鼓をうっていた。

「取り敢えず、拓哉君のセグエンテは今さっきのバトルで調整が終わったし響君のストライクは明日にでも渡せると思う。」

「ありがとうございます！」

「それでだ最後はカッコ悪く終わってしまったけど、この装備拓哉君なら大丈夫だろう。トラップツールはどうする？」

「あー今は大丈夫です！セグエンテ装備だけで。」

笑いながらだったが素体だけ出来上がっていたクアンタにセグエンテのパーツを組み込む。

「これからよろしく頼むな、セグエンテ。」

姿を新たに变えたクアンタムセグエンテをポーチに戻し木乃香のシフトが終わるまでみんなの談笑は続いたという。

## 第47話～模擬戦の定義ってなんだっけ～

木乃香の喫茶店でアルバイトした次の日、響たちはガンプラバトル部の部室に集まっていた。

「よし集まってもらったのは他でもない、みんなの最終機体調整と響くんと拓哉くんのnew機体お披露目会だ。」

「「わああああ!!」」

自作だろうか?」マークの入った箱を木乃香と奏に持たせていた翼が普段よりもややテンション高めに話し響たち1年組の拍手に満足してテーブルに2つの箱を置いてもらう。

「まずは響くんの新しいストライク。独立稼働のパラディオンストライカーが目を引く機体に仕上がった。」

「お願いしてた配置通りだ!しかも天羽々斬とソウルプリデジョンシールドまで!」

ストライクをベースとして全体的なカラーリング変更と格闘時に邪魔にならないような武装配置に加えムラマサ時代に多かった足技を補助する為の近接ブレード兼ソードドラグーンを装備しており今までの武装を含め響が扱いやすい様に調整されていた。

「続けて昨日預かって再調整を重ねたセグエンテだよ。」

「昨日の今日でカラーリング変更までしてもらえるんですか…。」

拓哉のセグエンテはベース機体をクアンタへ喫茶店の帰りに預かりダブルオーの時に使っていたGNランチャービットを腰にGNメガランチャーをメイン武装に据えクロスボーンガンダムフルクロスに粒子タンクをはめGNフィールドを貼る際はその粒子を使う事で本体はGNフィールド分の粒子を気にせず戦闘を行えるものとなっていた。

「なあ響、ちよつと模擬戦しようぜ。」

「奇遇だなちよつと俺も考えてた所だ。」

「待ってくれ大会を控えているのにガチ戦闘になりかねないからやるなら特訓モードにしよう。」

「それもそうですね…。」

「出撃前シークエンスを省略、終了はモックを1人20体狩り終わるまで。さあ始めようか。」

「「お願いします！」」

2人は同じ方向へと進みGPベースと機体をセットする。

《 Damage level set to B 》

《Beginning Plavsky particle dispersal. F  
i ard?》

《BATTLE START》

「城戸 響、ストライクガンダムパラディオン。推して参る！」

「安藤 拓哉、クアンタムセグエンテ。飛び立つ！」

今回のステージは練習用の障害物が何もなく一定の時間ごとにモックが投入されるステージだった。

「ムラマサより早い!??けど、足がある！」

早速2人の元へ1機目のモックが投入されアックスを振りかざしながら迫ってくるのに合わせ響がブーストを噴かし回避しようとするが思いのほか自身の速度が早く体勢を崩してしまう。

だが、倒れこむよりも早く地面に手をつき回し蹴りでアックスを弾き飛ばしビームバルカンで頭部を吹き飛ばす。

「やるじゃんか、俺も負けてらんねえな。ってパワーがアヴァランチアズールエクシアより遙かに強い。」

振り下ろされたモックのアックスを持った方の手を正面から武器を持たずに掴み空中に放り投げ腰裏ラックからGNビームサーベルを2本抜き落ちてくるモックを十字

に斬り伏せ自身は身を屈める。

「翼さん俺の動きのくせに合わせて武装を取りやすい所に纏めといってくれてる！」

続けて今度は3体のモックが投入されアックスやらガトリングを撃ちながら迫ってくるが右手のGNビームサーベルでアックスを受け左手はGNフルクロスからGNビームガン抜き胴体に押し当て風穴を開け残った2機も同じようにGNビームサーベルで斬り伏せGNビームガンで撃ち抜いていく。

「拓哉もう4機かよ!??なんかこっちのモック素早くない!??いや俺が早すぎてそう見えるだけか?」

拓哉が撃ち抜いた4機目のモックの爆発を少し離れた所で応戦しながら見ていた響が改めてリーダーに反応があった方向を向くと何故かこっちのモックはアックスなど持つておらずバックパックがDXのものであったり木乃香のバンダースナッチによく似たストライカーを装備していた。

「バンダースナッチ!??部長のによく似てるけどこっちは白いしなあ…。さては翼さんコピー作ったな!??」

『ただのモックじゃつまらないだろ?ブランシエも仕込んでおいたよ。』

『ちよつと翼くん!完成してたなら言つてよ!作つてる時から私使いたいつて言つてたじゃない。』

「部長了承済みかよおーくそ、やるならやってやる!」

両腰から勢いよく天羽々斬 真・偽を振り抜きハイパービームサーベルを構えたDXモックと鏢迫り合いこれを横一閃に薙ぎ払いほぼ同時にバンダースナッチモックの振り下ろした対艦刀を一度天羽々斬 真・偽を投げ捨て正面から真剣白刃取りで受け止める。

直後、ソウルプリティジョンシールドのビームキャノンを撃ち放ち胴体を狙うがアブソープを使っていなかった為風穴を開けるには至ってはいなかった。

「響のやつ苦戦してんなあ… ってコイツは…!?」

こちらも響の戦闘を横目に5体目6体目とGNメガランチャーを撃ち放ち続けるという所でクアンタムセグエンテのすぐ横を高出力のビームが掠めていきその方角を向くと先ほどの翼の宣言通りメガランチャーを撃ち終わった体制のまま止まっているプランシエモックが7体目として現れ直後トリアイナを正面で構えブーストを噴かしながら突撃してくる。

これを腰に懸架していたGNビームブレードを抜刀し振り上げてトリアイナを弾きSPからトランザムを選択。

紅い残像を残しながら背後に回ったクアンタムセグエンテはGNビームブレードを振り下ろそうとするが上半身だけ振り向いたプランシエモックが振り下ろそうとした

右腕を掴む。

「この受け方どこかで…」

『流石、そうだよ響くんがああの全国ガンプラバトルレディーストーナメント個人の部優勝の彼女立花美咲と戦った時の回避データをAIに読み込ませてある。ただモックと戦うだけじゃ足りないと思つて組み込んだんだ。』

「もはや軽く模擬戦の意味を超えてんだけど!?？」

悲しみの悲鳴をあげたくなる気持ちを抑えつつも掴んでいる腕を蹴り飛ばしGNソードビットを6基GNランチャービットを2基射出して自身もGNビームブレードを両手で握りしめ今度は正面から振り下ろす。

ビットの砲撃を受けつつもトリアイナを前に掲げ伏せごうとしたブランシエモックだったがトランザムで出力の上がついていたGNランチャービットの砲撃を受け右膝が撃ち抜かれ体制が崩れその時点でクアンタムセグエンテを止められるわけもなくトリアイナの横つ腹にヒビを入れバギイ!と音を立てて砕け散っていく。

「いくらデータがあるつて言つても戦闘パターンだけならすでに視聴済みなんだよ!この程度で俺とセグエンテは止めらんねえよな!エクスプロージョンバーストオ!」

ブランシエモックが最後の抵抗と言わんばかりにプロトドラグーンを4基向かわせてくるがそれは自身の周りを旋回しているGNビットたちに次々と落とされていき



クアンタムセグエンテがGNビームブレードを戻して代わりに取り出したGNメガランチャーを両手で構えビツト共々ビームを撃ち込むと撃たれたビームが収束し球体と化したビームが一直線でブランチエモックへ向かい着弾した瞬間、大爆発が起こり響たちが戦っている方面までその余波が襲いかかり響とモックの戦いを戦闘範囲外に待機していた普通のモックもつられて爆発を起こした。

「うおおい!!? 拓哉のやつこつちの事も考えてくれよ。けど拓哉の言う通り戦闘データだけならあれから何回も見てるんだ!」

再び持ち直した天羽々斬 真・偽を柄に収め右脚のラックからビームライフルを抜いて思いつきり投げつけバンダースナッチモックが対艦刀で斬り伏せようとした瞬間、それよりも早くビームキャノンがビームライフルを貫き辺りに煙が撒き散らされる。

「攻めるなら今だろ! SEED!」

「SEED system standby. Remaining until the time limit of 180 seconds.」

その身に蒼い粒子を纏いながらバンダースナッチモックの周囲を高速で移動しつつ要素所でビームキャノンを撃ち放ちその場に仮止め。

いつもなら近接で攻め入る所だが、あのチャンプの戦闘データが入っているなら後ろから攻め入れれば必ずと言っていいほど防がられるのが目に見えていたので今回はビー

ムキャノン主体で攻めていく。

「こうして見るとビームキャノンって使い勝手いいな！小川さんから使い方教えてもらって翼さんに組み込んでもらって正解だった。」

ビームキャノンによる足止めを中断し今度は勢いよく振るった腕から溢れ出した余剰粒子がいくつかの形を形成し次々とバンダースナッチモックの装甲を傷つけていきとうとうアスタロトの動力炉が爆発を起こしバックパックを切り離す。

「SEEDの方も調整してくれたのか一発一発の威力高くなったな？けどここで引く通りはない、俺はバンダースナッチを討つ！」

パンツアーアイゼンを前に掲げながら後方へバックブーストをかけ下がるバンダースナッチモックに向け天羽々斬（大剣モード）を勢いよく振るい追撃を仕掛けパンツアーアイゼンを斬り伏せその返す刀で斬り払うと上半身と下半身が分かれ爆発が起ころ。

「はあ、はあ…： やっぱりバンダースナッチだけあって手強かった。ムラマサだったらやられてたかもしれないなあ…。」

辺りを見渡すと拓哉の先ほどの砲撃で起きたクレーターが今も燻っており討伐数も響：4に対し拓哉：7と多少離れてはいるがまだ追いつける段階でブーストを噴かそうと身をかがめたところでクアンタムセグエンテが砂煙を巻き上げながら降り立った。

「お疲れさん…：。なあそろそろ。」

「ああお疲れ様…：。そうだな。」

「もう終わりにしよう…：。」

その後もストライクやらエクシアやら歴代主人公機を模したモックが向かってきたのだが木乃香モックを倒した響と拓哉の敵ではなく最後のエクストリームモックを響が天羽々斬で一刀両断し爆発を起こす。

「mission clear!」

スクリーンが溶け自機を回収した響と拓哉はソファに腰掛け翼が手渡してくれた缶コーヒーとココアを飲んで寛いでいた。

「それでどうだったかな。使い勝手の方は。」

「俺は思ってたよりも速度が早くて慣れが必要みたいです。」

「決定打を与える武装もうひと押しかなって感じですね。」

その答えを聞いた翼が何かを考える素振りを見せて製作スペースに籠っていくのを翼以外のガンプラバトル部メンバーは顔を見合わせて考えてる事は同じかと今度は木乃香が口を開く。

「翼くんはさておき、大会まで残り5日!やれる事をしましょう!」

「「おー!!!」」

その後すぐ筐体に向かった木乃香たちのコンビネーションなどの特訓は帰宅チャイルムが鳴り施錠をしている警備員さんに怒られるまで続いた。

## 第48話〈裁定者・オン・ザ・ロード〉

「電車とバスを乗り継ぎ！」

「途中、道に迷いながらも…」

「何だかんだで！」

「やってきました！」

「「in 静岡あ！」」

響たち天ヶ崎高校ガンプラバトル部は全国大会の会場があるガンダムの聖地、静岡県に出向いていた。

ちなみに全国大会の5日間は平日だがちゃんとした公欠なので問題はない。

「それにしても宿舎まで貸してくれるってホント太っ腹だよな。」

「それに加えて大会中の飲食は参加選手なら制限はあるけどタダっていうのも凄いよね！」

「奏、あんまり食べ過ぎないでくれよ？奏母から面倒見てって言われてるから。」

「「幼馴染か？」」

「「幼馴染ですけど？」」

と、一通りのツツコミを終え宿舎に荷物を置き開会式のために参加選手が次々と会場に入っていく中、響は遠目に舞姫の姿を見つけていたが敢えて声を掛けずに去年優勝高校の選手宣戦による行われ1回戦のステージアップのため一旦控え室に戻っていった。

「さて！1回戦は私が去年叩き潰されたバトルロイヤルな訳だけど勿論1人は私としてあとは…」

「すみません、質問なんすけどなんで1回戦が参加高校全部によるバトルロイヤルなんです?」

その後は翼が説明してくれたが、要約すると参加する高校から2名の代表選手の合計90名によるバトルロイヤルで3分の1を切るまで戦いが続き残った30名(15高校)で2回戦からのトーナメントに進めるという事だった。

「なるほど、バトルロイヤルで一気に絞るわけか…。それなら多数戦闘に慣れてる奴を出すべきだな。」

「そうなのよね、沙希ちゃんと奏は次に出したいし安藤くんはまだ温存したいから城戸くん行くよ!」

「了解です!パラディオンの初陣としては申し分ないぜ!じゃあ小川さん、行ってくるね。」

「頑張つて、下さい!」

「ああ！部長！頑張りましたよね！」

「これで付き合っていないのか… 背中が痒くなってきた。」

「安藤くん、気持ちは分かるわ… さ！行きましようか！」

直後、ステージアップが終わり準備が整った選手たちが予め送られていた配置図通りに並びGPベースをセットする。

《《 Damage level set to A 》》

《《 Beginning [Plavsky particle] dispersal. F  
i ardl, space 》》

《《 Please set your GUNPLA 》》

音声に従ってガンプラを置く

《《 BATTLE START 》》

「今井 木乃香、ガンダムバンダースナッチ。殲滅を始めましようか！」

「城戸 響、ストライクガンダムパラディオン！推して参る！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは地上から宇宙まで全てが戦場の超超大型バトルステージだった。

響たち天ヶ崎メンバーのスタート位置は地上ではなく宇宙だったので急いでバーニアで姿勢制御を行いながら機体状態の確認もして戦艦の残骸の上に降り立つ。

「さて、この状況どうしましょうかね？」

「あのデカイのを突くべきなのか…。」

辺りを見回して一番目に付いたのは144/1サイズのガデラーザでまだGNフアングは射出しておらず、それに加え響は狙撃機でないため遠距離まで細くは出来なかったがシルエットからしてジム系統である事が分かる機体も遠くにいるのが確認できた。

「あら？誰かと思えば眼鏡コンビじゃないの、元気にしてた？」

「あ、お前！」

「部長お知り合いですか？」

「そう言えばこの人達とは戦った事ないわね。ジムⅢブラストマスターの彼は部長の矢野で隣のガナーザクウォーリアの方は副部長の金子よ、ちなみに舞姫のいる高校。」

周囲の警戒を行いつつも見知った機体を見つけて話していた光景を響はさすが顔広いなと思いつつ木乃香も思っていたであろうことを口にする。

「大事な一戦なのに、舞姫居ないんですね？」

「君はあれか今井が言っていた天ヶ崎の盾か。大事な一戦だからこそ体力を温存させて2回戦に出す予定だ。」

「あ、そうなんですね。それにしても「盾」か…。」

「良かったじゃない。あの子中々人にそういう名をつけないから。」



そんな中その空間にいる全てのファイターに聞こえるように通信が入る。

『さあ、せっかく色んな人に見てもらえるんだから派手に盛り上がりましょう!』

『クソ!なんでこつちに裁定者がいるんだ!??ついてねえ!』

『あいつ...!ここでケリをつけてやる...!』

「ちよつと城戸くん!? ああ、もう!」

オープンチャンネルで聞こえてくる声に今一番会ってはいけない人物だと確定しその方向へと木乃香の制止を振り切りブーストを噴かす。

だがその通信により至る所で戦闘が始まり、移動中の響にもFAZZが迫っていたが響はこれを天羽々斬・真で即座に斬り伏せ前方にいる立花 美咲の愛機「リブラドミナント」へ向かうため周囲の敵機にビームキャノンを撃ち込んでいく。

「私のためにここで散ってくれえ!」

「すまないそれは出来ない!せめてものアレで先に狂い咲こうじゃねえか!」

「あ、手を出さない方が良かったかも...!」

おそらくガデラーザのファイターである女性が喋っていたのだろうが、ひとまずビームキャノンによる砲撃を中断し天羽々斬をブースターに加速して行くが自衛の為にガデラーザからGNファンングが多数射出され至る所で爆発が起き響もGNファンングの対応をしているとこちらに気づいたのかりブラドミナントがゆっくり近づいてきていた。

「やっぱり城戸君だあ、見たことある盾だったから！」

「そうかい。盾だけでも覚えてて貰って嬉しいよ、けど俺はこの場でアンタを落とす！」  
「その台詞はこれをなんとかしてからにしてよね。行ってファンネル！」

その台詞と共にガデラーザが動かしていたGNファングはリブラドミナントの「サイコジャック」により美咲の指揮下に入り本来の主であるガデラーザにすらビームを展開し斬り込まれていき当然響の方にも向かって来るがこれを冷静に斬り伏せて行くがいかなせん数が多く。

「1つ1つ斬ってたんじゃ！」

「ねえ城戸くん。私に名案があるんだけど？」

「なんか嫌な予感はしますけど、その案とは！」

「天照で吹き飛ばしましょ♪」

「ですよー！」

次々とGNファングを斬って撃って数を減らしてソウルプリディジョンシールドのビームキャノンフルバーストで撃ち放ちガンダムバンダースナッチの前面に誰もいない空間を作る。

「部長今です！あ、お2人もバンダースナッチの近くへ！」

「天ヶ崎を舐めるんじゃないっての！全方位レーザあああ！」

その言葉と同時にガンダムバンダースナッチの推進装置となっていた高出力ビーム砲「天照」が機体上部に展開、異変に気付いたGNフアングが束となって向かってくるが直後「天照」から無数のビームが放たれ響と木乃香の周囲のGNフアングが軒並み撃ち落とされていく。

「残ったGNフアングと降りかかる火の粉は私と彼らが払ってにおいてあげるから行ってきなさい！」

「部長……と、矢野さん？金子さん？でしたっけ。もありがとうございます！俺、行ってきます！」

「俺ら関係ないんだが!?!？」

ブーストを噴かし木乃香たちに背を向けた時にSガンダムがスマートガンの銃口を向けてきていたがなんだかんだ言いつつ矢野のジムⅢブラストマスターの改造機「グレイガンダム」が盾となって防いでくれていて、そこから少し進んだ先に響が望んでいたリブラドミニナントが佇んでいた。

「アンタの言葉とはちよつと違うけどほぼほぼ片付けたぞ、さああの時の再戦と行こうぜ！」

「お疲れ様！わざわざやられに来てくれるなんてね！」

背部バーニアを噴かしながら接近し天羽々斬を思いつき振り下ろしてそれを敢え

て交わさせてビームキャノンの射程圏内に追い込み乱射モードで撃ち少しづつ装甲を削っていく中、リブラドミナントがの蹴りあげで右側のビームキャノンを潰されてしま  
う。

「まだまだあー！」

「しつこい男は嫌われるよ？」

「しつこくて結構！これが俺の戦い方だからな！」

そう言いながらも振り下ろされたリブラドミナントのビームサーベルを持った腕を掴み、脚に付けたままのビームライフルで至近距離から撃ち込んでその持っていたビームサーベルの基部を撃ち抜き爆発が起こる前に美咲が遠くの方に放り投げ爆発を防ぐ。

「へえ？ちよつとはマシになったんじゃない？」

「そりやお褒めに預かり光栄だよ！」

ビームサーベルと天羽々斬・真による罅迫り合いは近寄ってくる機体を片っ端から斬り伏せながらも続き、左腕を斬り落とされながらも響は近くにあつた戦艦の残骸を掴みリブラドミナントに投げ付けた。

「邪魔な残骸だなあ！ファンネル！」

「この瞬間を待っていたんだ！ビームコンフューズ！」

「嘘!? 戻っ…！」

「3つ貫うぞー！」

残骸を撃ち抜いて尚も向かってくる射出された3基のスカートファンネルの射撃を今響が出来る最低限のステップで躲しつつ、ちよっと勿体ないかと思ったがここで出し惜しみはしてられないとビームダガーをファンネルの移動予測位置に投擲し狙い通り投擲位置に差し掛かった瞬間ビームキャノンで撃ち抜きその周囲を細くなったビームが迸る！

「良いもん！まだGビットがあるから！」

「Gビットもファンネル判定なのかよ！てか斬り伏せた奴らの中にDXいたかあ!?？」  
(クソ！不覚にも可愛いつて思っちゃまった…)」

先ほどの斬り合いの最中奪ってきたであろうGビットのビームサーベルを敢えて交わさずに天羽々斬・真で受け止めビームバルカンでGビットを行動不能にしそのままの勢いで前方のリブラドミナントにどさくさ紛れにこちらも奪ったビームサーベルを投擲しつつも、弾かれる事を見越してブーストを噴かし突撃。

「今度は頭部を貫う！」

「舐めるなあ！」

リブラドミナントのビームサーベルとストライクガンダムパラダイオンの天羽々斬・偽がお互いの頭部バルカン発射口に食い込もうとしていたその瞬間、試合終了を告げる

ブザーが鳴り響く。

「TIME OUT!!」

スクリーンが解け辺りを見渡すと勝ち残れて喜びの表現をする人や奇しくも撃墜されてしまい涙を浮かべる人や地面に崩れ落ちる人など色々な表現があったが、自機を回収し隣にいる武装の大半を失いながらも五体満足なバンダースナッチを持つ木乃香と控え室に帰る。

「部長、お2人は…」

「残念だけど落とされちゃったわ。私にもっと技量があれば助けられたのだけど…」

「そうですか…」

「いつまでも沈んでほられないわ。前を向いて明日からのことを考えましょう、トーナメントの組み合わせも明日だし。」

その後木乃香たちと別れ宿舎に戻り館内着を身に纏い夕食会場に足を踏み入れた響たち男組は既に待ち合わせをしていた女性陣が待っているであろうスペースに向かったのだが、シルエットの人数が1人多かった。

「あれ、舞姫(こ)でなにしてんの?」

「響い… 沙希ちゃんいる時に下の名前+呼び捨てはマズイよ。ってそれはさておき負けちゃってする事ないしどうせ大会期間中は宿舎にいるから箆(こ)ってても暇だから近く

で応援しようかなって♪」

「さいですか、でも何で小川さんいる時はマズイんだ？ねえ小川さん？なんでこつち見  
てくれないんだ？おーい…。」

「舞姫ちゃん後で話し合いましよ…。」

「寝る時にね！で響と沙希ちゃんはいつもこんな感じなの？」

「「「そうだよ。」」」

（これは色々な意味で楽しくなりそうだなあ。）

宿舎で夕食を食べながらの会話はここから更に弾み夕食会場を閉める時間まで続い  
た。

## 第49話くイレギュラーにはイレギュラーで返しますく

「ガン普拉バトル全国大会、高校生の部2日目がやってまいりました！早速ですが組み合わせ発表とさせていただきますー！」

「「うおおおおおおお！！！！」」

会場全体が盛り上がりを見せる中、残っていた高校名が正面のスクリーンに映し出され映像内でシャツフルが起き次々と組み合わせが決定していく。

「第3戦、天ヶ崎高校 対 雨ノ宮高校の試合となっております！」

「3戦目か… 思ってたよりも早かったな。」

「出番かみたいに言ってるけどビツキー今回は休みじゃん。」

「え、そうなんですか？」

「当たり前じゃない、昨日戦ってるんだから。」

そして、全対戦カードの貼り出しが終了し第1戦の選手たちがコートに出て試合が始まり

何分かすると第1戦、第2戦と勝敗が決まっていき続けて響たち天ヶ崎高校の試合となった。



「それじゃ選出メンバーはさっき話した城戸くんは休みで安藤さんと沙希ちゃんね！」  
「おっしゃー！いつちよやつてくるか！」

「は、はい…！」

バトルコートへ向かい相手方の選手たちと何度か言葉を交わし、4人の選手たちはそれぞれ機体とGPベースをセットしていく。

《《 Damage level set to A 》》

《《 Beginning [Plavsky particle] dispersal. Faird2, desert 》》

《《 Please set your GUNPLA 》》

音声に従ってガンプラを置く

《《 BATTLE START 》》

「安藤 拓哉、クアータムセグエンテ！飛び立つ！」

「小川 沙希、ドミネイトバストラア。い、行きます…！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージはガンダムZZでジウドー達ガンダムチームとロンメル部隊が戦った砂漠地帯だった。

ゲートから飛び出しオアシスを踏まないようにその横あたりに砂埃を巻き上げなが

ら降り立ち早速、偵察用としてGNランチャービットを射出する。

「さつてと、小川さんリーダー感知できそう？」

「安藤さんから送られてきた地形データとスナイパーライフルで覗ける範囲には反応がないですね。」

どうしたものか、と一旦GNランチャービットを戻しその場を後にするためバーニアを噴かし始めた辺りで地面が揺れ始める。

「下から!? あつちのデザートカラーの腕に付いてるドリルで地中を掘り進めて来てたんだな、だから地上からじゃ反応しなかった訳だぜ。」

「安藤さん……!」

「分かってる!俺が突っ込むから援護してくれ!」

胸部装甲を若干削られながらもギリギリの所で身をよじって回避を行いアームから伸ばした大型ビームソードを掴んで刀身からビームを一閃、ブーストを噴かして再突撃を掛けると正面から受けてやると言わんばかりにガルスjが両腕のドリルを回転させながらクアンタムセグエンテの大型ビームソードとぶつかり合う。

「かつてえな、おい!金属でも使つてんじゃないの!?!」

「失礼な!ちゃんとルール通り金属までは守ってるわ!」

「そうかよ!説明してもらって悪いけどその腕にはご退場願おうか!」

「ええ!?？」

何度が鏢迫り合いを繰り広げてこのままではラチが明かないとフロントスカートから照明弾を投擲しガルスjを蹴り上げ、続けて腰に付けた状態でGNランチャービッドからビームを撃ち放ち両腕の関節がキレイに飛んでいく。

「さて、邪魔な腕を落とさせて貰った訳だがここからどうする…!?？」

「脇が甘い!」

両腕が無くなったガルスjが何をするか観察するのに一度距離を取ろうとバックステップを図るその直前、膝蹴りを受け体制を崩してしまふ。

「リアルだったら気絶しそうな一撃をくれるじゃねえか!」

「ならもう一ついかが?」

「特攻だ!??クソ間に合わ…!?？」

「安藤さん…!」

異変に気付いた沙希が実弾ガトリングを乱れ打ち先ほどまで戦闘していたパウードザクカーデイガン共々、ガルスjに穴を開けていくがそれでも勢いは止まらずクアンタムセグエンテと接触した瞬間動力炉が爆発を起こし爆発の中心から少し離れていた2機は中心地の爆発による煙が見えなくなるまで吹き飛ばされていく中最後に沙希が見たのはGNフルクロスを展開しようとしていた一瞬だった。

「仲間を見に行きたいのは分かるが、俺がいるのを忘れないでくれ！」  
「邪魔をしないで下さい…！」

砂地に足をめり込ませながらもなんとかバーニアを全開で噴かし浮き上がり爆心地へ戻ろうとした沙希だったが、こちらは同じく吹き飛ばされていたパウードザクカーデイガンと出会ってしまいヒートアックスと複合バヨネット装備型ビームライフルで斬り結んでいた。

「あーらよつとー！」

「…？重い…！」

何度か罅迫り合いを繰り返して業を煮やしたパウードザクカーデイガンがヒートアックスを投擲、すんでの所で前に掲げた複合バヨネット装備型ビームライフル2丁に深々と食い込みダメージアラートが鳴り響くと同時に投げ捨て身を屈め爆風を最小限に止める。

「そおら！続けて行くぞー！」

「重い、けど…！」

ザクマシンガンを乱射し続けるパウードザクカーデイガンに対し沙希は両手にビームガン（サーベルモード）を持ち手首を回転させる事で即席のビームシールドを貼って直撃を防いでいた。

「スナイパーの本領発揮ってか？」

ザクマシンガンをしまつて代わりに抜いたビームサーベルを構えながらブーストを噴かし突撃をかけるパワードザクカーデイガンへ向け武装をスナイパーライフルに持ち替え、簡易射撃ポジションを取り関節部を狙い撃つが流石全国にでるだけの実力を持つており避けられてしまう。

「私が取るべき手段は…！」

「狙撃機がライフルを投げたあ…？」

とうとう接近を許してしまったパワードザクカーデイガンが肩から抜いていたビームサーベルでこちらのビームライフルを突き刺そうとその腕を突き出した瞬間、沙希は自身の手からスナイパーライフルを上空へ投げ代わりにアーマーシユナイダーを膝から抜きその勢いのまま振り上げる。

振り上げられたアーマーシユナイダーはビームサーベルを持っていた手の指を斬り落としボトリとビームサーベルが地に落ちていく。

「地面から何か…？」

トドメを刺そうとアーマーシユナイダーを振り抜いてブーストを噴かし砂漠を滑走していく中、突如地面から初期に拓哉が撃ち落としたガルスJのドリルユニットが勢いよく飛び出し頭部の右側が音を立てて削られその際アーマーシユナイダーを手放して

しまう。

「ガルスJの…」

「そうさ！あれは本当は俺のビットなんだよ！撃ち落とされた時に地中に忍ばせたまま吹き飛ばされて良かったぜ。」

（地中にいたのであれば熱源センサーに引つかからなくても仕方ないですね…）

頭部を削られながらも背部バーニアユニットを逆に噴かしてドリルビットを突き放し、パワードザクカーデイガンから振り下ろされたビームサーベルを近くに放置されていたスナイパーライフルを拾い上げビームジュツテで防ぐ。

「この場は離脱しましょう…」

今度はバーニアユニットを地面に向けて噴かし砂煙を舞わせて目くらましを行い闇雲に撃たれたビームを躲しつつ半分しか見えていないモニターに若干の苛立ちを感じながらも追加パックから3基のセンサービットを展開しパワードザクカーデイガンの横を通り過ぎていく。

「3… 2… 1…！」

「時限式のミサイルか！」

背を向け回避を行いつつも先ほど展開していたセンサービットが要所要所に仕掛けていた追加武装のミサイルブースターを点火、バストレアにザクマシンガンに向けてい

たパワードザクカーディガンの背後から複数のミサイルがそのバックパックに直撃し地面に顔面から突っ込み。

「い、これで…！」

周囲を旋回していたドリルユニットもその爆発で撃ち落とされた瞬間、ドミネイトバストレアが弾かれた様にスラストスターを全開で噴かし右肩の350mmガンランチャーを胸部にめり込ませおもむろに引き金を引き地面に大きなクレーターを作りながらも立ち上がり上空に向けミサイルを1発打ち上げた。

「やっどガルスj倒したと思ったのに、なんでコアブースターが出てくんだよ！」

「あれはコアブースターに装備していたものだから私がメイン操縦してるのはこのコアブースターだよ。」

爆発の直前、腕だけ強制トランザムを起動し強引にGNフルクロス2枚を前面に押し出す事で自身の被害を最小限にとどめたまでは良く

実際のところこちらの被害としてはGNフルクロスとGNメガランチャーを全て失ったのみでビットやNGNサブマシンガン1丁などは健在だった。

「ゲートから出た後、何処かに隠してやがったな！」

改めてガルスjにコアブースターの連邦とジオンの合体って異質な組み合わせだなと思いつつも、GNビームサーベルを振りかぶるがこれはコアブースターの急速旋回

で躲される。

お返しと言わんばかりに放たれた追尾ミサイルをGNビームバルカンで撃ち落としながら反撃の機会をうかがっているのと拓哉がある事に気付く。

「攻撃と旋回を同時にはしてこないのか？ならこいつで！」

「そんな見え見えの手は喰らわないよ！」

「は？？？。どんだけ手を隠してんだ？？」

再び急速に接近を仕掛けてきたコアブースターに向けGNビームダガーを投擲、GNビームバルカンで爆発を起こそうとするがこれは読まれていたのかキャタピラが變形しシザーカッターへと姿を変えGNビームサーベルを斬り落とし逆に左腕を挟まれてしまう。

「捕まえたつて言うとおれだけど、片腕ぐらくれてやるよ！トランザム！」

「この状態からやるの？？」

左腕をシザーカッターに挟まれていたクアンタムセグエンテの身体が紅く発光しGNソードビットで自らの腕を切断、千切れた腕を掴んでコアブースターの燃料タンクに叩きつけ装甲を歪ませみるみる燃料が漏れ出し火器を近づけたらもう爆発する一歩手前で

「トランザムエクスプロージョン！」



両肩のGNドライブから勢いよくGN粒子が吹き出し翼の形を形成しアームから伸ばした大型ビームソードを眼前に掲げGNソードビットがその両脇につき自身の背丈をゆうに超えるビームソードを振り下ろし、その一撃は周辺の砂を吹き飛ばしながら正面から突き刺さりクレーターを残してコアブラスターの姿が見えなくなる。

「まだ！終わらない！」

「もう終わってくれない!!?」

トランザムが終了しコアブラスターが跡形もなく爆散し勝利を確信していた拓哉だったが、よくよく目を凝らすとブラスターを切り離れたコアファイターが逃走を図っていた。

「射角取れてなくね!!?」

「その辺りは改修済みなの！」

「そうかい！なら俺は更にその上を行く！」

「ワンセコンドトランザム!!?」

建物の影から飛び出たコアファイターに一瞬肝が冷えるが「ワンセコンドトランザム」を繰り出し、コアファイターの背後に回りNGNサブマシンガンフルオートで撃ち放ち残弾が空になるまで撃ち続け乾いた音が鳴り響く頃には穴だらけになったコアファイターが崩れ落ちる。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け対戦してくれた選手たちと言葉を交わしたのち、選手の控え室に疲労困憊と言った様子で転がり込んだ拓哉と普段より疲れた顔をした沙希にみんなでタオルと飲み物をわんさか差し出していた。

「つつかれたあ！やっぱり全国だけあつて一筋縄じゃいかねえわ。」

「見てて手に汗握る戦いだったな！思わずフリースペースにバトルしに行くところだったぞ。」

「そこは試合見てくれよ…。」

「冗談だつて、小川さんも出てたんだからむしろちゃんと見てたわ。」

「——！」

「沙希ちゃんが堪えた！なら夜ご飯食べた後、1バトルしない？」

「良いですね部長！翼さん、フアランクス貸してください。」

「おや、今日は可変機の気分なのかい？良いよ、ちょうど追加武装も作ってたんだ。」

「え、あれから増やしたんですか…。」

ちなみにそのバトルは追加武装をバトルが始まってものの数分でパージしグラハムスペシャルをやるうとしてエクストリームガンダムブレイヴアーFに突っ込み  
[ブローケンファンタズム]  
「壊れた幻想」され敗北したのは言うまでもない。

## 第50話〈燃え盛る炎と吹き荒れる翼〉

全国大会3日目の朝、1人目が覚めた拓哉はコンビニでピザまんとスマイルコーヒーを買っていた。

「やっぱ寒い日の朝はピザまんと苦いコーヒーに限るぜ。」

ブラブラと宿舎に向かって歩き出していると今にも泣き出しそうな少女と熱血そうな青年が地面をゴソゴソしていたが、敢えて触れずに通り過ぎようと曲がり角に差し掛かった瞬間。

「む！そこにいる高校生！だいぶ助けてくれないか！実はだな…」

「ちよつとまてえい！一旦くれないかの辺りで止まってこっちの返しを待て！まあいいけどさ…」

そこから彼の話を聞くと、どうやら女の子がお気に入りストラップを落としてしまったらしくそこを通りがかり一緒に探しているところに俺が来たという事だった。

「事情は分かった。俺も手伝うけど、朝食バイキングの時間までには探し終えるぞ！」

「お、おう…ここのご飯美味しいからな。そうと決まれば！」

朝食の時間までの2時間を使ってフルに周囲を探索したが見当たらず諦め掛けてい

た拓哉だったが最後の救いで訪れたのが朝ピザまんとかを買ったコンビニに尋ねたところ、あつさり見つけたりそれを少女に手渡しながら。

「ほらこれだろ？もう無くしたらダメだからな。」

「うん！ありがとお兄ちゃんたち！」

笑顔で駆けて行つた少女を見送り、改めて横に同じように立っている青年に声を掛ける。

「えっと、良かったな見つかつて。」

「おう！俺一人ではコンビニに聞きに行くという判断が出来なかっただろうから君が居てくれて助かった。はっ！そう言えば自己紹介がまだだったな。俺は榎野 衛兔！君は？」

「だから畳み掛けてくるなって。俺は安藤 拓哉、多分会わないだろうけどよろしくな。」

「そんな釣れない事を言うな！きつと再開は早いかもしれないぞ！じゃあな！」

だからあ……と言葉を言い終わる前に衛兔は陸上部さながらのスタートを切つて宿舎の方へ全力疾走で遠ざかつていき一人残された拓哉はすっかり冷め切ってしまったピザまんを頬張っていた。

時は流れ朝食を食べ終えた拓哉たちは昨日と同じく選手控え室で対戦相手の発表を

今か今かとそわそわしていた。

「ガン普拉バトル全国大会、高校生の部3日目がやってまいりました！組み合わせ発表について：：」

「「「うおおおおおおお！！！！」」」

会場全体が盛り上がりを見せる中、2日目が終わりに残っていた8校が正面のスクリーンに映し出され映像内でシャツフルが起き次々と組み合わせが決定していく。

「第2戦、天ヶ崎高校 対 順堂高校の試合となっております！」

「アミダの結果、安藤くんが2連チャンになっちゃったけど行けそう？もしダメそうなら城戸くんに変えるけど：：」

「いや大丈夫です。翼さんが追加武装バック組み込んでくれてたんで。」

「ぶつつけ本番になってしまっって申し訳ないね。」

「むしろ感謝してますよ！んじや行ってきますかつと！」

「じや行ってくるね！」

そうしてステージ発表のアナウンスから多少遅れてコートへ向かうと既に相手方の選手が待機しており、そこに見知った顔を見つけていた。

「ん？あんださっきの：：」

「お！そういう君は少女の落し物を探すの手伝ってくれた人！」

「あれ、俺あの時自己紹介したよな。榎野さん……」

「うんうん、覚えてる。ちよつとど忘れしただけだ！えつと安藤くんだったよな？」

「急に不安になるなよ……」

「たつくん知り合いだったの？」

「今朝知り合いました。」

衛兔と拓哉の会話で場がホワホワしていたが試合開始を告げるブザーが鳴り響き、意識をバトルへ向けて4人はGPベースをセットする。

《《 Damage level set to A 》》

《《 Beginning [Plavesky particle] dispersal. Faird3, Forest 》》

《《 Please set your GUNPLA 》》

音声に従ってガンプラを置く

《《 BATTLE START 》》

「滝沢 奏、ダハック式号機！狩る！」

「安藤 拓哉、クアンタムセグエンテフルウエポン。飛び立つ！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージはガンダムビルドファイターズ1話でセイとサザキが戦った桜舞い

散るエリアだった。

木々の隙間を器用に避けながら進むクアンタムセグエンテとその横をメガライダーではみ出た木を薙ぎ倒しながら進むダハック式号機を横目に今回増設したGNセンサービットを3基射出していた。

「滝沢先輩、位置情報丸出し過ぎませんか？」

「いやあステージをコロニーか砂漠とか通りやすいので想像してたからこれは完全にやっちゃったよね♪」

「…そうっすね。」

きつと今奏の顔を見たら舌を出してテへって出してるんだろな…そんな事を考えつつもGNセンサービットが集めてきた情報をモニターに映す。

「こりや…ウイング？とクロボンか？独自のカスタマイズがされてるが…」

「情報サンキュ！それじゃ派手に開始の祝砲を打ち上げようか！」

「ちよ、先輩？？まだ気づかれてなかつ…！」

拓哉の言葉を遮り放たれたメガライダーの一撃は周辺に桜の葉を舞わせながら爆発音が響き、爆風がクアンタムセグエンテの装甲を撫でていく。

「やったか？？」

「この瞬間を待っていたんだ！」

「やれてるわけないよな!!? 滝沢先輩!」

「オツケイ! 私はクロボン行くね!」

直後伸びてきたアンカーがGNフルクロスに絡みつきそれを急いでGNビームサールで切り裂く頃には敵機と自身の距離がだいぶ近づいてしまっていて

かたや、ビームサール同士で斬り結びもう片方はGNビームガンを乱れ撃つがミラージュコロイドによる分身を展開してビームを躲しウイングガンダムのカスタム機が迫ってくる。

「目標捕捉、ウイングガンダムインフェルノ殲滅を開始する。」

「さっきの熱血キャラはどこいった!」

出会い頭に振り下ろされた実体ブレードをGNメガランチャーで受け流しつつ左手で握ったGNビームサーベルを振り上げるがこれは手持ちシールドに防がれてしまい続けて背部ラックから拡散パイルドライバーを撃ち放ちウイングガンダムインフェルノの上空から降り注ぐとウイングを展開してミラージュコロイドによる分身で躲していたが流石に連続して放たれた2発目は躲しきることが出来ず分身が消えていく。

「貰った!」

「インフェルノ、俺を導いてくれ...」

「ああ!!? 機体が燃え、いやクリアパーツから粒子が炎に姿を変えて放出されてるの



か。」

大型ビームソードをその頭上に振り下ろした拓哉だったが切っ先がウイングガンダムインフェルノに触れるその直前、機体各部に配されたクリアパーツから炎が溢れ出しその熱気がビームが掻き消えていた。

「赤には紅だ！トランザム！」

紅い残像を残しながら加速したクアンタムセグエンテが大型ビームソードで木々を薙ぎ倒しウイングガンダムインフェルノも各所から炎を放出し燃える剣と化した実体ブレードでこちらにも木々をなぎ倒しながら罅迫り合いへ発展していった。

「ダハックにビーム兵装で挑むなんて無茶してるね！」

「そういう貴女もクロスボーンにビームで無茶してると思わない？」

「ABCマント剥がせば無茶じゃないよ！」

先ほど拓哉が斬り落としたアンカーのワイヤーを引っ込む前に両手で掴んで力一杯に引くとやはり機体が小さい分軽いX1パッチワーク改が釣り上がるがお互いの姿を認知した瞬間、ピーコックスマッシュャーから連射したビームをダハックはワイヤーを手放して両手を前に掲げビームを吸収しお返しにメガライダーからビームを放つがこちらはABCマントに当たって掻き消える。

「もう！邪魔なビームバリアだなあ！」

「それはこつちのセリフだよ！ビーム兵器しかない私に対しての嫌がらせのビームシールドは！」

遠距離からの撃ち合いを諦めた2機がダハックは8本のビームサーベルをX1パッチワーク改は左手にビームザンパーを右手にヒートダガーを持ち罅迫り合いを繰り広げビームサーベルがABCマントとビームシールドからはみ出てるXスラスターの上部2部を斬り飛ばし対するX1パッチワーク改もビームザンパーの一撃を敢えて防がせてヒートダガーを右肩に突き立てると右腕がプラインと力なく垂れ下がっていた。

「スラスターを犠牲にしてまで？」

「2基までなら予備はあるから！」

「え、予備？？」

X1パッチワーク改が腰裏からピーコックスマツシャーだと思われていたものが真ん中から左右に分かれスラスターの形を形成するとXスラスターが再び形を取り戻し呆気に取られていた奏に畳み掛けるようにダハックを押し倒して両肩のビーム砲を踏み潰しバックバックのビームサーベルアームをビームザンパーで切り飛ばしていく。

「このまま……！」

「来て！メガライダー！」

「SF風情が？？」

押し倒されていたダハツクの後方から凄いい勢いでメガライダーがX1パッチワーク改にぶつかり木々にめり込ませようと勢いを止めることなくブースターに火が入るがブランドマーカーで発射口を殴りつけられそれにより姿勢制御が取れなくなり地面にめり込んでしまう。

「こんなもので私を止められるなんて思っていないよね。」

「当たり前！今度はこつちが行く番だよ！」

「減らず口を!?!」

直後、ダハツクの姿が消えブランドマーカーを形成していた方が切り飛ばされており状況を飲み込めないX1パッチワーク改は腰につけたままのビームザンパーなどの外付け武装を自身を守るように乱れ撃つていくが所々紫色の残像やビームを吸収したようなエフェクトだけ目視ではつきりと確認でき最初に左腕を続けてピーコックスラスト、右足が切り落とされて行く。

『ダハツクがトランザム!?!?』

『いや、正確にはダハツクが吸収したビームを推進エネルギーに変換してヴオワチュールで機動性を上げる事により擬似的なトランザムが出来るように改造したんだ。』

『『へえ〜』』

翼による解説を聞いた響たちはまたモニターに視線を移し元々持続時間が短かった

「ヴォワチュールランザム」が終了し再びはつきりとダハックの姿を見れるようになった頃には、X1パッチワーク改はABCマントがスタスタに引き裂かれ両手両足とXスラストアスターがなくなり身動きが取れない状態となっていた。

強引に使ったため、回路の焼き切れたバックパックをパージしながら歩き出し途中メガライダーからダブルビームライフルを回収してX1パッチワーク改に押し当てる。

「まさかダハックがランザムするなんてね……」

「正確にはランザムじゃないんだけど……作ってくれた人には感謝の気持ちでいっぱいだよ。」

「腕利きのビルダーさんがいるのね。」

「うん！私にとっても大事な人が！けど、貴女のパッチワークも強かったよ！」

「ええ、ありがとう……」

ありがたいの他にも何かを言いかけていたがその言葉を聞き終える前にダブルビームライフルの引き金を引き、パッチワークの胴体を撃ち抜いて爆発が起こる。

「あーくっそ！ビームサーベルで斬り合えば良かった！」

罅迫り合いを繰り返していた拓哉だったが、自分の使っていた武装が小回りの効かないものだったためやはり獲物の小さいウイングガンダムインフェルノの方に分がありGNメガランチャー1つとパイルドライバー1つを失ってしまった。

「ここで決めさせてもらおう…！」

「はっ！そうかい、やれるもんならやってみろってんだ！」

一度距離を空けるためにスカイレガースを起動しビームを蹴ってウイングガンダムインフェルノを遠ざけるがすれ違いざまにGNビームガンが傷つけられ爆発が起ころ前に投げ捨てる。

再度突撃をかけるためお互いがそれぞれの獲物を構えた瞬間、相方に關してのアラート通知が鳴り響く。

「…リリーナがやられたか。」

「滝沢先輩はイエローか…ってあの人外国人だったのか!?？見た感じ日本人だと思ってたんだけど。」

「本名が榎本・リリーナ・ベルンで正確にはおじいちゃんが何とかのクォーターらしいが…。」

間合的に届かない、そう思っていた矢先のことシールドから伸びてきたヒートロッドが左肩に突き刺さっており引き寄せられまいとGNランチャービットを射出し自身の左腕を持っていたGNメガランチャーごと撃ち抜き再び自由を取り戻す。

「何処にそんな収まってんだよ！」

「なんか奇跡的に収まってな。」

「そんな奇跡があつてたまるか！行けよビットたち！」

先ほど射出したGNランチャービットに加えGNセンサービットも3基射出しビームバルカンを連射ながら旋回するがウイングガンダムインフェルノのヒートロッドが一つ一つの確に貫いていき最後の一つはバルカンによる乱射で撃ち落とされていた。

「バスターライフル、最大……出力！」

「しかも2丁持ちだあ!? トランザムの出力じゃ……なら！トランザムエクスペロー  
ジョン！」

バスターライフル2丁によるビームの渦は地面を抉り周辺の木々を溶解させクアンタムセグエンテもGNメガランチャーを最大出力で撃ち放つが徐々に押されていきウイングガンダムインフェルノのビームが自身を飲み込むその直前、SPスロットから「トランザム」の上位互換である「トランザムエクスペロージョン」を選択GNドライブから勢いよくGN粒子が吹き出し翼の形を形成するとビームの出力が跳ね上がりGP02のアトミックバズーカに負けず劣らずの爆発が起こる。

「やった、のか……?」

「んな訳ないだろ！この程度やられる俺とクアンタムセグエンテじゃねえ！」

爆発による煙が晴れるのを待つ事なく体制を低くグッと踏み出し炎システムの終了したウイングガンダムインフェルノの下からGNカッターを振り上げバスターライフル

ルを斬り、返す刀でもう一つのバスターライフルを斬りふせる。

流石に3撃目はバルカン乱射に防がれてしまい一度距離を取りウイングガンダムインフェルノが実体ブレードを抜きブーストを噴かし突撃をかけていた。

「わざと弱点を残したな!?？ 姑息な手を！」

「姑息とは失礼だな！ ちゃんとした作戦だったの！」

GNフィールド用のGNドライブを前に掲げ実体ブレードの一撃を無理矢理に防ぎ柔道でやる足掛けの挙動でよろけさせると

パイルドライブバーから拡散弾頭を引き抜いて押し倒したウイングガンダムインフェルノの胴体に縫い付ける。

「これでしまいだ！ エクスプロージョンノヴァー！」

「ここまでだな… お疲れ様インフェルノ。」

左腕、姿勢制御用の追加武装に加えGNドライブが損傷している状態での大型ビームソードによる「エクスプロージョンノヴァー」はかろうじてシールドを掲げていたウイングガンダムインフェルノを響のブレイヴエンプレスに勝るビームの束が飲み込み戦闘不能に追い込むことは出来たが自らの出力に機体が耐えきれず自壊していく。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが溶け地面に座り込んだ男組となにやら話し込んでいた女性組に分かれ、

一呼吸置いて拓哉が立ち上がり筐体の反対へ回り込み同じく座り込んでいた瑛兎に手を差し伸べる。

「ほら、立てるか？」

「ああすまない！ここまで熱く燃え上がる事の出来た試合は数少ないから全力で楽しませてもらった！」

「試合が終わった途端戻りやがった……」

ワイワイ話していた拓哉たちだったが次の試合のアナウンスが鳴り試合会場を追い出され、それぞれの控え室へ戻りそこからの時の流れは早く意識をはっきり戻す頃には布団に潜っていた。

（滝沢先輩はリリーナさんと連絡先を交換していたな。何か通ずるものがあつたのだろうか？）

「ま、いつか。今日はもう寝よう……」

拓哉のベット横の机にはボロボロにはなっていたが仁王立ちが出来るくらいに修復されたクアータムセグエンテが置かれていた。



## 第51話～前夜祭は波乱の予感?～

全国大会・高校生の部も3回戦が終わり準決勝を前にして2日ほど選手たちの休養期間となっていて

この期間においては一度地元へ帰るもよし、飲食店を巡ってもよしと自由な時間を過ごしており響も施設内をウロウロしていたが遠くの方に知った顔を見つけたので叫んでみた。

「あ、おーい!舞姫!ちよつといいか?」

「遠くから声かけないでよ恥ずかしい...」

「ごめんごめん。今暇?」

「え、なにデートの誘い?嫌です無理ですごめんなさい。」

急に早口になって捲したてる舞姫に若干落ち込みながらも言葉が続ける。

「ちげえ!しかも振られてるし。つて話は戻すけど久し振りにバトルしないか?バトルロイヤルじゃバトル出来なかつたし。」

「良いけど決勝とか前にしてパラデイオン使うの?多分壊れるよ?」

「なんで壊れる前提なんだ...それは大丈夫、部長からバンダースナッチストライカー

を翼さんからファランクス借りてきたし」

「またそんな武装増やして：：ただでさえバンダースナッチがバランス崩してるのにファランクスの可変形態も使おうだなんてき。」

「複合兵装つてやつを使ってみたくなくて。」

会話をしながらも空いてる筐体へ向かいGPベースをセットした2人は続けて機体を読み取り機へ置く。

《 Damage level set to C 》

《 Beginning Plavsky particle dispersal. Fairly, space 》

《 Please set your GUNPLA 》

音声に従ってガンプラを置く

《 BATTLE START 》

「城戸 響、バンダースナッチストライクtypeF!推して参る!」

「今井 舞姫、ストライクフリーダムフェイタルバレット。殲滅を始めようか。」

今回のステージは予めフリーバトルで設定していた多少の障害物はあるものの見晴らしの良い所だった。

「舞姫の性格上、中央に着くまで攻撃はしてこないだろうけど…。」

ガウォーク形態で周囲を警戒しながらステージ中央付近の小惑星に降り立つと時を同じくして舞姫の期待も戦艦の残骸に降り立つ。

「お待たせ、待たせちゃった？」

「いや、俺も今着いたとこだよ。って今回はロストフリーダムじゃないのか。」

「まあね、あの名前は特別だし…。」

「そういうもんか。」

「そういうこと！」

開幕早々にストライクフリーダムフェイタルバレットが、その両手に持ったバズーカを撃ち放してくるのに合わせ響は1発目を屈んで躲し続く2発目をビームサーベルで斬りふせる。

「今だからこそ話せる話つてのもあると思うんだよ、俺たち…。」

「どうしたのよ。バズーカの弾頭を初見で斬り伏せといて。」

「あのな？小川さんって日毎に髪型変えてるじゃん？」

「変えてる、ねえ…それが？」

「ツインテールの時があったんだが、その時気付いたんだ。俺は小川さんのツインテールが好きなんだって。」

「響、一つ言わせて。キシヨイ…。」

「え…」

なにかを言おうとした響の言葉を遮ってロケットブースターを取り付けたMSの残骸を3基飛ばし向かわせるのだがメンタル面はあの一件で鍛えられていた事もあり意識を即座に戻し6連ミサイルから複数撃ちバンダースナッチストライク type Fに届く前に撃墜、対する舞姫は残っていたミサイル弾頭を取り出していたビームガトリングで乱れ撃ち次々と誘爆させていく。

「切り返しが早くなつたんじゃない？」

「そりやどうも！それはそうときっきの続きなんだけど…」

「あの話続けるなら沙希ちゃんにこの事密告しようか？」

「……」

「黙るな！」

可変形態でのハイマニューバを駆使しストライクフリーダムフェイタルバレットのビームガトリングの攻撃を敢えての加速で振り切つて一度抜き後方を取り振り向くモーションに入つた瞬間上半身のみ変形を解き、実体ブレードで切り上げ追加バイナダーの接続アームを斬り飛ばす。

「可変形態で躲す!?」

「人呼んで、グラハムスペシャルつてな！」

接続アームの2つめを切った辺りで振り向かれてしまいストライクナックルで頭部をブン殴られ視界が揺れた衝撃で可変形態に戻り宇宙空間に漂っているところを長距離ビームライフルで狙われるのだが、ビームが当たる直前でフライトポジションから人型に戻る変形を行いそのビームはバンダースナッチストライクtype Fの脇を抜けていった。

「両手でガトリングつてずるくねえ!?!?」

「いや、沙希ちゃんだつてやってたじゃん。」

「確かに沙希……じゃなくて小川さんもやってたわ。」

「いい加減、下の名前で呼びなつて!そろそろ見てられないよ……」

「それはあれか?この前沙希つて呼ぼうとしてヒュつて声が出た俺に對してか?」

「えつと……なんかごめん……」

残っていたバインダーからビームガトリングを2丁抜いて前方に向けて乱射しながらブーストを噴かして接近してくるのに合わせ響も変形時の機首になるシールドを前に掲げブーストを噴かしビームガトリングにシールド叩きつけ暴発させた勢いでストライクフリーダムフェイタルバレットの胴体を蹴り上げ距離をとる。

「ここで決めさせてもらう!吹き飛ばせアスタロト!」

「アスタロトを使うこの瞬間を待ってたの!」

「誘導されたのか?」

悪魔の名を持つバンダースナッチストライカーの中で一番の火力を持ったビーム砲が叫び声にも似た咆哮をあげながら直線上の小惑星を溶解させストライクフリーダムフェイタルバレットへ迫るがビームの渦を滑るように回避、途中で砲撃を中断できないバンダースナッチストライク type F の上部に位置すると両手に持ったビームサーベルで右はストライカーの右翼斬り飛ばし左はアスタロトの動力炉に突き刺していた。

「はあー!」

「ああああ!バンダースナッチが!部長に怒られる:」

「何言ってるの!設定Cなんだから壊れるわけないでしょ!」

「そりやそう、かつと!」

動力炉が爆発を起こす前にバンダースナッチをパージし戦艦の残骸へ向かわせ自身のダメージを最小限に抑え、脚部のスラストのみの推力で姿勢制御を行い続く追撃をビームサーベルを抜き斬りむすびストライクフリーダムフェイタルバレットを蹴り飛ばす。

「うらああああ!!」

蹴り飛ばされたストライクフリーダムフェイタルバレットは衝撃で飛んで行った

ビームサーベルの代わりにアサルトナイフをバンダースナッチストライクタイプはビームサーベルを手放し一撃の威力の高さを求めて近くに漂っていた折れたストライカーの翼を手に持ちお互いにブーストをかけ突撃をかける。

だがその切っ先が両者に触れることなく終了を告げるアラートが鳴り響いた。

<Draw!!!>

「はああ!引き分けか〜!」

「武装の多さで攻めてくるとは思わなかったよ。」

「そっちこそバンダースナッチとフランクスの使い方上手かったじゃん。」

「ありがとよ。この後どうする?他の人のフリーバトルでも見に行く?」

「良いけど、この光景を沙希ちゃんが見てませんように。:」

「なんか言った?それよりあそこでバトルしてるのって部長のバンダースナッチと相手は4本の刀を持った。:バルバトス?」

筐体外に設置されていたモニターの途中でその中でも一際盛り上がっていたところのを見ると響の言葉通り木乃香のガンダムバンダースナッチと武者のような装甲を身に纏ったガンダムバルバトスが罅迫り合いを繰り返していた。

「ホントだ。でもあのお姉ちゃんがあそこまで押されているの久し振りに見たかも。:」

「しかも部長のアロндаイトが飛ばされた!?」

ガンダムバンダースナッチが右手のアロンダイトを振り下ろした瞬間、武者のようなバルバトスが追加腕の刀で受け止め左手の刀でアロンダイトの持ち手を斬り飛ばす。

衝撃で壁に叩きつけられバルバトスの刀が頭部を突き刺そうとした時に試合終了を告げるブザーが鳴り響きスクリーンが解けていく。

「時間みたいだな。また近々会うこともあるだろうよ、フリーダムのファイターさん？」  
それだけ告げるとバルバトスを操っていた男はその場を後に立ち去り残されたのは木乃香、響、舞姫の3人で木乃香がワナワナと震えていた。

「まさかフリーバトルでここまで白熱した試合を送れるなんて！こうしちゃいられないわ…。もしもし翼くん!?今からモデラールームに集合！」

「あれ部長負けそうになったから震えてたんじゃ…」

「そんなわけないじゃない！むしろ強敵とバトルできた喜びが勝ってるのよ！しかもね、あの彼準決勝で名前は忘れちゃったけど私たちが当たる人なの！」

「そ、そうなんですわね…」

「響、諦めてお姉ちゃんは今からこういう人だよ。」

そこから数十分とかならず翼が息を切らしながらやってきてすぐ木乃香に引きずられてモデラールームへ姿を消し次の日の夜まで木乃香と翼の顔を見る事は無かったという。



## 第5 2話～盾に挑む獣と悪魔の狂乱～

時は準決勝の対戦カード発表の3時間ほど前

木乃香達2年生組は朝早くから工作室に籠っていた。

「ま、間に合った！私のバンダースナッチ。」

「6割型弄つたの僕だけどね…。名付けるならRe：Incarnation。再転生って意味だよ。」

「生まれ変わったこの子には良い名前ね！」

木乃香のバンダースナッチの姿は大きく変わっていて目を引くのは脚部のブーツ部分が巨大な大剣となっていて腕部にも普段使用しているアロンドイトが2つに増えていてバックパックにはトリアイナを改良したものが増設されており、見た目だけで言えば宇宙戦でのレギンレイスジュリアに似ていた。

「随分と実体剣増やしたね。」

「4本腕には4本の刀で対抗するのよ！そのために翼くん呼んだんだから。」

「ちようど僕も奏の頼み物を作ろうとした最中だったから良いけど。ほら、奏の分だ。」

「あれ出来たんだ！ありがとー！」

「それって・・・」

「ふっふう。それは戦ってみてのお楽しみだよ！」

そして時間は流れ準決勝の対戦カードがスクリーンに張り出されていく。

「準決勝第2試合！霞ヶ関高校対天ヶ崎高校の試合を行います。選手はコートへ！」

「よっしゃー！いっちゃ行ってくるか！行くぞ拓哉！」

「ちよつと待て、俺のセグエンテはメンテナンス終わってないしそれ以前に選出メンバーは部長と滝沢先輩って決まってるからな？」

「え、いつ決めたんだ？」

「あれはそうだな・・・お前が小川さんとイチャコラしてる時に決まってたぞ。」

「そうですね・・・私は聞こえてました・・・」

「ま、そういう事だから。応援よろしく！」

そう言いながらコートへ足を運んだ木乃香と奏は待つていた人に声を掛ける。

「ん、来たか。」

「待たせてしまつてごめんなさい。そう言えば貴方の名前を聞いてなかったわね？」

「そうか、なら俺の事はイチョウって呼んでくれ。それでこっちは篠崎、そういうあんたは？」

「私は今井 木乃香。相方は滝沢 奏よ。分かったわ、ならとことん斬り合いますよ  
か?」

「楽しみにしとくぜ。」

残った2人も会釈を交わし読み取り機へ歩き始め

「あの人がさつき言ってた?」

「そう!あの人となら本気で斬り合えそうなの。」

そして会話もほどほどに慎重な顔つきになった4人はそれぞれGPベースをセットし機体を読み取り機に置いた。

《 Damage level set to A 》

《 Beginning Plavsky Particle dispersal. Fairly, space 》

《 Please set your GUNPLA 》

音声に従ってガンプラを置く

《 BATTLE START 》

「今井 木乃香、ガンダムバンダースナッチRL。最後の殲滅を始めましょうか!」  
「滝沢 奏、ダハック改式号機!援護は任せてよ!」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは鉄血のオルフェンズで、ガエリオ達とドルトコロニー付近で戦いを繰り広げた所だった。

「奏、索敵は怠らないで。」

「分かつてるって。それより木乃香ちゃんこそメテオライダーから離れないでよ!」

「ワイヤー牽引してるから大丈夫よ。取り敢えずそのコロニーへ。」

ゲートから飛び出た後メテオホッパーの改造機である2輪となった名を「メテオライダー」に跨り宇宙空間を掛けていきドルトコロニーの外壁にタイヤ痕を残しながら降り立つ。

「うーん、近くに敵機の反応はないね…移動する?」

「いえ、わざと大技撃って誘い出しましょう。」

「木乃香ちゃんならそう言うと思った。周囲の警戒は任せて!」

「ありがと!メテオライダーに接続、わざわざ手持ち式にしてまでアスタロトを引っ張り出してきたんだからデカいの行つくよ!」

『調整がまだ完全に済んでいないから撃って2発が限界だ。撃ちどころを…』

と、翼の言葉が終わるかの所で予備バッテリーも兼ね備えてるメテオライダーに繋いだ上での砲撃はレーダーの範囲外で何かに当たったような命中音が鳴り響く。

「あ、当たったの?」

「なんで撃った本人がビックリしてるの…」

「いやだって、ねえ?」

「でもあれだね、メテオライダーの望遠レンズから送られてきた映像だとなんかビームシールドっぽいのが見えてるから落ちてはならないみたい。」

メテオライダーからの映像を転送してもらいモニターを凝視した木乃香の眼に映っていたのは、戦国バルバトスの前方には増設されたグシオンリベイクの隠し腕の実体盾と自身の腕・脚から発生させた計4枚のビームシールドを重ね合わせていたズサだった。

「ガン盾過ぎない!?」

「ビックリーの盾より硬そうだね…」

この瞬間何処かでガタつと音がしたような気もするがここは敢えて触れず、奏と共にメテオライダーに乗り込み補助ブースターに火を灯す。

3カウントを刻んだのちブースターが爆発的な推力を叩き出すと前方に漂っていたスペースデブリをメテオライダーのメガ粒子砲で蹴散らして進んでいく。

「こんにちは! イチヨウさん?」

「手厚い歓迎感謝するぜ、昨日やり合って感覚的だが天ヶ崎のエースさんよお!」

「惜しいわね、最近エースの称号は後輩に譲ろうと思ってるの!」  
「へえ、そりや残念だっ!」

振り下ろされた特殊超合金製太刀による一撃を右脚の実体ブレードで蹴り上げ背部の「天照」から狙いを一点に絞ったビームを至近距離から撃ち込むが戦国バルバトスの右肩アームで握っている菊一文字則宗によって切り裂かれてしまう。

「太刀も硬くて折れなければサブアームで握ってる太刀はビームを切り裂くための粒子変容塗料が塗られてる!?!」

「察しがいいなあー!」明察通り俺の刀にはそれぞれ加工が加えてるんだよ!」

なんとか攻め時を作ろうとトリアイナ ver3で斬り込んでいき正面から振り下ろすと戦国バルバトスの両手に持った特殊超合金製太刀をクロスにして受け止められつぎの瞬間、バンダースナッチRLには届かないにしても切り払われトリアイナ ver3がバキイ!と音を立てて砕け散る。

「ほんつとうに硬いんだから!」

「お褒めに預かり光栄!」

4本の太刀を携えた戦国バルバトスと4本の実体大剣を携えたバンダースナッチRLがそれぞれの獲物を構えブーストを噴かしていた。

「一つ聞きたいんだけど。攻撃系の武装って積んでるの?」

「それを聞いてどうするの?」

「いやあ、見たところサーベルすら積んでなさそうだったから:」

バックパックアームを含めた8刀流で斬り込んでいくが守りに特化していたズサ本体にはダメージが通っておらずどっちつかずな戦闘が続いていた。

「守りだけで言えばビツキーより硬い、んだけど!」

「私以外に守りに特化させた人がいるの!?!?」

「特化って言われるとちよつと違うかな。」

「なんだ:。所で話を戻すけど、私のビームシールドの防御が勝つか貴女の8刀流が勝つか根比べといきましょう!」

「根比べは苦手なんだよお:」

ここで奏は攻め方を変えビームシールドの基部を狙って斬り込み対するズサはビームサーベルの切っ先が触れる箇所到的確に追加アームの实体经济を当てていく。

「ビームサーベルかビームライフルでも使ってくれば吸収し易かったんだけど、ね!」

「ビームシールドのビームを吸収して?!?強制終了出来ない?!?!?」

ラチが明かないと实体经济をバックパックの腕で押さえ込み展開していたビームシールドに臆する事なくダハック改式号機がその両腕を突っ込みビームをエネルギーへと変換していく中、なんとか逃げ出そうとジタバタしていたが足まで膝から下をビーム

シールドの基部にしていたのが仇となりビームシールドを展開するだけの粒子が足りなくなるまで吸い取られ続けていた。

「そろそろ吸収限界量……ってやば!?？」

「イチヨウさんのために私と一緒にいいい！」

予め設定されていた限界ビーム吸収量を超えそうだったのでズサから手を離そうとした奏だがやはり準決勝まで勝ち進んでいるだけあって簡単には離してくれず逆に叩きつけられたズサのビームシールドの基部が爆発を起こし直撃を受けた頭部が衝撃で吹き飛ぶ。

「まだメインカメラがやられただけだから！サブカメラ起動、ホントはバルバトスに使いたかったけどもうビーム吸収出来ないし長引くとめんどくさそうな気がする……」

「change!beast mode. Remaining until the time limit of 150 seconds。」

下半身がひっくり返り獣のような身体つきになると近くに待機していたメテオライダーからビーストモードに必要な機首となるシールドが射出され先ほど吹き飛んだ頭部の位置に嵌め込まれ吠える！

擬似的なトランザムの加え制限時間付きの可変形態と言った設定マシマシなのは奏が翼のフアランクスを見て思いついたのを私もそれを取り入れたいと駄々を捏ねた結



果生まれたもので、無理やり詰め込んだせいで一度変形した後の人形に戻るのとは不可能となっていた。

「流石に…：これは突破されないよね…：!?？」

「はあい！こんにちは！」

「で、で、で、出たあ!?？」

小惑星のクレーターに身を潜めていた出力の関係で使えるのが残り2枚となつてしまったシールドを自身の目の前でガツチリと組み合わせていたズサの目の前にさつと現れシールド上部に爪を食い込ませて押し倒し頭部に食らいつく。

そうして頭部・右腕・脇腹を喰いちぎりバックバックに装備されているダブルビームライフルが残された両脚を吹き飛ばし胸部を踏み潰す。

「潰すつもりなかったのにこのシステムだとそんな感じの制御が難しくなるから考えどころかも。」

ビーストモードのままメテオライダーに乗り込み遠隔レンズから得た情報を元にその場を離れる。

「それならとっておきを使いましょうか！SEED III（ドライ）！」

「SEED system standby。Remaining until  
 he time limit of 60 seconds。」

鏢迫り合いの最中、戦国バルバトスの振り下ろされた菊一文字則宗による一撃がガンダムバンダースナッチRLを貫くその瞬間機体周囲に蒼を纏わせて脚部大剣で蹴り上げる。

「流石元エースだけあって面白いもん見せてくれんじやねえか！」

「SEED使ってるのに着いてこれるの!!?」

「天照」のビームは即座に斬り伏せられ高速戦闘の隙を狙って投げつけた戦艦の装甲板も弾かれてしまい、もうやることは一つだと響程ではないが足技を用いた攻撃を仕掛けた！

「はあああああああ！」

「はは！楽しいなあ！」

「コロニー!!? やられたっ！」

だが蒼を纏った刀身ですら戦国バルバトスの刀を折るには及ばず逆にこちらの大剣が傷ついていき、瞬く間に脚部大剣は2本とも叩き折られていた…

なんとか反撃の一手を探していくうち気付いた時には廃棄されたコロニーの外壁が目前に迫っており急制動を掛けたままではいいが後方から戦国バルバトスが特殊超合金製太刀を牙突の構えでブーストを噴かしながら距離を詰めてくる。

「木乃香ちゃん大丈夫!!?」

「奏！貴女その形態は…。」

「なんだよ！蒼の次は紅い獣かあ？？」

突き刺さる筈だった特殊超合金製太刀はバンダースナッチRLを突き飛ばしながら突撃してきたダハック改式号機（ビーストモード）の機首に喰らいつかれて咄嗟に手放してしまう。

「ぐるあああ！」

「言葉まで獣になつてない？？けど、貫つたあああ！」

「はっ！あめえ！」

再び喰らい付こうと襲いかかったダハック改式号機を受け止めていた戦国バルバトスの背後から最後のアロンダイトを両手で構え振り下ろそうとするが、いつのまにか背部に移動していた鬼盾に阻まれ逆に追加アームの長曾禰虎徹によつて右肩を貫かれていた。

「ここまま袈裟斬りにしてやるよお！」

「タダでは斬られないわ！そうね…せめてその盾でも貫おうかしら！」

「木乃香ちゃん！今救援に…。」

「来ちゃダメ！ここは私が引き受けたあああ！」

右肩に突き刺さっている曾禰虎徹が徐々にその傷口を広げていくがガツと両腕で掴

み「天照」を起動、収束率などの細かい作業をすつ飛ばして木乃香の覇氣に乗っているかのように咆哮を上げながら超至近距離で撃ち放す。

思いのほかの勢いが強く近くのスペースステブリまでバンダースナッチR.L.が吹き飛ばされ衝撃でその動きを止め、2人を相手にしても優勢を保っていた戦国バルバトスにしても流石に鬼盾でも完全には防ぎきれずヒビが入ったと同時にコロニーの搬入口まで押されていた。

「奏！アスタロトは!?？」

「もってこいって言われると思ってメテオライダーに積んであるよ！」

「なら、タイミング任せた！」

「オツケ！この距離なら外さない…飲み穿てアスタロトオオオ！」

「はは、やつぱ手動じゃここらが限界だな…」

退路を塞がれた戦国バルバトスへ放たれたアスタロトによるビームの渦は序盤、菊一文字則宗と長曾禰虎徹を正面から振りかぶって受けていたが今までビームを受けるための細かい動作を数秒前に損傷してしまった鬼盾に任せていたため段々と操作が追いつかなくなり徐々に刀が刃こぼれを起こしていきアスタロトが出力を高めた瞬間に戦国バルバトスは搬入口を突き破りコロニー内部の道路へ叩きつけられていた。

「まだ立って…」

「いや、あんたらの勝ちさ…。」

カメラアイの輝きが消えていた戦国バルバトスが直後ゆっくりと立ち上がってきたのを見た奏がこちらもちらで擬似トランザムが終了してしまった体で各関節が悲鳴を上げながらもブーストを噴かそうとレバーを動かそうとした瞬間、戦国バルバトスが再び崩れ落ちシステムから墜落判定が下される…。

「YOU WIN!!」

スクリーンが解け思わず木乃香と奏は地面に座り込みそうなるがそこはぐつと堪え改めてイチヨウ達の方へ歩き出す。

「木乃香って言ったか？今回はアンタらの勝ちだ。おめでとう。」

「あら、ありがとう。けど、私はこれは勝ちであつても勝ちじゃないから。」

「そうかい、ならこれからフリーバトルでもどうだ？」

「行きましょうか！そこではつきり白黒つけようじゃない！」

そう言つて2人は損傷した機体を回収してフリーバトルスペースへ消えていった。

「遅いですね…。」

「まあ、あの2人だから。私たちはお茶会でもしよつか？」

「ふふ、そうしましょうか。」

そうして、奏と一華はフリーバトルスペースとは反対の位置にあるカフェで楽しくお

話ししていたのだが結局何回かバトルして満足した木乃香達も合流して4人は準決勝後のティータイムを楽しんだそう。

## 第53話～そして物語は綴られていく～

### 全国大会決勝戦・前日の事

「先輩このパーツつてここに付けたら右に寄っちゃってバランス悪くないですか？」

「あーそしたら真ん中につけちゃおっか。」

そう言いながら基盤となる翼作のジョイントの数を大幅に増やしたストライカーにパーツを組み込み。

「こつちのアイギスは？」

「それは沙希ちゃんのバストレアに付けるよ。」

「拓哉も滝沢先輩もすみません… ホントは俺がやらなきゃいけないのに。」

休憩室から出てきた響が作業中の机の上にそつとホットココアとアイスコーヒー（ほぼカフェオレのようなもの）を置き響自身も本体であるストライクの最終調整に入り始めその横では翼が各武装のデイトールアップをしていた。

「良いって！あつちでも沙希ちゃんのバストレアの調整を木乃香ちゃんがしてるしさ！」

「そうだぞ、こんな時だからこそやるんだよ。しかも明日まで時間がないんだから出来

る事はやっておかないと。」

「なんか呼んだ？」

「木乃香ちゃんが良い先輩してるって話！」

「急に照れるじゃない！あ、沙希ちゃんこれは抜きましょう。」

席がそれほど離れてないとはいえ木乃香の耳の良さに驚きつつも翼が仕上げてくれたものをストライカーに組み込んでいき、沙希のガンダムバストレアと折り合いを兼ねながら最終調整を終え次の日を迎えた。

「6日前に始まったガン普拉バトル全国大会、高校生の部もとうとう最終日がやってきました。残っているのはレディース大会個人の部優勝の実績を持つ立花 美咲所属のテストメント女学園と！今回全国大会初参加ながらも怒濤の勢いで駆け上がってきたニューフェイス天ヶ崎高校になります！泣いても笑ってもこれが最後の試合です、選手の皆様はコートへお進み下さい！」

「「わあああああ!!」」

朝からテンションMAXの司会のお兄さんにアナウンスが終わった瞬間、残っていた人たちからも空気が響くほどの歓声が会場を包み響きたちもコートへ向かいちようど美咲たちもコートへ着いた所だった。

「よくここまで残っていられたね？その頑張りは認めてあげる。」



「そりやどうも、けど今回は俺らが勝たせてもらう。」

「バトル終わった後もその言葉を吐けるかな。」

「言うさ、絶対にな！」

そうして4人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットし読み取り機に機体を読み込ませる。

《《 Damage level set to A 》》

《《 Beginning [Plavsky particle] dispersal. F  
i ardl, space 》》

《《 Please set your GUNPLA 》》

音声に従ってガンプラを置く

《《 BATTLE START 》》

「城戸 響、ストライクパラディオン マルチプルストライカー！推して参る！」

「小川 沙希、ガンダムバストアウィスストライクブースターver2。い、行きま  
す！」

レバーを動かし機体を発進させる。

今回のステージは、機動戦士ガンダム特有の宇宙空間だった。

可変式のマルチプルストライクストライカーをSFSとしてそれに乗っているスト

ライクパラディオンとストライクブラスターのガンダムバストレアがステージ中央まで移動していくとバトルロイヤルとは見た目が大きく変わったペイルライダーとオレンジ色のダークハウンドが待機していた。

「女性を待たせるってどういう神経してるの？」

「俺にとつての最優先すべき女性は小川さんだけだからな。」

「貴方！美咲さんに向かってなんて口…！」

「黙ってください。今余韻に浸っているんですから。」

美咲と響の言い合いに口を挟もうとしたオレンジ色のダークハウンド、「DHガスト」の目前に沙希がショートライフルの銃口を向けており最後まで言い終える事が出来ていなかった…。

「それじゃ…！」

「そろそろ…！」

「始めつか（始めましょうか）!!!」

次の瞬間、金色のペイルライダー「ドミナントクイーン」のビームサーベルとストライクパラディオンの天羽々斬・真がぶつかり合い火花を散らす中すぐ横でショートライフルを撃ち放ちそれを躲すDHガストがドックファイトに入っていく。

「しやらくせええええ！」

「じゃらくさくくないっ！」

真・擬の二本を抜き放ち二刀流の構えで斬り込んでいき対するドミナントクイーンもビームサーベルで斬り結ぶ。

実体剣を使う人はよく粒子変容塗料を塗っている事が多いのだが、天羽々斬 真・擬はその塗料とは相性が悪く塗る事をせず切り結んでいるためビームを切断出来ず拮抗を保っていた。

「なんでこの刀は塗れなかったんだろう、な！」

「負けた時の言い訳を今言わないでくれる？」

「言い訳なんてするか！負ける気はないってきつきも言った！」

「あつそ、じゃあこれはどう！」

ドミナントクイーンの両肩からサブアームが伸びてくると天羽々斬・真を掴み響は咄嗟のことで手放してしまうがスロットからビームキャノンを選択、至近距離だった事もあり狙いを外すことはなく的確にサブアームを撃ち抜きそのままの勢いで脚部ブレードで蹴り上げ一度距離を取る。

「サブアームとかトリスリッターかよ！」

「それを参考にしてるからね！」

そうして改めて獲物を持ち直し再び天羽々斬・擬とビームサーベルの鏖迫り合いが始

まった。

「私のDHガストに追いつける？」

「……行けます！私のこのストライクブラスターがあれば！」

こちらに背を向けたDHガストに向けガンダムバストレアが腰部メガ粒子砲をフルバーストで撃ち放つがIフィールドに防がれてしまい距離が開いてしまうがすぐさまバーニアに火を灯し第1、第2加速で徐々に距離を詰める。

「思ってたより早いね！」

「外しません……！」

増設タンクをパージして大型ビームサーベルを起動、Iフィールドに一撃目は防がれてしまうが2撃目はサーベルの柄の部分で直接叩きつけIフィールド発生器を潰す！

「Iフィールドがなくなっても！」

「行つてください！シールドドラグーン、シノビビット……！」

「なにあれ？可愛いんだけど……」

ガンダムバストレアの追加パックから放出した3基のシノビビットが同じタイミングで射出されていたこちらも3基のアイギスストライカーのシールドドラグーンに飛び乗る形で向かっていきDHガストの周囲をスペースデブリなどを器用に使いながら注意を引いていく。

「捕まえました…！ラディエーションデュータ殺戮する光子盾！」

「ブースターが!?？」

DHガストがその動きを止めシノビビットに翻弄されている間に先に射出していたものに加え新たに射出し計6基のシールドラグーンが右脚のブースターの周囲に展開しながら徐々に幅を狭めていき脱出を許さずDHガストの右脚が太ももの下あたりから爆発を起こし釣られてシノビビットの1基が巻き込まれて誘爆してしまう。

「…： 勝敗は着きました。これ以上の戦闘はガンプラを壊してしまいます。」

「これじゃ移動は無理そうか…： けど、それでもここまでできたんだから最後まで足掻かせてよ！」

「まだ戦う…：!?？」

片脚が無い状態のDHガストに歩み寄ろうとした矢先、いつの間に出射していたのだろうか両肩のアンカーがガンダムバストレアの右肩に絡まっており巻き取りが始まってグンッと引つ張られ突然の事に対応が遅れてしまい関節部をドツズランサーが貫いていた。

「そろそろ決着をつけましょう?」

「そう、ですね…： けど勝つのは私です…：！」

片腕が無くなった事により姿勢制御の難しくなったストライクブースターから飛び

出して近くの小惑星に降り立つと目の前のDHガストも残った追加ブースターと両肩のクアトロバレットのビームライフルをパージし大型のビームソードを形成していく中、沙希も左肩のメガキャノンに弓矢がわりのスラストブレードをサブアームを使って掛け限界まで弦を張っていく。

「クアトロバレットッ！」

ブローケンファンタズム  
「壊れゆく幻想！」

そしておもむろに振り下ろされたクアトロバレットの正面に残っていたシールドラグーンを向かわせるが次々と斬り落とされてしまい最後アブソバを展開した状態で正面に投擲したソウルプリティジョンシールドが落とされた所で若干威力が弱まったその隙を見逃さずメガキャノンの引き金を引き音を立てながら放たれた一撃はDHガストを巻き込んで近くの小惑星にクレーターを作り爆発を起こす。

「おらああああ！」

「いやああああ！」

先程から鏑迫り合いを行っていた響たちだったが、美咲はこのままではラチが明かないと武装を100mmマシンガンに持ち替え連射してくるのを響は多少の被弾はあるものの天羽々斬（大剣モード）を振り回して弾き飛ばしていた。

「そんな振り回して関節すっぽ抜けどどうよ？」

「ご忠告どうも！けど、その辺りは解決済みだ！」

「その距離から振りかぶった所で！」

「だあああらっしやあああ！」

「なんで切り傷が付くの!?!？」

バックステップで下がろうとしたドミナントクイーンを逃さまいと天羽々斬を居合の構えで振るいその距離で当たらないと確信していたが念のため掲げていたシルドには僅かだが横一線に切り傷が付いていた。

『響の今の振りがぶり、なんで当たってんの!?!？』

『見た感じ実体剣による傷ではなさそうだけど…』

『え、ええと…今の動き自体は私のお父さんの持ち技なんですけどそれをガンプラで使うにあたって城戸さんなりに使えるようにした結果、実体剣の先に小型ビームサーベルを仕込んでいてそれを思いっきり振る際に衝撃波程度のビームが出るみたいですよ…』

と、移動中の沙希の説明を受けた拓哉たちが納得している間にも響は追撃を仕掛ける！

「まだまだあ！」

「どんな手を使ったかは知らないけど！」

「なんだ!?？」

天羽々斬 真・擬を用いた二刀流で斬り込んでいたのだが突然傍から予期せぬ一撃を受け頭部の半分をえぐられドミナントクイーンから引き離されてしまう。

「いつてえ… なんなんだ、こりや。」

「驚いた？ 私の自立支援型バックパック「ヴェノムワイバーン」は予測できなかつたでしよ。」

「女王が龍を顎で使うのか… 理にかなってはいるけどさ。」

改めて正面を向くと美咲の発言通り、当初羽だと思っていたものはその翼竜のもので尻尾の先にはGNランスが背中には粒子タンクが付いておりブースター音がしなかつた事もあり接近に気づけなかつたらしい。

「ファンネルに加えて支援型のバックパックとか1人でやる気満々だな。」

「君も似たようなもんだけどね、けど2対1なら私の方に部があるかな♪」

「いえ… そうとは限りません…」

「小川さん！」

「なんだ、あの子やられちゃったの。」

「城戸さん…！ 私が時間を稼ぎます！」

「任せた！ リミテッドリプレイス！ パラディオントロストバンダースナッチ！」



「戦闘中に換装!? させるかっての!」

「…… させません! プラフスキーパワーゲート展開、パラディオンストライカーフルブースト!」

ドミナントクイーンを蹴り飛ばし、上空で待機させていたマルチプルストライカーからロストバンダースナッチのパーツ（一部バックパック）が射出されパラディオンストライカーと入れ替わるように装備していき残されたパラディオンストライカーがガンダムバストレアの展開したプラフスキーパワーゲートを潜って加速していく。

「そんな物で私の動きを止められると、でも!?」

「小川さんナイシアシスト! 喰らええええ! ロスト… フィンガアアア!」

「小賢しいまねをつ!」

プラフスキーパワーゲートを通過し加速の勢いがあつたにもかかわらずビームサーベルの一振りでパラディオンストライカーは両断されてしまうが換装の終わったストライクLBは右腕のフィンガユニットを展開し脚部バーニアを全開で噴かしながら突撃、その一撃は奇しくも頭部を潰すには至らなかつたがアンテナをへし折る。

「天照!」

「フアンネル!」

ドミナントクイーンに背を向けたまま背部ビームユニット「天照」を起動、狙いを一

点に絞ったビームはスカートファンネルによって防がれたストライクLBを3基のスカートファンネルとヴェノムワイバーンが取り囲むとナノマシンが放出されていく。

「これだけは使いたくなかったけどね！」

「月光蝶!!?まさか搭載してるとは...」

「——！避けてください！」

「小川さ...」

ナノマシンがストライクLBに接触するほんの数秒前にモニターに衝撃が走り視界が大きく揺れる響の目に写ったのは、ナノマシンに包まれていくガンダムバストレアの姿だった。

範囲から逃れていたガンダムバストレアの右腕が宙を漂いストライクLBの横を過ぎた瞬間、響は糸が切れたように右腕のロストフィンガーと左腕でブレイクフィンガーを展開し狙いなどつけていない様子でただ眼前に佇むドミナントクイーンに殴りかかる！

「ハハッ！ここまですれば君でも怒るんだ！」

「お前！お前お前お前え！」

「だけどさ、ガンプラバトルなんだから壊れるのは当然でしょう？」

「それにしたって限度があんだろ!!?ダメージレベルAで月光蝶なんて使ったらどうな

「るかなんて！」

「分かるだろ、って言いたいんだろうけど私はね負けるわけにはいかないの。だから勝てる手はなんだって使うの！」

フィンガーユニットによる連続攻撃を右に左に揺れながら最小限の動きで躲し、続くロストフィンガーを敢えて左腕のサーベルユニットで受け右手のビームサーベルがストライクLBの右腕の関節を貫く。

「ガッ!??ぐあ…!??ああくそ… またやったのか…！」

「形勢逆転ってこういう事を言うのかなッ！」

関節を貫かれた衝撃で視界が揺れ響き自身が頭を振って正面を向こうとした瞬間、再びビームサーベルによって右肩を貫かれ戦艦の残骸に突き刺さった。

「城戸さん！」

「小川さん!??ごめん、カッとなった結果がこのザマだ…！」

「そんな事は良いんです…！それよりも私の事は気にせず自分のためにバトルを下さい。」

「でも！それじゃ小川さんのガンプラは…！」

「響さん…！壊れたものは治せば良いんです、だって私たちはファイターでもありビルダーなんですから…！」

「……分かった。行くよ小川さん、いや沙希！」

「はい！ちよつと遅いですけど、サポート引き継ぎます。」

「よろしく！まずは右肩をパージする！」

「人の目の前でラブコメを繰り広げておいて！」

グググと右肩を貫いていたビームサーベルがめり込んでいくが響はドミナントクイーンではなく右肩目掛けバルカンを乱射しそのビームサーベルごと右肩を粉碎、戦艦の残骸を足場にタツクルを仕掛け体制を立て直す。

「SEED！」

「SEED system standby. Remaining until  
he time limit of 180 seconds。」

「——ッ!?？」

距離を開けられたドミネイトクイーンのヴェノムワイバーンがストライクを貫こうとGNランスを翳しながら迫ってくるが、近くを漂っていたガンダムバストレアの右腕を掴み自身に嵌め全身に蒼い粒子を纏い天羽々斬・真を振り抜いてヴェノムワイバーンを一太刀で斬り伏せる。

残るはドミネイトクイーン本体なのだがスカートファンネルからは月光蝶のナノマシンが激しく揺らめいていた。

「ここからが本番って事ですか…。」

「それでもこのSEEDなら…！」

天羽々斬 真・擬を構えブーストを噴かして振り下ろすとナノマシンとSEEDの蒼い粒子がぶつかって消しあっており徐々に刀身が砂になっていくが…

「1本でダメなら2本、2本でダメだったら全部叩きつけりゃいけんだろう！」

その言葉と同時に柄だけになってしまった天羽々斬真・擬と入れ替わるようにトリアイナをビームランスマードで突き立てナノマシンを展開していたスカートファンネルの1基を貫き2枚では月光蝶を維持出来ないのかトリアイナが砂と化すのと同じくして月光蝶が弱まっていた。

「ギリギリまでバランス調整をしてくれた滝沢先輩と拓哉、こんなに沢山のストライカーを作ってくれた翼先輩、武装を貸してくれた部長と舞姫…そして沙希がいる！ストライク！お前の力を見せてみる！」

「マルチプルストライカードッキングします…！」

「SEED EX drive! Break through the limit  
！」

制限時間の過ぎたSEEDだがバンダースナッチストライカーをパージしてマルチプルストライカーの予備バッテリーを使う事で限界を超えた出力の天羽々斬（大剣モ一

ド)がもう一枚のスカートファンネルをナノマシンが触れるよりも早く斬り伏せていく。

「もうしつこいッ！」

「それが私の好きな人ですから…！」

「惚気話は辞めろお！」

ドミナントクイーンは残ったスカートファンネルを掴み最後の1撃にしようとしているのか自身の背丈を越えるビームソードを形成していた。

(ヤバイ、今確実にニヤついている自信ある。ってそれよりも次で決着をつける気か。)

「なら、コイツで決着をつけてやる…！」

放出していた蒼い粒子が上空に掲げた天羽々斬に収束していく。

「チエストオオオオオ!!！」

「久々に、こんな楽しかつ…」

振り下ろされたビームソードと天羽々斬が激突した。

互いのビームがぶつかると周囲の残骸が吹き飛び2機のボディにヒビ割れが起こり内部の関節が露わになっていく。

そして、意図しない用途で使われていたスカートファンネルが先に限界を迎え天羽々斬の刀身がドミナントクイーンを袈裟斬りに斬り裂いた。

「YOU WIN!!!」

スクリーンが解け思わず地面に座り込んでしまった響と隣に疲労が前面に出ていた沙希に木乃香たちが目尻に涙を浮かべながら駆け寄ってくる。

なにか司会のお兄さんが喋っているが今は聞かなくてもいいかな…

「か、勝てたんだよ！私たち！あんなに夢だった景色が今日の前にあるなんて…信じられないわ…」

「部長…俺もなんか夢見たいです。えつとその…あの時俺と拓哉を誘ってくれたお陰で今があります、だからありがとうございます！」

「そうつすよ！同じくありがとうございます！」

「沙希ちゃんも自分から入部してくれてありがとうございます！」

「…いい、いえ！私もここに来て色々な事を経験出来ましたしこうして良い出会いも出来ました…」

「もう！木乃香ちゃん泣きすぎだよお！」

「そういう奏も泣きそうだけどね。」

響たちが喜びを分かち合っていると正面からムツとした顔で美咲が歩いてくる。

すると、天ヶ崎メンバーの前に立った瞬間に顔が柔らかな表情へと変わり響と握手を交わす。

「今度は何もしがらみもなくバトルしようぜ。」

「ふふ、そうだね。君のいやらしい事から始まった事だけど次は楽しもう♪」

「あの：：今更なんですけど、響さんそのいやらしい事って何が：：」

「言ってなかったんだ？えつと、それはねえ。」

「あー！もう授賞式始まるんじゃないか？！？イカナイトー！」

「響さん！まだ話は終わってないですよ：：！」

美咲の言葉を遮って授賞式の台までバトルの後だと言うのに全力疾走で駆け出て行った響を追いかけるように沙希も駆け出した。

そうして、授賞式を終えた響たちが初めて挑んだ全国大会は優勝という形で幕を下ろしたのだった。



## Epilogue 蒼の衝突、受け継がれる想い

季節は流れ響たちが全国大会優勝をもぎ取った12月の大会から桜が咲き始めた3月ごろの事

進級を直前に控え部活動を休止にしてまでテスト勉強に励んだ響たちは無事、赤点を誰一人として取ることはなくその進級祝いとして部室でお菓子パーティーを開いていた。

「期末テストも乗り切ったし留年も回避されたし悔いはない！」

「英語の授業寝すぎて期末前の小テスト50点満点の所13点しか取れなかったのにな。」

「「え…。」」

「みんなしてその顔止めてえ！流石に俺もヤバイと思ったから沙希に教えてもらった。」

「あれは大変でしたね…。稽古の合間に英語と数学を…。」

「危なかったの英語だけかと思いきや数学も苦手だったのね…。」

「奏もその2教科苦手だよね。僕が教えてなかったらどうなっていたか。」

「その節はありがとう。ございましたあ！ほ、ほら勉強会の後サイ○リアでご飯奢った

じゃん！」

翼の続けようとした言葉を遮るように翼の口にカントリーマアムをこれでもかと注ぎ込んで珍しくバタバタしながら流し込み、仕返しと言わんばかりに奏の口にマカダミアナッツを投げ込んでいた。

「はあはあはあ……死ぬかと思った……」

「部長、翼さんと滝沢先輩生きてるんでその手に持った2L牛乳を置いてください。」

「あら、そう？ 沙希ちゃんいつのまに城戸くんの隣にいたの。」

「……ついさつきですね。」

「じゃあ、城戸くんの隣に居たはずの安藤くんが私の隣にいるのは……」

「察しの良い木乃香さんは嫌いです……」

「沙希ちゃん……?」

珍しくテンションの高い沙希を見て思わず口角が上がっていた所をニヤニヤした拓哉に見られ口封じを図るのため、他者に聞こえないようLINEのトーク画面に「ちよつと前にフリーバトルスペースにいた他校の女の子に声掛けてたのマリちゃんにバラすぞ。」を打ち込むと拓哉の顔が青ざめ首を横に振りポテチを食べだし響自身は左手で食べていたポテチの指についた油をウェットティッシュで拭き取り腰のポーチへ手を伸ばした。

「お、やる気満々じゃない。それじゃ部長継承のバトルを始めましょうか!」

「催促しちゃったみたいですね…。よろしくお願いします!」

良いのよ、と木乃香がウインクし響がそつと目を逸らして冷たい沙希の視線からも目を逸らし2人は筐体を真ん中に挟みGPベースをセットして、読み取り機に機体を置いた。

《《 Damage level set to B 》》

《《 Beginning [Plavsky particle] dispersal. Faird3, Forest 》》

《《 Please set your GUNPLA 》》

音声に従ってガンプラを置く

《《 BATTLE START! 》》

「城戸 響、ストライクガンダム黄昏改。推して参る!」

「今井 木乃香、ガンダムバンダースナッチRL! 殲滅をはじめましょうか!」

レバーを動かし機体を発進させた2人はステージ中央の開けた所へ降り立つと近くの木々が風圧を受け桜が舞っていた。

「思い起こせば君たちをスカウトしたのも去年の今頃だったわね。」

「あの時はガンプラバトルが出来れば良いやって感覚でしたね…。」

「そう…：なら今は？」

「バトルを楽しみたいと思うし楽しんだ上で部長に勝ちたい！」

「楽しんだ上に勝ちたいなんて強欲じゃないの！」

お互いにブーストを噴かしたと同時にトリアイナ ver3 とトリアイナがぶつかり合いビームランスモードを起動するが、やはり出力は ver3 の方が高く押し切られそうになるが脚部ブレードを蹴り上げバンダースナッチRLを蹴り飛ばす。

「吹き飛びなさい、アスタロト！」

「そう言えばあの時の開幕アスタロトには驚かされたけど、今なら受け止められる！」

距離が空いた瞬間、手持ち式のアスタロトが手元に移動し最大火力で火を噴く！

「サイコフィールドとまではいかないが、ファーストシールド！」

射出された2基のシールドドラグーンがビームバリアを形成、だが受け切れず

「セカンドシールド！」

続けて2基のシールドドラグーンを向かわせ同じようにビームバリアを形成、威力は弱くなったが受け切れない

「持っつけ全部だ！追加で簡易総てオールガージェイアスアツァロンを受け入れし理想郷！」

残っていたシールドドラグーン4基に加え左肩のソウルプリゲイションシールドを正面に掲げ武装のみ展開したSEEDが翼の形を形成、包み込むように折りたたまれると

アスタロトによる高出力ビームは吸い込まれるように吸収されていく。

「奪ったビームをプラスしてえええ！滅びゆく誰かに祝福を！」  
プレッスンプレッシンング

「ビームを吸収してビームの出力を上げる…教科書に書いてあるような流れじゃ私はやれないわ！」

「な？？ビームシールド？？今までのバンダースナッチには搭載してないはず。」

「私は日々進化しているのよ！」

ドラグーン・ビームキャノンと言った全身の射撃武装を用いたフルバーストは周辺の木々を薙ぎ倒しながらたしかにバンダースナッチRLを蒸発させるには十分な威力だったのだが先ほど、響が行った多重ビームシールドのようにサイドアーマーから予備ビームシールドを5つ投げつけ威力を弱めた所を「天照」で打ち消した。

「初めてやったけどなんとかなるものねえ。」

「俺が一部SEEDでギリギリ防げたのに、こんな簡単に防がれると…。」

「落ち込むなあって？まだまだ楽しましようよ！ふふ、あははは！」

「闇の部分出てません？？」

続けてバンダースナッチRLが脚部大剣で蹴り上げてくるのに合わせて響はビームサーベルを両手で抜き振り下ろし拮抗を保ちながらも鏢迫り合う。

「ならこれならどう！」

「あ!?? コッチが2本ならそっちは4本だっけか!??」

ストライクガンダム黄昏改の振るうビームサーベル2本に対し木乃香のバンダースナッチRLが脚部大剣を用いた4本で迫ってくる姿はどこか武者の鎧を纏ったバルバトスに似ていた。

「このまま近接はマズイか… フィンファンネル!」

「近づかせるかあああ!」

振り下ろされたアロンダイトをビームサーベル2本を犠牲にしながらもなんとかパレイシバンダースナッチRLへ頭突きをかまして体制をよろけさせると後退した響の代わりにフィンファンネル2基がビームを撃ちながら向かうが、向かった矢先に増設したマシンキャノンとバルカンの乱射によってビームの1発が頭部アンテナを掠めたのみで爆発してしまう。

「喋るなあ! だったら完璧でしたねっ!」

「そうね。 ってそういう場合じゃなくて!」

ストライクガンダム黄昏改が爆発による煙を引き裂いてロストフィンガーを展開し「天照」の輪を掴みヒートさせるがこちらもロストフィンガーの一部を斬り裂いてファンネルラックの両翼にアーマーシユナイダーが突き刺さっていた。

「まだ持ってたのそれ!」

「だって舞姫がお守りがわりに持っててよって言ってくれたんですもん！」

「あの舞姫がそんな事を… 姉として嬉しいけど複雑な心境ね！」

爆発寸前の翼をパージし天羽々斬 真・擬を振り抜き、ガードのために突き出した左腕部ブレードが火花を散らしてヒビが入ると同時に脚部大剣を蹴り上げ天羽々斬 擬が音を立てて折れてしまう。

「げっ?!? 損傷率そんな低くなかった筈なんだけど。」

「これがアームブレイクってやつね！その武器の壊しやすそうな部位を狙って一点に集中するの！」

「勉強になります！」

柄だけになった天羽々斬 擬を投げ捨ててビームキャノンを起動、乱射しながらマシンキャノンと撃ち合い次の瞬間にはすれ違って撃ち抜かれ小爆発を起こす。

「この瞬間を待っていたんだ！」

「自爆… いえ、盾の強固さを生かした武器潰しね！」

距離が近づいたところでバンダースナッチRLのバラエーナ改とクスイファイアス レール砲を一気に撃ち放すが響は敢えてソウルプリゲイションシールドのアブソーバを展開しながら突撃をかけそのまま押し当てる武装が爆発した衝撃が襲う。

「ちなみにだけど、城戸くん残り武装は？」

「さっきラックごとファンネル壊された上に刀を一本持っていかれてるので、半分きつたところですかね。」

「奇遇ね。私も射撃武装を全部失ってさっきブレードを1つ無くしたところよ。」  
「俺の方が損傷してるんだよなあ…。」

天羽々斬 真を両手で持ち腰のあたりに構え直し振り下ろされた左脚部大剣の一撃を受け流し、返す刀で脆そうな接続部を狙ったがちよつと逸れてしまい左脚を太もものあたりから斬り落とした。

「これがアームブレイクってやつなのか。」

「いやいやいや、武器どころか脚持っていかれてるからね？立ってるのは難しくなってきたからそろそろ決着つけようか！」

「望むところですよ！」

「SEED (Ⅲ)!!!」

[SEED system standby。Remaining until  
he time limit of 180 seconds。]

[SEED system standby。Remaining until  
he time limit of 60 seconds。]

蒼の揺らめきを纏った両機はその場に残像を残しながら響は天羽々斬（大剣モード）



を木乃香はトリイナver3を振り下ろし振り上げ鋸迫り合い再び距離を取っていき。

「SEEDビット!!!」

揺らめいた両機のSEED粒子がいくつかの形を形成、不規則な軌道を描いて迫っていくが幾分元が同じであるだけに2人の間でぶつかっては消滅を繰り返して同じ考えに至ったのだらうビットがプラフスキーパワーゲートを正面に展開される。

「壊れゆく幻想!」

「その行く手を阻むは勇敢なる皇后!」

高出力ビームによる互角のぶつかり合いはその中心地を焼け野原にし煙が立ち上っており、その煙が消えるまで待つ事はなく木乃香は右腕部ブレードを響は天羽々斬を携えブーストを噴かし突撃する。

「これだからガンプラバトルは!」

「やめられない!」

それぞれの獲物がぶつかり最後に会話を交わした2人の視界が閃光に染められていった。

~~~~~

5月某日響たち新ガンプラバトル部は新人戦の会場に足を運んでいた。

「第10回新人戦個人の部を開催したいと思えます！」

「「うおおお!!!」」

「それじゃ行つてくるわ！」

「おうよ！」

「は、はい……！」

アナウンスと共にコートへ向かった響が筐体を真ん中に挟みGPベースをセットし読み取り機に機体を置く。

「城戸 響、ストライクパラディアス！推して参る！」

レバーを動かし機体を発進させゲートから飛び出すとストライクパラディアスのバックパックからSEED粒子による翼が形成されステージを掛けていった。